

ウィトゲンシュタインの後期哲学についての研究

—確実性について—

橋 本 哲

2015年度名古屋大学大学院文学研究科
学位（課程博士）申請論文

ウィトゲンシュタインの後期哲学についての研究

— 確実性について —

名古屋大学大学院文学研究科
人文学専攻哲学講座

橋 本 哲

2016年3月

略号

○ ウィトゲンシュタインの著作

Tractatus Logico-Philosophicus (『論理哲学論考』) : *TLP*

Philosophical Grammar (『哲学的文法』) : *PG*

The Blue and Brown Books (『青色本』・『茶色本』) : *BB*

Philosophical Investigation (『哲学探究』) : *PI*

Remarks on the Philosophy of Psychology, vol. I (『心理学の哲学 1』) : *RPP1*

Remarks on the Philosophy of Psychology, vol. II (『心理学の哲学 2』) : *RPP2*

ZETTEL (『断片』) : *Z*

Remarks on Colour (『色彩について』) : *RC*

On Certainty (『確実性の問題』) : *OC*

Philosophical Occasions 1912-1951 : *PO*

Cambridge Letters Correspondence with Russell, Keynes, Moore, Ramsey and Sraffa :
CL

○ ヒュームの著作

A Treatise of Human Nature (『人間本性論』) : *T*, 同付録を *App*, (セルビー・ビッグ、ニディッチ版によるページを *SBN* と表示)

An Abstract of a Book Lately Published; Entitled, a Treatise of Human Nature, &c, Wherein the Chief Argument of That Book is further Illustrated and Explained (『人間本性論摘要』) : *Ab*, (セルビー・ビッグ、ニディッチ版によるページを *SBN* と表示))

Enquiries Concerning Human Understanding and Concerning the Principles of Morals (『人間知性研究』) : *EHU*, (セルビー・ビッグ、ニディッチ版によるページを *SBN* と表示)

○ ウィトゲンシュタイン及びヒュームの著作からの引用は、文献表に掲げた邦訳を基本的に利用したが、論者が手を加えた個所がある。なお、引用文中の [] の挿入は、論者によるものである。

目 次

略語	i
目次	ii
序	1
第1章 ウィトゲンシュタインの後期哲学の基本的な考え	6
1 はじめに	6
2 『哲学探究』について	8
3 文法について	9
4 言語ゲームについて	10
5 真なる命題、無意味な命題、ナンセンスな命題について	14
6 二種類の心的出来事・心的状態について	18
第2章 ムーアの「外的世界の証明」とストロールによるウィトゲンシュタインの批判と評価	23
1 はじめに	23
2 ムーアの「外的世界の証明」について	23
2 (1) ムーアの外的事物について	23
2 (2) ムーアの「外的世界の証明」について	24
2 (3) ムーアの「外的世界の証明」に対する異論とそれに対するムーアの応答	26
3 ムーアの「外的世界の証明」についてのストロールによるウィトゲンシュタインの批判と評価	27
3 (1) ムーアの証明の奇妙さについて	27
3 (2) 第一、「ここに私の手がある（存在する）」という言明と「ある惑星が存在する」という言明との間には大きな違いがあるということについて	29
3 (3) 第二、「物理的対象は存在しない」という言明はナンセンスであり、また、「物理的対象は存在する」という言明もナンセンスであるということについて	32
3 (4) 第三、ムーアの証明そのものはナンセンスであり誤っているが、ムーアの証明の	

背後には理解できる重要な考えがあるということについて	34
3 (4-1) ムーアの証明そのものはナンセンスであり誤っているということについて	34
3 (4-2) ムーアの証明の背後には理解できる重要な考えがあるということについて	40
3 (4-3) ストロールの蝶番命題についての考え	44
4 本章のまとめ	46
 第3章 「知識」と「確実性」について	 49
1 はじめに	49
2 「揺るぎないもの」の事例	50
2 (1) 「揺るぎないもの」についてのシャロックの分類	51
2 (2) 「揺るぎないもの」についてのハミルトンの分類	51
2 (3) 「物理的対象は存在する」はムーア命題か	54
3 知識（知っている）について	56
3 (1) 知識（知っている）について	56
3 (2) 疑うことのできない確かなことに二種類のレベルの違うものがある	60
4 疑いについて	65
4 (1) すべてを疑う疑いは疑いではない	65
4 (2) 無分別な疑いと論理的に不可能な疑い	69
5 信念（信じている）について	71
5 (1) 信念と知識	71
5 (2) 基礎付けられた信念と基礎付けられていない信念	72
6 誤りにについて	75
7 確実さについて	77
8 本章のまとめ	79
 第4章 「揺るぎないもの」についてのマッギン、シャロック、ハミルトンの解釈	 81
1 ムーア型命題についてのマッギンの解釈	81
1 (1) ムーア型命題は認識的文脈の中では扱われない	81
1 (2) ムーア型命題の確実さは、言語による記述の技術を訓練によって習得した結果である	82
1 (3) マッギンのムーア型命題の解釈に対する評価と批判	85
2 蝶番についてのシャロックの解釈	87

2 (1)	蝶番は文法規則である	87
2 (2)	蝶番の概念的特徴とその身分	88
2 (3)	蝶番を疑うことや誤ることは不可能である	92
2 (4)	認識的ゲームの中で蝶番を語ることは論理的に排除されている—その 1—	94
2 (5)	認識的ゲームの中で蝶番を語ることは論理的に排除されている—その 2—	97
2 (6)	蝶番の起源についてのシャロックの解釈	102
2 (7)	蝶番についてのシャロックの解釈のまとめとそれに対する評価と批判	103
3	ムーア命題についてのハミルトンの解釈	105
3 (1)	ウィトゲンシュタインのムーア批判についてのハミルトンの解釈	105
3 (2)	ムーア命題の特殊性	109
3 (3)	確実性の全体論と動的な概念	113
3 (4)	世界像についてのハミルトンの解釈	115
3 (5)	ムーア命題についてのハミルトンの解釈について	117
3 (6)	ムーア命題についてのハミルトンの解釈にたいする評価と批判	120
4	本章のまとめ	122
第 5 章	「揺るぎないもの」を巡るいくつかの問題について	124
1	「揺るぎないもの」の確実さ	124
1 (1)	「揺るぎないもの」は経験命題の体系の中で「特有の論理的役割」を果たしている	124
1 (2)	「揺るぎないもの」は思考の操作の基礎にある	126
1 (3)	「揺るぎないもの」の揺るぎない確実さ	128
1 (4)	言語ゲームの二層の構造（「揺るぎないもの」とそれを基礎とする通常の言語ゲーム）	130
1 (5)	「揺るぎないもの」をどのようにして手に入れたか	133
1 (6)	「揺るぎないもの」の転換について	137
1 (7)	「揺るぎないもの」の確実さは行為において示される	140
1 (8)	心的傾性としての「揺るぎないもの」	145
1 (9)	「揺るぎないもの」を表現したものは文法的命題である	147
2	規則について	150
2 (1)	標識について	151
2 (2)	規則に従う仕方は社会慣習による	152

2 (3) 規則による行為の仕方は解釈によって決められない	154
2 (4) 規則の解釈ではない規則の把握の仕方	156
2 (5) 規則に従うのは認識知によるのではなく技術知を身に付けること	160
2 (6) 規則違反について	164
2 (7) 規則と「揺るぎないもの」	165
2 (8) 「揺るぎないもの」の役割はどのようにゲームの規則の役割に似ているのか	167
2 (9) 「揺るぎないもの」は規則のどういう性格を持つのか	168
2 (10) 「揺るぎないもの」と規則の相違	169
3 根拠と原因	171
3 (1) ウィトゲンシュタインによる理由（根拠）と原因の区別	172
3 (2) 因果関係についての一般的な考え	181
3 (3) 以前の経験は確信の根拠にならない	182
3 (4) 「揺るぎないもの」と原因	189
4 ウィトゲンシュタインの基礎付け主義について	191
第6章 ヒュームとウィトゲンシュタイン — 懐疑論に対するストローソンの自然主義を批判する —	198
1 はじめに	198
2 懐疑論に対するヒュームとウィトゲンシュタインの態度についてのストローソンの見解	199
3 ヒュームについて	202
3 (1) 立証的推論について	203
3 (2) 物体の存在について	206
3 (3) ヒュームの自然本性	208
4 ウィトゲンシュタインについて	208
4 (1) ウィトゲンシュタインの因果推論に対する考え	211
4 (2) ウィトゲンシュタインの物体の存在についての考え	214
4 (3) ウィトゲンシュタインにおける「揺るぎないもの」の身分とその確実さについて	216
5 本章のまとめ	219
第7章 結論	221

参考文献	226
------------	-----

序

『確実性の問題』（*Über Gewißheit, On Certainty*, 1949-1951 年, (1969 年公刊)）は、ウィトゲンシュタイン（1889-1951 年）が 1951 年 4 月 29 日に亡くなる約 1 年半前から、亡くなる前々日の 4 月 27 日までに書き留められた、短い断章からなる草稿である。

『確実性の問題』の編集者であるアンスコムとウリクトによれば¹、この草稿は、ウィトゲンシュタインが 1949 年半ばにノーマン・マルコム（Norman Malcolm）の招きを受けてアメリカを訪れた際に、マカコムに刺激されて、G. E. ムーア（George Edward Moore）の 1925 年の論文「常識の擁護」（*A Defence of Common Sense*、以下本論文において「擁護」と表示する。）と、1939 年の論文「外的世界の証明」（*Proof of an External World*、以下本論文において「証明」と表示する。）を検討する中で書かれたものである。

『確実性の問題』は、§ 1-65、§ 66-192、§ 193-299、§ 300-676（最後）の 4 つの部分から成っている。最初から § 299 までは日付が無いが、編集者によれば、1949 年のクリスマスから 1950 年の 3 月にかけて書かれたと言われる。また、§ 300 以降には日付が入っていて、最初のもは 1951 年 3 月 10 日で、最後のもは同年 4 月 27 日である。

なお、『確実性の問題』の個々の節の頭にある番号は編集者がつけたものとされている。

ウィトゲンシュタインは、通常、草稿を選別し推敲して、手書き原稿、タイプ原稿というように草稿を圧縮し、整理していくのが常であったが、『確実性の問題』についてはそれをする時間が無かった。

『確実性の問題』が書かれた 1949-1951 年の時期に重なる彼の他の著作は、『色彩について』（*Bemerkungen über die Farben, Remarks on Colour*, 1950-1951 年, (1977 年公刊)）、『断片』（*Zettel*, 1929-1949 年、なお内容の大部分は 1945-1949 年, (1967 年公刊)）、*Letzte Schriften über die Philosophie der Psychologie I, II*（*Last Writings on the Philosophy of Psychology I, II*, 1948-1951 年, (1982 年公刊）、未翻訳）であるが、『確実性の問題』と重複する断章はほとんどない。『確実性の問題』は、編者が言うように独立したテーマを扱った仕事である。

「この著作は、単独に出版されることがふさわしいと思われた。これは精選されたものではない。ウィトゲンシュタインは、これを独立した主題として自分のノートに示していた。その主題は、18 ヶ月の間の 4 つの異なる時期に、中断したところから彼が

¹ 以下の記述は『確実性の問題』の序言による。

再び始めたということが明らかである。この著作は、その主題に関して、単一の維持された論じ方で構成されている。」（OC Vorwort, preface）

本論文は、ウィトゲンシュタインがこの『確実性の問題』で主題とした「確実性」をテーマにしている。彼が取り上げる確実性とはどういうものか、またそれは我々の生活の中でどういう役割を果たしているのかを研究するものである。

このことを明らかにするために、最初の第1章では、ウィトゲンシュタインの後期哲学の基本的な考え方の中で、確実性に関連する彼独自の概念をいくつか取り上げる。そこでは初めに、彼の前期哲学である『論理哲学論考』の概略を見て、その後、後期哲学の全般について及び後期哲学の中でも本論文に関係するキーワードについて説明する。そこで取り上げるキーワードは、「文法」、「言語ゲーム」、「真なる命題、無意味な命題、ナンセンスな命題」、「二種類の心的出来事、心的状態」である。これらは第2章以下で関係するものであるが、確実性を論じていく上で、その概要をあらかじめ俯瞰しておくことが好ましいと思われるので、ここに挙げたものである。

第2章では、最初に、ウィトゲンシュタインが確実性について関心を持つきっかけになったムーアの「証明」について、その概要を明らかにする。その後、ムーアの「証明」に対するウィトゲンシュタインの批判と評価について、アヴラム・ストロール（Avrum Stroll）の *Moore and Wittgenstein on Certainty* を基に、ストロールによるウィトゲンシュタインの確実性についての解釈を検討する。

第3章では、『確実性の問題』の中で取り上げられる「確実さ」が、通常の言語ゲームの中で用いられる「知識」、「疑い」、「誤り」等の用語とどういう関係にあるのか、また、ウィトゲンシュタインが明らかにしようとしている「確実さ（揺るぎないもの）」がどういう確実さなのか、彼のテキストを基にして浮かび上がらせていく。そこでは、ウィトゲンシュタインの言う確実さが、心理的なものとか主観的なものではなく、言語ゲームの二層の構造—「揺るぎないもの（確実さ）」とそれを基礎とする通常の言語ゲーム—に基づく論理的なものであることが示唆される。

第4章では、ウィトゲンシュタインが明らかにしようとしている「確実さ」について、その確実さをどう理解するか、マリー・マッギン（Marie McGinn）の *Sense and Certainty*、モイヤル・シャロック（Danièle Moyal-Sharrock）の *Understanding Wittgenstein's On Certainty*、アンディ・ハミルトン（Andy Hamilton）の *Wittgenstein and On certainty* を基に、3人の解釈をそれぞれ検討して、彼らの解釈について批判と評価をする。

第5章では、ウィトゲンシュタインのテキストを基に、言語ゲームの二層の構造を明ら

かにするとともに、心的状態としての「確実さ」について論者の見解を論じる。また、確実さに関連する「規則」、「根拠と原因」について、ウィトゲンシュタインの考え方を考察する。そして最後に、ウィトゲンシュタインを基礎付け主義者として見るかどうかについて考察する。

第 6 章では、第 5 章まで論じてきた「確実性」についての論者の解釈を基礎にして、P. F. ストロークソン (P. F. Strawson) の *Scepticism and Naturalism : Some Varieties* を基に、彼の自然主義を批判する。ストロークソンは、ヒュームとともにウィトゲンシュタインを自然主義と見ることで懐疑論を避けようとするのであるが、彼の提唱する自然主義的方法からは、ウィトゲンシュタインの確実性の内実は導かれないことを論じる。

第 7 章は結論として、本論文で取り上げた 5 人の解釈について、それぞれの見解をまとめるとともに、論者の見解を比較して論じる。

本論文を通じて示そうとする論者の見解は、訓練や教育などは確実さを獲得する原因であって、確実さの内実を説明するものではない、「揺るぎないもの」の確実さは、言語ゲームの二層の構造からもたらされる論理的な関係に基づくものであるということ、即ち、「揺るぎないもの」を疑うことや誤ることは、自己論駁に陥ることが免れず、言語ゲームを破棄する結果になるということ、そして、心的状態としての「揺るぎないもの」は、感覚や感情のような本物の持続を持たず、ウィトゲンシュタインの言う心的傾性であり、それは行為する我々の態度、構えの内に示される、というものである。

なお、本論文には、以下の論文の内容が取り込まれている。

- (1) 「ウィトゲンシュタインの後期哲学における心的述語批判について」、修士学位論文、2011
- (2) 「ウィトゲンシュタインの後期哲学における心的述語批判について——意図についての考察」『中部哲学会年報』第 43 号、2012、pp.83-98
- (3) 「ウィトゲンシュタインの確実性について——ムーアの「外的世界の証明」についてのウィトゲンシュタインの批判と評価」『名古屋大学哲学論集』第 11 号、2013、pp.49-66
- (4) 「ウィトゲンシュタインの確実性についての研究」、日本哲学会第 72 回大会（於お茶の水女子大学）・一般研究発表、2013 年 5 月 12 日
- (5) 「ヒュームとウィトゲンシュタイン——懐疑論に対するストロークソンの自然主義を批判する」『名古屋大学文学部研究論集 61 号（平成 26 年度）』、2015、pp.75-96
- (6) 「ウィトゲンシュタインの『確実性』について」『名古屋大学文学部研究論集 62 号（平

成 27 年度) 』、2016 (掲載見込)

(1)及び(2)は、主として本論文の第 1 章の 6 及び第 5 章の 1(8)の心的状態のあり方を論じた個所にその内容が反映されている。また、(3)は本論文の第 2 章に、(4)は第 3 章及び第 5 章の 1 に、(5)は第 6 章に、(6)は第 3 章全般と第 4 章の一部に、それぞれ加筆修正した内容が取り込まれている。

このように本論文の多くはこれらの論文に拠っているが、これらの論文を作成するに当たっては、田村先生を始め、金山先生、宮原先生から多くのご指導と貴重なご教示を頂きました。この場をお借りして、深く感謝とお礼を申し上げます。

また、セミナーでは、先生方からはもちろん、学部や研究科所属の皆さんから適切な意見や疑問点を指摘していただいた。有志によるウィトゲンシュタイン勉強会などでも、新たに発見することも多くありました。これらの方々にも、それぞれのお名前を掲げることは控えさせていただきますが、この場を借りてお礼申し上げます。

平成 20 年 3 月末に公務員としての 35 年間の職務を終えた後、名古屋大学で 8 年間学ぶ機会を得ることができました。ここでは学生時代からずっと関心あった哲学の研究に専念することができ、日々とても充実した生活を過ごすことができました。特に先生方や哲学に関心を向ける若い学徒の皆さんとの交流は、私にとって何物にも代えがたく、また、とても刺激的でかけがえのない貴重な時間でした。

なお、今回論文をまとめるにあたって、一昨年 7 月に亡くなった S さんに感謝の気持ちをささげたいと思います。彼とは、私が公務員としての在職中及び退職後も、彼が亡くなるまでの約 30 年近く、週一回くらいのペースで、在職中は勤務が終わった午後 6 時頃から、社会教育センターの一室で哲学関係の読書会を続けてきました。その中には、今回取り上げたウィトゲンシュタイン関連のものも含まれており、忌憚のない意見を取り交わしてきました。ウィトゲンシュタインの著作は思索の断片の集積で、どれをとっても彼が主張しようとしていることが何かを把握することは、極めて困難です。彼とのこうした経験がなければ、今回の論文にまとめることはとてもできなかったと思います。また、私が哲学に対する関心の灯をずっと持ち続けていられたのも、彼との勉強会が続いていたからこそだと思っています。その成果を彼にささげたいと思います。

最後に、本論文は、これまで研究を続けてきた一つの区切りとして、ウィトゲンシュタインの確実性についての自分の解釈を取りまとめたものであります。まだ考察の途上であ

って、荒削りのところも多く完成したものとはとても言えませんが、独自の解釈を示すことができたのではないかと考えております。

第1章 ウィトゲンシュタインの後期哲学の基本的な考え

1 はじめに

ウィトゲンシュタイン（1889-1951年）の後期の哲学は、一般に、『青色本』（*The Blue and Brown Books*, 1933-1934年（1958年公刊））からとされている。ウィトゲンシュタインの前期の哲学が『論理哲学論考』（*Tractatus Logico-Philosophicus*, 1918年（1922年公刊））だとすると、後期の哲学は、前期のそれとは大きく異なっている。

『論理哲学論考』は、世界と言語との関わりを論じている。それは、世界と言語との関係があるとすればかくあらねばならないものとして論理的に要請されるもので、要約すれば次のようである。

世界は、成立している事実の総体としての世界と、可能的な世界とに区分される。事実は諸事態からなっていて、事態は最小単位である対象が結合したものである。言語は命題（事態を結合した諸事態の言語表現）として表現され、命題は最小単位の要素命題（事態の言語表現）に分析される。要素命題は最小単位である名（対象の言語表現）の結合からなる。命題は要素命題の真理関数として表現され、その真・偽は、要素命題の真・偽による。かくして、世界と言語の間に、事実（諸事態）－命題、事態－要素命題、対象－名という対応関係が成立する。世界と言語の間に、思考が介在する。世界－思考－言語は写像関係で結ばれ、論理形式を共有する。論理形式は示すことができるだけで、それを語るができない。

これに対して、後期の哲学は、前期の『論理哲学論考』批判に始まって、語の意味、規則に従う行為の仕方、数学の基礎、色彩論、心理学の哲学（心的用語批判）、確実性等を扱っており、考察の対象範囲が広がっている。

これらの内、語の意味に関するものは、語の意味は対象であり、語と意味には一対一の対応関係があるというアウグスティヌスの言語観（『論理哲学論考』が前提にしているものでもあった）を批判し、語の意味はその使用であるという語用論を主張する。そして、私的言語批判に向けていく。

前期の哲学が、世界と言語について要請される論理的関係を独断的に論じているものだとすると、後期の哲学は、生活形式を説明するのではなく、現にあるがままにそれを記述することを旨として、そこで用いられる言語が無批判に前提している事柄を明らかにし、語の哲学的な使用を批判することに向けられている。

ウィトゲンシュタインが生前に出版したもので、哲学に関する著作といえるものは、『論理哲学論考』だけであって、後期の哲学に関係する著作で、出版されるに至ったものはな

かった。出版に向けた過程の中で、様々な思索の断片の束（草稿）が作られていただけである。そして、その中で最も完成度が高く、ウィトゲンシュタインの後期の哲学の主著作とされているのが、彼の死後に公刊された『哲学探究』（*Philosophische Untersuchungen*, 1936-1949 年（1953 年公刊））である。この『哲学探究』も、生前に何度か内容が組み替えられて、結局は出版されるには至らなかった。そして、この『哲学探究』に取り込まれた思索を中心として、その周辺には、膨大な手稿やタイプ原稿が残された。それらは、彼の死後、彼の遺稿管理人によって、これらの草稿がテーマごとに整理されて、順次公刊されるに至った。

従って、ウィトゲンシュタインの後期の哲学は、先に掲げた複数の哲学的関心を巡って、様々な観点から考察したものであるが、体系的に整理されたものではない。『哲学探究』にしても、一つのテーマに関する考察がなされても、次のテーマの中で以前のテーマが再考され、そして、それがまた別の視点から考察される、ということが繰り返されて、複雑な網目模様を形成していく。各テーマについて大まかに色分けをすることはできるが、それぞれのテーマが別のテーマに関連し、全体が共鳴しあっている。網の一箇所を引っ張ると他のテーマに関係するものも、ずるずるとつながって引き上げられてくるようなものである。あるいは、あるテーマが論じられても、その背後に別のテーマの思想が流れ込んでいる、と言っても良いかもしれない。

このように彼の後期の哲学に関するものは、相互に関連しているものの、主なテーマごとに纏められて、『数学の基礎』（*Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik*, 1937-1944 年（1956 年公刊））、『心理学の哲学 I, II』（*Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie I, II*, 1946-1948 年（1980, 1988 年公刊））、『色彩について』（*Bemerkungen über die Farben*, 1950-1951 年（1977 年公刊））、『断片』（*Zettel*, 1929-1949 年、なお内容の大部分は 1945-1949 年（1967 年公刊））、*Letzte Schriften über die Philosophie der Psychologie I, II*（1948-1951 年（1982 年公刊、未翻訳））、『確実性の問題』（*Über Gewißheit, On Certainty*, 1949-1951 年（1969 年公刊））等として公刊されている。

これらの著作には、内容が重複している個所もあるが、本論文が考察の中心にしているウィトゲンシュタイン最晩年の『確実性の問題』は、他の著作からある程度独立している。本章では、彼の後期哲学の基本的な考え方や、本論文で『確実性の問題』を論じるにあたって関連するキーワード（「文法」、「言語ゲーム」等）について、以下の節においてあらかじめ整理しておく。

2 『哲学探究』について

『哲学探究』の全体を通じて流れているものは、語の意味とは何かという問題である。『論理哲学論考』が先にも述べたように、世界と言語の関係を、要請される論理的関係として独断的に扱っているのに対して、『哲学探究』は、日常の生活を通じて営まれる多様な言語活動を俎上において、語の意味とは何かという問題を中心に行っている。

『哲学探究』は、第1部と第2部に分かれている。第1部は、§1から§692までから成り、その内§1から§142までは、前期の『論理哲学論考』批判を基礎に、主に次のことを論じている。

- ① 語の意味の説明は、定義によるだけでなく、事例を挙げたり、現物を示したりすることでもなされうる²。
- ② 語の意味は、その対象ではなく、また、その語がもたらすイメージや感じでもない。語の意味は一つしかないのではなく、使用に応じて様々な意味を持つ。語の意味とは言語内におけるその語の使用である³。
- ③ 語の意味は、その語に共通する何かではなく、互いに重なり合ったり交差しあったりしている。語の意味には、家族的類似性と呼ぶことのできる類似性がある⁴。
- ④ 言語形式の単一で完全に分析された表現形式というものはない（『論理哲学論考』では、命題の一般形式や言語の一般形式を扱っていた）。表現形式の類似性から生じる誤解は、別の表現形式に置き換えることで除去することができる⁵。
- ⑤ 哲学は科学的な考察ではなく、言語の働きを洞察する文法的な考察である⁶。

§143から§315は、規則に従う行為の仕方、また、私的言語に関するものである。規則に従った行為は、規則を解釈することによるのではなく、訓練によって実践を学ぶものであること、私的言語は単なる音声であって、言語でない⁷ことなどが論じられる。§316から第1部の終わりまでは、心理学的用語（思考、理解、想像、意識、期待、感情、意志・意図など）について論じられている。

『哲学探究』の第2部では、心理学的用語について更に論じるほか、特にアスペクト（相貌）について詳しく論じている。

² *PI* § 68, 69, 70, 73, 75, 78

³ *PI* § 1, 6, 35, 37-45, 73, 140, 141

⁴ *PI* § 65, 66, 67

⁵ *PI* § 90, 110-112, 116

⁶ *PI* § 90, 109, 118, 132

⁷ *PI* § 269

3 文法について

ウィトゲンシュタインの言う「文法」は、言語学者が扱うような意味での文法ではない。彼はそれを次のように言う。

「哲学的文法と普通のドイツ語文法があるのではない。……決定的な違いは、言語学者と哲学者が文法の研究に従事するその目的にある。一つの明白な相違は、言語学者は歴史的な発展と文学的な性質に関心を抱くが、我々はそのどちらにも関心がないことである。さらに我々は、言語学者には興味を起こさせないような困惑、例えば、『時は流れる』という表現から生じるある種の困惑⁸を解決するために、我々自身の言語を構成する。そのような文についての論評を我々が文法と呼ぶことを、我々は正当化せねばならないだろう。もし我々が、水が流れるというのとは別の意味で時が流れると言い、これを直示的定義（hinweisenden Definition）でもって説明するのであれば、我々はその語の説明を示したことになる。その場合我々は、人が一般に文法と呼ぶ領域を離れている。我々は、ある種の混乱を取り除こうとしているわけだ。文法学者はこうした混乱に興味を示さない。彼には哲学者の目的とは別の目的がある。我々は、普通の文法を、粉々に叩き壊すのである。」（*Vorlesungen 1930-1935*, pp. 185-186, 邦訳『講義』, pp. 59-60、強調は論者）

「それゆえ我々の考察は、文法的な考察である。そしてこの考察は、誤解を取り除くという方法で我々の問題を明るみに出す。その誤解とは、語の使用に関する誤解のことで、とりわけ言語の異なる領域において、その表現形式のある種の類比によって引き起こされる誤解のことである。—これらの誤解のいくつかは、一つの表現形式を別の表現形式に置き換えることによって取り除くことができるが、このことを人は、表現形式の＜分析＞と呼ぶことができる。というのは、その過程が分解することに、まま似ているからである。」（*PI* §90）

⁸ 「『現在』は、それが過去になる時どこに行くのか、そしてその過去はどこにあるのか』……我々の側を流れていくものがある—木の丸太が川を流れ下っていくような—事例が我々の念頭を占めている時、この問いが最も容易に生じるというのは明らかである。そのような場合、流れ去った丸太は全て左手の下の方にあり、流れ去るだろう丸太は全て右手の上の方にある、とすることができる。この時我々は、この状況を、時間の中で生起するもの全てに、直喩として使う、そして、『現在の出来事が過ぎ去る』（丸太が過ぎ去る）、『未来の出来事がやってくる』（丸太がやってくる）と言う時のように、この直喩を我々の言語の中に組み込むことさえするのである。こうして我々は、出来事の流れを語る。しかし、時間の流れ—丸太が運ばれる川—についても語るのである。ここに、哲学的困惑の最も豊かな源泉の一つがある。……我々は自分の記号法に取りつかれてしまう。—我々を抵抗しがたく引きずり込む類似性によって、我々は困惑に導かれる、とすることができるだろう。—」（*BB* pp. 107-108, 邦訳 pp. 178-179、強調はウィトゲンシュタイン）

このように、『哲学探究』では、語の多様な使用に考察が向けられ、語の使用を混同することから生じる誤解を明るみに出すという文法的な考察が、哲学の目的とされる。例えば、『茶色本』では、肉体的緊張と精神的緊張の例を挙げている。これらは、どちらも同じ「緊張」という言葉を用いているが、同じ意味での「緊張」ではない、とウィトゲンシュタインは言う。仮に二つの経験を比較して、類似性の感じがしたとしても、その比較はかなり複雑なことをすることで、簡単ではない、と言う。また、その「類似性に気付く」場合でも、常に必ずそのような感じがあるわけでもない、と言う⁹。

「では、精神的緊張と肉体的緊張は、言葉の同じ意味において＜緊張＞であるというべきか、それとも違う（または『わずかに違う』）意味において＜緊張＞である、と言うべきか。—この種のような場合は、[違う意味においてという] 答えがはっきりしている。」（BB p. 135, 邦訳『茶色本』 p. 218）

4 言語ゲームについて

ウィトゲンシュタインの後期の哲学を貫く基本的なキーワードの一つは、「言語ゲーム (Sprachspiel, language-game)」である。この「言語ゲーム」という言葉は、『哲学的文法』 (*Philosophische Grammatik*, 1930~1934 年 (1969 年公刊)) の中で初めて使われ、その後、『青色本』を始め、『茶色本』や『哲学探究』、『心理学の哲学 1, 2』、『確実性の問題』など後期の著作の全てにおいて見ることができる。

「言語ゲーム」という語は、多様な意味で使われている。初めて使われた『哲学的文法』では、次のように言われている。

「事態を記述すること、物語を作り出すことなど、様々な言語ゲームを比較せよ。」
(PG p. 43, 邦訳『哲学的文法 1』 p. 46)

「対象を示して言葉を発することによって、子供が言葉を理解することについても考えて見よ。その子供は直示的定義を与えられてその言葉を理解する。……その言語ゲームはまだ非常に単純で、この言語ゲームにおける役割は、より発展した言語ゲームにおける役割と同じではない。（例えば、その子はまだ、『これは何と呼ばれる

⁹ 引用したもの以外に BB pp.132-134, 邦訳『茶色本』 pp.213-216 に関連する記述がある。

か』と尋ねることができない。）」（*PG* p. 62, 邦訳『哲学的文法 1』 p. 74）

また、『青色本』では次のように言われている。

「言語ゲームとは、子供が言葉を使い始めるときの言語の形式である。言語ゲームの研究は、言語の原初的な形式すなわち原初的言語の研究である。」（*BB* p.17, 邦訳『青色本』 p. 45）

言語ゲームは、『哲学的文法』では、言語を用いた活動、『青色本』では、子供が言語を使い始めるときのような原初的な言語形式とされている。しかし『青色本』の後の『茶色本』では、言語の文法的な考察をする方法として、すなわち、語の用法を比較対照するための方法として、多くの言語ゲームが作為的に考案されている。そしてウィトゲンシュタインは、そうした作為的に作られた言語ゲームについて、『茶色本』では、次のように言う。

「我々は、我々が記述する言語ゲームを言語の不完全な部分としてみなすのではなく、それ自身完全な言語、完全な人間の交信システムとして見なしている。」（*BB* p. 81, 邦訳『茶色本』 p. 139）

また、『哲学的文法』、『青色本』、『茶色本』よりも後に書かれた『哲学探究』では、次のように言う。

「我々は、〔『哲学探究』の〕第二節における語の使用の全過程が、子供がそれを介して自分の母国語を学ぶゲームの一つだ、と考えることもできよう。私は、こうしたゲームを＜言語ゲーム＞と呼び、或る原初的な言語をしばしば言語ゲームとして語ることにする。……

私は、言語とその諸活動（Tätigkeiten）とが絡み合った全体も、＜言語ゲーム＞と呼ぶだろう。」（*PI* § 7, 強調はウィトゲンシュタイン）

この節の前半は言語ゲームを、『青色本』等と同じように、子供が言葉を使い始める時の言語の形式という意味で使っているが、後半では、言語とそれに伴う諸活動全体も言語ゲームと呼ぶと言っており、言語ゲームの意味が広がっている。

なお、ウィトゲンシュタインがこの節で言う「第二節における語の使用」とは、『哲学

探究』の第二節に取り上げられている作為的に作られた言語状況における語の使用のことで、大工とその助手の二人だけから成るものである。そこで用いられる語は、＜立法石＞、＜柱石＞、＜板石＞、＜角石＞の四つの語だけの極めて単純なもので、助手は、大工が発した語に見合った石材を大工のもとに持っていくことである。ただ単純ではあっても、これだけで完結した言語、完結した交信システムの社会として考えられている。なぜこのような言語状況設定をするかという、単純な言語ゲームを日常行われている複雑な言語ゲームの比較の対象として考えるためである、とウィトゲンシュタインは言う。

「我々の明瞭で単純な言語ゲームは、将来の言語の規制を目指した予備的研究—いわば、摩擦や空気抵抗を考慮しない暫定的な近似—ではない。むしろ、この言語ゲームは比較の対象としてあって、それらは、類似や相違によって、我々の言語の諸状態に光明を投げかけるように求められている。」（*PI* § 130、強調はウィトゲンシュタイン）

なお、『茶色本』では、無限という言葉の用法、規則に従う（案内される）という意味などを考察するために、比較の対象のための様々な作為的な言語ゲームが考案されている。また、『哲学探究』では次のように言う。

「＜言語ゲーム＞という言葉は、ここでは言語を話すことが、活動の一部あるいは生活形式 (*Lebensform*, *life-form*) の一部であるということを強調するよう求められている。言語ゲームの多様さを、次の例その他において概観せよ。」（*PI* § 23、強調はウィトゲンシュタイン）

ここでは言語ゲームは、生活形式の一部であることが強調されている。また、ウィトゲンシュタインは、「次の例」として、記述する、報告する、推測する、検証する、感謝する、冗談を言う等、人間の様々な活動の事例、普通に行われている認識的ゲームの事例を挙げ、言語ゲームの多様さに注目せよと言う¹⁰。また、次のように言う。

「私が自分の感覚を同定するのは、もちろん基準によってではなく、同じ表現を用いることによってである。しかし、それで言語ゲームが終わるのではない。それでもってそれが始まるのである。」（*PI* § 290、強調はウィトゲンシュタイン）

¹⁰ 「我々の言語の衣装があらゆるものを均一にしまうために、日々の言語ゲームの言葉では言い表せない多様性は、我々の意識に上ってこない。」（*PI* II xi p. 191, 邦訳 p. 448）

ここでは感覚の同定について、それを表現することで言語ゲームが始まると言っている。例えば、「私はお腹が痛い」は、痛みの言語表出、医者への報告、食事ができない理由、病院に連れて行ってほしいという依頼など、状況に応じて様々な意味を持ちうる。そして、ここから言語ゲーム（認識的ゲーム）が始まる、と言っている。また、次のように言う。

「我々の間違いは、事実を＜原現象＞と見るよう求められているところで、説明を探し求めるということ。即ち、この言語ゲームが行われている、と言うべきところで。言語ゲームを我々の経験によって説明することが問題なのではなくて、言語ゲームを確認することが問題なのである。」（*PI* § 654, 655、強調はウィトゲンシュタイン）

ここでは言語ゲームは、通常の活動、認識的ゲームの意味で用いられている。現に行われている認識的ゲームを経験によって説明することは、活動の原因を探究することであり、仮説を求めることである。それは、ウィトゲンシュタインにとって関心の対象ではない。彼にとっては、現に行われている認識的ゲームが出発点なのであって、それは我々の目の前にあり、説明すべきことは何もない。それを別の何かで説明するのではなく、我々はそれに気付くことができないのでそれを確認することが問題だ、と言っている。

「全ては公然とそこにあるので、説明すべきこともない。」（*PI* § 126、強調は論者）

「我々にとって最も重要な物事の相貌は、その単純さと平凡さによって隠されている。（人はこのことに気付くことができない、－それがいつも眼前にあるからである。）」（*PI* § 129、強調は論者）

また、『哲学探究』の第2部では、次のようにも言う。

「我々の言語ゲームという出来事は、常に暗黙の前提の上に置かれている。」（*PI* II v p.153、邦訳 p.358）

ここでは、言語ゲームには常に暗黙の前提がある、と言っている。ここで言う言語ゲームとは認識的ゲームのことである。この節は、言語ゲームには常に暗黙の前提がある、と言うことで、言語ゲームが「認識的ゲーム」と「暗黙の前提」という二層の構造から成る、

ということを予想させる。この「暗黙の前提」には、『確実性の問題』の中でウィトゲンシュタインが考察の対象とする確実性も念頭に置かれていると考えられる。確実性については、本論文のテーマであり、第2章以下で取り上げるものである。

このように言語ゲームは、子供がそれを介して母国語を学ぶような原初的な言語として、また、明瞭で単純な言語ゲームを作為的に考案して、それと比較することで複雑で錯綜した日常言語の見通しを付ける方法として、また、人間の活動あるいは生活形式の一部（認識的ゲーム）として考えられている。そして、「言語ゲーム」という語に、こうした用法の全てに共通する一本の糸のような一貫した定義はなく、その代わりにそれらは多くの仕方で類似している（家族的類似性¹¹）、とウィトゲンシュタインは言う。

「人は今や私に向かって次のように反論できよう。『あなたは安易なやり方をしている！すべての可能な言語ゲームについて語っているが、それなら言語ゲームの本質的なものは何か、また、言語の本質的なものは何か、そのことをあなたは何も言っていない。これら全ての出来事に共通するものは何か、そして、それらを言語にするものは何か、あるいは言語の一部にするものは何か、それについて何も言っていない。だからあなたは、かつてあなた自身を最も悩ました研究の正にその部分を、すなわち命題の一般形式と言語の一般形式に関する部分¹²を、なしで済ませているのだ』、と。そして、これは本当のことである。－我々が言語と呼ぶもの全てに共通する何かを挙げる代わりに、私は、これらの現象全てに同じ言葉を用いる、それらに共通するものは何一つなく、－これらの現象は、多くの異なった仕方で類似している、と言っているのである。そして、この類似性あるいはこれらの類似性のために、我々はこれらの現象全てを＜言語＞と呼ぶ。」（PI § 65、強調はウィトゲンシュタイン）

このようにウィトゲンシュタインは、多様な意味で言語ゲームという言葉を用いるが、後になるほど原初的な言語とか比較対象のための人為的な言語というよりは、多様な人間活動に伴う認識的ゲームという意味で用いることが多くなっている。

5 真なる命題、無意味な命題、ナンセンスな命題について

ウィトゲンシュタインは、命題を、真なる命題、無意味な命題、ナンセンスな命題に区別して考える。これらの語の用法を確認しておこう。

¹¹ PI § 67

¹² 「命題の一般形式と言語の一般形式に関する部分」というのは『論理哲学論考』のテーマである。

ウィトゲンシュタインにとって真なる命題とは自然科学 (Naturwissenschaft, natural science) の命題¹³であって、それ以外は無意味 (Sinnlos, senseless) な命題か、ナンセンス (Unsinn, nonsense) な命題かのいずれかである。

真なる命題は、真か偽かのどちらであるかが決められる命題 (「命題の二極性 (the bipolarity of the proposition)」と言われる¹⁴) のことであって、自然科学の命題がその典型であり、経験命題ともいわれる。

無意味な命題の「無意味」とは、「真・偽を問うことが無意味」ということで、「意味をなさない」ということではない。この点で「ナンセンス」と区別される。従って、無意味な命題とは、真・偽を問うことには意味がないが、正・誤 (規則に従っているか否か) を問うことには意味がある命題のことである。これには数学や論理学の命題、教示や文法 (規則) を表現する命題が該当する。数学や論理学の諸命題はトートロジーか矛盾を表現し、理解可能であるが、世界について何ごとかを語るものではない。文法 (規則) を表現する命題は、トートロジーではないが、アンディ・ハミルトン (Andy Hamilton) によれば、「文法的命題は…ナンセンスではなく、意味の境界線上にあり、おそらくそれは無意味である。この命題は、それ自身言語ゲームの中の指し手ではなく、その限界にあって、どの指し手が意味をなすかを示す」 (Hamilton, A. [2014], p. 44、強調はハミルトン)、としている。無意味な命題は、計算が正しいか間違っているか、規則に従っているかそうでないかが問題になる。

ナンセンス (理解不能) というのは、構文論的に意味不明 (理解不能) な文だけでなく、ウィトゲンシュタインの場合は、構文論的に正しい表現でも文脈によって意味不明になる場合があり、語用論的に意味不明 (理解不能) な文を含む。

ウィトゲンシュタインは、「語の意味とは言語内におけるその使用である」 (PI §43)、「文は言語ゲームの外ではどんな意味も持たない」 (RPP1 §488)、「文 [命題] は用いられることによって意味を持つ」 (OC §10) というように、文は、言語ゲームの中で用いられることによって意味を持つと考える。従って、文脈に無関係になされる文は、たとえ構文論的に意味をなす文であっても、語用論的にナンセンス (理解不能) になるケースがあり得る¹⁵。

¹³ 「真なる諸命題の全体が自然科学の全体 (あるいは諸自然科学の全体) である。」 (TLP §4.11)

¹⁴ ウィトゲンシュタインは命題の二極性に常に関わっていたという統一見解があるが、それが常に維持されていたことを否定する論者もいる、とアンディ・ハミルトンは言う。また、ハミルトンは、真なる命題はその否定が可能でなければならない命題のことだと言われるとしたうえで、どんな真なる命題も、真または偽であることが可能でなければならない、それが命題の二極性ということで、真なる命題は、偶然的経験的である、と言う。 (Hamilton [2014], pp. 110-111)

¹⁵ ストロールは、構文論的には正しくても意味不明 (ナンセンス) な文として、「超越論的調和に浸された

語用論的にナンセンスな文というのは、例えば、正常な光りの下で面と向かって目の見える相手と会話をしている時に、会話の脈絡とは無関係に、「私はここにいる」と発話する場合が該当するだろう。ただ、「私はここにいる」は、例えば初詣などで大勢の人波に紛れて私を見失った子供に、私の位置を知らせるために手を挙げて大声で、「私はここにいる」と言う場合等、状況によって意味をなす場合がありうる。この場合「私はここにいる」は、ナンセンスではなく、真・偽を問うことに意味がある、真なる命題（経験命題）である。

なお、「命題」という言葉について、モイナル・シャロック（Danièle Moyal-Sharrock）は、ムーアの 1939 年の論文「外的世界の証明」のような状況の中で使われる「私には手が二つある」という文は、第 3 章以下で取り上げるように、蝶番として働く「揺るぎないもの」であり、それを「命題」と呼ぶことを厳密な意味で批判している¹⁶。

またアヴラム・ストロール（Avrum Stroll）は、ウィトゲンシュタインが『確実性の問題』を書き始めた頃¹⁷は、ムーアが「擁護」に掲げたような確実なものを、ムーアと同様に命題として考えていたという。しかし彼の考察が進むに従って、次第にそれらは非命題的なものであるという考えに取って代わられて、『確実性の問題』の終わりの頃¹⁸には、普通の意味での命題（真か偽かという二極性の概念が当てはまるような命題）として考えてはいなかった、ということを指摘している¹⁹。

ストロールによれば、経験命題、無意味、ナンセンスのウィトゲンシュタインによるこうした区別は、彼の初期の哲学である『論理哲学論考』から『確実性の問題』に至るまで一貫していると言う²⁰。

しかし、ハミルトンは、ウィトゲンシュタインの後期の哲学は、前期の『論理哲学論考』とは対照的に、「意味を持つ文」、「無意味な文」、「ナンセンスな文」を幾分ゆるく区別していて、無意味とナンセンスは交換して使われている²¹。特に形而上学や倫理学などの命題が、無意味なのかナンセンスなのかは、一義的に明確に決められず、それを明らかにする

緑色の持続を少しばかりもってこい（Bring me some bits of green duration that are immersed in transcendental harmony.）」（Stroll [1994], p. 106）という例を挙げている。

¹⁶ Moyal-Sharrock [2007], pp. 33-51

¹⁷ 『確実性の問題』の編者によれば、『確実性の問題』を書き始めたのは 1949 年のクリスマスの頃。

¹⁸ ストロールが『確実性の問題』の終り頃としてどの時期を考えていたかは不明である。

¹⁹ ストロールは、「ムーアは、命題的な用語の中で確実性について考えている。ウィトゲンシュタインが……蝶番命題について語る時、我々は初めの方【命題】の説明を扱っている。……テキストが書き続けられるに従って……説明は……非知性的になる。その中には、行為すること、共同体の実践の中で訓練されること、本能的であることなどがある」（Stroll [1994], p. 146、強調はストロール）、と言う。

²⁰ Stroll [1994], p. 115、

²¹ Hamilton [2014], p. 145

には分析を必要とする²²、と言う。

論者は、形而上学や倫理学の命題は別にして、ウィトゲンシュタインは語用論的立場を取っているので、ある命題が、経験命題、無意味な（規則を表現する）命題、ナンセンスな命題のいずれに該当するかは、まさにその命題が、どういう文脈（状況）の中で使われているかに依存する、と考える。

なおウィトゲンシュタインは、次に引用する『確實性の問題』§ 319²³で、真なる命題（経験命題）と論理学や規則のような無意味な命題との間に、明確な境界は無い、と言っている。

「しかしそれでは、人は、論理学の命題と経験命題の間にはっきりした境界は引けない、と言わなければならないのだろうか。規則と経験命題の間の境界があいまいなのである。」（§ 319、強調はウィトゲンシュタイン）

ここでは、経験命題が規則として用いられることがあるとウィトゲンシュタインは言っている²⁴。

従って、同一の命題であっても、それが用いられる文脈によって、経験命題にも無意味にもナンセンスにもなりうることが示される²⁵。

もっともウィトゲンシュタインは、命題という概念自体がはっきりしたものでない、とも言っている。

「ここで人は、＜命題＞という概念自体が明確でない、ということを考えなければならないと私は信じている。」（§ 320）

なお、「命題」という語は、多くの他の語と同様に、本章の 2 で触れた家族的類似性を持つ概念である。彼は、次のように言っている。

「我々が＜命題＞、＜言語＞などと呼ぶものが、私の想像した形式的な統一体ではなく、多少とも互いに類似したものを持つ家族であるということが分かる。」（*PI* § 108、

²² ハミルトンは、『ソクラテスは同一である』のような明らかにナンセンスな命題がある一方、形而上学、倫理学、美学の命題は世界を全体として捉えようとしていて、有意味であるように見え、それらがナンセンスであることを開示するには分析を必要とする」（Hamilton [2014], p. 44）と言う。

²³ 以下本論文において『確實性の問題』からの引用は、紛らわしい場合を除いて「§」だけの表示とする。

²⁴ この問題については、第 5 章の 1(2)、1(9)で取り上げる。

²⁵ § 622

以上のように、ウィトゲンシュタインにおいては、命題には真なる命題（経験命題）と、それ以外に無意味な命題とナンセンスな命題がある。本論文では、ムーアが「擁護」に掲げたような確実なものを表現する命題を、命題としてみるかどうかについては、緩やかに扱っていくこととする²⁶。

6 二種類の心的出来事・心的状態について

『心理学の哲学 I, II』、*Letzte Schriften über die Philosophie der Psychologie I, II* は、『哲学探究』の第2部のための予備的研究と考えられている。これらと、『断片』及び『哲学探究』第1部の後半部分は、感覚、痛み、感情、知覚、体験、アスペクト、意図、想像、思考、知識、信念等の心的用語について考察している。

ウィトゲンシュタインは、こうした心的出来事や心的状態を表わす心的用語を、本物の持続を持つものと持たないものに区分する。彼は、感覚や痛みや感情は本物の持続を持ち、これらは特定の（特徴的な、特有の）心的状態とか心的出来事であるが、知識や信念は本物の持続を持たず、状況に応じて様々な心的出来事（感覚や感情）から成るが、これらに特定の心的状態や心的出来事はない、と考える。本物の持続を持つ心的出来事とは、例えば次のようなことだ。

「全ての感覚は本物の持続を持つ。全ての感覚は度合い及び質的混合を持つ。度合い＝ほとんど気づかないー我慢できない。この意味で、位置あるいは運動感覚は存在しない。」（*RPP2* §63）

「本物の持続がある場合には、『注意を向けなさい、そして、体験（像、物音等）が変化したら、私に合図しなさい』と誰かに言うことができる。」（*Z* §81）

サイレンの音には始まりと終わりがあるし、中断もありうる。音には強弱や音色があつて変化すればそのことに気付く。それを指摘することができる。このように音には本物の持続がある。しかし、知識や信念、理解や意図には、この意味で本物の持続は無い。そして、ウィトゲンシュタインは、「心の状態」と言う時、本物の持続を持つものとそうで

²⁶ 論者は、本論文で明らかにするように、ムーアが「擁護」掲げるような命題を、行為する態度、構えとして理解し、それをあえて命題として表現したもの、と理解する。（第5章の1(7)、(8)）

ないものと混同してはならない、と言う。

『ある語を理解する』、一つの状態。しかし、ある心の状態か。一悲しみ、興奮、痛みを、我々は心の状態と言う。次のような文法上の考察をせよ。

我々は言う、

『彼は一日中悲しんでいた』

『彼は一日中ひどく興奮していた』

『彼は昨日から間断なく痛みがあった』

我々は『私は昨日からこの語を理解している』とも言う。しかし『間断なしに』か。

一確かに、人は理解の中断について語ることができる。しかし、どんな場合に、か。

『いつ君の痛みが和らいだのか』と『いつ君はその語を理解できなくなったのか』とを比較して見よ。」（*PI* § 149 欄外 (a)、強調はウィトゲンシュタイン）

彼女は昨日まで悲しみにくれていたが、今日は元気だ、ということに意味がある。また、痛みには、強い弱いがあるし、痛みが無くなれば、それがいつ頃無くなったか言うことができる。痛みの推移に注意を払うことができる。このように感情や感覚、痛みには本物の持続がある。だが、三平方の定理を以前は証明することができたが、今はできないとか、朝永振一郎の「繰り込み理論」を以前は説明することができたが、今はできない、ということがある。これらは、いつ忘れたかを言うことができない。

「私は、自分の痛みの推移に注意を払うことができる。しかし、私の信念や私の翻訳あるいは私の知識の推移に、[痛みと] 同じように注意を払うことはできない。」（*Z* § 75）

また、何かをしようとする意図は、本物の持続を持たない。フランス料理を食べに行こうと意図して家を出て料理屋に着くまでの間、道を歩いている時、電車に乗っている時、途中で友人に出会って話をする時、その意図を間断なくずっとオカレントな意識として持ち続けて続けているわけではない。その間、フランス料理を食べに行こうという一貫した特定の感覚や感情があるのではなく、様々な感覚や感情が行き交っている。例えば、肖像画を描こうと意図することについて、ウィトゲンシュタインは、次のように言う。

「ある絵を誰その肖像画にしようとする意図することは、一つの特定の心の状態ではな

く、一つの特定の心的出来事でもない。〔それは、〕『……と意図する』と呼ぶべき心の働きや状態の、非常に多くの組み合わせである。」（BB p. 32、邦訳『青色本』p. 68）

このように、フランス料理を食べに行こうという意図についても、その特定の感覚や感情を間断なく持ち続けているわけではない。それにも拘らず、足は、自然と料理屋に向かっている。こうした心的状態のあり方を、ウィトゲンシュタインは傾性と捉えて、感覚や感情のような在り方と区別して考える。

そしてウィトゲンシュタインは、感覚や感情のような本物の持続を持つ心的状態を意識状態と考え、知識や信念、意図のような本物の持続を持たない心的状態は、意識状態ではなく傾性と考える。従って、感覚や感情や痛みは意識状態であるが、理解、知識、信念、期待、意図などは意識状態ではなく、傾性である。

「私は＜意識状態＞について語りたい。一定の像を見ること、音を聞くこと、痛みの感覚、味覚等をそう名付けたい。私は、信じる、理解する、知る、意図する等は意識状態ではないと言いたい。これら後者を＜傾性（Disposition）＞と呼ぶとすれば、傾性と意識状態の間の重要な違いは、傾性は意識の中断あるいは注意の移動によって中断されることがない、ということである」（RPP2 § 45、強調は論者）

傾性が意識の中断や注意の移動によって中断されることが無いというのは、知識や信念などは、睡眠等によって意識が中断されたり、何かに注意がそがれたりしても、影響されないということである。ユークリッド幾何学で三角形の内角の和は 180° だという知識は、常に念頭にあるわけではない。熟考中の将棋の棋士のオカレントの意識に、次に指す手のいくつかの候補はあっても、三角形の内角の和は 180° というのはない。だが、その場合でも誰かに聞かれれば答えることができる。こういう意味で、知識は途切れることは無い。しかしウィトゲンシュタインは、厳密には知識などは傾性ではないと言う。

「ABC の知識は、ある心の状態だ、と言う時、人は、ある心の装置（例えば我々の頭脳）の状態を考え、それを介して我々がこの知識の表出を説明するのだ、と考える。そのような状態を人は傾性と呼ぶ。しかし、ここで心の状態について語ることは、その状態について二つの基準が存在しなくてはならない限り、異論なしとしない。即ち、その装置の働きとは別に、その〔装置の〕構造を認知することである。」（PI § 149、強調はウィトゲンシュタイン）

ウィトゲンシュタインは、傾性とは何らかの心の装置に基づく状態に対応するもので、その構造を認知できなければ、傾性と呼べない、と言う。知識については、そのような心の装置の働き（常に意識していなくても聞かれればいつでも三角形の内角の和は 180° だと答えることができるという心の働き）はあっても、そのような心の働きの構造を何ら認知しない（そのような構造があることを自覚しない）ので傾性とは言えない、と言う。それで彼は、意図や志向のような本物の持続をもたないものを傾性と区別して、心的傾性と呼ぶ。

「意図、志向は、心の動きや気分でもなければ感覚や心象でもない。それは意識の状態ではない。それは本物の持続を持たない。人は、意図を心的傾性と（*seelische Disposition, mental disposition*）呼ぶことができる。この表現は、人が自身の内にこのような傾性を経験によって知覚しない限り、惑わされる。それに対して、嫉妬する傾向（*Neigung, inclination*）は本当の意味で傾性である。経験は、私がそれを持っていることを教える。」（*RPP2* § 178、最初の強調は論者、後の強調はウィトゲンシュタイン）

ウィトゲンシュタインは、嫉妬する傾向を持っていることは自覚できるので傾性と呼べる、だが、意図はその働きを表出することはあっても、働き（傾向）を経験によって知覚できないので傾性とは呼べない、従って、心的傾性と呼ぶ、と言っている。知識や信念などについても、意図と同様に、心的傾性と呼ぶことができると考えられる。また、本論文のテーマである「確実性」も、心的傾性に属すると考えられる²⁷。

このように、知識や信念、理解や意図等の命題的態度と呼ばれる語は、痛みや感覚、感情などの用法と文法が異なっている。なお、知識や信念、理解や意図等の用語の間にもそれぞれ文法の違いがあることは勿論である。

以上で、後期ウィトゲンシュタインの基本的な考え方を説明するとともに、確実性に関連するキーワードを取り上げ、その概略を説明してきた。次章から、ウィトゲンシュタインがこの『確実性の問題』で主題とした確実性について、なぜ彼が、確実性をわざわざ取り上げて論じようとしたのか、また、彼の主題とする確実性は知識や信念とどう異なるのか、それはどういうものかについて、論じていこう。

²⁷ 第5章の1(8)

次の第 2 章では、ウィトゲンシュタインが確実性について関心を持つきっかけになったムーアの「証明」がどのようなものであったかを見て、ウィトゲンシュタインがムーアの証明の何を批判し、何を評価したのか、アヴラム・ストロールの解釈を下敷きにして考察し、ストロールの確実性に対する考えを批判する。

第2章 ムーアの「外的世界の証明」とストロールによる ウィトゲンシュタインの批判と評価

1 はじめに

『確実性の問題』は、第1章で述べたように、ムーアの1925年の論文「擁護」と1939年の論文「証明」を検討して書かれた。

本章では、次の第2節でムーアの「証明」の概略を辿り、第3節でそれに対するウィトゲンシュタインの批判と評価について、アヴラム・ストロールの *Moore and Wittgenstein on Certainty* を参考にして考察を進め、ストロールによるウィトゲンシュタインの確実性に対する解釈を見て、第4節で本章のまとめとしてストロールの確実性についての解釈を考察する。

2 ムーアの「外的世界の証明」について

2(1) ムーアの外的事物について

ムーアは、論文「証明」の中で、観念論を論駁して実在論を擁護するために、「物理的対象が存在する」ことをどのようにして証明すればよいかを考える。その際、広い意味での事物 (things) の様々なあり方を検討して、「我々の心の外にあるもの (to be external to our minds) 」、「空間において出会われるもの (to be met within space) 」、「空間において現れるもの (to be presented in space) 」を区別して、これらに関連する具体的な事例を検討する²⁸。

例えば、痛みは「空間において現れるもの」であるが、「空間において出会われるもの」ではない。痛みはまた「我々の心の外にあるもの」でもなく、それは我々の心の内にあるものである。また、黒地を背景にして白斑をしばらく見つめた後に、白地に目を移すと、そこに灰色の斑点が見える。これとは別に、物が二重に見えることもある。このような残像や二重像の経験は、「空間において現れるもの」であるが、「空間において出会われるもの」ではない。また、光源を見つめた後に眼を閉じると光点が見えるが、これはある空間に現れるとはいってもいわゆる「空間において現れるもの」と言うことが適切かどうかは問題にされうる。また、鏡に映る像は「空間において出会われるもの」だと断言することははばかれるだろう、と言う。

かくして、ムーアは、残像や二重像、体の痛みは「外的事物 (external things) 」とは考えず、心象や寝ているときに見る夢も「外的事物」とは考えない。ムーアが考える「外的

²⁸ 以下、Moore [1959], pp. 129-137 による。

事物」とは、「我々の心の外にあるもの」で「空間において出会われるもの」のことであり、事例として、人や動物、植物、星、家、椅子、影等を挙げる。

そしてムーアは、「物理的対象が存在する」ことを証明するためにどのような証明をすればよいかを考えて、次のように言う。

「もしあなたが、二つの植物が存在するとか、一つの植物と一匹の犬が存在するとか、一匹の犬と一つの影が存在するということを証明したとしたら、あなたは正にそれによって、空間において出会われる事物が存在することを証明したことになるだろう。」

(Moore [1959], pp. 137-138)

続いてムーアは、例えば、「少なくとも一つの星が存在する」ことが証明されれば、空間において出会われる少なくとも一つのもの（星）が存在するということであり、我々の心の外に存在するものがあるということになると考える。他の場合についても同じことがいえると言う²⁹。そして、事例として石鹼の泡や一枚の紙、靴と靴下を挙げて、これらのどれであっても、それが存在することを証明できれば、「我々の外に事物 (things outside of us)」が存在することを証明したことになるだろう、と言うのである³⁰。

では、何であれ、外的事物が存在するということを、ムーアはどのようにして証明するのか。

2(2) ムーアの「外的世界の証明」について

ムーアは、外的事物が存在する例として、「人間の二つの手が存在する」ことが証明できる、と言う。どのようにしてか。彼は、次のようにしてそれを証明する。

「私は両手を挙げ、右手であるジェスチャーをしながら、『ここに一つの手がある』と言い、次いで左手であるジェスチャーをしながら、『また、ここにもう一つの手がある』と言う。こうすることによって、私が正にその事実によって外的事物の存在を証明したのであれば、今や私は、他の多くの仕方でそれ【外的事物の存在】を証明することもできる、ということをあなたは見て取ることだろう。だから、事例を増やす必要はない。」 (Moore [1959], p. 146、強調はムーア)

²⁹ Moore [1959], p. 144

³⁰ Moore [1959], p. 145

続いてムーアは、厳密な証明に必要な 3 つの条件を掲げる³¹。その 3 つの条件とは次のとおりである。

- ① 結論を導くための証明の前提が、証明しようとする結論と異なっていること。
- ② 私が証拠として取り上げる前提は、私がそうであるということを知っているものであり、私はそれを単に信じているだけでなく、確実に確かであること。
- ③ 結論が実際に前提から引き出されること。

ムーアは、先に自分が行った証明は、厳密な証明に必要なこの 3 つの条件を満たしていると言って、それを次のように説明する。

- ① ついて、結論は単に「人間の二つの手がこの瞬間に存在する (Two human hands exist at this moment.)」というものであり、その結論を導くための前提は、私が両手を示してあるジェスチャーをして、「ここに一つの手があり、またここにもう一つの手がある」と言うものである。前提は結論よりはるかに特殊なものであるから、①の条件を満たす。
- ② ついて、私は、あるジェスチャーをして、そのジェスチャーを「ここに一つの手があり、またここにもう一つの手がある」と言うことに結びつけることによって、表現したこと【ここに一つの手があり、またここにもう一つの手がある】を確かにその時知っていた。即ち、私は、あるジェスチャーを、「ここに」という最初の発話と結び付けて、指示した場所に一つの手があることを知っていた。それは、確実に確かなことであった。もしこの時、私はそれを知らなくて、ただ信じていただけだったとか、おそらくそうではなかったと言うとすれば、何と馬鹿げたことではないか。だから②の条件を満たす。
- ③ ついて、ここに一つの手があり、また今ここにもう一つの手があるなら、二つの手が今存在している、ということになるから、結論がその前提から導かれたということは、全く確かである。よって③の条件も満たす。

かくしてムーアは、自分は外的事物の存在について決定的な証明をした、と考えるのである。

ムーアの以上の説明を整理すると、次のようになる。

前提：ここに一つの手があり、またここにもう一つの手がある。

結論：外的事物が存在する。

前提から結論に至るのに、ムーアが言う次の三条件を満たす。

³¹ Moore [1959], p. 146

- ① 前提は結論より特殊なので結論と区別される。
- ② 前提は真だと知っており、確実に確かである。
- ③ 結論が前提から引き出される。

手は、「我々の心の外にあるもの」で、「空間において出会われるもの」であること、即ち外的事物である。③の条件は、「手」という外的事物が存在するという一つの事例を基礎にして、「外的事物が存在する」という一般命題が証明できる、ということが想定されている。

このようにしてムーアは、外的事物の存在について決定的な証明をした、と考えるのである。

2(3) ムーアの「外的世界の証明」に対する異論とそれに対するムーアの応答

しかしムーアは、自分のこの証明に満足しない哲学者達が多くいるだろうということも認めていた。彼らは、ムーアが自分の手を眼前に掲げて、「ここに一つの手があり、またここにもう一つの手がある」と言う時、ムーアがその証明の前提にしている「ここに手がある」こと自体の証明を求めるのである。そして彼らは、ムーアにその証明ができないのなら、ムーアはそれを知らないと考え、ムーアがした証明は、決定的な証明ではない、と批判するのである。

これに対してムーアは、「証明」の中で次のように応答する。

『ここに一つの手があり、またここにもう一つの手がある』ことを、今や私はどのようにして証明すべきなのか。私にはそれができるとは思われない。」 (Moore [1959], p. 148)

「私は、証明することができないものごとを知っている。そして、たとえ（私が思うように）それを証明することができなくても、私が確かに知っているものごとの中には、私が証明の前提にしているもの【『ここに一つの手があり、またここにもう一つの手がある』】がある。

それ故、私は次のように言いたい。もし誰かが私とその前提を知らない【証明できない】という理由だけで、この証明に満足しないなら、彼らは自分達の不満について納得のいく理由を持っていないのだ、と。」 (Moore [1959], p. 150)

このようにムーアは、自分の証明が前提にしている「ここに一つの手がある」ことを証

明することはできないが、自分は確かに「ここに一つの手があることを知っている」と、断言するである。

以上が、ムーアの「証明」の概略である。

この結論と同じものが、次に掲げる『確実性の問題』の冒頭の第1節の中に取り上げられている。

「もしあなたが、ここに一つの手があることを知っているのなら、残りの全てについてあなたを認めよう。」 (§1)

では、ウィトゲンシュタインは、ムーアの証明の何を批判し、何を評価したのか。このことを、ストロールの *Moore and Wittgenstein on Certainty* を基に、彼の解釈を下敷きにして考察しよう。

3 ムーアの「外的世界の証明」についてのストロールによるウィトゲンシュタインの批判と評価

3(1) ムーアの証明の奇妙さについて

ムーアは、1925年の論文「擁護」では、そこに掲げる常識について、自分は確信を持って知っているとして単に主張するだけで、そのことを証明しようとはしなかった。

なお、ムーアが「擁護」において、自分は確信を持って知っているとして主張する常識とは、「今、生きている身体が存在し、それは私の身体である」、「私の身体は、生まれて以来ずっと地球の表面に接しているか、またはそれほど離れずにいる」、「地球は、私の身体が生まれる以前から何年も存在してきた」等³²の命題のことである。

しかし、後の1939年の論文「証明」では、ムーアは正に、「物理的対象（外的世界）が存在する」ことを証明しようとした。

ストロールによれば³³、ムーアが外的世界の存在について証明を試みたところに、ウィトゲンシュタインがムーアの論文を考察する気にさせるものがあったという。そしてウィトゲンシュタインは、ムーアの証明には奇妙なところがあり、また、証明自体は誤っていると考えたが、同時にそこに、哲学的に理解できる重要な考えがあるという洞察を得た。そのプロセスが『確実性の問題』なのだ、と言う。

ストロールによれば、ウィトゲンシュタインは、ムーアが常識について確信を持って自

³² Moore [1959], p. 33

³³ 以下、Stroll [1994], pp.97-101

分はそれを知っていると主張するだけで、それを証明しようとしないうちに 1925 年の「擁護」を評価して³⁴、1939 年の「証明」の方はそれほど考慮しなかった。だから彼が『確実性の問題』を書き始めた 1949 年ごろ、哲学的問題の本質に対するムーアの感性が 14 年間のうちに悪くなったのではないかと考えていたことは十分ありうることであり、とストロールは言う。ムーアが「証明」において「外的世界の証明」を企てたことで、彼も伝統的な哲学ゲームに取り込まれてしまったとウィトゲンシュタインは考えたのである。しかしその後ウィトゲンシュタインは考察を深める中で、ムーアが「擁護」においても伝統的な哲学ゲームを受け入れていることに気付いた、とストロールは言う。

なおここでいう伝統的な哲学ゲームとは、デカルトに始まって、ロック、バークリー、ヒューム、カント、そして 20 世紀前半のラッセル、エイヤーらの研究にいたる認識論的伝統の観念論、懐疑論、実在論の枠組みの中での論争のことである。そしてムーアは、本腰を入れて懐疑論者達の疑いを止めさせるために、「外的世界の証明」を企てたのである。しかし、彼の証明は、観念論者や懐疑論者達の異議を処理することに成功しなかった。本章で明らかにするように、ムーアも結局「外的世界は存在する」という命題を、経験命題の一種として考えており（少なくとも懐疑論者たちの疑いを理解不能な疑いとは考えていなかった）、彼らと同じ土俵（伝統的な哲学ゲームの中）にいたのである。こうした伝統的な哲学ゲームに対して、ウィトゲンシュタインは、観念論や懐疑論の哲学者達が立ててきた疑いはどういう類の疑いなのか、それらはムーアの証明が解決するような疑いなのか、と問うのである。

では、ウィトゲンシュタインが、ムーアの証明には奇妙なところがあるとしたもの、また、その証明は誤っているとしたもの、そしてそれにもかかわらずその証明の背後には、何か理解できる重要な考えがあると洞察したもの、それらはストロールによれば何であったのか。

ウィトゲンシュタインがムーアの証明に向ける批判の中で、ストロールは、主に次の三点を取り上げる。

第一、ムーアは、「ここに私の手がある（存在する）」という言明と「ある惑星が存在する」という言明との間には大きな違いがあるということを理解していないこと³⁵。

第二、「物理的対象は存在しない」という言明はナンセンス（理解不可能）であり、また、

³⁴ 実際、ウィトゲンシュタインは、「そのように【確実に】知られた真理の事例として【ムーアが】列挙した命題は、勿論興味深い」（§ 137）と言っている。

³⁵ Stroll [1994], p. 101

「物理的対象は存在する」という言明もナンセンスであるということ³⁶。

第三、ムーアの証明そのものはナンセンスであり誤っているが、ムーアの証明の背後には理解できる重要な考えがあるということ³⁷。

以下、それぞれについて取り上げていこう。

3(2) 第一、「ここに私の手がある（存在する）」という言明と「ある惑星が存在する」という言明との間には大きな違いがあるということについて

ストロールは、『確実性の問題』の § 20 を引用してこの議論を始める。

『外的世界の存在を疑う』ことは、後の観察を通じて立証されるようなものの存在、例えば惑星の存在を疑うことを意味しない。——あるいはムーアは、ここに自分の手があることを知っているということは、土星という惑星が存在することを知っているということとは違った種類のものだと言いたいのだろうか。そうでなければ、土星という惑星が発見されていることを懐疑論者達に指摘して、土星の存在が証明されているのだから外的世界の存在も証明されている、と言うことは可能であろう。」 (§ 20)

ウィトゲンシュタインの断章は、『確実性の問題』に限らず他の著作（草稿）でも何を問題にしているのかが分かりにくい。この節も同様に分かりにくい。ストロールによれば、ウィトゲンシュタインはここで、次の 3 つ言明に対する疑いを比較することを求めているという³⁸。

- i ある惑星が存在する
- ii 私の手がある（存在する）
- iii 外的世界が存在する

ストロールは、ムーアの関心の焦点は ii と iii にあり、彼の証明は、ii の言明を前提として iii の言明を結論とするものであるが、その目的は ii の言明と iii の言明の区別が不鮮明なことを懐疑論者達に対して説得しようとするものである、と言う。「結局、彼（ムーア）は、自分の手の存在を疑うことと外的世界の存在を疑うこととの間に区別の無いことを懐疑論者に説き伏せようとしている」（Stroll [1994], p. 101）、と。

³⁶ Stroll [1994], p. 103

³⁷ Stroll [1994], p. 104

³⁸ Stroll [1994], p. 101

しかし、ストロールによれば、ウィトゲンシュタインはこの節で、ムーアが ii と iii を同化させているというよりは、ii を i に同化させている可能性のあることを問題視しているという。ii が i に同化されるなら、ムーアの証明は奇妙なものとして映る、と。また、ii を i に同化させて iii を導くということでは観念論や懐疑論の異議に十分に答えられない、ということを描したがつているように見えるという。これはどういうことだろうか。

まず、ii が i に同化されるのなら、ムーアの証明は奇妙なものとして映るとはどういうことか、を取り上げよう。

「ある惑星が存在するかどうかについての疑い」と「私の手が存在するかどうかについての疑い」を比較すると、「ある惑星」と「私の手」に違いがあるだけで、この二つの表現に大きな違いはないように見える。しかし、ウィトゲンシュタインにとっては、この二つの疑いにはとても大きな違いがある、とストロール言うのである。

実際のところ、「惑星」に関して言えば、天文学の歴史の中で、「ある惑星が存在するかどうか」の議論がなされ、新たな惑星が発見されたこともあれば、惑星の存在の可能性が否定されたこともあった³⁹。

しかし、「私の手がある（存在する）かどうか」について議論がなされるということがあるかどうか、また、過去にあったかどうか。ムーアにしても、「ムーアが生まれて以後、どういう時にせよ、ムーア自身を含めて、様々な人がムーアの手が存在することを疑うようなことがあっただろうか。」（Stroll [1994], p. 102）ムーアの手が存在することは誰にとっても当たり前のことで、ムーア自身も、自分の手の存在を、証明する前でも後でも疑うことはなかったはずだ。

しかしムーアは、「惑星の存在」ではなくて、「ここに私の手がある（存在する）」ことを証明しようとした。ウィトゲンシュタインは、ここにムーアの証明の奇妙さを見出した。

「惑星が存在する」と違って、「ここに私の手がある」ことは、証明されたから理解されるというものではない。それは証明される以前からあたりまえのことである。だからそれを証明しようとするのが奇妙なのだ⁴⁰。

³⁹ 天王星は 1781 年に発見された。一方、惑星「バルカン」は 1915 年のアインシュタインの一般相対性理論によって、その存在の可能性が否定された。

⁴⁰ ウィトゲンシュタインは、「太陽からしかじかの距離に惑星が存在する」という命題と比較して、「第二の命題『ここに私の手がある』』を仮説と呼ぶことはできない」（§ 52）と言っている。仮説と呼ぶことは疑いの余地があるということで（第 5 章の 3 参照）、その意味で第二の命題を仮説と呼ぶことはできない、ということだと考えられる。なお、ここで言う「できない」は、論理的にできないという意味であるが、その詳細は第 3 章で取り上げる。

次に、ii を i に同化させて iii を導こうとするムーアの証明は、観念論や懐疑論の異議に十分に答えられないとはどういうことか、を取り上げよう。

先に引用した § 20 で、ウィトゲンシュタインは、『『外的世界の存在を疑う』ことは、後の観察を通じて立証されるようなものの存在、例えば惑星の存在を疑うことを意味しない』、と言っていた。この意味は、ストロールによれば、観念論者達が立てる外的世界の存在についての疑いは、土星の存在を疑うこととは異なった特殊なものであり、明らかに哲学的な疑いだ、というものである。それは、何か事実の発見や証拠をあげることによって立証されるような存在を疑うものではない、と⁴¹。

しかしムーアは、i と ii の間に大きな違いがあることを見損なって、惑星の存在も自分の手の存在も同じようなものだと考えて、誰も疑うことがない自分の手を取り上げて、その手の存在を証明することによって、iii の外的世界の存在を証明しようとした。

ストロールは、この証拠を挙げて外的世界の存在を証明しようとした点で、ムーアは伝統的な観念論者の疑いがどんなに特殊なものであるかを理解し損なっており、ムーアの試みた証明が、反対論者の異議に答えることにはなっていないと言う⁴²。そして、観念論者の疑いが通常の違いではないことについて、次の § 24 を引用する。

「観念論者の問いは、次のようなものであろう。『どんな正当性があって私は、私の手の存在を疑わないのか。』（そしてその問に対する答えが、『私は、それらが存在することを知っている』ということではあり得ない。）しかし、そのように問う者は、存在についての疑いが、言語ゲームの中でのみ働くものだという事実を見落としている。従って、まず問われるべきは、そのような疑いはどのようなものかということであって、早まってそれを理解してはならない。」（§ 24、強調はウィトゲンシュタイン）

ここでウィトゲンシュタインは、「存在についての疑いが、言語ゲームの中でのみ働くものだという事実」に我々の目を向けさせる。存在についての疑いとは、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）では、例えば、冷蔵庫の中に入れておいたケーキがまだあるだろうかとか、ペンケースの中に入れてあったはずの馴染みの赤のボールペンがないのはどうしたのだろうか、というような形でなされる。ケーキがなければ誰が食べたのか犯人捜しをするだろう。また、ボールペンがなければカバンの中かポケットを探すだろうし、どこかで落としたのかもしれないと思うかもしれない。しかし、ケーキやボールペン自体の存在を

⁴¹ Stroll [1994], p. 102

⁴² Stroll [1994], p. 103

疑うことはない。ましてや事物一般の存在を疑うことはない。そのような疑いはそこでは除かれている。通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）では、このように疑いはどこかで打ち止まる。そこで更に根拠（正当化）を求めることはない。

「自分の手が存在する」ということも、通常の言語ゲームでは、それ以上の根拠や正当化を求める必要のないものの一つである。

ストロールによれば、このような中で、ウィトゲンシュタインは、自分の手の存在を疑わない根拠を尋ねる観念論者にどう応じるべきか、答えている。それは、あれこれ悩んだ挙句、結局、観念論者の求める根拠を見出すことができなくて、「とにかく私は、自分の手が存在していることを知っている」などと答えることではない。そうではなくて、観念論者の問う疑いがどういう疑いかということを、観念論者に問い質すことである、と。観念論者の疑いは、通常の言語ゲームを逸脱しているからだ。

従ってムーアは、観念論者に対して、「私はここに一つの手があることを知っている」と言うことでもって答えるのでは無くて、彼らの問いはどのような類の疑いか、と問うべきであった、というのである。

次に、ウィトゲンシュタインがムーアの証明に向ける批判の第二、「物理的対象は存在しない」という言明はナンセンス（理解不可能）であり、また、「物理的対象は存在する」という言明もナンセンスである、ということについて検討しよう。

3(3) 第二、「物理的対象は存在しない」という言明はナンセンスであり、また、「物理的対象は存在する」という言明もナンセンスであるということについて

「物理的対象は存在しない」という言明はナンセンスであり、また「物理的対象は存在する」という言明もナンセンスであるということを説明するために、ストロールは次の § 35 を取り上げる。

「しかし人は、いかなる物体も存在しないことを想像することができないのではない。私には分からない。しかしまた、『物理的対象は存在する』はナンセンス（Unsinn, nonsense）である。これは一つの経験命題であるのだろうか。—

また、『物理的対象が存在しているように見える』という、これは経験命題であろうか。」

（§ 35、強調はウィトゲンシュタイン）

ストロールは、この節から「人は、いかなる物体も存在しないことを想像することがで

きないのではないか。私には分からない」という箇所を取り上げて、その意味を次のように問い進める⁴³。

地球の存在を始め、本章の 3(1)で述べたムーアが「擁護」で主張する命題の多くは、人が間違いうる可能性の困難なものばかりで、ウィトゲンシュタインによって、「私は確信の岩盤に達した」 (§ 248) と言われるようなものだ。地球の存在について誤りを想像することは困難である。このことからストロールハ、「物理的対象は存在する」というムーアの言明はナンセンスであり、結論としてこのナンセンスな命題を導き出すムーアの証明は、論点はずしているだけでなく、認識内容が空虚だと言う。ストロールがこの結論に至る推論を要約すると、次のようである。

「物理的対象は存在しない (いかなる物体も存在しない)」ということは、地球を含めたいかなる天体も存在しないということである。地球が存在しないということは、人間も存在しないということである。では、「我々は如何にしてその誤りを発見しうるのか」と問うことは、何を意味するのだろうか。物理的対象が存在せず、従って、我々も存在しないとする、この間に意味はないのではないか。全く何も存在していないと仮定してみよ。如何にして我々はそれを見出すことができるのか。問がこのような形でなされると、言語は実際に働かなくなってしまうのではないか。よってこのことから、地球の存在を誤る可能性について、例え不可能ではなくてもそれを仮定することは、分別のあるものではない。従って、地球の存在を誤る可能性というのは概念的に空虚である。ところが、ムーアは、「ここに私の手がある」ことを証明することで、懐疑論や観念論による太陽や地球を含むあらゆる物理的対象の存在に対する疑いを、論駁していると思っている。しかし、懐疑論や観念論が想定するような「物理的対象が存在しない可能性」という概念は、空虚である。従って、空虚な概念 (物理的対象が存在しない可能性) に反対してするムーアの証明 (物理的対象は存在する) は空虚だ、ということになり、誤っている。かくして、ムーアの証明の誤りが導かれる、とストロールは言う。

ウィトゲンシュタインによれば、ナンセンスの否定はナンセンスなので⁴⁴、以上のように「物理的対象は存在しない」という言明がナンセンス (理解不能) だとすると、その否

⁴³ Stroll [1994], p. 103

⁴⁴ CL p. 217、ウィトゲンシュタインはラムゼイへの手紙 (1927.7.2) の中で、「ナンセンスの否定はナンセンスである (*the negation of nonsense is nonsense*. 強調はウィトゲンシュタイン)」、と書いている。また、同様の考えは、『青色本』の「……人が知っていると言うことは意味をなさない (*no sense*) (従って、人が知らないと言うことも意味をなさない)」(BB, p. 54, 邦訳 p. 101) や、『確実性の問題』の「……『<私は知らない>という表現はここでは意味をなさない [ナンセンスである]』ということの意味する。従って当然 [その否定である] 『私は知っている』ということも意味をなさない [ナンセンスである] ことになる」 (§ 58) にも現れている。

定である「物理的対象は存在する」という言明もナンセンスだということになる。

このような推論を行って、ストロールは、先の § 35 の『物理的対象は存在する』はナンセンスである」という意味を説明する。

しかしストロールは、「物理的対象は存在する」という言明がナンセンスだというウィトゲンシュタインの理由はこれだけではなく、これとは別の観点から、ムーアの証明に誤りと評価を与えているという。

次に、ムーアの証明に対するウィトゲンシュタインの批判の第三、ムーアの証明そのものはナンセンスであり誤っているが、ムーアの証明の背後には理解できる重要な考えがあるということ、について検討しよう。

3(4) 第三、ムーアの証明そのものはナンセンスであり誤っているが、ムーアの証明の背後には理解できる重要な考えがあるということについて

3(4-1) ムーアの証明そのものはナンセンスであり誤っているということについて

第 1 章の 5 で論じた、経験命題（真なる命題⁴⁵）、無意味な命題、ナンセンスな命題についてのウィトゲンシュタインの考え方を踏まえて、ストロールがウィトゲンシュタインについての解釈として指摘する、ムーアの証明はナンセンスだという意味を検討しよう。

ストロールは、§ 54-56 を取り上げて、そこでは § 35 で論じられた観点とは別の観点からムーアの証明が誤っていることを、ウィトゲンシュタインが示している、と言う。

先の § 35 で、ウィトゲンシュタインは、「物理的対象は存在する」という命題はナンセンスであり、従って、それは経験命題ではないのではないかと問うていた⁴⁶。それが経験命題ではないことは、続く § 36、37 で示唆されていると言う。

§ 36 では次のように、「A は物理的対象である」は教示の一つであり、「物理的対象」というのは論理学的概念だと言う。

『A は物理的対象である』は、『A』が何を意味するのか、あるいは『物理的対象』が何を意味するのかまだ理解していない者に対してだけ、我々がする教示の一つである。つまりそれは、言葉の仕様についての教えであり、『物理的対象』というものは（色、

⁴⁵ ストロールは、ウィトゲンシュタインが「真なる命題の全体が自然科学全体（自然の諸科学全体）である」（*TLP* § 4.11）と言う意味で、真なる命題を、彼の論文(*Moore and Wittgenstein on Certainty*)の中で「経験命題」として表現してきたと言っている。（Stroll [1994], p. 115）

⁴⁶ ウィトゲンシュタインにおいては、経験命題ではない命題は、ナンセンスな命題か無意味な命題のいずれかである。従って、ナンセンスな命題は経験命題ではないことになる。

量などのように) 論理学的概念である。従ってこのことが、『物理的対象は存在する』
というような命題が定式化されえない理由である。しかし我々は、至るところでこの
ような無駄な試みに出会う。」 (§ 36、強調は論者)

そして、続く § 37 では、直接的でもっと重要なことを語っている、と言う。

「しかし、『物理的対象は存在する』はナンセンスであると言うことは、観念論者の懐
疑や实在論者の確信に対する十分な答えになるだろうか。彼らにとっては、結局のと
ころ、それはナンセンスではない。しかしながら、この主張もその反対の主張も、そ
のように表現されえないものを表現しようとする誤った試みなのだとすることは、一
つの答えになるだろう。そして、誤っていることを示すこともできるが、それで問題
が終るわけではない。困難やその解決の最初の表現として我々に考えられるものが、
実は全く誤った表現であることがありうるということを認識する必要がある。」 (§ 37)

ストロールは、本章の 3(3)で取り上げた § 35 及びこの § 37 で、ウィトゲンシュタイン
は、「物理的対象は存在する」という言明がナンセンスである⁴⁷と言う一方、次の § 57 を
引用して、「ここに私の手があることを私は知っている」が文法的命題であると言っている
ことを指摘する。

「さて、『ここに私の手があることを私は知っている、単に推測しているのではない』
は、文法的命題 (grammatischer Satz, proposition of grammar) として考えられうるのでは
ないか。」 (§ 57、強調はウィトゲンシュタイン)

ウィトゲンシュタインは、経験命題 (自然科学の命題など) と文法的命題を対比させて
用いる。経験命題は、その命題の真・偽や正当化を問うことに意味のある命題のことであ
る。他方、文法的命題は、語の用法 (使用規則) や言語ゲームを記述するもの⁴⁸で、真・偽
は問題にならない。従って文法的命題の場合、それを検証することや正当化を問うことが、
的外れでナンセンスなものになる。このような意味でウィトゲンシュタインは、「ここに私

⁴⁷「物理的対象は存在する」という命題はナンセンス (理解不可能) ではなく理解できるのではないかという
異議が出されるかもしれない。しかしながら以下で論じるように、この命題は、ウィトゲンシュタインに
よればナンセンスである。

⁴⁸「言語ゲームを記述するものは、全て論理学に属する。」 (§ 56)、「それが言語ゲームを記述するものに
属するのであれば、それは論理学に属する。」 (§ 628) なお、論理学の命題は文法的命題である。

の手があることを私は知っている」は、文法的命題として考えられうるのではないか、と言っている。

ところでムーアが、「ここに私の手があることを私は知っている」と断言したのは、「ここに私の手があること」を証明するよう求められて、彼はそれを証明することができなかったからである。要するに、彼は、この言明を経験命題として考えていて、文法的命題とは決して考えていなかったのだ。だからこそ彼は、「ここに私の手があること」を正当化しようとしたのである。従って、その命題が文法的命題だとすると、「ここに私の手があることを私は知っている」と言うことで正当化しようとしたムーアの試みは、決定的にナンセンスだということになる。文法的命題（規則）に正・誤を求めることはあっても、真・偽を求めることはナンセンスだからである。

しかし、とストロールは言う。ウィトゲンシュタインはそこに、ムーアが「私は……知っている」と断言した言い回しはまずいけれど、彼が気付かなかった、ナンセンスではない理解できる重要な考えを洞察した、と。それは、「ここに私の手がある」という命題は、真・偽を問うことに意味のある経験命題ではなく、文法的命題として考えられるのではないか、という洞察である。

ストロールは、このことを十分に評価するために、次の二つの問を立てる⁴⁹。

- i なぜ、ムーアの言い回しがナンセンスで誤った仕方なのか
- ii 誤った仕方で表現しようとしているが、理解できる重要な考え（文法的命題としての意味）とは何か

ストロールによれば、これらに対する答えは、§ 54-59 の中で示唆されている、と言う。まず、i の問いを取り上げよう。

ストロールは、i の問に答えるために § 54-56 を、次の 9 つの文に再構成する⁵⁰。

- ① 誤りの蓋然性は、惑星の場合から手の場合へと次第に減っていくのではない。あるところで、誤りを考えることができなくなる⁵¹。【§ 54 に対応】

⁴⁹ Stroll [1994], p. 108

⁵⁰ Stroll [1994], p. 109、なお、ストロールは、ここで再構成した文は、ウィトゲンシュタインの『確実性の問題』における文と同一のものではなく、『確実性の問題』から大きく逸脱しているところもあることを注意している。なお、①～⑨中の【】書きは論者の挿入である。

⁵¹ 先に本章の 3(2)で、「ある惑星が存在するかどうかについての疑い」と「私の手がある（存在する）のかどうかについての疑い」との間には、とてつもなく大きな違い（程度の違い）があることが示唆されていた。しかし、①では、「惑星の場合」の誤りと「手の場合」の誤りとの違いは、程度の違いではなくて、種類の違いだということが言われている。この種類の違いというのは、「手の場合」は、「惑星の場合」と違って誤りを考えることができないもの、我々にとって揺るぎないものの部類に属するということである。揺るぎないものというのは、①でいう「誤りを考えることができなくなる（意味をなさなくなる）」もののことであって、疑いが無限に続けられることは無く、あるところで打ち止めになるということである。

- ② 「我々の周りの物はすべて存在しない」という仮説は、「物理的対象についての言明は例外なく誤っている」ということを含意する。
- ③ 上の②の仮説は、「我々は計算をする際に全て計算間違いをする」という仮説に類比的である。【§ 55 に対応】
- ④ しかし、③の仮説は考えられる仮説ではない。なぜなら、「しかじかの計算が間違いである」と言う為には、「ある計算が正しい計算である」ことが言えるのでなければならぬからである。【§ 55, 56 に対応】
- ⑤ もし、全ての計算が間違っているのなら、ある計算が正しい計算だと言うことができない。
- ⑥ それ故に、「我々はあらゆる場合に計算間違いをする」という仮説はナンセンスである。同じ理由から「物理的対象についての言明は例外なく誤りうる」という言明はナンセンスである。
- ⑦ それ故、②～⑥から「物理的対象は存在しない」という言明はナンセンスである。従って、観念論をそれから導き出すことはできない。
- ⑧ 「物理的対象は存在しない」の否定は「物理的対象は存在する」である。しかし、ウィトゲンシュタインによれば、ナンセンスの否定はナンセンスなので、もし P [=物理的対象は存在しない] がナンセンスであれば、非 P もナンセンスである。それ故「物理的対象は存在する」はナンセンスである。
- ⑨ もし P [=物理的対象は存在する] が本質的に R [=私は P を知っている] に現れて、 R が「私は『物理的対象は存在する』ことを知っている」であるならば、 P がナンセンスなので R はナンセンスである。それ故、实在論を R から導き出すことはできない。

ストロールの再構成による推論を整理すると、次のようである。

ウィトゲンシュタインは、「我々の周りの物は全て存在しない」という仮説を「我々は計算をする際に全て計算間違いをする」という仮説に類比させている (③)。

「ある計算が間違っている」と有意味に言える為には、「正しい計算がどういうものか」を知っていなければならない。(これは文法的言明である。) 正しい計算が手元にあつてこそ、「あの計算やこの計算は間違いだ」という概念が意味をなす (④)。

従って、「あらゆる場合に計算間違いをするのではないか」という問は、有意味な(理

それ以上疑うことをしなくなるのである。誤りの考えられる惑星の存在は「知識」に関わり、誤りの考えられない手の存在は「確実さ」に関わる。このことをウィトゲンシュタインは『知識』と『確実さ』は異なるカテゴリーに属する(§ 308、強調はウィトゲンシュタイン)と表現するが、その詳細は次の第3章で取り上げる。

解可能な) 答えがあり得ないことを示唆している (⑤)。即ち、その問は、ナンセンスな問だということになる (⑥)。(なお、これに類似した例で、「これは、あるゲームが常に間違っただけで行われてきた、と言うことが意味をなさないことを示す場合に似ている」 (§ 496) ということが言われている。)

「物理的对象についてのあらゆる言明が誤っているのではないか」と問うことは、「あらゆる場合に計算間違いをするのではないか」と問うことに類比的である (③)。

従ってここで、「物理的对象についてのあらゆる言明が誤っているのではないか」という問に対して、有意味な(理解可能な) 答えはあり得ないこと、即ちこの問はナンセンスな問であることが示唆される (⑦)。

「物理的对象は存在しない」がナンセンスだとすると、「物理的对象は存在する」もナンセンスである (⑧)。「物理的对象は存在する」がナンセンスだとすると、そのナンセンスな文を含む「私は『物理的对象は存在する』ことを知っている」という文はナンセンスである (⑨)。

ここでの推論も、本章の 3(3) の § 35 に関してなされた推論と同様に、「物理的对象は存在する」はナンセンスな言明であるということが導かれている。3(3) では「物理的对象は存在しない」は経験的に空虚な概念であるためにナンセンスであり、その否定の「物理的对象は存在する」もナンセンスである、というものであった。しかしここでの推論は、「あらゆる場合に計算間違いをする」ことがナンセンスであることに類比的に「物理的对象は存在しない」はナンセンスであり、従って、その否定の「物理的对象は存在する」もナンセンスであるというもので、3(3) における推論と違って、ここでは文法的な意味で言われている。

またここではさらに、「物理的对象は存在しない」とか「物理的对象は存在する」という言明はナンセンスなので、このことから観念論も実在論も導き出すことができない、と言われている。しかしウィトゲンシュタインは、先に引用した § 37 にあるように、「物理的对象は存在する」はナンセンスだと言うだけでは観念論者や実在論者に対する十分な答えにならないということを認めている⁵²。では、ウィトゲンシュタインはどう答えようとしているのか。

⁵² 「しかし、『物理的对象は存在する』はナンセンスであると言うことは、観念論者の懐疑や実在論者の確信に対する十分な答えになるだろうか。彼らにとっては、結局のところ、それはナンセンスではない。」 (§ 37)

ストロールによる先の再構成からすると、有意味な（理解可能な）答えがありうるためには、一つでも正しい計算がなければならないことになる。即ち、物理的対象が少なくとも一つは存在するのでなければならないことになる（§56）。ムーアにあっては、それが「ここに私の手がある（存在する）」というものであった。

しかし、とストロールは続ける。懐疑論者は、この計算が正しいことを如何にして我々は知るのか、即ち「ここに私の手がある」ということを如何にして証明するのかと問うのだ、と。

これに対して、ストロールは、ここで問われている二つの「疑い」の種類の違いに言及する。3(2)における§20の解釈では、ウィトゲンシュタインは「惑星の場合」の誤りと「手の場合」の誤りとの違いは程度の違いであることを示唆していた。しかし、§54では、「あるところで、誤りを考えることができなくなる」（強調は論者）とされていて、それは程度の違いではなくて、種類の違いが言われている、と言う。

また、計算が全て誤っているのではないかと、物理的対象についてのあらゆる言明が誤っているのではないかと問うことは、この計算は誤っているのではないかと、しかじかの惑星は存在するかと問うことと違って、理解可能な問いではなく、理解不能（ナンセンス）な問いである。従って、全ての計算は誤っているのではないかと問うことと、この計算は誤っているのではないかと問うこととは、疑いの種類が違う。これと類比的に、物理的対象についてのあらゆる説明が誤っているのではないかと問うことと、しかじかの惑星が存在するかと問うこととは、疑いの種類が違う、と言う。

このように、懐疑論者が疑いと呼ぶものは理解可能な疑いではない。それは疑いに関連し、疑いを模倣する行為ではあるが、重要な点で普通の（日常的な）疑いと異なっている。「普通の疑い」と懐疑論者のするこの種の「哲学的な疑い」との間の違いは、度合いの違いではなくて、種類の違いなのである。そして、「哲学的な疑い」は、理解可能な疑いではなく、ナンセンス（理解不能）な疑いなのだと言っている、とストロールは言うのである。

§54でウィトゲンシュタインが言うように、惑星の場合から手の場合へと理解可能な疑いは、その蓋然性が次第に減っていくのではなく、ある点で誤りが考えられなくなる（誤りを疑うことが意味をなさなくなる）のである。

誤りを疑うことが考えられなくなる所で誤りを疑うことは、その疑いは、理解可能な疑いではなく、ナンセンス（理解不能）な疑いになる。ストロールは、この違いを洞察

したのがウィトゲンシュタインだ、というのである⁵³。

しかしながらムーアは、自分の証明によってウィトゲンシュタインとは対照的に、自分の手の存在を含めて、「あらゆる事物の存在を疑う問い」は理解できる問いであることを前提にして、「私は……を知っている」と言うことで、その疑いに答えたつもりでいる。もちろん、「私は……を知っている」と答えることが適切な場合の疑いもある。通常の言語ゲームでなされる疑いは、全てこれに該当する⁵⁴。しかし、ムーアが理解できると考えているその問いの前提にある、「あらゆる事物の存在を疑う問い」は、理解できないもの、誤った（ナンセンスな）ものである。そのため、その証明は誤り導かれており、ムーアの証明は不必要だということになる。

次に、ストロールが言う、ii の、誤った仕方で表現しようとしているが理解できる重要な考え（文法的命題としての意味）があると言う時の、重要な考えとは何だろうか。次節で、それを取り上げよう。

3(4-2) ムーアの証明の背後には理解できる重要な考えがあるということについて

ここで重要となる概念は § 56-59 にある、とストロールは言う。該当箇所を引用しよう。

「……疑いは、次第にその意味を失う。この言語ゲームは、正にそのようなものである。」

そして、言語ゲームを記述するものは、全て論理学に属する。」（§ 56、強調はウィトゲンシュタイン）

⁵³ しかし、なぜ我々は「普通の疑い」と「哲学的な疑い」の間の区別を容易に混同してしまうのだろうか。ストロールはこの点を明確にはしていないが、論者のウィトゲンシュタインに対する理解では、これは、文の表現形式の類似性から引き起こされる混同によるためである、と考える。（*PI* § 90, 94, 109, 111, 116, 132 他）

即ち、「しかじかの物理的対象は存在しないのではないか」という疑いと、「あらゆる物理的対象は存在しないのではないか」という疑いとは、「しかじか」と「あらゆる」が異なるだけで、それ以外の表現形式は同じである。そのため、「普通の疑い」と「哲学的な疑い」とでは文法が異なっていること、その種類が違うことになかなか気が付かないのである。同種の疑いであることを無批判に前提して理解してしまうのである。

だからウィトゲンシュタインは、このような用法批判をせずに推論を進めることによって誤った結論を導き出すことを戒めて、「早まってそれを理解してはならない」（*OC* § 24）とか、「我々は、至るところでこのような無駄な試みに出会う」（*OC* § 36）と言うのである。しかし、類似した表現形式の背後にある文法的相違を見出すことは極めて困難な作業である。ウィトゲンシュタインの哲学は「明白ではない（nicht offenkundig, disguised）ナンセンスから、明白な（offenkundig, patent）ナンセンスへと移っていく」（*PI* § 464）作業である。

⁵⁴ 「知っている」だけでなく、「信じている」と答える場合も含めている。

「ところで、『ここに私の手があることを私は知っている』のであって、単に推測しているのではない』ということは、文法的命題として理解されうるのではないか。それ故、それは時間的ではない。」 (§ 57、強調はウィトゲンシュタイン)

『私は何々を知っている』が文法的命題として解されるならば、『私』は、もちろん重要であり得ない。そしてそれは、本当は、『この場合疑いの余地はない』とか『「私は知らない」という言葉がこの場合意味をなさない』ことを意味する。そしてもちろん、『私は知っている』も意味をなさないことが帰結する。」 (§ 58、強調はウィトゲンシュタイン)

『私は知っている』は、ここでは論理的洞察である。ただし、それによって、実在論は証明されない。」 (§ 59)

ここに表れている重要な概念の一つは、§ 56の「疑いは、次第にその意味を失う。この[疑いの]言語ゲームは正にそのようなものである。」というものだ。これは、ムーアがその反対論者達から「ここに私の手がある」こと自体の証明を求められ、それに対して「私はどのようにして証明すべきなのか。私にはそれはできないが、私は『ここに私の手があること』を知っている」と答えることに関連している。懷疑論者達は、ムーアの「ここに私の手がある」こと自体を疑い、ムーアにその証明を求め、ムーアはそれに対して「私は知っている」でもって答えようとしたのである。

ストロールは、ウィトゲンシュタインはここに、ムーアによって洗練された形で表された伝統的哲学の本質に対する異議を見出した、というのである。

それは、懷疑論者の疑いに答えるどのような試みも誤りに導かれるという洞察である。それは、

「確実性のようなものがあるという確信。世界についての間違いのない記述は、それを重視しなければいけないという確信。」 (Stroll [1994], p. 160)

である。

ウィトゲンシュタインは、ムーアが我々の実際の実践を描いてはいない、と考える。我々が日々の生活の中で行っている通常の言語ゲームでは、疑いはどこかで打ち止めになる。

しかし、観念論者や懐疑論者が目論んでいるのは、終ることの無い疑いのゲームである。ムーアが理解しているように、疑いをなぜ無限に続けることができないのか、また続けるべきではないのかということに、理由はない。しかし、通常の言語ゲームでは、疑いはどこかで終る。これは一つの洞察である。「疑いは、次第にその意味を失う。この【疑いの】言語ゲームは、正にそのようなものである」 (§ 56) ということが、ウィトゲンシュタインの洞察である。そしてムーアは考えなかったけれど、ウィトゲンシュタインは、通常の言語ゲームでは疑い（根拠づけ）の終わるところに行為がある、と考える⁵⁵。その行為に、根拠やそれを正当化するものはない。根拠はその行為そのものであって、当該行為においてそれ（根拠）は示されている。行為において示されているものを、文脈に関係なく取り出して命題的に言明することはナンセンスになる、と考える。

ストロールによれば、ムーアはこのことを理解していなかった。ムーアは、「疑いは、次第にその意味を失う」という洞察に至ることは決して無かった。そのため、彼は、観念論者や懐疑論者による「普通の疑いを超えた疑い」も、理解できるものと考えていた。しかし、ムーアの意図は、そのような終わりの無いように見える疑いの連鎖を断ち切ることだった。その疑いの連鎖を証明によって断ち切ることができなかったのも、代わって「私は知っている」でもって答えようとしたのだ。彼がそのように「私は知っている」でもって答えようとしたこと自体が、終わりの無いように見える疑いにも意味があるということをも前提にしたものだったのである。ムーアは結局、懐疑論者の問う「哲学的な疑い」も日常的な「普通の疑い」の一種だと想定している。そこにある「疑い」の論理的（文法的）な違いを見て取れなかった。だからムーアは、懐疑論者の疑いを不適当なものとは考えず、懐疑論者が表明する疑いに対して、「自分は確実さを持って知っている」と、断言することによって立ち向かおうとしたのである。

しかし、懐疑論者の表明する疑いは理解できるものであるとするムーアの想定は誤っている。ウィトゲンシュタインには、ムーアの反対論者達は特殊な哲学ゲームをしており、

⁵⁵ 「しかしながら、根拠を与えること、証拠を正当化することは終わりがある。」 (§ 204) 哲学が表現しようとする言明が、全てナンセンスなのではない。哲学において理解できる無意味な（文法的な）言明の存在をウィトゲンシュタインは否定していない。経験命題と文法的命題のように、本来は文法的に種類の異なる文であっても、言語の表現形式が類似しているために、その類似性に惑わされて混同することが、ナンセンスな言明を生み出す源泉なのである。こうした混同を解きほぐすことは、言語の表現形式が要請してくる映像との闘いであり、恐ろしく困難で、骨の折れる作業である。その作業は、言語の用法（文法）批判であり、言語についての論理学なのであって、その表現は、無意味な文（文法的命題）の集積である。そして、この作業は、有意義な（理解できる）営みであって、これがウィトゲンシュタインの哲学であり、彼の仕事の大部分はこれに該当しているものと論者は考えている。

3(3) 及び 3(4-1) で示されたように、彼らの用いる鍵となる概念の一つである「物理的対象（外的事物）は存在しない」はナンセンスだ、と映る。また、懐疑論者の表明する疑いは、日常的な普通の疑いとは種類が違う。これがムーアの持ち得なかったウィトゲンシュタインの洞察である。

しかし同時にウィトゲンシュタインは、ムーアの定式化の背後に、ムーアが手に入れようとしてはっきりと述べることのできなかった、理解できる何か重要な考えを見出した。

<疑う>という語は普遍的に適用されることはなく、疑いのゲーム自体、確実性を前提にしているという考え、を。ウィトゲンシュタインは次のように言う。

「全てを疑おうとする者は、疑いに行き着くことがないだろう。疑いのゲーム自体がもう既に確実さを前提にしている。」 (§ 115)

しかしムーアは、「自分はそれ（ここに私の手があること）が真であると知っている」と断言することによって、疑いの連鎖を止めようとした。つまり、ムーアは次のように考えるのだ。自分の手を掲げて、「ここに私の手がある」ことは確実に確かである、そのことを自分は知っている。疑いは、自分が確信を持って知っている⁵⁶と断言することによって、排除されている。従って、ここで疑いの連鎖を断ち切ることができる、と。

「ここに私の手がある」という言明は、特殊な状況を除いて、疑いが排除されているということについては、ウィトゲンシュタインも同意する。しかし、ムーアとウィトゲンシュタインとでは、その点を表現する仕方が違っている。ウィトゲンシュタインは、「私はそれ（「ここに私の手がある」こと）を知っている」という言い回しも、「私はそれを疑う」という言い回しも、ムーアがそれを言明するような状況（自分の手を眼前に掲げてそれを言う状況）では意味をなさず、そこで「知っている」とか「疑う」と言うのは「知っている」や「疑う」という言葉の誤用であって、ナンセンス（理解不能）だ、と言う。ムーアが語っているような状況で、ムーアのような言い回しをすることに制限を与えているものが通常の言語ゲームである。

通常の言語ゲームには、それを根拠付けている「揺るぎないもの」がある。ストロールはこの「揺るぎないもの」を「蝶番命題（hinge proposition）」と呼ぶ⁵⁶。蝶番命題は、「疑いのゲーム自体がもう既に確実さを前提にしている」と言われるときの「確実さ」のことである。蝶番命題は、通常の言語ゲームの基礎（背景）としてあり、認識的評価を受けな

⁵⁶ Stroll [1994], p. 146

い⁵⁷。

以上が、ストロールの解釈を下敷きにして考察した、ムーアに対するウィトゲンシュタインの批判と評価である。

3(4-3) ストロールの蝶番命題についての考え

ストロールが理解するウィトゲンシュタインの蝶番命題の身分は、「疑似命題」であり、「文法的規則」である。

「ウィトゲンシュタインが蝶番命題と呼んでいるものは、普通の命題では全くないということである。真か偽であるとか、知られているか知られていないとか、正当化されているかいないかというような概念は、それら【蝶番命題】に適用されない。真か偽かなどの概念は、通常、命題の特徴を規定しているものと受け取られている。……

彼が、……命題では全くないものを指すために……用いた用語は、＜疑似命題＞というものであった。それから後に、……彼はこれらを……＜論理的洞察＞と＜文法的規則＞として、または＜論理的洞察＞か＜文法的規則＞として考えた。＜蝶番命題＞という概念は、それらの身分を指し示すための彼のもっとも新しい試みである。……それらは真でも偽でもなく、証拠や証明、確認や否認に従うものではない。このようにそれらは本当の意味で命題では全くないのである。」（Stroll [1994], p. 146、最初の強調はストロール、後の二か所の強調は論者）

ストロールが、蝶番命題と普通の命題を明確に区別した点は評価できる。しかし、ストロールはここで、ウィトゲンシュタインは蝶番命題を＜文法的規則＞として考えたと言うが、*Moore and Wittgenstein on Certainty*の中で、彼が、蝶番命題の文法的規則としての役割を論じた個所は、ここ以外には見当たらない。

蝶番命題は命題に似たものであるが、真・偽に関係せず、証拠を求めたり、証明したり、確認したり、否認したりすることに関係しない。それは通常の言語ゲームの外にある⁵⁸。通常の言語ゲームには属さない⁵⁹。ストロールは、知識と確実性を区別して、次のように言う。

⁵⁷ Stroll [1994], p. 143

⁵⁸ Stroll [1994], p. 138

⁵⁹ Stroll [1994], p. 146

「前者【知識】は、認識的概念で、言語ゲームに属している。また後者【確実性】は、非認識的概念で、言語ゲームに対して前提的で支持的な関係にある。知識は概念的体系の一部であり、その体系の構成員には、推測すること、仮定すること、考えること、信じること、疑うことが含まれる。……しかし、確実性はこの体系には属していない。確実性は体系の外にある。それは言語ゲームを作る。」 (Stroll, A. [1994], p. 165)

ストロールは、知識は言語ゲームに属し、確実性は言語ゲームの外にあって言語ゲームを支持し、言語ゲームを作る関係にあると言う。そして彼は、蝶番命題の確実性に次の 3 つの形式を認める⁶⁰。

- (1) 確実性は、原始的、本能的、動物的な何かである
- (2) 確実性は、行為することである
- (3) 確実性は、共同体の中での実践の反復訓練に由来する

これら三つの要素（本能、行為、訓練）はそれぞれ異なっているが、これらを一つにまとめる概念が、「人間の共同体の構成員として我々すべてが受け継いでいる世界像である」(Stroll, A. [1994], p. 158)、と言い、蝶番命題が理性と推論の産物であることを次のように否定する。

「その基礎は、知られるものでも知られないものでもなく、理性的でも非理性的でもない。それらはそこにある。ちょうど我々の生活がそこにあるように。」 (Stroll, A. [1994], p. 159)

しかし、ストロールが認める蝶番命題の確実性の形式は、そのどれも蝶番命題の確実性の内実を説明しない。(1)と(3)は確実性が生まれる原因であって、確実さの内実とは異なる。(2)は確実性が行為に示されるというだけである。ストロールは、知識は言語ゲームに属し、確実性は言語ゲームの外にあって言語ゲームを支持する関係にある、という見解を示す。こうした見解は、第 4 章で取り上げるマッギンやシャロック、ハミルトンとも共通する。そして、その見方は正しい。それは言語ゲームが、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）とその基礎にある蝶番命題（揺るぎないもの）の二層の構造から成ることを指摘するものである。しかし、ストロールの分析は、蝶番命題の持つ確実さが、どうして揺るぎなく確実であるのか、その内実を説明しない。

⁶⁰ Stroll [1994], pp. 157-158

また、ムーアのような状況で、「ここに自分の手が二つある」ことについて、「私はそれを知っている」と言うことも、「私はそれを疑う」という言い回しも意味をなさない、と言うが、なぜ意味をなさないのか、ムーアのような言い回しに制限を与えているものが通常の言語ゲームだ、とストロールは言うが、どうして制限を与えることになるのかを説明しない。そして、蝶番命題の確実さは行為することであり、本能的な何かで、実践の中の訓練に由来すると言うだけだ。本能的な何か、また訓練によるというのは、確実さの原因を説明するものであって、それだけでは蝶番命題の確実性は生まれない。また、ウィトゲンシュタインが言う『私は知っている』は、ここでは【ムーアの「証明」の場合】論理的洞察である。」 (§ 59、強調は論者) の「論理的」の意味を説明しない。「ここに私の手が二つある」ことの確実性の内実は、本能的な何かでも、訓練によるものでも、行為でもないだろう。その確実性の内実は、言語ゲームの二層の構造から生まれる論理的な関係に基づくものである。ストロールの説明では、そのことが示されていない。

4 本章のまとめ

ムーアは、实在論を擁護するために、眼前に自分の手を掲げて、「ここに一つの手がある」という事実を前提にして、「物理的対象が存在する」ことを証明したと考えた。

しかし、懐疑論者からムーアが証明の前提にしている「ここに一つの手がある」こと自体の証明を求められて、彼は、「私はここに一つの手があることを知っている」と断言することで答えた。(本章の 2(3))

しかし、ウィトゲンシュタインは、ムーアのこの証明には奇妙なところがあると感じた。ムーアが「私はここに一つの手があることを知っている」と言う時、それは、「知っている」という語の誤用であって、「そのように表現されえないものを表現しようとする誤った試み」 (§ 37) のようにウィトゲンシュタインには思われたのである。

ストロールは、ムーアが証明しようとした「物理的対象は存在する」をウィトゲンシュタインはナンセンスだと考えている、と解釈した。その一つの理由は、「物理的対象は存在しない」は経験的に空虚な概念なのでナンセンスであり、その否定の「物理的対象は存在する」もナンセンスであるからである。(本章の 3(3))

また、もう一つの理由は、「あらゆる場合に計算間違いをする」ことはナンセンスである。これに類比的に「物理的対象は存在しない」はナンセンスなので、その否定の「物理的対象は存在する」もナンセンスであるからである。(本章 3 の(4-1))

そして、ストロールは、ムーアの証明の背後に理解できる重要な考えがあることをウィトゲンシュタインは見出したと考える。それは、「言語ゲームでは疑いは、次第にその意味

を失うこと」であり、「懷疑論者の疑いに答えるどのような試みも誤りに導かれるという洞察」であり、「確実性のようなものがあるという確信」であり、「懷疑論者の問う『哲学的な疑い』と日常的な『普通の疑い』は種類が違う」ということである。しかしストロールは、ムーアがこれらの洞察に至ることはなかった、と結論する。(本章の 3(4-2))

そして、ストロールは、蝶番命題と通常の言語ゲームの中での命題を、次のように区別した。(本章の 3(4-3))

- (1) 蝶番命題の身分は、「疑似命題」であり、「文法的規則」である。
- (2) 知識は言語ゲームに属し、確実性は言語ゲームの外にあって言語ゲームを支持する。
- (3) 確実性は、本能、行為、訓練という三つの形式を持ち、世界像という概念でまとめられる。

しかし、ストロールは、蝶番命題の文法的規則としての役回りがどのようなものか、蝶番命題の確実さが通常の言語ゲームの確実さと如何に異質なものか、を説明していない⁶¹。

また、ストロールは、本章の 3(4-2) で、惑星が存在することを誤ることと、自分の手が存在することを誤ることは、誤りの程度の違いではなくて種類の違いだ、「普通の疑い」と「哲学的な疑い」は疑いの種類が違う、「哲学的な疑い」はナンセンスだ、と言っていた。ここで「哲学的な疑い」というのは、蝶番命題を疑う疑いのことであろう。しかし彼は、蝶番を疑う疑いがなぜナンセンスになるのか、その理由を説明しない。

また、ストロールが掲げる本能と訓練という蝶番命題の確実さの形式は、確実さを生む原因であって、確実さの内実を明らかにするものではない。

ストロールが、知識の確実さと蝶番命題の確実さを区別したこと、また、誤りと疑いにも種類の異なる誤りと疑いがあることを指摘したことは、そのとおりである。しかし、彼は、蝶番命題の確実さが、蝶番命題と通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）という言語ゲームの二層の構造に基づく論理的なものに拠っているということを見落としている。

「私には手が二つある」ことは、我々の日常生活の中で疑われることのないものの一つである。それは、我々の生活を条件付けており、その疑われなさ（確実さ＝揺るぎなさ）は、日常生活の行為の内に示されている。その確実性は、自分に両足がある確実性と同じである。

「私が椅子から立ち上がろうとする時、私はなぜ、自分に両足があることを確かめな

⁶¹ ウィトゲンシュタインは、蝶番命題の確実さを「客観的な確実性」、知識の確実さを「主観的な確実性」と呼んでいる。(§ 194, 245)

いのか。そこには理由はない。単にそうしないだけのことだ。そのように私は行為する。」 (§ 148)

我々の生活の中では、何かを疑う時、そこには疑うだけの理由がある。そして疑いはどこかで打ち止めになる。「私には手が二つある」やムーアが「擁護」で取り上げている命題は、通常は誰もが疑うことのないものばかりである。それらは、全て、「我々皆がムーアと同様に知っているように見え、しかも如何にして知っているかをちゃんと言うことができないような」 (§ 84) 命題で、「その反対を信じる理由を想像することが困難な命題である。」 (§ 93) すなわち、その命題を否定することが困難な命題である。

ムーアが掲げる命題の確実さは、心理的な、あるいは主観的な確実さではない。その確実さは、我々の言語ゲームの二層の構造から来る論理的な確実さである。では、この言語ゲームの二層の構造から来る論理的な確実さとはどのようなものか。

また、例えば、ムーアのように眼前に自分の手を掲げて「私は自分に手が二つあることを知っている」と言明することは、たとえそれが構文論的には正しくても、ナンセンスである、とウィトゲンシュタインは言う。ここで「知っている」という用語を用いることが、なぜナンセンスになるのか、それを明らかにする必要がある。

これらの問題に答えるために、我々が通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中で用いる、「知っている」、「疑う」、「信じている」、「誤る」等の用語が、ムーアが「擁護」において掲げる誰もが疑うことのない命題の確実さと、どのような関係にあるのか、またそのような確実さを疑ったり、誤ったりすることは、通常の言語ゲームにおいて我々が疑ったり誤ったりすることとどう異なるのか、「擁護」に掲げる命題の確実さがどういう確実さなのか、これらについて、次章で詳しくみていこう。

第3章 「知識」と「確実性」について

1 はじめに

『確実性の問題』においてウィトゲンシュタインは、「知識（知っている）（Wissen, Ich weiß, knowledge, I know）」、「疑い（Zweifel, doubt）」、「信念（信じている）（Glauben, belief, believing）」、「確実さ（確実である）（Sicherheit, gewiß, certainty, certain）⁶²」等の語の用法及びそれに関わる言語ゲームの基礎⁶³を考察している。その考察の中で彼は、「＜知識＞と＜確実さ＞は異なるカテゴリーに属する」（§ 308、強調はウィトゲンシュタイン）と言う。これは、『確実性の問題』の重要な結論の一つである。本章は、これらの語の関係がどのようなものかを明らかにするものである。

結論を先取りして言えば、「知識」、「疑い」、「信念」という用語は、通常の言語ゲームである認識的文脈の中で意味をなすものである一方、「確実さ」は、そのような言語ゲームの基礎にあって、認識的ゲームを意味あるものにする「揺るぎない（feststehen, stand fast）」ものである⁶⁴。

この「揺るぎないもの」が、認識的文脈の中で扱われるものでないことを明らかにしたのは、第4章で取り上げるようにマリー・マッギン（Marie McGinn）である。なお、アブラム・ストロールも第2章の3(4-2)で述べたように、「揺るぎないもの」を「蝶番命題」と呼び、その身分は「文法規則」であり、言語ゲームの外にあって、言語ゲームを支持し、その確実さは行為に示される、としていた。ストロールと同様の主張を、これも第4章で取り上げるモイナル・シャロック、アンディ・ハミルトンもしている。

この「揺るぎないもの（確実さ）」を、ウリクト（G.H. von Wright）は「前-知識（Vor-Wissen, pre-knowledge）」⁶⁵と呼び、マッギンは「ムーア型命題（Moore-type proposition）」⁶⁶、シャロックは「蝶番（hinge）」⁶⁷、ハミルトンは「ムーア命題（Moorean proposition）」⁶⁸と呼んで

⁶² 他にも Gewißheit (§ 115) とか「確信（Überzeugung, conviction）」 (§ 248) とも言われる。

⁶³ 『確実性の問題』で、基盤・基礎（Grundlage, foundation (§ 246)）、根底・土台（Boden, ground, rock bottom (§ 248, 492)）、基礎・土台（Fundament, bedrock (§ 498)）等と表現されている。

⁶⁴ 「揺るぎないもの」については、ムーアが「擁護」において挙げるものの他に『確実性の問題』の中で多くの事例が挙げられている。次節を参照。

⁶⁵ ウリクトは、ウィトゲンシュタイン自身は使っていないという断り書きをした上で、この「確実さ」に該当するものを「前-知識」と呼んでいる。（Wright [1972], p. 172）

⁶⁶ McGinn [1989], p. 102

⁶⁷ Moyal-Sharrock [2007], p. 68 なお、シャロックは、『確実性の問題』において「揺るぎないもの」の類比的な表現として「規則」、「端的な発話」を、また比喩的な表現として「足場」（§ 211）、「基礎壁」（§ 248）、「蝶番」（§ 341）、「岩盤」（§ 99）、「基盤」（§ 498）、「根底」（§ 248）、「基体」（§ 162）を取り挙げている。（Moyal-Sharrock [2007], p. 75）

⁶⁸ Hamilton [2014], p. 2

いる。本論文では基本的に「揺るぎないもの」と表現する⁶⁹が、適宜、「ムーア命題」とか「蝶番」等の表現も用いる。

なお、ブライアン・マッギネス (Brian McGuinness) は、この「確実さ [揺るぎないもの] 」をウィトゲンシュタインの発見と呼ぶことができる、と言った⁷⁰。

本章では、「知識 (知っている)」、「疑い」、「信念 (信じている)」、「誤り」という語の通常の言語ゲーム (認識的文脈) における用法批判を通じて、「揺るぎないもの」を認識的文脈の中に位置付けることは論理的にできないということを、あぶりだしていく。これは、ウィトゲンシュタインの言う「<知識>と<確実さ>は異なるカテゴリーに属する」 (§ 304) ことを検証することであり、また、マッギンやストロール等による、「揺るぎないもの」は認識的文脈の中で扱われるものでないというウィトゲンシュタインについての解釈を、確認することでもある。

このことを明らかにするために、本章では次の第 2 節で、ウィトゲンシュタインの言う「揺るぎないもの」の事例を取り上げる。その後、第 3 節で「知識 (知っている)」、第 4 節で「疑い」、第 5 節で「信念 (信じている)」、第 6 節で「誤り」のそれぞれについて、論理的に異なる二種類のものを区別して、第 7 節で「確実さ (揺るぎないもの)」を取り上げ、第 8 節で本章をまとめる。

2 「揺るぎないもの」の事例

「揺るぎないもの」には、ムーアが彼の論文「擁護」において確実だと述べるものや、同じく彼の論文「証明」における「ここに私の手がある」の他、ウィトゲンシュタイン自身が『確実性の問題』の中で挙げるものもたくさんある。

ムーアが「擁護」において確実だと述べる命題とは、第 2 章の 3(1)でも取り上げたが、「今、生きている身体が存在し、それは私の身体である」、「私の身体は、生まれて以来ずっと地球の表面に接しているか、またはそれほど離れずにいる」、「地球は、私の身体が生まれる以前から何年も存在してきた」等である⁷¹。

また、ウィトゲンシュタイン自身が『確実性の問題』の中で確実だとして挙げるものには、「私には脳がある」 (§ 4)、「ここに病人が寝ている」 (§ 10)、「 $12 \times 12 = 144$ 」 (§

⁶⁹ 『確実性の問題』では、揺るぎない・確実だ (feststehen, stand fast (§ 151))、しっかりつかまえる (festhalten, hold fast (§ 174, 225))、凝固する (erstarren, harden (§ 96))、動かさない (feststehen, immovable (§ 655))、揺れない (unwankend, unmoving (§ 403))等とも表現される。

⁷⁰ McGuinness [1972], p. 237

⁷¹ Moore [1959], p. 33

43)、「私の身体が消滅して、しばらく後にまた現れるということは決してない」 (§ 101)、「太陽は天蓋にある穴ではない」 (§ 104)、「私は月に行ったことがない」 (§ 111)、「私には曾祖父母がいる」 (§ 159)、「地球は 100 年前にも存在していた」 (§ 231)、「地球は突然消滅することはない」 (§ 234)、「車は大地から育ってこない」 (§ 279)、「地球は丸い」 (§ 291)、「私は L.W.と呼ばれる」 (§ 328)、「私は今英国で暮らしている」 (§ 420) 等数多くある。

2(1) 「揺るぎないもの」についてのシャロックの分類

シャロックは、ウィトゲンシュタインが『確実性の問題』の中で挙げる様々な蝶番（揺るぎないもの）を、次の 4 つのタイプに分類する⁷²。なおシャロックは、この分類がウィトゲンシュタインによるものではないことを断っている。実際、ウィトゲンシュタインは、「『揺るぎないもの』について、】私は、様々な典型的な場合を挙げるができるが、共通する特徴を挙げることはできない」 (§ 674) 、と言っている。

- (1) 言語的な蝶番 (linguistic hinges) : 個々の言葉や数についての使用を定義する文法規則で、例えば、「青という言葉によってどういう色が意味されているか」 (§ 545)、「A は物理的対象である」 (§ 36) 等⁷³が該当する。
- (2) 個人的な蝶番 (personal hinges) : 個人の生活に関係するもので、個人の自叙伝的なものと自身及び外界の知覚に係わるもの。例えば、「私は何カ月もの間、A という住所地に住んでいた」 (§ 70)、「私は今椅子に座っている」 (§ 552) 等⁷⁴が該当する。
- (3) 局所的な蝶番 (local hinges) : ある決まった時点の、全てのあるいはある人間にだけ該当する知識の底にある枠組みで、例えば、「地球は丸い」 (§ 291) 等⁷⁵が該当する。
- (4) 普遍的な蝶番 (universal hinges) : あらゆる普通の人間にとって放棄できない確実なことで、例えば、「私には脳がある」 (§ 4)、「私には祖母・曾祖母がいる」 (§ 234) ⁷⁶等が該当する。

2(2) 「揺るぎないもの」についてのハミルトンの分類

ハミルトンは、ウィトゲンシュタインが例示するもの全てをムーア命題と考えない。彼は、ムーア命題を狭く解釈していて、ムーアが「擁護」の中で掲げる命題をムーア命題の

⁷² Moyal-Sharrock [2007], pp. 101-103

⁷³ シャロックはこの他に、§ 126, 158, 340, 455, 565, 624 を挙げている。

⁷⁴ シャロックはこの他に、§ 67, 111, 269, 419, 421, 553, 613, 659 を挙げている。

⁷⁵ シャロックはこの他に、§ 106, 159, 339 を挙げている。

⁷⁶ シャロックはこの他に、§ 35-36, 159, 209, 234, 274, 513 を挙げている。

範例として、命題が化石化して (§ 657) ムーア命題になるには時間がかかる、と考える。そして、このようなムーア命題と、時間的・空間的に限られた確実さを表現する命題とを区別した⁷⁷。

従って、ハミルトンによれば、「地球ははるか昔から存在してきた」とか「私には手が二つある」はムーア命題であるが、「ここに私の手がある」や「ここに病人が寝ている」 (§ 10、強調は論者) は、ムーア命題と同じように確実ではあるが、時間的・空間的に限られた命題なので、彼はムーア命題とは考えない。「ここに病人が寝ている」は、ムーア命題と違って、一時的に「探究の道筋の外」 (§ 88) にあるだけだからである。

また彼は、ムーア命題を非人格的ムーア命題と人格的ムーア命題に区別する。非人格的ムーア命題は、同じ生活形式を共有する者にとって確実な真理から成る命題であり、「地球ははるか昔から存在してきた」が、これに該当する。また、人格的ムーア命題は、語り手にとって確実な真理から成る命題であり、「私には手が二つある」や「私は生涯のほとんどを英国で過ごした」がこれに該当する⁷⁸。この区別からすれば、「人間には手が二つある」は非人格的ムーア命題として考えられるだろう。

そしてハミルトンは、非人格的ムーア命題がウィトゲンシュタインの言う「世界像」⁷⁹ (§ 93-95) を構成するものであり、人格的ムーア命題や時間的・空間的に限られた場面での確実性を表現する命題は、「世界像」を構成しない、と考える。ただハミルトンも、シャーロックと同様に、自分のするこうした区別を、ウィトゲンシュタインが明示的にしている、とは考えていない⁸⁰。ウィトゲンシュタインは、ムーア命題を含めて確実性の問題を広い範囲で考えようとしている、とハミルトンは考えているし、実際にそのとおり (§ 674) だと思われる。

ハミルトンのこのような区別をシャーロックの区別と比較すると、シャーロックの4つの区別の内、「個人的な蝶番」は、ハミルトンの言う人格的ムーア命題に相当し、その一部は時間的・空間的に限られた確実さに該当すると考えられる。

なお本章では、「知識」と「確実さ」が異なるカテゴリーに属するということを検証することを目的としているので、ムーア命題をシャーロックのように4つのタイプに分けて考える必要はないと考えている。

⁷⁷ Hamilton [2014], pp. 93-94

⁷⁸ Hamilton [2014], pp. 90-91

⁷⁹ 世界像については、第4章の3(4)で取り上げる。

⁸⁰ Hamilton [2014], p.93

従って以後、考察を進めるに当たって、ハミルトンがするようにムーア命題を、時間的・空間的に限られた確実さを表現する命題と区別することが適切だと思われる場合は、彼のする区別を参考にする。

またハミルトンは、『確実性の問題』の次の節を根拠にして、ウィトゲンシュタインがムーア命題と哲学的命題（ナンセンスな命題）を区別している、と主張する⁸¹。

『私には身体がある』という文がどのように使われるべきか、私は知らない(Ich weiß nicht)。その文が、私は常に地球の表面にあるいはその近くに存在した、という文に該当すると無条件にいけない。」 (§ 258)

ハミルトンは、「私は常に地球の表面にあるいはその近くに存在した」という文はムーア命題であるが、「私には身体がある」という文は、どう使われるか理解できない哲学的命題であり、ウィトゲンシュタインはナンセンスだと言っている、と解釈する。また、彼は、「机はそれを誰も見ていない時でもそこに存在する」 (§ 119) も哲学的命題であって、ムーア命題ではなく、ナンセンスな命題だ、と解釈する⁸²。

しかし、論者は、ウィトゲンシュタインがムーア命題をハミルトンの言うように哲学的命題（ナンセンス）と区別しているとは考えていない。例えば、「私には身体がある」について言えば、ウィトゲンシュタインは当該節で、『私には身体がある』という文がどのように使われるべきか、私は知らない（強調は論者）と言っているだけで、使い道がないとかあり得ない、と言っているわけではないし、ナンセンスだと言っているのでもないからである。またこのことは、別の事例であるが、次に掲げる節からも伺われる。

「しかしながら今や、『私は知っている』をムーアが述べた脈絡の中で用いることも、少なくとも特定の状況においてなら正しい。（『私は自分が人間であることを知っている』が何を意味するか、私はもちろん知らない(Ich weiß nicht)。だが、この表現にすら一つの意味を与えることができるであろう。）

こうした文のいずれに対しても、それを我々の言語ゲームの中の一手にするような状況を私は想像することができ、それによってあらゆる哲学的な驚きは、消えてなくな

⁸¹ Hamilton [2014], pp. 143-144

⁸² Hamilton [2014], p. 144、ハミルトンは、ムーア命題と哲学的命題について、「ムーア命題は、哲学的主張との間にはっきりした境界は無いかもしれないが、哲学的主張に至ることはない」（Hamilton [2014], p. 147）と言う。

ってしまう。」 (§ 622、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者)

ここでもウィトゲンシュタインは、「私は自分が人間であることを知っている」が何を意味するか「知らない」と言っているだけで、ナンセンスだとは言っていない。

ウィトゲンシュタインにとって、「語の意味とは言語内におけるその使用である」(PI § 43) ので、「何を意味するか、私はもちろん知らない」 (§ 622) は、「どのように使われるべきか、私は知らない」 (§ 258) と同じことを意味している。従って、§ 622 で、「私は自分が人間であることを知っている」に「一つの意味を与えることができるであろう」とウィトゲンシュタインが言うのと同様に、「私には身体がある」にも一つの意味を与えることができると思われる。従って、「私には身体がある」という文は、ナンセンスではなく、「私には手が二つある」と同じようにムーア命題である、と論者は考える。

ウィトゲンシュタインは語用論的な立場を取るなので、第1章の5で論じたように、同じ文でも使われる文脈によってナンセンス(理解不能)になる。また、教示という文脈の中では文法的命題(無意味な命題)になるし、適切な認識的文脈では真・偽を問うことに意味のある経験命題(有意味な命題)になる。従って、ムーア命題が、文脈を離れて一義的に、経験命題、無意味な命題、哲学的命題(ナンセンス)に区別されることはない。なお、ハミルトンは、「哲学的主張(ナンセンス)と非哲学的主張の境界は、はっきりしない」(Hamilton [2014], p. 142) とも言っている。

以上のことから、本論文では、ウィトゲンシュタインが、ムーア命題と哲学的命題(ナンセンス)を区別しているというハミルトンの主張に、あまりこだわらずに考えていくこととする。

しかし、「物理的対象(外的事物)は存在する」が、ムーア命題に該当するかどうかについては、論者によって意見が分かれている。次節でこのことを取り上げよう。

2(3) 「物理的対象は存在する」はムーア命題か

ストロールは、第2章の3(3)及び3(4-1)で述べたように、「物理的対象は存在する」はナンセンスな命題であるとしていた。

シャロックは、「物理的対象は存在する」を、本章の2(1)に掲げた4つの分類の中の「普遍的な蝶番」に含めている⁸³。

ハミルトンは、「物理的対象は存在する」は「私には身体がある」という文と同様に哲

⁸³ Moyal-Sharrock [2007], pp. 101-102

学的命題であって、ナンセンスな命題だとしている。

論者は、「物理的対象は存在する」という文は、次の二つの理由からナンセンスだと考えている。

- (1) ウィトゲンシュタインは、第2章の3(3)でも取り上げたように、§35でこのことを明言している。

「しかし人は、いかなる物体も存在しないことを想像することができないのではないか。私には分からない。しかしまた、『物理的対象は存在する』はナンセンスである。これは一つの経験命題であるのだろうか。」 (§35、強調は論者)

そして、続く§36で、彼は「『物理的対象』というのは論理学的概念」で、「『物理的対象は存在する』というような命題は、定式化されえない」と、はっきり言っている。

- (2) 「物理的対象は存在する」の「物理的対象」は、全ての物理的対象を含意するように思われる。すると、第2章の3(4-2)でストロールが言うように、「物理的対象についてのあらゆる説明が誤っているのではないかと問うことは理解可能な問いを問うものではない」(Stroll [1994], p. 111、強調は論者)ことになる。従って「物理的対象は存在しない」は、ナンセンスな言明であり、ウィトゲンシュタインによればナンセンスの否定はナンセンスなので⁸⁴、その否定である「物理的対象は存在する」もナンセンスである。

以上から論者は、「物理的対象は存在する」という文は、ナンセンスだと考えている。

なお、ウィトゲンシュタインは次の節が示すように、「ここに一つの…」を「全ての…」とは区別して考えている。

「ここに一つの物理的対象が存在することを言う命題は、ここに一つの赤い斑点が存在することを言う命題と同じ論理的身分を持つとムーアが言っている、と彼を解釈するなら、人は彼が正しいことを認めることができよう。」 (§53、強調は論者)

このように「ここに一つの…」というように対象が特定されれば、経験命題か無意味な命題かになる場合が考えられ、ナンセンスではない。

⁸⁴ CL p. 216

3 知識（知っている）について

ウィトゲンシュタインは、第1章の6で論じたように、感覚や痛み、感情、知識（知っている）や理解、信念（信じている）等の心的出来事や心的状態を表わす用語を、本物の持続を持つものと持たないものに区分する。彼は、感覚や痛みや感情は本物の持続を持ち、これらは特定の（特徴的な、特有の）心的状態とか心的出来事であると考えるが、知識や信念などは本物の持続を持たず、状況に応じて様々な心的出来事（感覚や感情）から成るが、これらに特定の心的状態や心的出来事はない、と考えている。

3(1) 知識（知っている）について

ウィトゲンシュタインは、ムーアが外的世界の証明のために、彼が論文「証明」の中で行った「私はここに自分の手が二つあることを知っている」というのは、誤用である、と言う。

「ムーアが『私は……を知っている』という命題を誤用したのは、彼がこの命題を『私に痛みがある』と同じような、ほとんど疑う余地のない表白としてみなしているところにある。」（§178）

ウィトゲンシュタインがこの節で、ムーアが何をもって「私は……を知っている」という命題を誤用したと考えているのか、分かりにくいところがある。ここでは彼は、ムーアが、「ここに自分の手が二つある」という命題を、「私に痛みがある」という命題と同じように疑う余地のないものとみなしていて、それを「知っている」と表現したのが誤用だ、と言っているのである。しかし、それがなぜ誤用になるのか。

ウィトゲンシュタインは、人が「私は……を知っている」という場合、その人は自分が知っていると主張する根拠を示すことができるし、求められればその根拠を示さなければいけない、と言う⁸⁵。しかしその根拠は、「知っている」に伴う自分の感じのような内的経験ではない。

「内的経験は、私が何かを知っているということを私に示すことはできない。」（§569）

「知っている」は本物の持続を持たない。それは特定の心的出来事や状態からなるのでは

⁸⁵ ここに掲げた引用以外にも同様の趣旨のことは、§441, 504, 550, 555, 588 等にある。

なく、状況に応じて異なる様々な感覚や感情からなる。ウィトゲンシュタインによれば、知っている（知識）は意識状態ではない。従って、知っているとする根拠は、内的経験以外のところに求めなければならない⁸⁶。

「『私はそれを知っている』は、しばしば私が私の言明に対する適切な根拠を（richtigen Gründe, proper grounds）持っていることを意味する。」（§ 18、強調は論者）

「適切な根拠」は、内的経験にではなく、他の証拠に結びついていなければならない。

「『私は……を知っている』という発話は、その＜知識＞が他の証拠に結びついている場合にのみ意味を持ちうる。」（§ 432、強調は論者）

また「適切な根拠」は、根拠付けられるものよりも確かなものでなければならない。

「人を納得させずにはおかない根拠を与える用意のある時に、人は『私は……を知っている』と言う。……

彼が信じていることが、彼がそれに与えうる根拠の方がその主張より確かでなければ、彼は自分の信じていることを知っている、と言うことはできない。」（§ 243、強調は論者）

ウィトゲンシュタインは、「私は……を知っている」の正しい使い方の事例を示している。

「『私は知っている』という表現の正しい使用。ある弱視の人が私に尋ねる。『我々があそこに見るものは木であると、君は信じるか。』——『私はそうだということを知っている。私には正にそれが見えるし、それをよく知っている』と私は答える。A:『N.N.さんは家にいるか。』——私:『いると思う(信じている)。』——A:『彼は昨日家にいたか。』——私:『昨日彼は家にいた。そのことを私は知っている。私は彼と話をしたのだ。』——A:『君は家のこの部分が新たに追加して建てられたということを知っているか、それとも単にそう信じているだけなのか。』——私:『私はそうだということ [追

⁸⁶ ストロールは、§ 569 について、「そのような根拠が何であれ—観察によるデータ、推論等を—与えねばならない。そのような根拠は、人が内観することによって見出し得るどんな心理学的傾向とも態度とも同じではない」（Stroll [1994], p 130、強調は論者）とコメントしている

加して建てられたということ]を知っている。私は……に尋ねたのだ。』

それゆえ、ここで人は、『私は知っている』と言って、その知識の根拠を掲げるか、[尋ねられれば]その根拠を掲げることができる。」 (§ 483, 484、最後の2か所の強調は論者、それ以外はウィトゲンシュタイン)

このように、「私は……を知っている」と言う人は、適切な根拠を掲げることができるのでなければならない。

また、ウィトゲンシュタインは、人が「私は……を知っている」と語る時、証拠を挙げることができるということの他に、その人は、自分がそれを知ることのできる立場にいないなければならない、とも言う。

「ある場所で何が起っているか私は知っている、と誰かに断言するだけでは十分でないだろう。－私が知る立場にいたことを彼(他者)に納得させる根拠を与えることがなければ。」 (§ 438、強調は論者)

「……彼が、自分はそのこと[両手があること]を知っているとせば、それは、私にとっては、彼の両手が、例えば布や包帯で隠されていない等々、彼が自分の両手が存在することを確かめることができたはずだ[その立場にあった]ということ、意味するだけのことである。」 (§ 23、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の二か所の強調は論者)

「法廷では、証人の『私は……を知っている』という単なる断言だけでは、誰も納得しない。その証人が知る立場にあったということが、示されなければならない。」 (§ 441、強調は論者)

ムーアの外的世界の証明に異議を唱える者達は、ムーアに対して、彼が証明の前提にしている「ここに自分の手が二つある」ことの根拠を求めた。それに対してムーアは、自分は「ここに自分の手が二つある」ことを証明する[根拠を示す]ことはできないが、「ここに自分の手が二つあることを知っている」、と断言することでもって答えた。ここに自分の手があることは間違いない、だから自分はそのことを知っている、と断言したのである。ウィトゲンシュタインは、この文脈で使われる「知っている」は、「私は自分に痛みがあることを知っている」と同じように、誤用だと言うのである。ではムーアは、「私は自分の目で見て、自分に手が二つあることを確かめた。だから知っている」とでも答えれば良かった

たのだろうか。これについては、ウィトゲンシュタインは、次のように批判する。

「さて、生活の中で、ここに手がある（すなわち私自身の手がある）ことを私が知っているということを、私は確かめるだろうか。」（§9）

「もし盲人が私に、『あなたには手が二つありますか』と尋ねたとしたら、私はそのことを目で見えて確かめようとはしないだろう。そこまで疑うなら、なぜ私は、自分の目を信用すべきなのか私には分からない。」（§125）

「普通の状況では、私は、自分に手が二つあるかどうか目で見えて確かめることはしない。」（§133）

このように、自分には手が二つあるということは、ムーアのように両手を自分の眼前に掲げてそのように言う状況では、それを目で見ただけから知っているということではない。それは、それを目で見えて確かめる以前から既に確実なことなのだ。

「私に手が二つあるということは、私が両手を見つめたからといって、見つめる前より確実になったというわけではない。しかし、『私に手が二つあるということは覆すことのできない信念である』と、私は言うことができよう。」（§245）

「私に手が二つあるということは、普通の状況下では、私が証拠として引き合いに出すことのできるどんなものとも同じくらい確実である。それ故、私は、自分の手を見ることを証拠として取り扱うことはできない。」（§250、強調は論者）

「私に手が二つある」ことは、それを正当化するために引き合いに出すどんな証拠とも、同じくらい確実である。だからそれらを証拠として使うことはできない。

しかし、「私は自分に手が二つあることを知っている」という文が意味をなす、非常に特殊な言語ゲーム（認識的文脈）はあり得る。次に掲げるような場合である。

「ある人に手が二つあるかどうか（例えば両手の切断手術がなされたかどうか）私が知らない時に、彼が信頼に値する場合、その彼が自分には手が二つあるという彼の確信を、私は信じるであろう。そして、彼が、自分はそのことを知っていると言え、

それは、私にとっては、彼の両手が、例えば布や包帯で隠されていない等々、彼が、自分の両手が存在することを確かめることができたはずだということを、意味するだけのことである。」 (§ 23、強調はウィトゲンシュタイン)

問題は、ムーアのように眼前に自分の手を掲げる状況で「私は自分に手が二つあることを知っている」と言う場合である。「どうして君はそのことを知っているのか」とその根拠を聞かれても、どう答えてよいかわからない。根拠を挙げることができないのだ。

ウィトゲンシュタインは、これを、「私は自分に痛みがあることを知っている」と言うのと同じように、「知っている」という語の誤用だと言うのである。人は、自分に痛みがある時、その証拠を挙げることができるだろうか。

ウィトゲンシュタインによれば、今まで論じてきたように「知っている」という言葉を使う場合には、求められればより確かな根拠を示すことができるのでなければならないし、そのことを知る立場にいるのでなければならない。ムーアが知る立場にあったことには間違いない。だが彼は、その根拠を挙げることができない。

「最高に信頼のおける人が、しかじかであることを自分は知っている」と断言するとしても、それだけでは、彼がそれを知っているということを、私に納得させることはできない。」 (§ 137、強調はウィトゲンシュタイン)

たとえムーア本人が最も信頼に足る人であったとしても、また、自分はそう思われていると彼が考えていたとしても、彼が、自分は知っていると断言するだけではだめなのだ。また、人に二つの手があるのは当然だ、という常識に訴えるのでもだめだ。常識が疑うことのできない確かなものとは限らないからである。

だが、本来、「知っている」という言葉は、疑うことのできない確かなことに使われるものではなかったか。「私には二つの手がある」というのは、自分の痛みと同じように疑うことのできない確かなことではないか。だから、「知っている」という言葉を使うことに問題はないのではないか。この点にこそ、この場合に「私は……を知っている」という命題が、誤用であるのかそうでないのかの重要なポイントがある。このことを次節で論じよう。

3(2) 疑うことのできない確かなことに二種類のレベルの違いがある

これまでは、「知っている」という言葉の通常の用法批判を通じて、「私は自分に手が二

つあることを知っている」が「知っている」という語の誤用であることを見てきた。しかし、ウィトゲンシュタインは、明示的にではないが、この場合の「知っている」が誤用であることに、これまでの議論とは別の、より根本的な観点があることを示唆している。それは、「疑うことのできない確かなこと」に、論理的な観点に基づいた二種類のレベルの違うものがある、ということである。ウィトゲンシュタインは、次のように言う。

「『私は……を知っている』ということが、『私は……を疑わない』ということの意味するかもしれない、—しかしそのことは、『私は……を疑う』という言葉が無意味 (*sinnlos, senseless*) であり、疑いが論理的に排除されている、ということの意味しない。」(PI XI, p. 188、邦訳 p. 441、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者)

ここでもウィトゲンシュタインの言っていることは分かりにくい、「知っている」は、どんなに確かなことであっても、疑いの可能性が論理的に排除されていない場合に、「私は……を疑わない」という意味で使う、と言っている。ここで彼は、疑いには、その疑いの可能性が論理的に排除されている場合と論理的に排除されていない場合の、レベルの違う二種類がある、ということを示唆している。彼は、「私は……を知っている」という表現は、疑いの可能性が論理的に排除されている場合には用いられない、と言っている。「知っている」という言葉が用いられるのは、どんなに確かなことであっても、疑いの可能性が論理的に排除されていない文脈（即ち認識的な文脈）だけであって、疑いの可能性が論理的に排除されている文脈では、「知っている」という言葉を使えない、というのである。

このことをハミルトンは、「知識は疑いの論理的可能性を含意する」（強調は論者）と表現して、次のように言う。

「ウィトゲンシュタインの考えは、その主張を疑うことが論理的に可能でなければ、—即ち、それを疑うことが意味をなさなければ—その場合、それは知識の対象になりえない、というものである。ムーア命題を疑うことは通常意味をなさない、それ故、それらは通常、知識の対象ではない、とウィトゲンシュタインは論じる。」(Hamilton [2014], p. 39、強調は論者)

「疑うことが論理的に可能である」ということは、「疑うことの可能性が論理的に排除されていない」ということであり、その意味をハミルトンは、「疑うことが意味をなす」こととして考えている。

また、第2章の3(4-3)で取り上げたように、ストロールは、疑いは知識と密接に結びついていて、知識は言語ゲームの外にはない、外にあるのは確実性だ、と言う。

「疑うことが、知っていることに密接に結びついていてことは明らかである。……[ウィットゲンシュタインは、] 疑うことは、知っていると同じように言語ゲームに属し、確実性と違ってその[言語ゲームの] 外にはないことも、示す。」(Stroll [1994], p. 134、強調はストロール)

「知識は言語ゲームに属するが、確信は言語ゲームに属さない。その基礎と基礎に基づく構築物は全く異なっている。」(Stroll [1994], p. 145)

通常の言語ゲーム(認識的ゲーム)と異なって、通常の言語ゲームの外にある「揺るぎないもの」は、認識ゲームとその基礎という言語ゲームの二層の構造から、それに対する疑いの可能性が論理的に排除されている。疑いは、「揺るぎないもの」を足場 (§ 211) にして、認識的ゲームの中で意味あるものとなる。「揺るぎないもの」は、認識的な文脈の外にある。足場である「揺るぎないもの」に対する疑いは、言語ゲームの中での疑いが「揺るぎないもの」を足場にして意味あるものになることから、ナンセンスになる。「ムーア命題(揺るぎないもの)」を認識的文脈の中で疑うことは、ハミルトンが言うように意味をなさない。

論者は、ハミルトンの言う「意味をなさない」を、以下に論じるように、「自己論駁に陥ることが免れない」という意味に理解している。このことについて説明しよう。

例えば、認識的文脈では、口論をしている二人の間で、「君は私を殴った」、「いや、私は殴ってなどいない、たまたま手が触れただけだ」ということが議論になることがあるだろう。だがその場合彼らの間で、「手があるかどうか」が議論になることはない。彼らに「手があること」は、彼らの殴った、殴っていないという議論の前提にあつて、彼らの議論を成り立たせているものの一つだ。「手があること」についての疑いは、この文脈の中では排除されている。彼らの議論の間で「手があること」を疑うことに本当に意味があるとする、と、殴った、殴っていないという議論自体が成り立たなくなる。即ち、自己論駁に陥ることが免れないのである。

「私には手が二つある」は、通常、それを認識的文脈の中で用いることが論理的に排除されている「揺るぎないもの」である。

以上の議論を踏まえて、ムーアの「証明」の場合に、「ここに私の手が二つある」こと

を知っているとか疑うということが、論理的に排除されているということを論じよう。ムーアが、外的事物が存在することを証明しようとして、「ここに一つの手があり、またここにもう一つの手がある」と言いながら、眼前に自分の手を挙げて、自分に手が二つあることを自分の証明の前提にする場面である。ここでムーアが、その根拠を求める懐疑論者達の異議に屈して、「私はここに自分の手が二つあることを知らない」と言ったとしてみよう。この場合ムーアは、自分の証明の前提として自分の手を掲げるのであるが、その行為自体が既に自分に手があることを前提にしている。即ち、自分で自分の手を挙げながら、「私はここに自分の手が二つあることを知らない」と言うのである。これは自己矛盾であり、自己論駁的である。従ってこの場合に、「私はここに自分の手が二つあることを知らない」と言うことは、ナンセンス（理解不能）な言明になる。ナンセンスの否定はナンセンスなので、「私はここに自分の手が二つあることを知らない」がナンセンスであれば、その否定である「私はここに自分の手が二つあることを知っている」もナンセンスになる。従って、「私はここに自分の手が二つあることを知っている」と言うことは、その否定が自己論駁に陥ることが免れないという意味で、論理的に排除されている。

ウィトゲンシュタインは、「私は夢を見ているのではないか」も同じような論理で無意味だと言う。

『私は夢を見ているのかもしれない』という議論は、もしそうだ【夢を見ている】としたら、この言表も夢見ている中でのことであり、この言葉に意味があるということ、それも夢の中のことなので、その理由から無意味である。」（§ 383、強調はウィトゲンシュタイン）

「私は夢を見ているのかもしれない」が夢の中でのことだとすると、その言表自体が夢の中のことになり、無意味だと言うのである⁸⁷。「私は夢を見ているのかもしれない」も、自己論駁的な言明の一種である。

さてここで、ウィトゲンシュタインが比較に出した、「私は自分に痛みがあることを知っている」が「知っている」の誤用であることを見てみよう。ムーアの証明でしたのと同じように、「私は自分に痛みがあるがそれを知らない」と言ったとしてみよう。「自分に痛

⁸⁷ 他に § 676 でも夢について同様の批判をしている。

みがあることを知らない」というのは、正に「痛みがない」ということである。すると、「私は自分に痛みがあるが、痛みがない」というやはり自己矛盾したナンセンスな主張になる。ここで、「いや、無意識の痛みがあるのだ」と言ってみても、今度は「無意識の痛み」について、更なる説明が必要になるだろう。それは、通常の「痛み」という文法（言葉の用法）とは異なる新しい使い方をしているからだ⁸⁸。

このことは、「冷蔵庫にケーキがある」という命題と比較するとその違いが分かる。「冷蔵庫にケーキがある」は、それを「知っている」と言うことも「知らない」と言うこともどちらも有意味である。このことから「冷蔵庫にケーキがある」は、経験命題の身分を持つが、「ここに私の手が二つある」や「私に痛みがある」は、経験命題の身分を持たないことが示される。それを「知らない」と言うことが自己論駁に陥ることが免れず、意味をなさないからである。

以上をまとめると、「私は P を知っている」という発話は、通常、P は確実で疑いのないことをその発話者は表明している。そしてその発話者は、P を知る立場にあって、求められれば P と主張する、より確かな根拠を示すことができるのでなければならない。それが、「私は P を知っている」と言うことのできる条件になる。

しかしより重要な点は、このような「知っている」の通常の用法批判以外に、論理的な観点に基づくものがあることである。それは、疑いのないことや確実さにはレベルの異なる二種類のものがある、というものである。一つは、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中の指し手であって、どんなに確かなことであっても、疑いの論理的可能性が排除されていないものである。これは通常の「知識」の文法である。また、もう一つは、疑いの論理的可能性が排除されているものである。P が「疑いの論理的可能性が排除されている」命題であるとき、「私は P を知らない」は自己論駁に陥ることが免れず、ナンセンスになる。

「私は P を知らない」がナンセンスになるので、「私は P を知っている」もナンセンスになる。だから、「私は P を知っている」という表現を用いることができない。従って、この場合の P は、通常の「知識」の文法を持たない。しかし、P が「疑いの論理的可能性を含意する」場合、即ち、通常の知識の場合は、「私は P を知っている」も「私は P を知らない」も、どちらも有意味であって、自己矛盾や自己論駁に陥ることはない。

⁸⁸ 類似の議論が『青色本』で「無意識的思考」についてなされている。（BB pp. 57-58, 邦訳 pp. 106-108）なお、人に痛みがあってもそれを知らないという場合の経験的な基準を定めて、「無意識の痛み」に意味を与える場合は、問題は別だ、とも言っている。（BB p. 55, 邦訳 pp. 103-104）

ムーアの誤りは、「疑うことのできない確かなこと」に、疑いの論理的可能性が排除されているものと、それが排除されていないものという、レベルの違う二種類のものがあることを見て取れなかったことにある。彼は、通常の言語ゲーム（認識的な文脈）の中でしか考えることができなかった。「ここに私の手が二つある」を、「冷蔵庫にケーキがある」と同じような経験命題として考えていた。だから彼は、「ここに私の手が二つある」ことに対する懐疑論者たちの疑いも、正当な疑いだと考えていた。しかし、ムーアに対して異議を唱える当時の観念論者や懐疑論者もムーアと同じであった。彼らもそれを経験命題として考えていたのだ。

ムーアは、懐疑論者達の疑いに根拠を示すことができなかったので、「私はここに自分の手が二つあることを知っている」と断言することで応じた。「知っている」ということで、そのことに疑いの余地のないことを示そうとしたのである。しかしそれは、ムーアが、経験命題ではない「揺るぎないもの」に対して「知っている」という言葉を用いるものであった。それは疑いの論理的可能性が排除されているものに対して「知っている」という言葉を用いるもので、ウィトゲンシュタインによって、「ムーアが『私は……を知っている』という命題を誤用した」（§178）と言われるものであった。これが、ムーアの「私はここに自分の手が二つあることを知っている」から得た、ウィトゲンシュタインの論理的洞察（§59）である。

4 疑いについて

4(1) すべてを疑う疑いは疑いではない

前節で論じた、ムーアによる「ここに私の手が二つある」は、時間的・空間的に限られた一時的な場面での確実性（ハミルトンによればムーア命題とは区別される確実性）についてのものであった。これに対して、「私には手が二つある」は、時間的・空間的に限られていないムーア命題の一つである。本節では、この「私には手が二つある」のようなムーア命題を疑う場合を考察しよう。

「（私の）疑いは、一つの体系を形成している。」（§126）

ここでウィトゲンシュタインは、ハミルトンが「概念全体論」⁸⁹と呼ぶ立場を示している。それは、通常の言語ゲームでは、疑いは、それ単独で成り立つのではなく、他の疑い

⁸⁹ Hamilton [2014], p. 116、なお、概念全体論については、第4章の3(3)でハミルトンの解釈を詳しく取り上げる。

や疑われないものから成る体系の中で、一つのピースとして成り立つというものである。

また、ウィトゲンシュタインは、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）では、疑いは際限なく続くことはなく、それはあるところで終わる、と言う⁹⁰。

「私が示す必要のあることは、疑いはたとえそれが可能であるとしても、不必要であるということ。言語ゲームの可能性は、疑いうるもの全てが疑われることに拠っていない、ということである。」（*OC* § 392）

「私が根拠付けをやり尽くしたのであれば、私は固い岩盤に到達してしまったのであり、私の鋤は反り返ってしまう。」（*PI* § 217）

また、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中でなされる分別のある疑い（疑う理由が理解できる疑い）には、疑うための根拠が必要である、と言う。

「人が疑うには、根拠が必要なのではないか。」⁹¹（§ 122）

「それ故、分別のある疑いは、根拠を持たねばならないか。『分別のある人（*Der Vernünftige, the reasonable man*）は、それを信じる』と言うこともできよう。」（§ 323）

「即ち、分別のある人は、しかじかの状況の下でのみそれを疑う【それ以外の状況では疑わない】。」（§ 334、強調はウィトゲンシュタイン）

また、我々の探究は、ある命題に関しては疑いを差し挟む余地が全くないという仕組みになっている、とも言う。

「例えば、我々の探究全体が、ある命題に関しては疑いを差し挟む余地が全くない、そういう仕組みになっている、と言えよう。それらの命題は、探究が進められる道筋から外れた⁹²ところにある。」（§ 88、強調はウィトゲンシュタイン）

⁹⁰ 以下に引用したもの以外にも § 56, 88, 123, 232, 519 で、類似の主張がある。

⁹¹ 他にも「どこをどう見ようとも私は……ということに疑う根拠を見出さない。」（§ 123）等がある。

⁹² 「揺るぎないもの」が探究から外れていることを、ウィトゲンシュタインは、§ 95 では「神話」、§ 210 では「鉄道の軌道から切り離されている」、また § 657 では数学の命題について「化石」と表現している。

「疑う振舞いと疑わない振舞い。後のもの【疑わない振舞い】がある場合に限って前者【疑う振舞い】がある。」 (§ 354)

我々の探究において、疑いを差し挟む余地が全くない場合の具体的な例として、ウィトゲンシュタインは、実験をする場合や手紙を投函する場合や計算する場合を挙げている。

「疑わないものがいくつかあるのでなければ、人は実験をすることができない。しかしそれは、人が何らかの前提を信用して受け入れている、という意味ではない。手紙を書いて投函する時、私は、その手紙が配達されることを当然のことと思っている。私はそう期待している。

私が実験をする時、私は眼前の実験器具の存在を疑うことはしない。私が疑うことはいくらあろうが、それを疑うことはしない。私が計算をする時、紙に書いた数字がひとりでに入れ替わることはないと信じて疑わない。」 (§ 337、強調はウィトゲンシュタイン)

ここで当然のことと思われる確実さは、手紙が配達されること、眼前の実験器具が存在すること、紙に書いた数字がひとりでに入れ替わることのないことである。これらの確実さは、我々が信頼して受け入れているのではなく、当然のこととしている確実さである。

このようにウィトゲンシュタインは、通常の言語ゲームでは、疑いがどこかで終わるということを明らかにしようとしている。

「全てを疑おうとする者は、疑いに行き着くことが無いだろう。疑いのゲーム自体が確実さをもう既に前提にしている。」 (§ 115、強調は論者)

「全てを疑う疑いは、疑いではない。」 (§ 450)

「終わりのない疑いは、疑いとすら言えない。」 (§ 625)

「全てを疑おうとする者は、疑いに行き着くことが無いだろう」というのは、疑いのゲーム自体が、何らかの確実さを前提にしていないと、論理的に成り立たないという意味で

ある。

例えば、感覚は自分を欺くことがあるので感覚は信頼できない、だから全ての感覚を疑う、という人がいるとしよう。するとその人は、「感覚は信頼できない」ということを、疑いえないものとして前提にしていることになり、すべてを疑う人ではない。

また、悪霊が私を欺いているので、感覚だけでなく私の考えることも全てが疑われると言う人は、悪霊を疑いえないものとして前提にしており、やはりすべてを疑う人ではない。ここでもし、悪霊自体も疑われるとすると、もともと悪霊を疑いえないものとする前提で、私の考える全ては疑わしいということが意味をなす、という論理の運びになっているので、その意味をなす要の前提を疑うということになり、全ては疑わしいということも、疑わしくなる。要するに、全てを疑う疑いというのは、自己論駁に陥ることが免れないのである。

こうした点は、疑いは言語ゲームの中ではどこかで終わるとか、疑いには疑う根拠が必要だという通常の用法批判の他に、前節の「知っている」場合と同様に、「疑う」について論理的な観点に基づいた違いがあることを示唆している。

例えば、「私には手が二つある」ということを疑うとしてみよう。ウィトゲンシュタインは次のように言う。

「私には手が二つあるということを、今疑うとしたらどうだろうか。なぜ私は、それを全く想像できないのだろう。もし私がそれ【私には手が二つあるということ】を信じないとしたら、私は何を信じるというのか。私は、この疑いを与えるような体系を全く持っていないのである。」 (§ 247)

「しかし、もっと正確にはこうである。私は、＜手＞という言葉や他の言葉全てをためらわずに私の文に用いるということ、疑ってみようとするだけで途方に暮れてしまうということ、—このことは、疑いの不在 (Zweifellosgkeit, absence) がその言語ゲームの本質に属し、『いかにして私は……を知るのか』という問いが、言語ゲームを長引かせ、あるいは破棄することを示している。」 (§ 370、強調は論者)

「私には手が二つある」や、＜手＞という言葉を始め他の言葉を疑おうとすると、途方に暮れてしまう。途方に暮れるということは、疑いの不在がその言語ゲームの本質に属していて、それに対する疑いは言語ゲームを破棄することを示している、とウィトゲンシュタインは言う。

4(2) 無分別な疑いと論理的に不可能な疑い

ウィトゲンシュタインは、疑いにレベルの異なる二種類があると、次のようにも言う。

「疑いが無分別な場合もあるが、論理的に不可能に見える場合もある。そしてこれらの間に明確な境界は無い様に見える。」 (§ 454、強調は論者)

ここでウィトゲンシュタインは、疑いに、無分別な疑いと論理的に不可能に見える疑いがあるということを示唆している。無分別な疑いとは、認識的文脈の中でなされる理解可能な疑いのことである。いわゆる K.Y. (空気が読めない) のような疑い、あるいは軽率だとか、早とちりだという謗りを受けることはあっても、それでもまだ何とか理解できる疑い (意味のある疑い) のことである。また、もう一方の論理的に不可能な疑いとは、認識的文脈の中で疑いの論理的可能性が排除されている疑い、理解不可能な疑いのことである。

「私には手が二つある」を疑うことは、疑いの論理的可能性が排除されているものを疑うことで、理解不可能な疑いに該当する。それは、通常の言語ゲームの中で疑いを有意味なものにしている足場をそのものを疑うものである。私は、練習すればショパンの幻想即興曲が弾けるようになるだろうか、という疑いは、「私には手がある」ことを当然の前提にしている。この場合、自分に楽譜が読めるだろうかという疑いはありうるが、自分に手があるだろうかという疑いは排除されている。「私には手がある」かどうかが本当に疑われる (認識的文脈の中で意味がある) 局面では、自分にショパンのピアノ曲が弾けるかどうかという疑いは、意味をなさないものになる。

このように「揺るぎないもの」を疑うことは、疑いが疑いとして成り立つその基礎を疑うもので、自己論駁に陥ることが免れない。従ってその疑いは、疑いの論理的可能性が排除されている疑いである。

「私は、自分の座っている木の枝を切り落とすわけにはいかない。」 (PI § 55)

このことはまた、本章の 2「知識について」で論じた、ムーアの「証明」の場合でも同じことが言える。懐疑論者が求めるように、ムーアが「ここに自分の手が二つある」ことを疑うとしてみよう。ムーアにとって、「ここに自分の手が二つある」ことは、自分の手を眼前に掲げるという行為の背景に足場として、既に前提されている。自分の手を掲げるという行為が、「ここに自分の手が二つある」ことを導くのではなく、「ここに自分の手が二つある」ということが前提にあって、自分の手を眼前に掲げるという行為を導くのである。

だから、「ここに自分の手が二つある」ことを疑うということは、手を挙げる行為の前提を疑うことになり、手を掲げる行為自体を無に帰す疑いになる。つまり、手があるという前提の下に自分で手を掲げておいて、前提にしているその手の存在を疑うということになる。それは、手を掲げるという自分の行為を自己論駁することで、意味をなさない。

このことをウィトゲンシュタインが主張する節として、本章の 3(2)で引用したところであるが、改めてここで引用しよう。

『私は……を知っている』ということが、[言語ゲームの中で]『私は……を疑わない』ということの意味するかもしれない。—しかしそのことは、『私は……を疑う』という言葉が無意味であり、疑いが論理的に排除されている、ということの意味しない。」(PI XI, p. 188、邦訳 p. 441、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者)

本章の 3(2)で論じたように、ここでウィトゲンシュタインは、言語ゲームの中で疑いの論理的可能性が排除されているものと、そうでないものがあることを示唆している。通常の言語ゲーム(認識的ゲーム)の中で「私は……を疑わない」と言うことは、疑いの論理的可能性が排除されていることを意味しない、と彼は言う。従って、認識的ゲームの中で「私は……を疑わない」と言うのは、疑いの論理的可能性を含意する、ということになる。これに対して、「揺るぎないもの」に対して「私は……を疑わない」と言うのは、疑いの論理的可能性が排除されている、という意味になる⁹³。

なお、先の § 454 で、無分別な疑いと論理的に不可能な疑いの間に「明確な境界は無い様に見える」というのは、論理的に不可能に見える疑いでも、認識的文脈の中で意味をなす特殊な状況があり得て、同じ表現でもどちらに該当するかはその状況次第だからである、と解される。

従って、もし通常で、「私に手が二つあるというのは確かだろうか」と冗談や軽率でなく真剣に疑う人がいるとすれば、その人は、分別のない疑いをしているのではなくて、論理的に排除されている疑いをしているのである。そのような疑いは、「分別のない疑い」というよりももっと度外れた疑い、私にとって「全く想像できない」 (§ 247) 疑いなのである。それは「理解できない」疑いであり、言語ゲームを破棄する疑いである。だからそれは、「疑い」とは言えないものなのだ。そのような疑いをする人は、「精神障害

⁹³ ウィトゲンシュタインは、本章の 7 で取り上げるが、誤りについて、誤りの論理的可能性が排除されていない確実性を「主観的な確実性」と言い、誤りの論理的可能性が排除されている確実性を「客観的な確実性」と言う (§ 194) が、疑いについても同じことが言えると考えられる。従って、疑いの論理的確実性が排除されている確実性は、客観的確定性である。

(geistesgesört, disturbance, demented)」 (§ 71, 155) と見なされるだろう。

次に、信念を取り上げよう。信念にも論理的な観点に基づいたレベルの異なる二種類がある。

5 信念 (信じている) について

5(1) 信念と知識

「信念」も、「知識」と同様に「意識状態でない⁹⁴」ことから、信念は、ウィトゲンシュタインの言う心的状態や心的出来事ではない。

「人は、『彼はそう信じているが、それはそうではない』と言うことはできるが、『彼はそれを知っているが、それはそうではない』とは言えない。このことは、信念と知識の心的状態の相違に由来するのであろうか。違う。－<心的状態>を人は、声の調子や身振りに現れるものと呼ぶことができる。」 (§ 42)

次に、「信念」と「知識」の違いを明らかにしておこう。

「信念 (信じている)」と「知識 (知っている)」の違いは、信じていると言う場合、知識と違ってその「根拠」を必ずしも示す必要がないことにある。信念に正当化は無くても良い。

「『私はそれを知っている』と、私は誰か他の人に言う。そしてここには正当化 (Rechtfertigung, justification) がある。しかし、私の信念には正当化はない。」 (§ 175、強調は論者)

「誰かがあることを信じている時、『なぜ彼はそのことを信じているのか』という問いに、人は必ずしもいつも答えることができる必要はない。しかし、彼が何かを知っている時は、『どうして彼はそのことを知っているのか』という問いに、人は答えることができるのでなければならない。」 (§ 550)

なお、ハミルトンは、「信じている」は、確実さの欠如を含意するので、「私は……を信じている」は、「私は……を知っている」よりも、確実さという観点で劣るということを

⁹⁴ *PI* § 149 欄外 (a)、*RPP2* § 178 (第 1 章の 6 参照)

指摘している⁹⁵。

5(2) 基礎付けられた信念と基礎付けられていない信念

さて、信念にも、知識や疑いと同様に、論理的な観点に基づくレベルの異なる二種類のものがあることをウィトゲンシュタインは主張する。

「困難なのは、我々の信念に根拠がないことを理解することである。」 (§ 166)

「十分に基礎付けられた信念の基礎に、基礎付けられていない信念がある。」 (§ 253)

§ 253 の十分に基礎付けられた信念とは、認識的ゲームの中での信念である。また § 166 の根拠のない信念、§ 253 の基礎付けられていない信念とは、認識的ゲームの外にあって、認識的ゲームを基礎付けている信念（「揺るぎないもの」）である。冷蔵庫にケーキがまだ残っていると信じているというのは、通常の言語ゲームの中で十分に基礎付けられた信念であり、「私には手が二つある」は、基礎付けられていない信念である。

しかし、通常の言語ゲームの中で、「私は自分に手が二つあることを信じている」と有意味に言える、特殊な状況を考えることができる。酷い交通事故に遭って両手を損傷し、縫合手術を受けた後、両手の存在を目で確認できず、また、麻酔で手の感覚がない時に、なされた手術を信頼して言う場合等である。しかし、「私には手が二つある」というのは、このような特殊な状況を除けば、一般に基礎付けられていない、また、普通、あえて表現されることさえない、疑いの不在が本質的である（疑いの論理的可能性が排除されている）ような信念の一つである。

このように認識的ゲームの中で使われる「信念」と、その信念を基礎付ける根拠のない「信念」は、その身分が論理的に異なっている。

この違いをムーアの「証明」を参考にして説明しよう。これは、本章の 3(2)で論じたのと同じ議論がこの場合にも成り立つ、と考えられる。

実際にはムーアはそう言うことはなかったけれど、眼前に自分の両手を掲げながら、「私はここに自分の手が二つあることを信じている」、と言ったとしてみよう。

この文の奇妙さは、「知っている」と言う場合と同様に、ここでもこの文の否定を考えてみると分かりやすい。即ち、眼前に自分の両手を掲げながら、「私はここに自分の手が

⁹⁵ Hamilton [2014], p. 184

二つあることを信じていない」、と言うのである。

これは、次に掲げるウィトゲンシュタインの言う「ムーアのパラドックス⁹⁶」と同類である。

「私は、雨が降っていると信じていない。しかし、雨は降っている。」（*RPP1* § 495）

なお、この同じ節でウィトゲンシュタインは、この言明を「彼は来る、しかし私は彼が来ることを信じていない」という言明と比較して、この後の言明は、言語ゲームに現れ得る（そのような言語ゲームを考えることができる）と言う。この比較をすることで、ウィトゲンシュタインは、「私は雨が降っていると信じていない。しかし雨は降っている」という言明は、言語ゲームには現れ得ない（そのような言語ゲームを考えることができない）、ということを示唆していると思われる。そして彼は、次のように言う。

『雨が降っている、そして私は、そのことを信じていない、ということが受け入れられたとせよ。』—私がこの仮定が受け入れているものを主張する時—いわゆる私の人格は分裂する。

『その時私の人格は分裂する』というのは、その場合、私は、もはや通常の言語ゲームをしているのではなく、別の言語ゲームをしているのである。」（*RPP1* § 820、強調は論者）

ウィトゲンシュタインは、「雨が降っている、そして私はそのことを信じていない」は、通常の言語ゲームをしているのではなく、「別の言語ゲーム」をしている、と言う。「別の言語ゲーム」とは、特殊な言語ゲームであるが理解できるゲーム（認識的ゲーム）⁹⁷のことではなく、「私の人格は分裂する」ような言語ゲーム、即ち通常では「理解できない」言語ゲーム⁹⁸のことである。

さて、眼前に自分の両手を掲げて、「私はここに自分の手が二つあることを信じていない」と言うことは、「ここに自分の手が二つある、そして私はそのことを信じていない」と言うことと同義である。するとこれは、「雨が降っている、そして私はそのことを信じてい

⁹⁶ *PI* X, p. 162、邦訳 p. 376

⁹⁷ 雨天の時にマイクの調整をする目的で「本日は晴天なり」と言うような場合、また、日本語を知らない人が日本語の発声練習するような場合が考えられる。

⁹⁸ 普通の人から見ればその人を精神障害だと言うことができる（§ 155）ような言語ゲームである。従って、「別の言語ゲーム」というのは普通の人には理解できない言語ゲームのことで、それを「言語ゲーム」と呼ぶことが適切かどうかは問題がある。

ない」と言うことと同類のことを表現しており、「私の人格は分裂する」ことになる。

従って、ムーアのような状況で、「私はここに自分の手が二つあることを信じていない」と言うことは、通常の言語ゲームをしているのではなく、別の言語ゲーム（普通の人には理解できないゲーム）をしているということになる。即ち、その言明はナンセンスだ、ということになる。すると、ナンセンスな文の否定はナンセンスなので⁹⁹、「私はここに自分の手が二つあることを信じていない」という文の否定である「私はここに自分の手が二つあることを信じている」という文も、ナンセンスだということになる。

このように、「私には手が二つある」は「揺るぎないもの」の一つであって、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中で「私は……を信じている」と、自分の信念を表明する時の、足場（§ 211）を構成している。

例えば、「私には手が二つある」は、久しくやったことの無い鉄棒を前にして、「私は今でも逆上がりができると信じている」と言う時の、足場を構成している。このような足場であるものを認識的文脈の中に持ち込んで、「私は自分に手が二つあることを信じている」と真剣に言うことは、「逆上がりができると信じている」と言う意味を、不明にするものである。なぜなら「私は逆上がりができると信じている」は、「私には手が二つある」ことを前提にした信念であるからだ。もし私に手が無いとしたら、自分に逆上がりができると信じていると言うことはできないし、そのように言うこともない。

認識的文脈の中で「私は自分に手が二つあることを信じている」と言うことは、自分には手がないという可能性を含意したことを言うことである。「私は今でも逆上がりができると信じている」と「私は自分に手が二つあることを信じている」が同じレベルにある信念だとすると、自分には手が無いかもしれないにもかかわらず、自分は逆上がりができると信じている、という奇妙なことになる。

「私には手が二つある」は、基礎付けられていない信念で、疑いの不在が本質的であり、認識的ゲームの中で疑いの論理的可能性が排除されている信念である。そのような信念を足場にして、認識的文脈の中で様々な言明がなされる。即ち、「私はキラキラ星をバイオリンで弾くことができると思う（信じている）」とか「私は今でも逆上がりができると信じている」という認識的ゲームの信念の基礎に、「私には手が二つある」という信念がある。この「私には手が二つある」という信念は基礎付けられていないが、この信念は、「私はバイオリンを弾くことができると思う」等の信念を、基礎付けている。この基礎付けられて

⁹⁹ CL p. 216

いない信念を疑うことは、その信念に基礎づけられて行われる認識的ゲームの意味を損なうもので、自己論駁に陥ることが免れない。基礎付けられていない信念（認識的ゲームを基礎付けている信念）を疑う可能性は、論理的に排除されている。

このように、ムーアのような状況（眼前に自分の手を掲げる状況）で発話する「ここに自分の手が二つある」という文、あるいはより一般的に「私には手が二つある」という文は、それを、「知っている」とも「疑う」とも「信じている」とも言うことが、言葉の誤用であり、ナンセンスなものになる。

次に、誤りについて論じよう。

6 誤りについて

ウィトゲンシュタインは、誤りについても、知識、疑い、信念と同様に、論理的な観点に基づく、レベルの異なる二種類を区別する。

「いわゆるゲームの中にその場所が用意されている誤り（*Irrtum, mistake*）と、例外的に起こる完全な規則違反（*Regelwidrigkeit, irregularity*）の誤りの間には、区別がある。」（§ 647）

「ゲームの中にその場所が用意されている誤り」というのは、認識的文脈の中で生じる誤りのことであり、「例外的に起こる完全な規則違反の誤り」というのは、認識的文脈から論理的に排除されている誤り（§ 155）のことである。従って、「例外的に起こる完全な規則違反の誤り」は、認識的ゲームの中でいう誤りと全く異なっている。

通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）における誤りについて、ウィトゲンシュタインは次のように言う。

「人は、誤りは原因を持つだけでなく根拠も持つ、とすることができるだろうか。つまり、人は、誤りを犯すとその誤りを正しい知識の内に組み込むことができると、おおよそ言うことができる。」（§ 74、強調はウィトゲンシュタイン）

通常の言語ゲームの中での誤りは、誤った理由がある。従って、その誤りを正すことができる。

例えば、ある人が、冷蔵庫の中にケーキがあると誰かが言うのを聞いて、冷蔵庫を開け

てみたらケーキはなかったとしよう。それで、彼が、ケーキがあると言った人にそのことを告げると、その人は、それは自分の勘違いで、他の人にあげたことを忘れていた、と言うかもしれない。誤りや勘違いは、通常の言語ゲームではごく普通にあることで、修正する（正しい知識の内に組み込む）ことができる。しかし、「揺るぎないもの」についての誤りはどうだろうか。例えば、「私には手が二つある」ことに、誤りや勘違いがあるだろうか。通常の言語ゲームでもしあるとすれば、それは極めて特殊な認識的文脈の中でのことであろう。

しかし仮にそのような特殊な場合でなく、「私には手が二つある」ことを思い誤っていたとしてみよう。その場合それは、単なる思い誤りでは済まされなくなる。その誤りは、私の普段の生活の様々な局面に及んでくる。

「私には手が二つある」ことは、例えば、ドアを開けて部屋に入る、携帯でメールを打つ、食事をする、荷物を運ぶ、お風呂場で体を洗う、ピアノの演奏をする、キャッチボールをする、拍手をする、万歳と叫ぶ、転んで手をつく、相手の胸ぐらを掴んで殴る、怪我をした手が痛いと訴える、手の傷の手当てをする、合掌する等々、我々の生活の中で手を用いる無数の行為と関係している。だからもし、「私には手が二つある」ことが誤っていたとすると、日常生活のこれらの行為の全てが誤っていたということになる。これがどういう状況をもたらすことになるのか、想像がつかない。

従って、「私は、あらゆる判断を放棄すること無しに」（§ 494）、「私には手が二つある」ことを誤ることはできないのである。仮にあるとしても、「私には手が二つある」ことを思い誤るということ自体が、どういうことを意味するのか理解できないのである。冷蔵庫の中にケーキがあることを思い誤るのとは、誤りのレベルが異なるのである。「私には手が二つある」ことを誤るのは、「完全な規則違反の誤り」である。

「ある状況において、人は誤りを犯すことはできない。（＜できる＞は、ここでは論理的に使われており、この命題はその状況において人は偽なることを言うことができない、ということを行っているのではない。）もし、ムーアが、彼が確実だと述べる命題と反対のことを言うとしたら、我々は、彼に同意しないだけでなく、彼を精神障害（*geistesgestört, demented*）¹⁰⁰とみなすだろう。」（§ 155、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者）

¹⁰⁰ 誤りとはみなされず精神障害とみなされる例が他に § 71 に、関連するものが § 70, 75, 155, 674 に挙げられている。

認識的ゲームの中では、誤りを犯すことがあり得る。しかし、「私には手が二つある」ことの誤りは、ゲームの中の誤りであり得ない。それはゲームの中の指し手ではなく、「完全な規則違反の誤り」（§ 647）である。即ち、ゲームの足場を構成するものに対する誤りであって、ゲームの中で誤りの可能性が論理的に排除されている誤り（§ 194）なのだ。無数の行為の中で手を用い、手があることを前提に行為しているにもかかわらず、「自分には手が二つあるというのは誤りだ」と言うことは、実際にやっていることと言っていることが相反しており、自己矛盾している。従ってそれは、「論理的に排除されている誤り」であり、完全な規則違反の誤りである¹⁰¹。

ハミルトンは、「知識は誤りの論理的可能性を含意する」（Hamilton [2014], p. 68）と言う。これにならっていえば、「＜揺るぎないもの＞は誤りの論理的可能性を排除する」、となるだろう。

このように、「揺るぎないもの」について誤りを犯すことは、自己論駁に陥ることが免れない。それは、言語ゲームから逸脱する完全な規則違反であり、言語ゲームを破棄する（§ 370）もので、誤りとは言えないものである。

7 確実さについて

これまで述べてきたように、「知っている」、「疑う」、「信じている」、「誤る」には、論理的な観点に基づくレベルの異なる二種類のものがあることが明らかにされた。これらの語を用いて有意味に表現できるのは、認識的文脈の中の指し手になる場合だけである。「私には手が二つある」のような「揺るぎないもの」を、「知っている」とか「疑う」等と表現することは、極めて特殊な認識的文脈を除いて論理的に排除されており、自己論駁に陥ることが免れない。では、このような「揺るぎないもの」については、どう言えば良いのだろうか。

ウィトゲンシュタインは、「私には手が二つある」という命題に類する、ムーアの「擁護」に掲げられたような命題の場合、「知っている」を「揺るぎない確信を持っている」にしてはどうかと、次のように提案する。

「ムーアの命題において、『私は知っている』を『私は揺るぎない確信（*unerschütterlichen Überzeugung, unshakeable conviction*）を持っている』に置き換えてみたらどうか。」（§ 86）

¹⁰¹ なお、ウィトゲンシュタインは、惑星の存在についての誤り（言語ゲームの中にその場所が用意されている誤り）と自分の手の存在についての誤り（規則違反の誤り）を取り上げて、誤りは次第に誤ることがなくなるように連続的に変化していくのではなくある点で誤りが考えられなくなる（§ 54）と言って、誤りの変化が不連続であることを示唆している。

「私は、次のように言いたい。ムーアは、自分が知っている」と主張することを^知っているのではなくて、それはムーアにとって、私にとってと同様に、^{揺るぎないもの}であるということ。それを固定したものとみなすことは、我々の疑いと探究の方法に属している。」 (§ 151、二番目の強調は論者、それ以外はウィトゲンシュタイン)

なお、「確実」という言葉にも、ウィトゲンシュタインは、「知っている」や「誤る」等と同じように、レベルの異なる二種類を区別する。

「＜確実＞という言葉で、我々は完全な確信を、あらゆる疑いの不在を表現し、また、この言葉によって、他者を確信させようとする。それは^{主観的な確実性}である。しかし、何かが客観的に確実であるというのはどういう場合か。一誤りがあり得ない場合である。しかしそれはどういう可能性なのか。誤りが、^{論理的に}排除されていないのではないのか。」 (§ 194、強調はウィトゲンシュタイン)

「主観的な確実性」というのは、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中の指し手の一つである。それは、誤りの可能性が^{論理的に}排除されていない確実性である。言い換えれば、「主観的な確実性」は、誤りの論理的可能性を含意する確実性である。それに対して「客観的な確実性」というのは、通常の言語ゲームの外にあって、誤りの可能性が^{論理的に}排除されている確実性である。それは、通常の言語ゲームの中の指し手にはならない。

ウィトゲンシュタインはここで、「客観的な確実性」は、誤りが論理的に排除されている確実性だ、と言っているが、誤りだけでなく、それに対する疑いも同様に、その可能性が論理的に排除されている。このことをウィトゲンシュタインは次のように表現する。

「＜知識＞と＜確実さ＞は異なる^{カテゴリー}に属する。」 (§ 308、強調はウィトゲンシュタイン)

ここで言う「知識」は、通常の言語ゲームの疑い、信念、誤りを含む。こうした「知識」とカテゴリーを異にする「確実さ」は、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中には現れない。それは、認識的ゲームの基礎にあって、その認識的ゲームの^{足場}を構成しており、そのゲームを意味あるものにする。この「揺るぎないもの」を認識的ゲームの中に持ち込んで、知っているとか疑う等と言うことは自己論駁に陥ることが免れず、その可能性は論

理的に排除されている。

さて、ウィトゲンシュタインが、ムーア命題のような「揺るぎないもの」に対して、「知っている」を『『揺るぎない確信を持っている』に置き換えてみたらどうか』（§86）と提案するとき、そこで意図されている確信は、通常の言語ゲームの中で使われる主観的な確実性のことではない。それは、疑いや誤りの論理的可能性が排除されている確実さに対する確信であって（§194）、客観的な確実性である。それは、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の基礎にあつて、枠組みとして通常の言語ゲームを基礎付けているが、自らは基礎付けられていない確実性である。

8 本章のまとめ

これまでの「知識」、「疑い」、「誤り」等についての考察から、言語ゲームにおいて、論理的な観点に基づいてレベルの異なる二種類のもの、即ち、カテゴリーの異なる「知識」と「確実さ（揺るぎないもの）」があることが明らかになった。「知識」は、疑いや誤りの論理的可能性を含意する。一方、「確実さ」は、疑いや誤りの論理的可能性が排除されている。

「知識」は、それに対して疑い、信念、誤りという言葉で表現することが認識的ゲームの中で有意味に行われるもので、疑いや誤りの論理的可能性を含意している。他方「確実さ」は、そうした認識的ゲームの外にあつて、認識的ゲームを意味あるものにする。この「確実さ」を疑ったり誤ったりすることの論理的可能性は排除されている。

このことは、言語ゲームが、「知識」と「確実さ」という二層の構造から成り立っていることを示唆している。「知識」である通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）と、その基礎にある「確実さ」という構造である。この「確実さ」の確実性、その内実は、言語ゲームのこうした二層の構造からもたらされるものである。その確実性は、心理的な、あるいは主観的な確実さではなく、客観的な確実さである。この客観的な確実さを疑ったり誤ったりすることは、言語ゲームの二層の構造から、自己論駁に陥ることが免れず、意味をなさないものになる。

このように客観的な確実さの内実は、通常の言語ゲーム(知識)と「揺るぎないもの」(確実さ)という言語ゲームの二層の構造に基づく、論理的な関係からもたらされる確実さである。

ムーア命題のような「揺るぎないもの（確実さ）」は、言語ゲームの枠組みを構成し、

認識的文脈の中では使われない。このことを明らかにしたのはマッギンである。第 2 章で取り上げたストロールや、次章で検討するシャロック、ハミルトンもマッギンと同様に、「揺るぎないもの」を、通常の言語ゲームの中の知識と区別して考えている。

ストロールは、第 2 章の 3(4-3) で論じたように、「確実さ」の内実を、本能と訓練という原因に求めて、それが言語ゲームの二層の構造からくる論理的なものであることを見落としていた。

次章では、マッギン、シャロック、ハミルトンについて、彼らの解釈する「確実さ」の内実を見てみよう。

第4章 「揺るぎないもの」についてのマッギン、シャロック、ハミルトンの解釈

1 ムーア型命題に対するマッギンの解釈

マッギンは、「揺るぎないもの」を「ムーア型命題」と名付ける¹⁰²。彼女は、ムーア型命題は認識的文脈（知識、疑い、信念などの言葉によってゲームが有意味に行われる文脈）の中では使われない、ムーア型命題は我々の「実践の枠組み」¹⁰³であり、「言語の表現を有意味に用いるための条件」¹⁰⁴であり、それが疑いの余地のないことは非認識的な文脈の中で考えられなければならない、と言う。そして、彼女の提示する非認識的な文脈の中での理解とは、ムーア型命題の確実さは、共同体の中で言語による記述の技術を訓練によって習得した結果である、というものである。

マッギンのこうした解釈から、ムーア型命題が認識的文脈の中では使われないこと、そしてムーア型命題と認識的文脈で使われる命題との関係が、推論によるものではなく、訓練による技術の習得という因果的なものであることが理解される。

このことを明らかにするために、次の 1(1) で、ムーア型命題についての彼女の解釈を検討し、1(2) で、彼女の提示する、非認識的な文脈の中でムーア型命題を理解することがどういうことかを明らかにして、最後に 1(3) で、ムーア型命題についての彼女の解釈を考察する。

1(1) ムーア型命題は認識的文脈の中では扱われない

マッギンは、「ムーア型命題」の特徴について次の 3 点を挙げる¹⁰⁵。

- (1) ムーア型命題より確実なものはない
- (2) ムーア型命題は、それを真剣に疑うことができる仮説とみなすことができない
- (3) ムーア型命題を誤るということがどういうことか理解できない

マッギンは、「ここに私の手が二つある」というようなムーア型命題¹⁰⁶に対する懐疑論者の疑いも、また、それに対してムーアがするように「私はここに自分の手が二つあることを知っている」と証拠を挙げずに「知っている」と強弁するのも、どちらも誤っており、全く別の理解が必要だとウィトゲンシュタインは考えている、と言う。

¹⁰² McGinn [1989], p. 102

¹⁰³ McGinn [1989], p. 102

¹⁰⁴ McGinn [1989], p. 160

¹⁰⁵ McGinn [1989], p. 117

¹⁰⁶ マッギンは「ここに私の手が二つある」というような時間的・空間的に限定された確実さも、ムーア型命題として扱っている。

「懷疑論も懷疑論に対するムーアの応答も、どちらも納得のいくものでないということとは、ムーア型命題に対する我々の関係が、肯定的な認識的 (epistemic) 用語 [『私は……を知っている』という言明] によっても、あるいは否定的な認識的用语 [『証拠を挙げることができないのならそれを知らない』という懷疑論者などの異議] によっても、どちらによっても適切に記述することができない。即ち、通常のあらゆる探究の背景を形成する命題に対する我々の関係は、何か全く違う仕方で理解されなければならない、とウィトゲンシュタインは思っている。【中略】『確実性の問題』の主要な要素の一つは、ムーア型命題を認識的な文脈の中に埋め込むこと (即ち、ムーア型命題を「私は……ことを知っている」、「私は……ことを疑う」等のような表現が【通常】なされる領域の中に置くこと) に対して、＜文法的＞な異議があることを我々に示す試みであるということは、全く明らかである。」 (McGinn [1989], pp. 104-105、最初の二か所の強調はマッギン、後の二か所の強調は論者)

マッギンの言う「あらゆる探究の背景を形成する命題」とは、ムーア型命題のことである。彼女は、ウィトゲンシュタインが、ムーア型命題を「知っている」とか「疑う」という認識的な文脈の中に埋め込むことに「文法的」な異議があることを示そうとしている、と言う。つまり彼女は、認識的な文脈の中で、「知っている」とか「疑う」という言葉を用いてムーア型命題を表現することはできないとウィトゲンシュタインが言っている、と言う。なぜできないと彼女は考えるのか。

マッギンは、ムーア型命題は、我々の「実践の枠組み」とみなされるべきものだ、と言う。ムーア型命題は実践の枠組みだから、それを認識的な文脈の中に埋め込むことは文法的に問題がある、即ち、枠組みであるムーア型命題に対する関係を、経験的判断に対する認識的關係として処理することは誤っている、と彼女は言うのである。

このように、実践の枠組みとしてムーア型命題を位置付けて、認識的な文脈の中に埋め込まないで考えるとすると、即ち非認識的に考えようとする、次に問われてくる問題は、我々の実践とムーア型命題との関わりをいかに非認識的な用語で説明するか、ということになるであろう。

1(2) ムーア型命題の確実さは、言語による記述の技術を訓練によって習得した結果である

マッギンはここで、ムーア型命題の確実さを、後期ウィトゲンシュタインの数学的命題の確実さに類比させる。これはどういうことか。

まず、マッギンは、論理学や数学の命題に対して持つ我々の確実さは、一般に、その命題が表現する真理が他ではあり得ないという直観形式に基づいていると考えられている、と言う。そして、『論理哲学論考』における前期ウィトゲンシュタインの考え方も、論理学や数学は直観形式に基づいた客観的に必然的なものを示すという、「客観主義者 (objectivist)」の見解と呼ばれるものを支持していた¹⁰⁷、と言う。

しかし後期のウィトゲンシュタインは、前期のこのような考え方を完全に否定している、とマッギンは言う。後期のウィトゲンシュタインは、論理学や数学を「技術の体系 (a system of techniques)」として考えており、その推論の仮借なさは、その思考技術を訓練によって習得した結果以外の何ものでもないと考えている、と言う¹⁰⁸。つまり彼女は、論理学や数学の命題に対して持つ我々の確実さはその推論技術を訓練によって疑うことなく受け入れてきた結果だと考えるのである。例えば、自然数列で、2 が 1 に続き 3 が 2 に続くのは必然的だ、と我々が受け取るのは、自然数列が客観的な形式としてあるからではなく、我々が、自然数列を日々の種々雑多な生活の中で際限なく訓練 (練習) してきた結果であり、推論や計算を実践技術として我々が習得している (mastery of a practical skill) ことの単なる反映に過ぎない、と考えるのである。これによって論理学や数学の確実さは、前・認識的 (pre-epistemic) であるということが帰結する¹⁰⁹。即ち、論理学や数学の確実さが、非認識的な文脈の中に置かれることになる、と言うのである。

論理学や数学の確実さについてのこのような考察を経て、マッギンは、論理学や数学の推論の必然性とその確実さが思考・計算の実践技術を習得した結果であるとする考えを、「私には手が二つある」のようなムーア型命題に拡張して、ムーア型命題を非認識的な文脈の中で考えようとするのである¹¹⁰。それはどのように進められるのか。

ここでマッギンは、規則は、その「解釈だけでは意味が決まらない」 (PI § 198) というウィトゲンシュタインの、規則の解釈についてのパラドクス (PI § 201) を持ち出す。規則は常に様々に解釈されうるため、規則の解釈は解釈によるだけでは決められないというパラドクスである。しかし、実際にはパラドクスはなく、解釈はどこかで打ち止まる。ウィトゲンシュタインは、この際限のない解釈の連鎖に終止符を打つのが、我々の実践、即ち

¹⁰⁷ McGinn [1989], pp. 124-126、例えば、「 $(P \supset Q) \ \& \ P$ ならば Q 」や「自然数列で 2 は 1 の次に、3 は 2 の次に来る」は、直観形式に基づき客観的に必然的なものを示している、というもの。

¹⁰⁸ McGinn [1989], pp. 127-128、例えば、「 $(P \supset Q) \ \& \ P$ ならば Q 」や「自然数列で 2 は 1 の次に、3 は 2 の次に来る」の必然性は、これらの技術体系について我々が訓練によりその思考技術を習得した結果であって、何ら客観的なものを示しているのではない、というもの。

¹⁰⁹ McGinn [1989], pp. 133-134

¹¹⁰ McGinn [1989], pp. 138-140

その規則の慣習的な使用である、と考える¹¹¹。

「[道標は様々に解釈されうるが、] 人は、道標の決まった慣用、慣習がある場合に
限って、道標に従う。」 (PI § 198)

マッギンは、ウィトゲンシュタインのこの考えを、ムーア型命題の確実性に援用する。
彼女の考えをまとめると次のようになる。

我々は、言葉の解釈技術や言葉による記述の実際的な技術の習得を、共同体の中での訓練によって得る。そしてその技術は、共同体の構成員によって共有されている判断体系によって既に規定されている。するとここに、論理学や数学の確実性と類似の地平が現れてくる。即ち、論理学や数学の確実性とムーア型命題の確実性は、どちらも訓練によって実践技術を習得した結果であるという類似の地平である。一方は推論・計算技術の習得であり、もう一方は言語による記述の技術の習得という違いはあるが、それぞれの技術が、共同体の中での訓練によって習得されるという面では同じだ、という地平である。

「論理学や数学の命題が推論や計算の実践に対して果たす役割に類似する役割を、世界を記述するための我々の技術を統一的に構成する判断体系 [ムーア型命題] は、記述の実践に対して果たしている。」 (McGinn [1989], p. 142)

つまり「私には手が二つある」というようなムーア型命題は、我々が通常の言語ゲーム (認識的ゲーム) の中でする経験的記述の実践に対して、その技術の判断体系 (経験概念を固定する役割) を構成している、と言うのである。

そして我々は、共同体の中での言語による記述の訓練という非認識的な手続きによって、言語で世界を記述する技術を統一的に規定する判断体系を習得する。ムーア型命題を疑問の余地のないものとする我々の態度は、こうした手続きによって技術を習得した結果の反映であって、我々が他者と有意味に対話するための条件なのである。

「ムーア型命題に与る (commitment) 我々の態度は、言語の表現を有意味に用いるための条件である。」 (McGinn [1989], p. 160)

¹¹¹ この議論は第 5 章の 2(1)-2(5)で詳しく取り上げる。

従って、言語表現を有意味に用いるための条件であるこの記述の技術の判断体系（ムーア型命題）について、その真・偽や証拠の正当化を問うことは、文法的に場違いなのである¹¹²。真・偽や正当化を問うことが有意味なのは、認識的な文脈の中におけるものだけなのである。

このようにマッギンは、ムーア型命題を認識的な文脈に埋め込むのではなくて、ムーア型命題の確実さは、論理学や数学の命題の確実さと同じように、訓練によって技術を習得した結果であると考ええる。

論理学や数学の確実さは、推論や計算技術を共同体の中での訓練によって無条件に習得した結果であり、また、ムーア型命題の確実さは、言語によって世界を記述する技術を統一的に規定する判断体系を、即ちムーア型命題を、共同体の中での訓練によって無条件に習得した結果であると考え、共同体の中での訓練という契機は、人間の歴史の中で生じ発展してきた形態である、と考えるのである。

論理学や数学、ムーア型命題の確実さは、懐疑論者達が認識的な文脈の中で求めて得られると考える「本質的な確実さ」ではなく、我々が訓練によって技術を習得するという非認識的な実践技術を習得した結果だ、というのである。

1(3) マッギンのムーア型命題の解釈に対する評価と批判

以上のようにマッギンが、真・偽や正当化を有意味に問うことができるのは認識的な文脈の中だけだとしたこと、また、ムーア型命題の身分を我々の「実践の枠組み」として、認識的な文脈とは別のところに位置付けたことは、評価されるべきものである。しかし、批判したい点もいくつかある。

- (1) ムーア型命題の確実さの淵源を、共同体の中で言語による記述の技術を訓練によって習得するという、非認識的な実践技術の習得に求めることは、ムーア型命題が確実さを持つに至った原因を説明するものである。だがそれは、ムーア型命題の確実さの内実を説明するものではない。その確実さは、言語ゲームの二層の構造、即ち、言語ゲームの枠組みであるムーア型命題と、それを基礎とする認識的な命題との論理的な関係から生まれるものである。マッギンは、「ムーア型命題の確実さは、言語の習得とともにやってくる実際的な確かさである」（McGinn, M. [1989], p. 157）と言って、ムーア型命題（実践の枠組み）の確実さを言語（記述の技術）の習得に還元するだけで、ムーア型命題と認識的な命題との論理的な関係を見て取ることができなかった。

¹¹² McGinn [1989], pp. 152-160

- (2) マッギンは、ムーア型命題を、我々が世界を記述する統一的な判断体系（実践の枠組み）としてとらえ、それを言語による記述の技術の訓練によって習得すると考えている。しかし、「私には手が二つある」とか「車は大地から育ってこない」（§ 279）等のムーア型命題は、我々が世界を記述する技術を訓練によって習得したものなのだろうか。おそらく直にそのようなことを訓練されたことはないであろう。ムーア型命題には、我々が明示的な教育や訓練を経て得たのではないものが沢山ある。また、表現されるに至らないものも無数にあると思われる。このことについての論究がなされていない。
- (3) 言語による記述の技術を訓練によって習得することは、ムーア型命題を獲得する原因として、言語ゲームの最も基本的な部分であるが、ウィトゲンシュタインはそれ以外に、文化・歴史を受け継いだ¹¹³共同体の中での生活や実践¹¹⁴、過去の体験¹¹⁵、動物の本能にも似たもの¹¹⁶、人間の自然誌¹¹⁷なども、その原因として考えている。言語による記述の技術の習得は、ムーア型命題を持つに至る原因と密接に関連しているが、それを言語による記述の技術の習得としてまとめてしまうと、ムーア型命題を持つに至る多様な要因を見落としてしまうことになると思われる。

以上のようにマッギンは、ムーア型命題が我々の「実践の枠組み」であり「言語を有意味に用いるための条件」であるとして、それを認識的な文脈の中で扱うことができないこと、また、ムーア型命題がどのようにして獲得されるのか、その原因を明らかにしたが、ムーア型命題の確実さがムーア型命題と認識的な命題との間の論理的な関係に基づくことまで論究しなかった。次節では、「揺るぎないもの」を「蝶番」と呼び¹¹⁸、それを規則として考えたシャロックの解釈を見てみよう。

¹¹³ 「……これ【世界像】は受け継いだ背景であり、これに拠って私は真・偽を区別する。」（§ 94）

¹¹⁴ 「私の生活は、あそこに椅子がある、ドアがある、と私が知っていること、あるいはそう確信していることを示す。一例えば私は友人に言う、『あの椅子を持ってきてくれ』、『ドアを閉めてくれ』等と。」（§ 7）、「子供は本が存在すること、椅子が存在すること等々を学ぶのではなく、本を取ってくる、椅子に座ること等を学ぶ。」（§ 476）

¹¹⁵ 「以前の経験は、私の現在の確信の原因であるということは十分にあり得るが、その根拠であるだろうか。」（§ 429、強調はウィトゲンシュタイン）

¹¹⁶ 「それは、私がそれ【確実さ】を正当化されるかされないかを越えたところにあるものとして、いわば動物的な何かとして、理解したいということを意味する。」（§ 359）、「私はここで人間を動物としてみなしたい。人が、本能はあるが推理の働きは無いと確かに思う原始的な存在として。」（§ 475）

¹¹⁷ 「命令する、問う、話をする、しゃべることは、歩く、食べる、飲む、遊ぶことと同様に、我々の自然誌に属している。」（PI § 25）、「私は絵を見ている。それは、一人の老人が杖で体を支えながら、急な坂道を上っていく姿を表わしている。－しかし、どうして【そう見えるのか】？彼がその姿勢でその道を滑り落ちているのだとしても、そのように見ることはできるのではないか？火星なら、この絵をおそらくそのように記述するかもしれない。なぜ我々は、そのように記述しないのか、私には説明する必要がない。」（PI § 139 の欄外(b)、強調はウィトゲンシュタイン）

¹¹⁸ Moyal-Sharrock [2007], p. 68

2 蝶番に対するシャロックの解釈

2(1) 蝶番は文法規則である

シャロックは、第3章の2(1)で取り上げたように、蝶番を、①言語的な蝶番、②個人的な蝶番、③局所的な蝶番、④普遍的な蝶番の4つのタイプに分類する。彼女は、これら4つのタイプの中で、言語的な蝶番（「この色はドイツ語で『grün』と呼ばれる」）を文法規則と呼ぶことは問題ないとしても、個人的な蝶番（「私は今椅子に座っている」）や局所的な蝶番（「地球は丸い」）や普遍的な蝶番（「私には脳がある」）を文法規則と呼ぶことの是非を検討して、次のように言う。

「我々は、文法規則の定義を不当に制限しないように注意しなくてはならない。一文法規則は、特定の言葉の使用のためだけの規則ではない。

『文法に属するものは、すべて命題を実在と比較するために必要な条件（方法）である。即ち、すべて（意味の）理解に必要な条件である。』（PG¹¹⁹, p. 88、[邦訳『哲学的文法1』, pp. 112-113, 強調はシャロック]）……【『私には手が二つある』などは】文法規則のように見えないかもしれないが、それが『我々が物事を見る見方と探究に、それらの形式を与える』限り、それが『我々の思考の足場』に属する限り、それは規則である。」¹²⁰ (Moyal-Sharrock[2007], pp. 103-104, 強調はシャロック)

このように彼女は、文法規則のようには見えないものでも、我々の「物事を見る見方と探究に、それらの形式を与える」限り、「思考の足場」に属する限り、それは規則だと言う。

そして彼女は、4つのタイプの内、言語的蝶番を除く3つのタイプの蝶番について、個人的蝶番は、経験的にも認識的にも根拠付けられずに話し手の論理的基盤を構成すること、局所的蝶番は、経験命題から始まって言語の中に溶融したものであること、普遍的な蝶番は、観察から必然的基礎を作り上げるものであることを論じて、これらはどれも文法規則だという¹²¹。従って、「私は今椅子に座っている」、「地球は丸い」、「私には曾祖父母がいる」も文法規則だ、と彼女は考えるのである。

このようにシャロックは、「文法規則」の用法を、言葉の使用規則としてだけでなく、もっと広くとらえて、文法は意味の理解に必要な条件であって、我々の思考の足場に属するものも規則として考えようとする。

¹¹⁹ ウィトゲンシュタインの著作 *Philosophical Grammar* の略号

¹²⁰ シャロックは、「私以外の人々が存在する」は、「世界の人口がこの40年間に倍になった」という文を理解するのに必要な文法的条件であり、文法規則だと言う。(Moyal-Sharrock [2007], p. 105)

¹²¹ Moyal-Sharrock [2007], p. 103

2(2) 蝶番の概念的特徴とその身分

シャロックは、蝶番の概念的特徴として次の 6 点挙げる¹²²。

- (1) 疑いの余地が無い (indubitable) : 疑いや誤りは論理的に意味をなさない
- (2) 基礎的である (foundational) : 正当化の結果として生じるものではない
- (3) 非経験的である (nonempirical) : 諸感覚に由来しない
- (4) 文法的である (grammatical) : 文法の規則である
- (5) 言葉で表現しがたい (ineffable) : 語られえないものである
- (6) 行為の内にある (in action) : 行為において自らを示す

シャロックは、ムーアが「擁護」に掲げる蝶番に共通する特徴について次のように言う。

「それら [蝶番] が、経験的世界、即ち物理的対象、出来事、相互作用を指していて、このことが、それらが経験命題であるように思わせる。しかし、これらの文が共有する何か他のものもある。それらは、疑いの余地のない、疑いえない、非仮説的なものである。……それらは共に、偶然的で仮説的性質であることと、疑うことが不可能で非仮説的性質であることの両方であるように思われる。」 (Moyal-Sharrock [2007], p.85、強調はシャロック)

彼女は、蝶番が経験命題で仮説的性質を持つように思われると同時に、経験命題と違って疑うことが不可能で、非仮説的性質を持つようにも思われる、と言う。「私には手が二つある」という命題は、経験的世界の出来事を指しているようにも思われるし、またそうでないようにも思われる、ということである。彼女は、ウィトゲンシュタインはある経験命題が規則の特徴を表わしているという事実に悩まされたが、やがて、「経験命題のように見えるものが必ずしもいつも経験命題ではない」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 86)、と考えるようになった、と言う¹²³。そして、このように経験命題のように見えながら文法規則として働くものが蝶番命題である、と言う。

¹²² Moyal-Sharrock [2007], p. 72

¹²³ シャロックは、ウィトゲンシュタインのこの変化を、「我々は、ウィトゲンシュタインの『命題からなる』説明と非命題の説明を一貫したものとして考えず、我々の基礎的信念の本性を理解するために進行する、非線型的で、発展的ではない格闘を、『確実性の問題』を通じて、示しているものとして考える」 (Moyal-Sharrock [2007], p.89、強調はシャロック)、と言う。

『『確実性の問題』の中で、経験命題のように見せかけてだますものの実は文法規則として働くこれらの命題が、いわゆる蝶番命題である。』（Moyal-Sharrock [2007], p. 87、強調は論者）

「全ての蝶番は文法規則として機能する。それらは、意味をなすことを条件付ける。」
（Moyal-Sharrock [2007], p. 105、最初の強調は論者、それ以外の強調はシャロック）

このようにシャロックは、蝶番は文法規則として機能する、と言う。だが、ウィトゲンシュタインはもっと慎重で、彼は、蝶番が規則だとまでは断定していない。

「この世界像¹²⁴を記述する諸命題¹²⁵は、一種の神話に属するであろう。そしてその役割は、ゲームの規則の役割に似ている（ähnlich, like）。」（§ 95、強調は論者）

『私は、あらゆる判断を放棄することなしにこの命題を疑うことができない。』
しかしそれは、どういう類の命題なのか。……それは確かに経験命題ではない。それは心理学に属さない。それはむしろ、規則の性格（Charakter, character）を持つ。』（§ 494、強調は論者）

このようにウィトゲンシュタインは、蝶番について「規則の役割に似ている」とか、「規則の性格を持つ」としか言っていないのである。だが、シャロックが、蝶番は文法規則として機能すると言うのはどういう意味だろうか。

「蝶番は、探究の対象ではなくて探究の規則である。その規則を我々は、疑問の余地なく受け取って用いる。」（Moyal-Sharrock [2007], p. 91、強調はシャロック）

蝶番は、探究の規則として機能する。探究の規則として機能するというのは、「記述の対象ではなく、記述の足場の一部のように働く」（Moyal-Sharrock [2007], p. 92）ということ

¹²⁴ 世界像とは「揺るぎないもの」の体系（必ずしも明示的に理解されているものではない）のことである。なお、ウィトゲンシュタインが世界像について語っている節（§ 94, 162, 167）は、本章の 3(4) で取り上げている。

なお、ラッシュ・リースは、「世界像」と「我々の生活」は相伴うもので、世界像が生活の基礎ではないことを強調している。（Phillips [2003], p. 176）

¹²⁵ 命題がその真偽や検証を問うことが有意味なものだとすれば、「揺るぎないもの」を表現する文は疑似命題（TLP 4.1272）と言えるかもしれない。なおウィトゲンシュタインは、「命題」は家族的類似性を持つ（PI § 108）と言っている。

である。これは、マッギンがムーア型命題を実践の枠組みと考えるのと、軌を一にしている。

かくして彼女は、次のように言う。

「ムーア型命題は、文法規則の表現である。……命題を仮装しているが、それらは実際には、我々の思考の、正当な命題の、枠組み、足場に属していることが露わになる (uncovered) 。」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 92)

「文法規則は、我々の言語ゲームの外にある。それは、文法規則が規定を必要とするからではなく、ゲームを可能にするからだ。文法規則が意味を可能にする。それ故、文法規則自身が意味をなすのではない。」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 94、強調はシャロック)

このようにシャロックは、ムーア型命題は文法規則の表現であり、それが意味を可能にし、言語ゲームを可能にする、と言う。

なおシャロックは、蝶番 (ムーア型命題) を文法規則と考える (引用の p. 91, 105) ので、後の引用文の中の「文法規則」を「蝶番」に置き換えると、次のように言い換えられる。

「蝶番は、我々の言語ゲームの外にある。それは、蝶番が規定を必要とするからではなく、ゲームを可能にするからだ。蝶番が意味を可能にする。それ故、蝶番自身が意味をなすのではない。」

このように彼女は、蝶番は言語ゲームの外にあって、それが言語ゲームを可能にし、意味を可能にするものだ、と考える。

なお、「蝶番」というのは、『確実性の問題』の中で使われている比喻である。

ウィトゲンシュタインは、次のように言っている。

「言い換えると、我々が立てる問いと疑いは、いくつかの命題が疑いから除外され、いわば問いと疑いが、それによって回転する蝶番のようなものに基づいている。」 (§ 341、初めの二つの強調はウィトゲンシュタイン、最後の強調は論者)

「もし私がドアを回転させようとするなら、その蝶番は、すべて固定されていなければならない。」 (§ 343、強調は論者)

なおハミルトンは、ムーア命題を特徴づける比喩として、次に掲げる理由から、「蝶番」より同じくウィトゲンシュタインの用いる回転する物体の「回転軸」（§ 152）の比喩の方が、優れていると言う¹²⁶。

「蝶番は、その周りを回る運動によってというよりは、[それ自身が] 何かによってしっかりと支持されていなければならない。[他方] 回転軸は純粹に幾何学的な概念で、それは、その周りを回る運動から離れては存在せず、また意味もない。」（Hamilton [2014], p. 97）

なお、ウィトゲンシュタインは、「回転軸」について次のように言っている。

「私は、私にとって揺るぎない命題を、はっきりと学ぶことはない。回転する物体の回転軸のように、私は、それを後から発見することができる。この軸は、しっかりつかまえられているという意味で固定されているのではなく、その軸の周りを回る運動が、動かなくしているのである。」（§ 152、強調はウィトゲンシュタイン）

ハミルトンは、第 3 章の 2(2) で示したように、ウィトゲンシュタインが関心を持つ確実さを、ムーア命題とムーア命題に至らない時間的・空間的に限定された確実な命題に区分して考えていた。

論者は、ハミルトンのこの区分に従って、ムーア命題は世界像を形成する命題であり、それに対しては「蝶番」の比喩が適切であると考ええる。世界像は共同体の中で固定されていて、簡単に変えることがないからである。

しかし、ムーア命題に至らない確実な命題に対しては、時間的・空間的に限定された場面が意味条件を作る。従って、その確実さを固定するものは個別の状況であり、それは時間や空間の変化に応じて変わるので、この場合は「回転軸」の比喩の方が適切ではないかと考えている。

¹²⁶ ピーター・ウィンチも、蝶番はそれ自体が別のものによって固定されていること、またドアの動きに先立って存在していることから、ムーア命題の比喩としては「回転する物体の回転軸」の方が適していると考えていたと言う。（Phillips [2003], pp. 157-158）

2(3) 蝶番を疑うことや誤ることは不可能である

さてシャーロックは、蝶番を疑うことは論理的に不可能であると、次のように言う。

「我々があること【蝶番】について、それが客観的に確実であるというのは、主観的または心理的な確信の問題ではない。また、単に疑われないということでもなく、疑う必要が無いということでもない。疑うことが、論理的に不可能なのである。」

(Moyal-Sharrock [2007], p. 73、強調は論者)

ここでシャーロックが「論理的に不可能なのである」と言うのは、どういう意味で「論理的に不可能」なのだろうか。シャーロックはこの引用に続けて、ウィトゲンシュタインの「私はあらゆる判断を放棄することなしにこの命題を疑うことができない」 (§ 494、強調はシャーロック) を引用して、「車が大地から育ってくる¹²⁷かこないかを疑うことは、我々人間の感覚の範囲 (bounds of sense) を放棄するに等しい」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 73、強調は論者) と言って、更に次のように続ける。

「普通の人間の理解の範囲 (within the ken) の内に留まっている間は、ある信念【蝶番】について疑ったり誤ったりすることは、論理的に不可能なのである。」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 74、最初の強調は論者、後の強調はシャーロック)

こうした推論をみると、シャーロックは、ある信念（蝶番）を疑ったり誤ったりすることが「論理的に不可能だ」という意味を、「人間の感覚の範囲を放棄する」こと、「人間の理解の範囲を超える」こととして考えているように思われる。しかし、感覚の範囲を放棄すること、人間の理解の範囲を超えることが、どうして蝶番を疑うことの論理的不可能性に結びつくのか、その説明がここでは明確ではない。

また彼女は、基礎的な蝶番について次のように言う。

「我々の基礎的な蝶番—我々の言語ゲームの足場を作り上げている信念—は、合理的にではなく、因果的に現実には繋ぎ止められている。」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 82、強調はシャーロック)

¹²⁷ 「車が大地から育ってこないというのは絶対確実だ。」 (§ 279) という例がある。

蝶番が、合理的に現実には繋ぎ止められているのではないということは、ウィトゲンシュタインの、「私は一定の思考の足取りに従って、意識的にその確信に至ったのではな」（§ 103）い、を指してのことであろう。そして、我々が基礎的な蝶番を獲得する（蝶番が現実には繋ぎ止められる）のは因果関係に基づく、というのはマッギンと同じである。マッギンは、ムーア型命題は言語による記述の技術を訓練によって習得したものである、という因果関係による理解をしていた。

また、誤りについて、シャロックは次のように言う。

「誤りは、不注意や疲労、無知から我々が犯すものであるが、『車が大地から育ってくる』という誰かの確信を、『誤り』と呼ぶことはできないだろう。」（Moyal-Sharrock [2007], P. 73）

彼女は、不注意や疲労、無知から我々は誤りを犯す、と言っている。確かに、認識的な文脈においてはそうである。しかし、この基準からいくと、蝶番に対しても、我々は誤りを犯すことがあり得ることになる。即ち、「車が大地から育ってくる」という誤った確信を、例えば無知から持つこともあり得ることになる。しかし彼女は、それは「誤り」と呼ぶことはできないだろうと言う。確かに、ウィトゲンシュタインは、「この種の誤った信念がすべて誤りというわけではない」（§ 72）と言っており、「車が大地から育ってくる」という信念を「誤り」とは言わないだろう。

第3章の6「誤りについて」で述べたように、ウィトゲンシュタインは、論理的な観点から、誤りを二種類に区別した。「いわゆるゲームの中にその場所が用意されている誤りと、例外的に起こる完全な規則違反の誤り」（§ 647）である。ゲームの中にその場所が用意されている誤りは、通常の言語ゲーム、認識的な文脈の中での誤りで、理解できる誤りである。それは、不注意や疲労、無知から犯すものである。しかし完全な規則違反の誤りは、理解されない誤りで、通常の言語ゲームの中で、論理的に排除されている誤りである。従って、ウィトゲンシュタインからみると、「車が大地から育ってくる」という確信は、後者の理解できない完全な規則違反の誤りである。その誤りは、その一つの確信だけが問題になるのではなく、次のようにゲームの枠組み全体に影響が及ぶような誤りなのだ。

「しかし、この一つの信念【『車が大地から育ってくる』という信念】は、他の全て

の信念と、どのように関連しているのでしょうか。先のようなこと[『車が大地から育ってくる』こと]を信じられる者は、我々の検証体系の全体を受け入れないのだ、と我々は言うだろう。

この体系は、観察と授業によって吸収するものである。私は、故意に<学ぶ>とは言わない。」 (§ 279、強調はウィトゲンシュタイン)

ウィトゲンシュタインの基準からいけば、「車が大地から育ってくる」という誤った信念を持つ者は、我々の「検証体系の全体を受け入れない」者である。それは一つの誤りで済むものではなく、あらゆる判断に係わってくる誤りである。それは無知による誤りというよりも、世界像の相違 (§ 92) に係わるもので、誤りとは言えないものである。

しかしシャロックの基準でいけば、無知による「車が大地から育ってくる」という確信は、理解できるものであり、誤りと呼ぶことができることになる。しかし彼女は、「車が大地から育ってくる」という確信を「誤り」とは呼べない、と言う。ウィトゲンシュタインにならって、それは心的障害だ¹²⁸、と言う。だが、なぜそれを誤りと呼ぶことができないのかについての説明はない。

2(4) 認識的ゲームの中で蝶番を語ることは論理的に排除されている—その 1—

シャロックは、文法規則（蝶番）を言語ゲーム（認識的ゲーム）の中で定式化する（蝶番を語る）ことは、いかなる助言も必要ない時に規則を述べることである、と次のように言う。

「文法規則を言語ゲームの中で定式化することは、……あたかもそれらが記述あるいは何かを伝える言明であるかのように、意味の境界を定式化することである。これは、ゲームの中に割り込みをすることである。——思い出すのにいかなる助言も必要とされていない時に、規則を述べることである。」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 95、強調はシャロック)

そして彼女は、その根拠に次の § 353 を取り上げる。

「営林署の職員が部下と一緒に森に行って、『この木は伐採しよう、それからこの木

¹²⁸ Moyal-Sharrock [2007], p. 73

とこの木』と言う。その時その職員が、『私はあれが木であることを知っている』と述べたとすればどうであろうか。」 (§ 353、強調はウィトゲンシュタイン)

この例で営林署の職員達は、森に行って伐採する木を選別するという言語ゲームをしている。シャロックは、職員が「私はあれが木であることを知っている」と言うのはナンセンスだろう、と言う¹²⁹。ここで彼女がそのように言う理由は、伐採する木を選別するという言語ゲームをしている時に、その規則（あれは木である）を言表することは、不必要だからナンセンスだ、と言っているように見える。その選別ゲームの中で、「この木は伐採しよう」とか「この木は伐採しないでおこう」と言うことには意味があるが、「あれが木だということを知っている」と言うことは不必要だ、「あれは木である」は、その選別ゲームの中の規則であり、その規則は当然知られている（「思い出すのにいかなる助言も必要とされていない」）もので、わざわざその規則を定式化するまでの必要はない、と言っているように見える。不必要だということは、確かに強調されて良い。だがウィトゲンシュタインは、これとは別の箇所ではこれに類似した例を挙げており、そこでは、不必要だからというよりはむしろ、端的にナンセンスだと言っている。

「[今度は] 私が医者で、一人の患者が私の下に来て、自分の手を私に示してこう言う、と仮定しよう。『ここに手のように見えるものは、精巧な模造品なんかではありません、本当に手なのです。』そう言ってから、彼は、自分の怪我のことを話し始める。—私はこれを、余計ではあるけれど、一つの報告として本当に見なすであろうか。私は、むしろそれを、確かに報告の形式をしてはいるけれど、ナンセンスだと思うのではないだろうか。というのは、もしこの報告が本当に意味を持つとしたら、彼は自分の語ることにどうして確信を持てるのだろうか、と[私は]言うのではなかろうか。」 (§ 461、強調は論者)

ここでウィトゲンシュタインが「ナンセンスだと思う」と言うのは、次のようなことからだと、論者は理解している。

医者は怪我をした人の手を治すのであって、模造品の手を治す（修理する）のではないということが、医者と患者の間の言語ゲームの前提にある。それは、蝶番である。しかし彼（患者）の報告は、その前提（蝶番）を無視するものである。あるいは破棄するものであ

¹²⁹ Moyal-Sharrock [2007], p. 95

る。というのは、彼の報告が真剣に取り上げられるべきものだとすると、報告している彼自身が自己論駁に陥ることが免れなくなるからである。なぜなら彼は、医者とは怪我をした人の手を治すという枠組みに立ちながら、彼の報告はその枠組みを自ら損ねていて、医者と患者の間に成り立っている言語ゲームを自ら破棄しているからである。だからウィトゲンシュタインは、「もしこの報告が本当に意味を持つとしたら、彼は自分の語ることにどうして確信を持てるのだろうか」と問うのである。もし彼の報告が本当に意味を持つとしたら、医者と患者の間に成り立っている蝶番を損ねることになるので、彼は確信を持って報告を語るができないことになるからである。彼の報告は、医者と患者という言語ゲームが成り立っている限り、論理的に排除されている報告であり、ナンセンスなのである。

また、先の § 353 についても同様のことが言える。営林署の職員達は、「木とは何であるか」を当然に理解しているという前提の下に、伐採する木を選別するという言語ゲームを行っている。「あれは木である」は、彼らの間の蝶番（回転軸）である。しかし、「私はあれが木であることを知っている」と言うことは、そのような前提が無い場合に有意味になる発話である。従って、「あれが木であることを知っている」が、真剣に取り上げられるべき（本当に意味を持つ）ものだとすると、彼らの間にある蝶番が損なわれ、木の選別ゲーム自体が破棄されるものとなる。よって、木の選別ゲームが成り立っている限り、「あれが木であることを知っている」は、木の選別ゲームから論理的に排除されており、ナンセンスである。それはちょうど、将棋の棋士が一局指している最中に、ある駒を指して、対局相手に向かって「私はこれが飛車であることを知っている」と言うナンセンスと同じである。どの駒が飛車なのか知らない者に対して、「私はこれが飛車であることを知っている」と言う場合には意味があるが、普通に将棋を指す人にそう言うのは、ナンセンスである。

しかしまた、シャロックは、次のようにも言う。

「蝶番を言葉によって表現できないことを強調することは、（普通の状況において）既に確実であることを語ることが余計なことであり、それをはっきり表現することは無駄な繰り返しであるということを、単に指摘することだけでなく、蝶番を語ることが論理的にできないということを明白にすることである。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 96、強調はシャロック)

ここでは彼女は、蝶番を言葉で表現できないことを強調することは、無駄な繰り返しだけでなく、「蝶番を語ることが論理的にできないということを明白にすることだ」と言っている。ウィトゲンシュタインが先の § 461 で、患者の報告をナンセンスだ（理解できない）

と言うのは、そのような報告は、報告の形式をしていても、論理的に排除されているからナンセンスだ、という意味からである。しかしシャーロックは、蝶番を言語ゲームの中で語ることができないと強調することが、なぜ論理的にできないということを明白にすることなのかについて、それ以上説明しない。彼女は、蝶番はゲームに属さず、ゲームの中で自らを示し得るにすぎない、と言うだけだ。

「それ【蝶番】は、ゲームを可能にし、できるようにするが、ゲームには属していない。……ウィトゲンシュタインにとって、文法規則は、言語ゲームの外でのみ語られ（あるいは正式に言うときに出され）得るもので、それらはゲームの中で自らを示し得るにすぎない。」（Moyal-Sharrock [2007], P. 97、強調はシャーロック）

「蝶番の確実さは、考え抜かれたものではなく、行為に表わされる。」（Moyal-Sharrock [2007], p. 98）

このようにシャーロックは、蝶番を語ることがなぜできないかについて、蝶番はゲームには属しておらず行為の中で示されるだけだ、と言う以外に説明しない。

なお、蝶番の確実さが考え抜かれたものではないというのは、その確実さが推論を経て認識されるに至ったものではない、ということであろう。それは、次のようにウィトゲンシュタインが言っていることである。

「私は、一定の思考の足取りに従って、意識的にその確信に至ったのではなく、その確信は、私がそれに触れることができないほどあらゆる私の問と答えの内に、しっかりと固定されている。」（§ 103、最初の強調は論者、後の強調はウィトゲンシュタイン）

本節では、営林署の職員や医者と患者の例を取り上げて、認識的ゲームの中で蝶番を語ることが論理的にできない（ナンセンスである）と言う、ウィトゲンシュタインの意味を論じてきた。しかしウィトゲンシュタインは、本節とは別の観点からも、蝶番を語ることが論理的にできないということを言っている。次節でそれを取り上げよう。

2(5) 認識的ゲームの中で蝶番を語ることが論理的に排除されている—その 2—

ムーア型命題は、言語ゲームにおいて「実践の枠組み」（マッギン）を構成し、その役割は「蝶番」（シャーロック）であって、認識的ゲームの「外」（マッギン、ストロール、

シャロック)にある。前節では、「認識的ゲームの中で蝶番を語ることはできない」の「できない」は、語ることが事実としてできないという意味ではなく、語っても認識的ゲームの中では意味をなさない(論理的に排除されている)、という意味であることを論じてきた。なおこの場合、規則の説明とか教示としてならば、語ることはできる(論理的に排除されていない)。

しかしウィトゲンシュタインは、これとは別の観点から、認識的ゲームの中で蝶番を語ることは論理的に排除されている(意味をなさない)、と言っている。それはどういうものか。このことについて、二つの事例を考えよう。

最初の例は、私が友人とレストランでフランス料理の会食をしている場合である。最近の政治・経済状況について会話がはずんでいる最中に、その会話の文脈とは無関係に、私が彼に向かって突然、「私には手が二つある」と真面目に言ったとしてみよう。その時、はずんでいた会話はおそらく突然中断されるだろう。彼は、驚くか私の発言の意味を理解できず、私に発言の真意を問い質すだろう。「私には手が二つある」という文が理解できないのではない。彼と私の置かれたその状況の中で、私によって唐突に発せられた「私には手が二つある」という文の収まりどころが、彼にとってないのである。

また、二つ目は、ウィトゲンシュタインがあげる例である。前節で引用したものと併せて掲げる。

「私は医者のところに行き、自分の手を見せてこう言う。『これは手です、……ではありません。私はこの手に怪我をしました等々。』私はそこで余計な報告をしているだけなのだろうか。」 (§ 460)

「[今度は] 私が医者で、一人の患者が私の下に来て、自分の手を私に示してこう言う、と仮定しよう。『ここに手のように見えるものは、精巧な模造品なんかではありません、本当に手なのです。』そう言ってから、彼は、自分の怪我のことを話し始める。—私はこれを、余計ではあるけれど、一つの報告として本当に見なすであろうか。私は、むしろそれを、確かに報告の形式をしてはいるけれど、ナンセンスだと思っ
てはいないだろうか。……[ここには] 報告されるべき背景が欠けている。」 (§ 461、
強調は論者)

最初に挙げた友人と会食をしている例では、「私には手が二つある」は、会話の内容を含めて場違いな、その場の状況とは全く無関係な発言である。もちろん、「私には手が二つ

ある」ことは、特殊な状況（「私には手が二つある」ことを言葉にして表現することに意味がある状況、シャーロックの言うドッペルゲンガー（doppelgänger、分身）¹³⁰）でない限り、自明のことである。それは、私がフォークとナイフを手にして料理を食べている背景に「揺るぎなく」ある。それは、彼にとっても「揺るぎないもの」である。それは蝶番（回転軸）である。しかし、どんなに場違いに思われるような発言でも、それが意味あるためには、私がそれを発言するに至った理由（発言した文の収まる文脈）を、私は説明できるのでなければならない。あるいはこちらが説明しなくても、少なくともその理由や文脈が、相手に理解可能でなければならない。それが、通常の言語ゲームにおける会話の論理である。私が発言するに至ったストーリーを相手が理解しない限り、その発言はその会話の論理を犯している（意味をなさない）のである。即ち、その発言は、完全な規則違反なのである。もちろん、どんなに唐突のようにみえる発言であっても、相手に対して納得できるストーリーを紡ぐことに成功すれば（その文の収まる文脈が理解されれば）、規則違反にはならない。その場合私の発言は、如何に唐突なものであってもナンセンスではない。

「会話の途中で誰かが唐突に、『幸運をお祈りします』と言う。私は驚く。だが、しばらくして私は、この言葉が、彼の私に対する思いに結びついていることを理解する。すると今や、その言葉は、もはや意味をなさないものとは思われない。」（§ 469）

従って、最初の友人と会食をしている例での私の発言は、私が相手に発言するに至った背景、収まるべき文脈を相手が理解しさえすれば意味をなす。しかし、そうでなければ規則違反であり、たとえ構文論的に誤りのない文であっても意味をなさないのである。

また、二つ目のウィトゲンシュタインの挙げる例では、私の発言は唐突なものではないが、怪我をした手が模造品ではなく私の手であることは、その状況から全く当たり前のこと、シャーロックが言うように余計な報告である。しかし、言わずもがなのことが当然の状況の中で、それを報告することは、その文脈の中で意味を持つ必要があり、そうでなければ余計というよりも、意味がない。

『私はここにいる』という言葉は、ある文脈の中でだけ意味を持つのであって、私の面前に座っていて私を直視している人に対して、それを語る場合には意味がない。－

¹³⁰ シャーロックは、ドッペルゲンガーを「同じ文が、文脈によって異なる意味と身分を持ち得る」（Moyal-Sharrock [2007], p. 71、強調はシャーロック）と説明している。

それらが余計な言葉だからというのではなく、その意味が状況によって規定されておらず、しかるにそのような規定が必要とされているからである。」 (§ 348、強調はウィトゲンシュタイン)

「その意味が状況によって規定されておらず」というのは、私が、「私はここにいる」という言葉を発することが、認識的に適切な文脈の中に収められていない、ということである。

従って、認識的な文脈の中で語ることに意味があるためには、それを語るべき「背景」が相手に理解されなければならない。そこに適切な文脈があるのでなければならない。それが、語るという認識的ゲームを有意味に行うための規則である。従って、言わずもがなのこと（蝶番）をあえて語るということは、それを語る意味が相手に理解されない限り、即ち適切な文脈がそこにあるのでない限り、意味をなさない。そうでなければ相手は、自分が馬鹿にされていると憤慨するか、私の精神状態を疑うかであろう。言わずもがなのこと（蝶番）を認識的ゲームの中で語ることは、それが適切な文脈の中に納められない限り、論理的に排除されている。そして、適切な認識的文脈の中で蝶番を有意味に語ることができる場合、その蝶番は、蝶番としての身分を喪失しているのである。

また、この § 348 を、前節の観点で見ると、次のようになる。私は、私の面前に座っていて、私を直視している人と会話をしている。その人が、私の面前に座っていて私を直視しているというのは、私とその人が会話という言語ゲームをする前提にある。それは、蝶番（回転軸）である。しかし、「私はここにいる」と言うのは、そのような前提が無い場合に有意味になる¹³¹。従って、私に面と向かっている人に「私はここにいる」と言うことが真剣に取り上げられるべき発話だとすると、私とその人が会話するそのゲームの前提にある蝶番を損ねるもので、自己論駁に陥ることが免れなくなり、ゲームを破棄するものとなる。私に面と向かっている人との間で会話ゲームが成り立っている限り、「私はここにいる」と言うことは、認識的文脈の中では排除されている。

このように、蝶番は、それが認識的ゲームの中に登場すると、通常は意味をなさず、余計なことというよりはナンセンスになる。ナンセンスにならず意味あるためには、収まるべき適切な文脈、認識的に有意味な文脈が必要である。蝶番は、教示や規則の説明として語られることはあるが、それ以外に、認識的ゲームの中に意味あるものとして収められる

¹³¹ 初詣などで大勢の人波に紛れて私を見失った子供に、私の位置を知らせるために手を挙げて大声で「私はここにいる」と叫ぶ場合。（第 1 章の 5 を参照）

時、そのような蝶番は、その限りで言語ゲームの基礎としての蝶番の身分（規則としての身分）を同時に喪失しているのである。

蝶番は、言語ゲームの基礎にあって、枠組みとして通常の言語ゲームを支えており、それを文法規則として説明するか教示するか以外に、語られることはない。

ゲームの規則も同様である。ゲームの規則は初心者に説明するか教示する場合を除いて、その規則自体がゲームの中で語られることはない。例えば、将棋で飛車は斜めに動かさないということは、初心者に将棋の規則を説明する時に言うもので、普段将棋を指している人に言うことではない。もちろん、ある局面で、飛車が斜めに動かせるといいな、と言うことがあるかもしれないが、それも飛車は斜めに動かさないという規則を踏まえての発話である。それを真剣に語ることは意味不明であり、ナンセンスである。

蝶番もゲームの規則と同様である。それが通常の言語ゲームの中で語られるとすれば、それは規則として子供や外国人に教示したり説明したりするような場合であって¹³²、それ以外にわざわざ取り上げて説明したり報告することは意味不明である。すなわち、認識的文脈の中で、蝶番を説明したり報告したりすることは、規則を教示する以外では自己論駁に陥ることが免れず、排除されている。

このように、認識的文脈の中でそれを表現することが排除されている蝶番を、わざわざ認識的ゲームの中に取り上げて語ることは、相手に理解不能として受け止められる。さらには、相手が侮辱されたと思うか、語る側の精神状態が疑われるかであろう。

しかし、認識的ゲームの中で蝶番を語ることが意味をなさないからといって、言語ゲームに蝶番の占める位置がどこにも無い、ということでは全くない。それは、シャロックの言うように、言語ゲームの行為の内に示されている。

ウリクトはここに、『論理哲学論考』の、「語りうるもの」と「示されるもの（語りえないもの）」という区分の中で、「示されるもの（語りえないもの）」を語ることに対する批判を、『確実性の問題』におけるウィトゲンシュタインのムーアに対する批判の中に特徴づけることができる、と言っている。

「ムーアが＜常識＞と呼んだものは、ウィトゲンシュタインが『論理哲学論考』で＜世界の限界＞として指していたものと、全く同じものである。……そして、我々は、『確実性の問題』におけるムーアについての彼の批判を、『論理哲学論考』の、言語において語りえないことを語る試みについての批判として、【同じように】特徴付ける

¹³² ウィトゲンシュタインは、「それは君の手だ」と子供に教える例を挙げている。（§ 374）

ことができる。」 (Wright [1972], pp. 175-176)

『論理哲学論考』において「示されるもの」は、例えば、ある楽曲について、レコード盤、楽曲の思考、楽譜、音波¹³³等の表現の内に示される論理形式であって、それを語ろうとしても語る表現の中にその形式を取り込まざるを得ないので、それを語ることが論理的に不可能であり、示されるだけなのである。これに対して、『確実性の問題』では、蝶番を事実として語ることはできても、認識的文脈の中では意味をなさず（ナンセンス）、蝶番は行為の内に示されるだけである、という違いがある。

2(6) 蝶番の起源についてのシャロックの解釈

シャロックは、我々が蝶番の確実さを獲得するにあたって、二つの仕方を区別する¹³⁴。一つは、自然に吸収・取り込まれることであり、またもう一つは、訓練によることである。

自然に吸収・取り込まれる確実さとは、教えられることなく持つに至る自然な、動物のような、本能的な確実さのことで、その確実さは、言葉を理解できるということを含意しない。この確実さの例としてシャロックは、「私は身体を持つ」、「手は我々がそれに注意を払わない時でも消え失せることがない」等を挙げる。

「私はこれまで、『私は身体を持つ』ということ学んだことはないし、私が身体を持っているかどうか考えたり、チェックしたり、テストするために立ち止まったりすることもない。……身体を持つことに伴っているのは、本能的な動物的確実さである。」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 108、強調はシャロック)

また、訓練によって獲得される確実さとは、我々が技術や習慣を獲得するように、文化的、教育的訓練を通じて、あるいは暗黙のうちに繰り返し曝露されることを通じて獲得される、条件付けられた確実さのことである。

「獲得された蝶番は、計画的な繰り返し（訓練）を通じて、あるいは自然な繰り返し（繰り返される暴露 (repeated exposure)) を通じて、揺るぎないものにされる。」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 111)

¹³³ TLP 4.014、4.022

¹³⁴ 以下、Moyal-Sharrock [2007], pp. 104-105

「我々が判断を教えられるというのは、その後が続く判断を基礎付けるひとまとまりになった公理を吸収することによって始めるというのではなく、判断そのものを吸収することによって始める。だから、我々は、我々自身、実際、その判断をしているのではない。我々は、どんな推論も推測もしていない。……＜判断＞はここでは、帰納的、あるいは決断的などんな香りも持たない。『あらゆる人間には両親がいる』という我々の確信は、我々の側の判断行為の結果ではない。それはその周りにあるものによってしっかりと固定されている。」（Moyal-Sharrock [2007], pp. 111-112、強調はシャロック）

このようにシャロックは、人間の自然な、動物のような本能と、教育や訓練あるいは自然な繰り返しを通じて、蝶番の確実さを我々は非認識的に受容する、そして、その確信は、判断行為の結果ではなく、その周りにあるものによってしっかりと固定されている、と言う。

なおシャロックは、蝶番が、「因果的に現実には繋ぎ止められている」（Moyal-Sharrock [2007], p. 82）、と言うことによって、蝶番の確実さ自体も、本能的なものや訓練（繰り返しによる暴露を含む）による因果的な条件付けから得られる、と言っているように見える。それは、「身体を持つことに伴っているのは、本能的な動物的確実さである」とか「いくつかの事実が基礎の中に溶解されて、我々の概念的足場の一部になった」（Moyal-Sharrock [2007], p. 143）と言われていることから伺われる。

しかし、本能的なものや訓練によって確実さを得るというのは、確実さを獲得する原因を説明するものあって、確実さの内実（言語ゲームの二層の構造に由来する論理的な関係に基づく確実さ）を説明するものではない。この批判は、先のマッギンに対する批判と同じものである。ただ、マッギンの場合、ムーア型命題の獲得に関して、共同体の中で言語による記述の技術を訓練によって習得することしかなかったが、シャロックの場合は、多様な原因を考慮しており、この点については、マッギンの解釈より評価できるように思われる。

2(7) 蝶番についてのシャロックの解釈のまとめとそれに対する評価と批判

以上からシャロックは、蝶番についての解釈を次のようにまとめる。

「行為において確実なことは疑われない。論理は我々の実践の内に—我々の行為の内に—埋め込まれている。我々の生活、我々の行為は、我々にもし分別があるなら、あることがらを疑わないし疑うことができないことを示している。確実さはここでは選

択ではないーそれは、我々の探究の論理に属する。……

文法規則は、言語の正しい使用を規定する。全ての蝶番を文法規則として考えることは、文法規則を言葉の使用にとって明示的な教示あるいは規約以上のものと考えらるゝことである。文法規則は、より一般的には、本能的に獲得されるか後から獲得されるものかのどちらかであり、それは意味の境界である。」（Moyal-Sharrock [2007], p. 99、強調はシャロック）

これまで述べてきたシャロックによるウィトゲンシュタインの確実性についての解釈には、評価できるところが多くある。「ある信念〔蝶番〕を疑ったり誤ったりすることは、論理的に不可能である」、「蝶番は、探究の規則である」、「蝶番は文法規則であり、それが意味を可能にして言語ゲームを可能にする」、「蝶番は、合理的にではなく因果的に現実になぎとめられている」、「蝶番の確実さは、行為のうちに示される」という考えがそうである。だが、批判したい点もいくつかある。

- (1) シャロックは「蝶番は文法規則である」と言うが、ウィトゲンシュタインはもっと慎重で、「ゲームの規則の役割に似ている」とか「規則の性格を持つ」としか言っていない。
- (2) シャロックは、ウィトゲンシュタインの言う、ある信念（蝶番）を疑ったり誤ったりすることが論理的に不可能だという意味を、人間の感覚の範囲を放棄すること、人間の理解の範囲を超えることとして解釈している。だが、人間の感覚や理解の範囲を超えると、ある信念（蝶番）を疑ったり誤ったりすることが、なぜ論理的に不可能になるのかが明らかでない。
- (3) シャロックは、誤りは不注意や疲労、無知から我々が犯すものであると言う。だが、そうだとすると、例えば無知から蝶番を誤ることもあり得ることになる。しかし、彼女は、それは誤りではなく心的障害だとするが、なぜ誤りと考えられないのか、その理由が明らかでない。
- (4) シャロックは、言語ゲームの中で蝶番を語ることができないことについて、言語ゲームの中では、蝶番を語ることが不必要であるだけでなく、それは論理的に語ることができず、行為に示されるだけだ、と説明する。だが、蝶番を語ることがなぜ論理的にできないのかについて説明がない。シャロックはこの他にも、「論理は我々の実践の内に埋め込まれている」とか「確実さは選択ではなく我々の探究の論理に属する」と言う。ここにはある洞察があるようにも思われるが、彼女がどういう意味で「論理」という言葉を用いているのか、明らかでない。

(5) シャロックは、蝶番が因果的に現実につながとめられていると言うが、蝶番の確実さ自体も、本能的なものや訓練による因果的な条件付けから得られると言っているように見える。しかし、蝶番の確実さは、蝶番とそれを基礎とする認識的ゲームという、言語ゲームの二層の構造による論理的な関係から生まれるものである。原因によって蝶番の確実さの内実を説明することはできない。彼女は、蝶番の確実さを言語ゲームにおける蝶番と認識的な命題との間にある論理的な関係から見て取ることができなかった。

次節では、ムーアが論文「擁護」の中で掲げた命題を「ムーア命題 (Moorean proposition)」¹³⁵と呼んで、時間的・空間的に限られた確実さを表現する命題と区別した、ハミルトンの解釈を取り上げよう。

3 ムーア命題についてのハミルトンの解釈

3(1) ウィトゲンシュタインのムーア批判についてのハミルトンの解釈

ハミルトンは、ムーアの論文「証明」が、観念論—我々の外に事物が存在することの否定—に向けられているのであって、懷疑論—事物が存在するにしろ存在しないにしろ、我々はそのことを知っているのかどうかという、实在論と観念論の両者に通じる疑念—に向けられているのではないことを指摘する¹³⁶。ムーア感覚では、観念論は外的事物の存在を否定するが、懷疑論は外的事物の存在を主張するにせよ否定するにせよ、どちらにも根拠がないことを見出して、その判断を疑うものと彼は理解している、とハミルトンは言う。しかしながら以下の議論は、観念論に限って通じるということではないので、観念論と懷疑論の区別にはこだわらずに考察を進める。

ハミルトンは、『確実性の問題』§1の「もしあなたが、ここに一つの手があることを知っているのなら、残りの全てについてあなたを認めよう。」というウィトゲンシュタインのコメントは、ムーアの証明は認められるべきではないと言っているのであるが、それはムーアが、自分の証明の前提にしている「ここに一つの手がある」を証明できなかったので、彼の証明自体が失敗していると論じているのではない、と言う。そうではなくて、ムーアが証明を行うその文脈では、「ここに一つの手がある」というのは知識や疑いの対象ではない、とウィトゲンシュタインは論じているのだ、と言う。この理解は、先に取り上げたマッギンやシャロックの理解と同じである。

しかし、ハミルトンは、ウィトゲンシュタインがムーアに同意しているところもある、

¹³⁵ Hamilton [2014], p. 2

¹³⁶ 以下、Hamilton [2014], pp. 168-176

と言う。それは、ムーアが、自分はどのようにしてムーア命題を知っているのか言うことができないけれど、また、知っているとする理由を与えることはできないけれど、そうしたことがムーア命題を疑う理由にならないということ、である。

ハミルトンは、ムーアとウィトゲンシュタインの違いを次のように指摘する。ムーアは、懐疑論を十分に理解できるものとして扱うという誤りを犯して、懐疑論に反対する。しかしウィトゲンシュタインは、懐疑論と懐疑論に反対するムーアの両方に対して、ムーアが「証明」の中で言う「ここに一つの手がある」という命題の理解可能性を問題にしている、と。即ち、ウィトゲンシュタインにとって、ムーアの「証明」という文脈の中でなされた「私はここに一つの手があることを知っている」という文は、理解できない（ナンセンス）文だ、と言うのである。

ハミルトンによれば、ウィトゲンシュタインにとってムーア命題とは、次のようなものである。

- (1) ムーア命題は、探究から離れたところにあり、それを認識的な文脈の中に、即ち「私は……を知っている」とか「私は……を疑う」という中に埋め込むことはできない。
(これは、蝶番命題が言語ゲームの外にあって言語ゲームを支持していると理解したストロール、ムーア型命題を「実践の枠組み」として理解したマッギン、蝶番を正当な命題の枠組み・足場として理解したシャロックと共通している。)
- (2) 知識と確実さは、非常に異なったものである。ムーアや懐疑論者にこのような理解は無かった。(この点も、先の3者と共通している。)

そして、ムーア命題は、文法規則としてのみ「知っている」が用いられ、その場合、それは無意味になる、とハミルトンは言う。

「P がムーア命題の場合、『私は P を知っている』は、通常、文法規則としてのみ用いられる。おそらく、そのような使用は意味を欠く (lack sense)。—それらは無意味 (*sinnlos*) であるか、意味を持たない (*keinen Sinn*) 。」 (Hamilton [2014], p. 181、強調はハミルトン)

ムーア命題を文法規則として使用する場合は「意味を欠く」、とハミルトンが言うのは、文法規則は、経験命題と違って真・偽や正当化を問うことに意味がないからである。ムーア命題は文法規則として使用されることはあっても、経験命題としては使用されない。ムーア命題を経験命題として使用する場合は、ナンセンスになり、文法規則として使用するなら意味を欠く、ということになる。

従って、P がムーア命題の場合、「私は P を知っている」が、ムーアが懐疑論を論駁するためにしたように用いられれば、即ち、経験的な主張として用いられれば、ウィトゲンシュタインからみれば、P は文法規則であるからその主張はナンセンスに (unsinnig) なる。

そしてハミルトンは、ムーア命題についてのウィトゲンシュタインの非認識的扱いは、「私は自分に手があることを知っている」が無意味な「文法的」使用のあることを意味するだろうが、通常の言語ゲームの中での指し手として意図されて発話される場合はナンセンスになる、と言う。

なお、ハミルトンは、「ムーア命題」を文法的命題に同化すべきではなく、またそれらが無意味な命題ともみなすべきでない、とも言う¹³⁷。なぜなら、規則は文法的命題（無意味な命題）で、それを使用できるし、規則を述べることもできる。だが、ムーア命題の場合、ウィトゲンシュタインは、それを使用することは困難でそれを述べることはおかしいことを言っているという感じを惹き起こす、と言っているだけで、ムーア命題が無意味ともナンセンスとも言っていないからである、と言う。（『確実性の問題』では意味なし (keinen Sinn) は頻繁に用いられるが、無意味 (Sinnlos) は 2 回しか現れない、と言う。）

さてハミルトンは、懐疑論に対するムーアのナンセンスな応答は、ウィトゲンシュタインにはある洞察を一疑いは普遍的に適用しえないということを一表現していたが、ムーアはそのことを理解するに至らなかった、そして、ウィトゲンシュタインは、自分の得た洞察を、ムーアは知っていると言断言することによって明確にしようとしたことで間違っていると感じた、と言う¹³⁸。このハミルトンのウィトゲンシュタイン解釈は、第 2 章の 3(4-2) で取り上げた、ストロールの次の解釈と同じである。

「ウィトゲンシュタインは、ムーアの定式化の背後に、ムーアが手に入れようとしてはっきりと述べることのできなかった、理解できる何か重要な考えを見出した。＜疑う＞という語は普遍的に適用されることはなく、疑いのゲーム自体、確実性を前提にしている。……しかしムーアは、『自分はそれ（ここに私の手があること）が真であると知っている』と断言することによって、疑いの連鎖を止めようとした。」（Stroll [1994], p. 117 の論述を要約）

しかしハミルトンは、ムーアに対する懐疑論者たちの批判について、ストロールやマッ

¹³⁷ 以下、Hamilton [2014], pp. 145-146

¹³⁸ Hamilton [2014], p. 187

ギン達とは異なる、新たな視点を提供している。

「[ウィトゲンシュタインは、] ムーアがするように、通常の知識主張 (knowledge-claim) を正当化しようとすることによって懐疑論者の疑いに答える代わりに、懐疑論者が疑いを形作る際、彼らが[用いる] 言葉の意味さえ知っていると想定する資格が彼らにあるかどうかと問うことによって、懐疑論者に異議を唱える。」 (Hamilton [2014], p227)

ハミルトンは、懐疑論者の疑いが如何に「自傷的 (selfundermining)」 (Hamilton [2014], p.227、強調はハミルトン) であるかを、ウィトゲンシュタインは指摘している、と言う。即ち、懐疑論者が、ムーアが証明の前提にしている「ここに私の一つの手がある」を疑うとしたら、その懐疑論者は、「手」という自分が用いている言葉の意味をどのようにして学んだのか、ということが逆に問われるのではないか、即ち、懐疑論者は、ムーアに異議を唱える以前に、「手」という言葉の意味を、経験的事実として既に受け入れてきたのではないかという異議を、ウィトゲンシュタインは唱えている、と言う。ハミルトンはこの主張を裏付けるのに、ウィトゲンシュタインの次のコメントを引用する。

『これが手であるかどうか、私は知らない。』だが君は、＜手＞という言葉が何を意味するのか知っているのか。また、『私は、それが今、私にとって何を意味するか、知っている』と言ってはいけない。この言葉がそのように用いられるのは一つの経験的事実ではないのか。」 (§ 306、強調はウィトゲンシュタイン)

「あらゆる言語ゲームは、言葉と対象が再認されることに基づいている。我々は、これが椅子だということを、 $2 \times 2 = 4$ と同じように容赦なく学ぶ。」 (§ 455)

「これが自分の手であることを私が疑う、あるいはそのことに確信が持てないと言うのなら (どんな意味であれ)、その時なぜ、これらの言葉の意味について疑わないのか。」 (§ 456)

懐疑論者の疑いは、彼らが、疑いを表現するのに用いる言葉を経験的事実として受け入れてきたということの内に、自己矛盾に似た罪を犯しているのではないか、その疑いは、

如何に自傷的であるか、とハミルトンは問う¹³⁹のである。

3(2) ムーア命題の特殊性

ハミルトンは、第3章の2(2)で取り上げたように、マッギンやシャロックと違って、ウィトゲンシュタインが例示する「揺るぎないもの」を、ムーア命題、時間的・空間的に限られていてムーア命題に至らない確実性を表現する命題、ナンセンスな命題の3つに区分する。

ハミルトンは、ムーア命題に対するウィトゲンシュタインにとっての哲学的関心は、ムーア命題が経験的であるにもかかわらず、それらが、「探究によって進められる道筋から離れたところにあり¹⁴⁰」、疑いえないものであるように思われることにあった、と言う¹⁴¹。この指摘は、シャロックのところでも取り上げたもの（本章の2(2)）であるが、次のシャロックの指摘と軌を一にしている。

「それら【蝶番】が、経験的世界、即ち物理的対象、出来事、相互作用を指していて、このことが、それらが経験命題であるように思わせる。しかし、これらの文が共有する何か他のものもある。それらは、疑いの余地のない、疑いえない、非仮説的なものである。……それらは共に、偶然的で仮説的の性質であることとまた、疑うことが不可能で非仮説的の性質の両方であるように思われる。」（Moyal-Sharrock [2007], p. 85、強調はシャロック）

ハミルトンによれば、デカルトは、数学や形而上学の真理のように、経験から独立に確証されるような言明に関心がある一方、経験論者は、「私の前に赤い斑点がある」のような間違ふ恐れのない観察に基づく言明に関心の焦点を当てた。しかし、ムーア命題は、デカルトや経験論者が関心を持つ言明のどちらにも属していないところがある、と言う。ウィトゲンシュタインは、ムーアが「自明の理 (truisms)」と呼ぶ¹⁴²ムーア命題の確実さについては同意するが、それらは、経験的に検査可能な命題ではないと論じて、ムーア命題が知識の対象であるというムーアの想定を、彼は否定している、とハミルトンは言う¹⁴³。

ハミルトンは、ムーア命題について次のように言う。

¹³⁹ Hamilton [2014], p. 227

¹⁴⁰ § 88

¹⁴¹ Hamilton [2014], p. 81

¹⁴² Hamilton [2014], p. 78

¹⁴³ Hamilton [2014], p. 83

「ムーア命題は、……ナンセンスなものではないし、また、ウィトゲンシュタインが、『文法の規則』を表現する『文法的命題』と呼ぶものでもない。むしろそれは、言語ゲームや実践や訓練の前提（presupposition）を表現しているように見える。」（Hamilton [2014], p. 86、強調は論者）

このようにハミルトンは、シャロックと違ってムーア命題を、文法規則を表現する文法的命題とは言わない。それは、言語ゲームや実践等の前提を表現しているものとする。ハミルトンが「文法規則」を狭く解釈するのに対して、シャロックは文法規則の意味を広く解釈して、蝶番（ムーア命題）を文法規則であるとするのと対照的である。そして、ハミルトンは、ウィトゲンシュタインがムーア命題の特殊性として、次の3つの特徴を考えているという¹⁴⁴。

- (1) 人は自分がどうしてムーア命題を知っているかを言うことができない
- (2) 人はムーア命題を疑うことができない
- (3) ムーア命題に特定の証拠を求める必要が無い

(1)については、ムーア命題が推論を重ねることによって獲得されたものではない、ということを示唆していると思われる。この点は、マッギンもシャロックも同じである。

(2)については、ハミルトンと同様にマッギンもシャロックも、彼らが「揺るぎないもの」を考察する際に前提にしていることである。だが、「疑うことができない」が、どういう意味で「できない」のかについて、3者の間に微妙な違いがある。

マッギンの場合は、ムーア型命題は「実践の枠組み」であり、「言語表現を有意味に用いるための条件」なので疑うことができない、という意味である。

シャロックの場合は、蝶番は「文法規則」であり、「文法規則は、言語ゲームの外でのみ語ることができ、ゲームの中では自らを示すだけ」なので、疑うことができない、という意味である。

ハミルトンの場合は、ムーア命題は「探究から離れたところにあり」、「言語ゲームや実践や訓練の前提を表現する」ものなので疑うことができない、という意味である。

このように3者は、「疑うことができない」と言う時の「できない」の意味を、マッギンは「言語表現を有意味に用いるための条件」、シャロックは「文法規則」、ハミルトンは

¹⁴⁴ Hamilton [2014], p. 87

「言語ゲームの前提」として考えて、それぞれ疑うことができないとするところに違いがある。

(3)については、マッギンもシャロックもハミルトンと違いはないが、彼らと違ってハミルトンは、「証拠」の意味を二つに区別する。一つは、ある命題（経験的なもの）の真・偽が証拠によって支持される、という意味での証拠であり、もう一つは、適切な時に他の人にそれを証明するために用いられる、という意味での証拠である。

例えば、「私は S. H. である」と言う時の証拠は、第一の意味では、出生証明書（戸籍謄本）か、車の免許証、DNA 鑑定が証拠になるであろう。第二の意味では、「S. H.」によって一般に知られており、誕生以来これまでこの名前と呼ばれてきたという事実が証拠になる。たとえ戸籍上の名前が「T. Y.」であったとしても、広く一般に「S. H.」として知られていれば、それがその人の名前の証拠になるということである。横綱白鳳は、白鳳として一般に知られているが、それは第二の意味である。第一の意味であるモンゴルの戸籍上の本名を知る人は、ほとんどいないだろう。ムーア命題は、この第二の意味に該当し、第一による特定の証拠を求める必要がない命題である、とハミルトンは言う。

さてムーア命題は、真・偽を問うことが有意味な経験命題に見える一方、また、疑いを免れているが、デカルトや経験論者の伝統的な確実さと違って、「[真・偽を問うことが有意味な] 探究の道筋から離れたところにある」（§ 88）命題である。ハミルトンは、ムーア命題のこの特殊性が、ウィトゲンシュタインの関心を刺激した、と言う¹⁴⁵。

かくしてハミルトンは、ウィトゲンシュタインがムーアに同意する点として、次の 3 点を掲げる¹⁴⁶。

- (1) 非人格的ムーア命題と人格的ムーア命題がある。
- (2) ムーア命題を疑うことはできない。
- (3) ムーア命題の確実さを証明するために、特定の証拠を引き合いに出すことはできない。

(1)の区別については、第 3 章の 2(2) で論じたものであり、(2)と(3)については上で述べたとおりである。

また、彼は、ウィトゲンシュタインがムーアと異なる点として、次の 5 点を掲げる。

- (1) ムーアは、自分の確実さを知識の一種とみなしているが、ウィトゲンシュタインは、知識の対象とも疑いの対象ともみなしていない。ムーアは、経験的/文法的の区別を

¹⁴⁵ Hamilton [2014], pp. 89-90

¹⁴⁶ 以下、Hamilton [2014], pp. 91-94

欠いている。

- (2) ムーアは、ムーア命題が経験的であるということを無反省に前提しているが、ウィトゲンシュタインは、文脈に依存する様々な使用を認めている。
- (3) ウィトゲンシュタインは、確実なものとして、ムーアの論文「擁護」に掲げられているムーア命題よりも、もっと広い対象を考えている。彼は、ムーア命題の他に、ムーア命題と同じように確実であるがムーア命題と異なって、時間的・空間的に限定された確実な命題も対象として考えている。しかし彼は、それらをはっきり区別することはしていない。
- (4) ウィトゲンシュタインにおいて、ムーア命題は、世界像を作り上げる。
- (5) ムーアは、ムーア命題を判断に必要な枠組みとは考えなかったが、ウィトゲンシュタインは、ムーア命題を判断が可能であるための条件と考えた。

(1)と(5)については、シャロックが指摘していたし、(5)についてはマッギンも指摘していた。

なお(1)について、ハミルトンは、「私には手がある」のようなムーア命題は、経験命題の形式をしているが規則の働きをしているということを、ウィトゲンシュタインは示唆している、と言う。この主張は、蝶番は文法規則であるとするシャロックの主張に近い。また、ウィトゲンシュタインは、ムーア命題と経験命題の間の境界を明確なものとしてみなしていなかった、と言う¹⁴⁷。ウィトゲンシュタインが、次のように言っているからだ。

「方法に関する命題と方法の内にある命題との間に……規則と経験命題との間に、明確な境界は存在しない。」 (§ 318-319)

なお、ハミルトンは、ムーア命題が規則の働きをしているといっても、ムーア命題と例えばチェスの規則との比較を強調しすぎてはいけないとも警告する。というのは、チェスの規則は、ゲームが始まるとともにあるが、ムーア命題は、経験命題として始まって、後になって規則に転換されることがしばしばあるし¹⁴⁸、またその逆もあるからだ、と言う。ハミルトンのこの考えは、次節で取り上げるウィトゲンシュタインの確実性についての動的概念に由来している。

また(2)の「様々な使用」というのは、文脈に拠って、同一の命題が、経験命題として有意義な命題、文法命題として無意味な命題、文脈から意味が理解できないナンセンスな命

¹⁴⁷ Hamilton [2014], p. 95

¹⁴⁸ Hamilton [2014], p. 96

題として使用されることを指している。

(3)の「確実ではあるがムーア命題とは異なって、時間的・空間的に限定された命題」というのは、第3章の2(2)で取り上げたように、「ここに病人が寝ている」というような命題のことである。

(4)の世界像については後の3(4)で取り上げる。

3(3) 確実性の全体論と動的な概念

ハミルトンは、ウィトゲンシュタインが個々の命題の意味を、判断と主張の実践全体から獲得するとみなしており、ウィトゲンシュタインは信念に関して全体論者だと解釈する。

「信念あるいは命題は、一つの体系として働き、その体系の要素は、相互に依存している。特定の信念を持つということは、他の信念を持っていることを必要とする。」

(Hamilton [2014], p. 102)

この考えは、ハミルトンが「概念全体論 (conceptual holism)」と呼ぶものに通底している。彼によれば、概念全体論とは、関係する諸概念の間で、どの概念も他の概念より基礎的であるということではなく、それぞれが等価で相互依存的である、とするものである。従って、この概念全体論によれば、人があることを理解するという時、その人は、それ以外のものを理解すること無しに理解することができない、ということを意味する¹⁴⁹。また、ウィトゲンシュタインにおいては、「語の意味とは言語内におけるその使用である」(PI § 43) から、語の意味とその使用は相互依存にある概念であると言うことができ、従って語の意味とその使用の間には、概念全体論があると言うことができる、とハミルトンは言う。実際、ウィトゲンシュタインの全体論的観点は、『確実性の問題』の中で随所に見られる¹⁵⁰。

「私がしっかりつかんでいるものは、一つの命題ではなくて、諸命題の巢である。」 (§ 225、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者)

「私は次のように言いたい。我々は、判断の(諸)原理として諸判断を用いる、と。」 (§ 124、強調は論者)

¹⁴⁹ Hamilton [2014], pp. 116-117

¹⁵⁰ ここに挙げたものの他に、§ 102, 103, 105, 140, 141, 142, 234, 274, 279 等がある。

「私は、確信の根底に達した。そして、この基礎壁は、家全体によってもたらされている、と言ってもよいだろう。」 (§ 248、強調は論者)

「それではなぜ私は、これが私の手であることにかくも確かなのか。言語ゲーム全体が、この種の確実さに基づいているのではないか。」 (§ 446、強調は論者)

また、ハミルトンは、以下に引用するウィトゲンシュタインの河床の比喻 (§ 96-99) が、経験的なものから規則のようなものへ、またその逆へとその身分を変える、ムーア命題の動的な概念を表わしている、と言う。

「経験命題の形をしたいくつかの命題が固められて、固まらずに流れる経験命題の導管として機能するということ、また、この関係が時とともに変化して、流動的な命題が凝固したり、固まっていた命題が流れたりするようになるということ、人は想像することができよう。」 (§ 96)

「神話【であったもの】が再び流動的な状態になり、思想の河床が移動することがあり得る。しかし私は、河床の上の水の動きと河床自体の移動を区別する。両者の間に明確な分離は無いのだけれど。」 (§ 97)

「……同じ命題が、ある時には経験によってテストされるものとして、またある時にはテストの規則として扱われることがあり得る、ということは正しい。」 (§ 98)

「その河岸は、一部が固い岩石からなり、これには全く変化がないか、あるいは知覚できない程度にしか変わらない。そして残りは砂から成り、あちこちに流されたり、堆積したりする。」 (§ 99)

ウィトゲンシュタインは、算術や科学の命題も、経験的なものから規範的あるいは規則に似た身分にあたかも固められたかのようなもので、それが経験を判断する範型に役立つ、と考えている、とハミルトンは言う¹⁵¹。

¹⁵¹ Hamilton [2014], pp. 104-106

3(4) 世界像についてのハミルトンの解釈

ウィトゲンシュタインが世界像 (Weltbild, world-picture) について語っている箇所は、主に次に掲げる節である。

「ムーアが＜知っている＞ことを表現する命題、例えば、ムーアは、彼の全生涯を地上からほとんど離れることなく過ごしたという命題などは全て、誰にせよその反対を信じる理由を想像することが困難な命題である。……私が見たり聞いたりしたことは全て、地上から遠く離れて過ごしたという人はいまだかつていない、ということを確認させる。私の世界像には、それに反対するものは何もない。」 (§ 93、強調はウィトゲンシュタイン)

「しかし、私は、その正しさを私が確信したから私の世界像を持っているのではない。また、その正しさを確信しているから持っているのでもない。そうではなくて、これは受け継いだ背景であり、これに拠って私は真・偽を区別する。」 (§ 94)

「この世界像を記述する諸命題は、一種の神話に属するであろう。そしてその役割は、ゲームの規則の役割に似ている。そのゲームというのは、明白な規則を学ぶことなく、人が純粋に実践的に学ぶことができるものである。」 (§ 95)

「私は、一つの世界像を持っている。それは真であるのか偽であるのか。とにかくその世界像が、私のあらゆる探究と主張の基礎なのである。これを記述する諸命題は、必ずしも皆同等に検証を受けるものではない。」 (§ 162)

「……世界像は、探究の当然の基礎であって、表明されるようなものでもない」 (§ 167)

ハミルトンは、ウィトゲンシュタインの世界像は、いわゆる世界観とは違って、意識的に支持されたり主張されたりすることがないこと、また、あらゆる世界観命題が必ずしもムーア命題ではないこと、を主張する。

ムーア命題と世界像との関係についてのハミルトンの考えは、次のように整理される。

世界像は、初期の子供の言語訓練を通じて徐々に獲得される。従って、ムーアが「擁護」に掲げるものは、世界像を構成するものと考えられ、また、「私には手が二つある」も世界像を構成するものと考えられる。しかしながら、「ここに私の手がある」という時間的・空

間的に限られたものや、「私の名前は L. W.である」のようなそれを発話する L. W.当人だけに限るものは、たとえこれらが揺るぎない確実性を持つものであっても、世界像を構成するとは考えられない。これらは一時的に「探究の道筋の外」にあるだけである。

また、ハミルトンに従ってウィトゲンシュタインの世界像の特徴をまとめると、次のようになる¹⁵²。

- (1) 世界像は、受け継がれてきたものであり、真でもなく偽でもない。根拠付けられても根拠付けられていないのでもない。合理的でも非合理的でもない。それは [判断の] 背景を形成し、その背景の下で、人は真・偽を区別する。

世界像は、その間違いを証明することはできない。世界像の違う人々は、お互いに矛盾しているのではなく、「誤りなき不一致 (faultless disagreement)」と呼ばれてきたものの中にいる。

世界像が崩壊する可能性はある。

- (2) 世界像は、初期の子供の言語訓練を通じて段々に獲得される。世界像は [それを学ぶのではなく] 学ばれたものの結果であり、それとともに吸収された世界観の一部である。結果として生じる枠組み概念は、合理的なものとして是認されることもなく、恣意的なものとして分類されることもない。それは、[通常の言語ゲームにおける] 仮説の理解とその検証の前提条件である。

ムーア命題を疑問の余地のなく受け入れていることが、我々の通常の探究の仕方の基礎にある。

世界像は、知識のアプリオリな基盤ではなく、特定の経験的信念を形成することの内に、また、世界についての一般的な映像の内に、内在している。

- (3) 世界像は、普通、明確に表現されない。世界像は、人が命題を考える際の背景に、無意識にある。

世界像は、明確に定式化されているというよりはむしろ、我々の行為や振舞いの内に根拠付けられていて、それらによって表明される。

- (4) 世界像の真理は、孤立して学ばれることはない。我々は、非認識的に世界像という枠組みを造る。それが正しいという確信が形成されるのは、世界についての一般的な像を反省することによってだけである。

- (5) 特定のムーア命題を疑うことは、その命題が属する世界像を疑うことと等価である。

ムーア命題を疑うことは、信念や想定全体を疑問に付すことだとウィトゲンシュタ

¹⁵² Hamilton [2014], pp. 129-147

インは示唆している。

(6) ムーア命題が、哲学的主張に至ることはない。

ここにまとめたウィトゲンシュタインの世界像についてのハミルトンの理解は、『確実性の問題』全体を通じたウィトゲンシュタインの考えを取り込んでいるように思われる。

世界像は、共同体において非認識的に受け継がれたもの、探究の道から外れたもの、化石化したもので、表現すればムーア命題として表わされるものによって、ネットワークとして構成されており、認識的ゲームの枠組みとしてその背景をなしている。

そしてこのような世界像を構成するものの我々における心的状態のあり方は、第5章の1(7), 1(8)で論じるように、心的傾性(第1章の6)の一種で、言語ゲームに参加する中で我々が行為する態度、構えの内に現れている、と論者は考えている。

3(5) ムーア命題についてのハミルトンの解釈について

以上の考察を踏まえて、ハミルトンは、『確実性の問題』におけるウィトゲンシュタインの主張を、次のようにまとめる。なお、ハミルトンは、これらはウィトゲンシュタインの主張を再構成したもので、自分の解釈だと断っている¹⁵³。

(1) 本当の知識の主張は、その主張自身よりも確かな根拠を持たねばならない。

「私はPを知っている」が正しく用いられるのは、Pの根拠がPそれ自身より確かである場合に限られる。従って、Pが「私には手がある」だとすると、PもPの根拠¹⁵⁴も「同じくらい確実である」 (§243) ので、「私はPを知っている」というのは「知っている」という言葉を誤用していることになる。「私には手がある」には、どういうものであれそれ自身より確実な根拠を与えることができないので、それは知識の対象であり得ない。「私には手がある」は、命題と根拠が、共に非認識的に確実である。

また、ウィトゲンシュタインが、「以前の経験は、私の現在の確信の原因であることは十分あり得るが、それはその根拠であるだろうか」 (§429) と問う時、彼は、現在の確信(ムーア命題)は、原因はあっても根拠のない信念 (§166) であることを主張している。以前の経験は、確信の原因ではあり得ても、正当化(根拠)を与えることはできない。

(2) 知識は間違いや誤り¹⁵⁵の論理的可能性を含意する。

¹⁵³ ウィトゲンシュタインがはっきりと主張しているのではないということ。以下、Hamilton [2014], p. 179-201

¹⁵⁴ 例えば、「私には手がある」を、目で見て確かめることを根拠とする場合等

¹⁵⁵ ウィトゲンシュタインは間違いと誤りを区別していないが、ハミルトンは、間違いは避けることのできる無知であり、誤りは避けることのできない無知である、と区別している。(Hamilton [2014], p. 195)

ウィトゲンシュタインにとって、間違い（誤り）は、誰かが正しく推論しあるいは述べる時に、不注意に述べるか誤って推論するかして間違いに至る、というものである。誤りは、誤った人が自分の誤りを理解することができ、「正しい知識の内に組み込むことができる。」（§74）記憶違いや誤解は、正しい記憶や理解を含意する。同様に、間違いも正しいものを一部に含む。ムーア命題を否定する者は、その誤りが正しい知識に組み込まれるべき文脈を欠いているので、単に間違いを犯したと見なすことはできない。その人は、精神異常かもしれないことを示唆している。心的障害に帰結する発話は、間違いの生じる標準の文脈（不注意に述べるか誤って推論するという文脈）を欠いている。

(3) 知識は疑いの論理的可能性を含意する。

ハミルトンがこの主張の根拠として『確実性の問題』から挙げる節は、『『この場合疑いの余地はない』……【このことから】『私は知っている』も意味をなさないことが帰結する』（§58）、「疑いのないところには知識もない」（§121）、「人が疑うには、根拠が必要なのではないか」（§122）、「【ムーア命題は、】どこをどう見まわしても……疑う根拠を私は見いだせない」（§123）、である。

疑いの余地のないものは、知識ではない。これを逆に言えば、知識は疑いの余地がある、即ち、たとえ疑う根拠が事実としてなくても論理的にはあるということである。従って、知識は、疑いの論理的可能性を含意する。

このことから、ムーア命題には疑いの余地が無く、それを疑う根拠がないので、ムーア命題は知識ではないことが帰結する。

(4) 知識は、自己納得の論理的可能性と学習の論理的可能性を含意する。また、知識はそれを主張する者がそれを知る立場にあることを含意する。

人は検証システムを観察と教育によって獲得するが、ウィトゲンシュタインは、そのことを「学ぶ」とは言いたがらない¹⁵⁶。これは、彼が、学習は命題の意識的な定式化を含意すると考えていることを示唆している。年長者は我々に多くのことを教える一方、その他のことを我々は彼らから単に吸収するだけである。ムーア命題は、この後の方のカテゴリーに属し、知識の対象ではない。ウィトゲンシュタインは、知識と学習を意識的な出来事として扱うが、彼の一般的な認識論的な構えは、非主知主義者、さらには反主知主義者でさえある。

ムーアの常識的な真理は誰もが知っていることである。普通に理解されていること、

¹⁵⁶ 「この体系は、人が観察と授業によって受け入れる（aufnehmen）ものである。私は、意図的に＜学ぶ（lernen）＞と言わない」（§279）

誰にも疑問の余地なく受け入れられていることを、知っているとは主張することは、通常の言語ゲームの核心をつかみ損ねている。これが、ムーアが、「知っている」と言う時の誤りである。

- (5) 知識は、問われるべき問題がある時に生まれる。知識の主張には、実践的という特徴と理解可能という特徴がある。

「全てを疑う疑いは疑いではない」 (§ 450)、「人が疑うには、根拠が必要なのではないか」 (§ 122)、とウィトゲンシュタインは言う。従って、ウィトゲンシュタインの見解では、単なる可能性によるだけの疑い、根拠のない可能性に基づく疑いを許さない。また、自分が L. W. であるかどうか、自分の頭蓋の中に脳があるかどうかという疑いを許さない。知識の主張は、「問題になっている問いと除かれるべき疑い」 (Malcolm) がある場合に限って意味がある。

- (6) 「私は知っている」は、知られているものを保証する心的状態を記述しない。

ある人に「P であることを知っているかどうか」、と尋ねることは、「P かどうか」と尋ねることである。それは P を正当化すること、P の根拠を与えることを含み、自分自身を見ることではない。人が知る立場にいるかどうかは、その人自身の心理学によって分析されえない。知識は、「X が P であることを知っているのは、P が真である場合に限る」という意味であり、知識は外的状態である。

- (7) ムーア命題は、非認識的な確実性であり、それを疑うことは意味をなさない。

- (8) 何かを知っていることとそれを疑うことは、共にそれについて考えることができる、ということを含意するが、人は、実際にそれについて考えたのでなければならない、ということまでは含意しない。

- (9) ムーア命題になるということは、時間的・空間的に限られた出来事ではない。命題が化石化する (§ 657) には時間がかかる。

従って、「ここに病人が寝ている」はムーア命題ではない。ムーア命題を疑うことの論理的不可能性と、「ここに病人が寝ている」ことを疑うことの論理的不可能性は等価ではない。

「この部屋が二階にあって、ドアの後ろをちょっと歩くと階段に出る」は、「ここに病人が寝ている」と同様にムーア命題ではないが、ウィトゲンシュタインが自分の確実性の議論に含めようとして広げる事例である。

- (10) 行為結果は、ムーア命題が知られていることを示す。

「この部屋が二階にあって、ドアの後ろをちょっと歩くと階段に出る」は、毎日の行為に示されている。だが、「地球は非常に古い」を我々は毎日の行為によって示し

ているだろうか、とハミルトンは問う (Hamilton [2014], p. 206)。

- (11) ウィトゲンシュタインの「語の意味とは言語内のその使用である」という語や文についての使用概念は、言葉を解釈する前に、更なる情報とその言葉が使用される文脈を必要とする、ということを主張している。それに対してムーアは、そうした文脈を展開することなく、自分の言っていることに意味があることを確信している。

ウィトゲンシュタインは、語用論の立場をとる。だから文が有意味であることについて、文脈から独立した条件の可能性を認めない。彼は、「構文論的に正しく結合した有意味な言葉は、有意味であらねばならない」ということを否定する。即ち彼は、意味論と語用論は分離できないと主張する。

意味の体系的理論では、文の意味（命題内容）は「P」によって与えられ、「P を疑う」とか「P を命令する」という態度の枠組みを作ることによって意味が達成される、とする。従って、主張文、命令文、疑問文は、全て同じ思想を表現するが、それに異なる力を付与するものである。

しかし、ウィトゲンシュタインは、この意味の体系的理論に反対する。ウィトゲンシュタインにとって「私はここにいる」という発話が有意味になるためには、特定の文脈、役割を指定しなければならない。そうでなければこの文はナンセンスになる。

以上が、ウィトゲンシュタインの確実性についてのハミルトンの解釈をまとめたものである。

3(6) ムーア命題についてのハミルトンの解釈にたいする評価と批判

前節でまとめたハミルトンによるウィトゲンシュタインの確実性についての解釈には、これまでに論じてきたことの繰り返しが多いが、以下に掲げるようにマッギンやシャロックには無い、評価できる新たな観点も多く示唆されている。

- (1) ムーア命題を、時間的・空間的に限られた一時的に確実な命題と区別すること
- (2) 確実性についての全体論的観点やその動的な概念を指摘していること
- (3) ムーア命題は、文法規則を表現するものではなく、実践や言語ゲームの前提を表現するものであること
- (4) 知識は疑いや誤りの論理的可能性を含意すること
- (5) 世界像についての解釈に、『確実性の問題』を通じたウィトゲンシュタインの基本的な考えが反映されていること
- (6) ムーアの論文「証明」に対して、懐疑論者が疑いを形作る際に、「手」を始めとする

言葉を自分たちがどのようにして学んだかを理解せずに、無批判に使用していることから、彼らの疑いが如何に自傷的であるかを指摘していることなどがそうである。

そして、これらの中でも、知識とムーア命題の相違を、疑いや誤りの論理的可能性を含意するか否かで区分する点を、特に評価したい。

しかし、批判したい点もいくつかある。

- (1) ハミルトンは、マッギンや本論文で取り上げた他の論者と同じように言語ゲームを、ムーア命題とそれを基礎とする認識的ゲームの二層に区別するが、ムーア命題の確実さが、正にその二層の構造からもたらされる論理的なものであることを見るのが無かった。彼は、他の論者と違って、知識とムーア命題の相違を、疑いや誤りの論理的可能性を含意するか否かで区分したが、その相違が、ムーア命題の確実さに関わっていることを見なかった。即ち、ムーア命題の確実さは、ムーア命題を疑ったり誤ったりすることが、言語ゲームの二層の構造—ムーア命題とそれを基礎とする認識的ゲームという二層の構造—から自己論駁に陥ることが免れないという、論理的な関係によるものであることを見なかった。
- (2) ハミルトンは、ムーア命題と時間的・空間的に限られた確実性を表現する命題を区別した。この点は、これまでに指摘したように評価されるべきであるが、ウィトゲンシュタインはこの 2 種類の確実さを区別せずに論じている。ウィトゲンシュタインはなぜ区別しなかったのか。ハミルトンは、ウィトゲンシュタインが確実性の議論を拡げていると言うだけで、このことについての考察を欠いている。ウィトゲンシュタインが、ハミルトンの区別する 2 種類の確実性を区別しなかったのは、(1)に関連することであるが、いずれの場合も、その確実性を疑ったり誤ったりすることが、自己論駁に陥ることが免れないからである。この点で、ムーア命題も時間的・空間的に限られた確実性を表現する命題も、論理的に同じレベルにある。
- (3) ハミルトンは、ムーア命題が行為の内に示されていることを指摘するが、同時に、「地球は非常に古い」というムーア命題を、我々は毎日の行為によって示しているだろうか、と問うている。ここでハミルトンは、ウィトゲンシュタインが心的用語に係る心的状態を二種類に区別していることを、理解していないように思われる。即ち、ウィトゲンシュタインは、第 1 章の 6 で論じたように、心的状態を、感覚や感情のように本物の持続を持つものと、知識や信念のように本物の持続を持たないものとを区別する。ムーア命題のような確実性は、知識や信念のように本物の持続を持たないものに該当する。この

ことをハミルトンは理解していないように思われる。即ち、彼は、行為の内に示されるムーア命題が、何か感覚に近い形でオカレントな意識に現前していなければならないと考えているように見える。ウィトゲンシュタインがそう言っている訳ではないが、我々は、ムーア命題のような「揺るぎないもの」も理解や信念と同じように、心的傾性という形で持っているように思われる。それは、本物の持続を持たないが、意識の中断や注意の移動があっても途切れることなく持ち続ける、という心的状態のあり方（一種の傾性）である。（これについては第5章の1(8)で取り上げる。）

4 本章のまとめ

本章では、マッギン、シャロック、ハミルトンそれぞれについて、「揺るぎないもの」についての解釈をみてきた。彼らは3人とも、「揺るぎないもの」を認識的な文脈の中に押し込むことはできないこと、また、知識と確実さは非常に異なったものであるが、ムーアや懐疑論者などにそのような理解は無かったことについて、共通の解釈をしている。

ウィトゲンシュタインは、「疑いが無分別な場合もあるが、論理的に不可能に見える場合もある。」（§454、強調は論者）と言っていた。ここで彼が「論理的に不可能に見える場合」と言うのは「揺るぎないもの」を疑う場合であるが、この「不可能に見える」という意味をどう理解するかについては、3人の間に相違がある。

マッギンは、ムーア型命題は我々の「実践の枠組み」であり、それを認識的な文脈の中に押し込むことはできないとした。また彼女は、我々が記述の技術を訓練によって習得することで、ムーア型命題を獲得するに至るという、ムーア型命題と訓練との因果的な結びつきを明らかにしたものの、実践の枠組みであるムーア型命題の身分がどういうものかについては、論究しなかった。

シャロックは、蝶番は探究の規則であり、蝶番命題は文法規則の表現である、と蝶番の身分を明らかにして、蝶番の確実さは行為に示される、とした。しかし彼女は、ウィトゲンシュタインがある信念（蝶番）を疑ったり誤ったりすることが論理的に不可能だと言う意味を、人間の感覚の範囲を放棄すること、人間の理解の範囲を超えることとして解釈する以外に、明らかにすることができなかった。

ハミルトンは、ムーア命題は文法規則の表現ではなく、実践や言語ゲームの前提を表現するものであること、また、知識は疑いや誤りの論理的可能性を含意すること、他方、ムーア命題は疑いや誤りの余地は無く、疑う根拠がないので、知識ではないこと、ムーア命題は、疑いや誤りの論理的可能性を含意しないことを明らかにした。しかし彼は、ムーア命題を疑うことが自己論駁に陥ることが免れず、ムーア命題の確実さが言語ゲームの二層

の構造による論理的なものであることまで論じなかった。それでも彼の解釈は、ムーア命題を疑うことは「論理的に不可能にみえる」とウィトゲンシュタインが言う意味を、近いところまで捉えていたように思われる。

ウィトゲンシュタインが明らかにしようとしている「確実さ」の内実、それは、言語ゲームを構成する「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームとの二層の構造から生まれる論理的なものであって、それが獲得される原因によって、その確実さの内実を説明することはできない。「揺るぎないもの」の確実さの内実は、第 3 章及び本章を通じて明らかにしてきたように、「揺るぎないもの」を疑ったり、誤ったりすることや、認識的な文脈の中でそれを知っていると主張することが、言語ゲームの二層の構造から、自己論駁に陥ることが免れない、という論理的なことにある。

さて、彼らの解釈を考察する中で、以下に示すように、改めて浮かび上がってきた問題がいくつかある。

- (1) 言語ゲームが、「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームの二層の構造から成ることを、ウィトゲンシュタインのテキストから検証する必要があること。またそれに関連して、「揺るぎないもの」は経験命題の中でどういう役割を果たすのか、「揺るぎないもの」を我々はどのようにして手に入れたか、「揺るぎないもの」と行為の関係はどのようなものか、「揺るぎないもの」は心的状態としてどのようなあり方をしているのか、これらについてもウィトゲンシュタインのテキストから明らかにする必要がある。
- (2) 「揺るぎないもの」は、その役割や性格が規則に類似しているとウィトゲンシュタインは言う。「揺るぎないもの」は規則とどういう点で類似しているのか、また、それはどういう点で異なると考えるのか。
- (3) 「揺るぎないもの」に根拠はないが、それを獲得するに至った原因はある。この根拠と原因の関係をどう考えるか。ウィトゲンシュタインは、過去の経験は確実さの原因ではあっても根拠にはならないと考えている。これをどう理解するか。
- (4) これらの問題に対する答えを整理したうえで、ウィトゲンシュタインを基礎付け主義者と見るかどうか。

次章では、これらの問題を考えていく。

第5章 「揺るぎないもの」を巡るいくつかの問題について

1 「揺るぎないもの」の確実さ

1(1) 「揺るぎないもの」は経験命題の体系の中で「特有の論理的役割」を果たしている

ムーア命題のような「揺るぎないもの」の表現は、経験命題の装いをしている。経験命題は、通常、その真・偽、正当性を問うことに意味があるし、検証することにも意味がある。しかし、ムーア命題のような「揺るぎないもの」は、その真・偽を問うことや検証することが排除されていて、そうすることに意味がない。

例えば、「私には手が二つある」という命題は、「冷蔵庫にケーキがある」という命題と同じような経験命題の形をしている。「冷蔵庫にケーキがある」という命題は、それを疑うことに意味があるし、冷蔵庫を開けてホントにあるかどうか確認する（検証する）ことも意味がある。しかし、「私には手が二つある」という命題は、普通、テスト（検証）することはない。それを証明すること自体、意味がない。「私には手が二つある」には、疑いを差し挟む余地が全くない。

「私には手が二つある」という命題をはじめ、ムーア命題は一見経験命題のような装いをしているし、また実際、特殊な状況では経験命題として用いられる（真・偽を問うことに意味がある）場合がある。しかし、ウィトゲンシュタインは、そのような場合を除いて、通常の言語ゲームにおける「揺るぎないもの」の役割は、経験命題のそれではない、と言う。

「ムーアが自分はかくかくのことを知っていると言う時、彼は、実際には我々が特別なテストをすることなく肯定する経験命題をたくさん枚挙している。つまりそれらは、我々の経験命題の体系の中で、特有の（*eigenütliche, peculiar*）論理的役割を果たす命題なのである。」（§ 136、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者）

ここでいう「特有の論理的役割を果たす命題」とは、ムーア命題のような「揺るぎないもの」を表現する命題のことである。また「特有の論理的役割を果たす」とは、自らは検証されることはなく、他の経験命題の基礎になっている、ということである。第3章の4(1)で取り上げた例であるが、改めて取り上げよう。

「疑わないものがいくつかあるのでなければ、人は実験をすることができない。しかしそれは、人が何らかの前提を信用して受け入れている、という意味ではない。手紙を書いて投函する時、私は、その手紙が配達されることを当然のことと思っている。

私はそう期待している。

実験をする時、私は、眼前の実験器具の存在を疑うことはしない。私が疑うことはいくらあろうが、それを疑うことはしないのだ。私が計算をする時、紙に書いた数字がひとりでに入れ替わることはないと信じて疑わない。また、終始自分の記憶をあてにして、無条件に信頼する。それはここでは、私は月に行ったことがない、というのと同じ確実性である。」 (§ 337、強調はウィトゲンシュタイン)

この節でウィトゲンシュタインが疑うことをしないとされているものは、投函した手紙が配達されること、実験する時の眼前の実験器具が存在すること、紙に書いた数字がひとりでに入れ替わらないこと、自分の記憶があてにできること、私は月に行ったことがないことである。我々は、他に疑うことはあってもこれらについては疑うことはしない、とウィトゲンシュタインは言う。我々は、この確実性（揺るぎないもの）を、「信用して受け入れている」のではない。信用するしない以前に、「疑うことはしない」のである。これらの確実性を無条件に信頼している。

例えば、化学の実験で、新たな物質 C を作るために、試料 A と試料 B をどういう条件で混合すればよいかを探究しているとしよう。その時、実験室の床が抜けることはないか、実験中に巨大地震が起らないか、隕石が研究所に落ちてこないかを疑うことは、状況によってはあるかもしれない。しかし、床が抜けることを心配したり、大地震が起らないか疑ったりする場合でも、疑われない何かが依然として残っている。同じように、実験で試料 A が入っている眼前にある試験管などの実験器具が存在するかどうか等を疑うことはしない。この実験で問われている（疑われている）ことは、新たな物質 C を作るために、試料 A と B の混合割合や触媒の条件等を見つけることだ。目の前にある実験器具が存在するか否かは、はじめから実験の目的から除かれている。試料 A と試料 B を混合して本当に C ができるのかを疑うことには意味がある。しかし、実験器具の存在を疑うことに意味があるとすると、その実験器具を使って実験する意味を損ねてしまい、実験すること自体の意味がそもそも失われてしまう。すき焼きを食べたいと思っていても、腐ったお肉を使ったすき焼きを食べようとは誰も思わないのと同じだ。すき焼きを食べる時、そこで使うお肉はちゃんとしたものであることが、当然前提されている。我々の探究は、そういう仕組みになっている、とウィトゲンシュタインは言う。

「例えば、我々の探究全体が、ある命題に関しては疑いを差し挟む余地が全くない、そういう仕組みになっている (eingestellt ist, is set)、と言えよう。それらの命題は、探

究が進められる道から外れた¹⁵⁷ところにある。」（§ 88、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の二か所の強調は論者）

ここでいう「我々の探究」は、特定の科学的探究だけでなく、日常生活での我々の広く一般的な行為、マッギンの言う認識的文脈の中での行為を意味している。

さて、実際、化学実験をしている時、実験器具の存在を問わないだけでなく、記録を書く紙が消滅しないか、操作する手は存在しているか、ということを我々は疑わない。「疑いを差し挟む余地が全くない」無数の事柄が、化学実験をする背景にある。「疑いを差し挟む余地が全くない」というのは、「事実として疑う余地が全くない」という意味ではなく、化学実験が成り立つ足場を構成しているものとして、それらを疑わないという意味である。化学実験でそれらを疑うことに意味があると考えすることは、化学実験をすることのそもそもの意味を失くしてしまうことである。我々の探究全体は、そういう仕組みになっている。

「眼前にある実験器具は存在する」というような命題は、「我々の経験命題の体系の中で、特有の論理的役割」を果たしている。即ち、それ自体は疑われることが無く、他の命題を支えている、という役割である。そして、「疑いを差し挟む余地が全くない」ことを疑うことに本当に意味があるとする、その「疑いを差し挟む余地が全くない」ものによって支えられているものの意味を失わせることになる。

「私には手が二つある」という命題も、例えば実験の中で同じように「特有の論理的役割」を果たしている。一人で行う実験を計画する時、手を3つ以上同時に使う必要のある操作は考えない。実験計画は、意識せずとも一人（二つの手）でやれるものしか考えない。手を同時に3つ以上必要とする実験は、そもそも始めから排除されている。「自分には手が二つある」ことは、実験をする時の当然の前提であって、「経験命題の体系の中で、特有の論理的役割」を果たしている。

1(2) 「揺るぎないもの」は思考の操作の基礎にある

さて、先にも述べたように、「私には手が二つある」は、「冷蔵庫にケーキがある」と同じ経験命題のように見える。しかし、「私には手が二つある」は、「冷蔵庫にケーキがある」のような経験命題と違って、真・偽を問うことに意味がない。だからといって、経験命題ではないのでこれが論理学の命題かということ、そうでもないように見える。

¹⁵⁷ 「疑いを差し挟む余地が全くないもの【「揺るぎないもの」】」が探究から外れていることを、ウィトゲンシュタインは比喻によって、§ 95 では「神話」、§ 210 では「鉄道の軌道から切り離されている」、§ 657 では数学の命題を「化石」と表現している。

ウィトゲンシュタインは、経験命題は全てが同じ身分を持っているのではなく、経験命題から記述の規範に変えることができるものがあり、従って、経験命題の形式を持つものが全て経験命題ではない、と言う。

「我々の『経験命題』は、同質の集合体を形成するのではない。」 (§ 213)

「我々の経験命題は、全てが同じ身分を持っているのではないということは明らかである。[というのは] 人は、そのような命題を定立して、それを経験命題から記述の規範に変えることができるからだ。」 (§ 167、強調は論者)

「一般に判断が可能であるなら、ある種の経験命題に関しては、いかなる疑いもあり得ないということに我々に関心がある。言い換えれば、経験命題の形式を持つものが全て経験命題ではない、と私は信じる気になっている。」 (§ 308、強調は論者)

そして、ウィトゲンシュタインは、経験命題であっても記述の規範に身分を変え、経験命題の形式を持った命題が、思考のあらゆる操作の基礎に必要だと言う。そして、そのような経験命題は、経験命題の体系の中で特有の論理的役割を果たすもので、「揺るぎないもの」を表現するものがそれに該当する。

「私は次のように言いたい。論理学の命題だけでなく経験命題の形式を持った命題が、思考(言語)のあらゆる操作の基礎に必要である、と。」 (§ 401、強調は論者)

なお、我々の経験的記述の実践に対して、経験概念を固定する役割を果たしているのがムーア型命題である、と解釈したのは第4章の1(2)で述べたように、マッギンであった。

『確実性の問題』のこれらの節をまとめると、次のようになる。

- (1) 「経験命題は、全てが同じ身分を持っているのではない」 (§ 167) は、「経験命題には、身分の異なるものがある」ことを含意する。
- (2) 「経験命題は、同質の集合体を形成するのではない」 (§ 213) や「経験命題の形式を持つものが全て経験命題ではない」 (§ 308) は、(1)と同類の主張である。
- (3) 我々の探究には、それを疑うと探究の意味を失ってしまうもの(疑いを差し挟む余地の全くないもの)がある (§ 88(本章の1(1)))。

- (4) 我々の探究において、疑いを差し挟む余地の全くないもので、経験命題の形式をしているものがある。それは、「経験命題の体系の中で特有の論理的役割」をする経験命題である (§ 136 (本章の 1(1)))。
- (5) 我々は、経験命題を定立して、それを記述の規範 (論理学の命題) に変えることができる (§ 167)。
- (6) 論理学の命題だけでなく、経験命題の形式をした命題が、思考のあらゆる操作の基礎に必要である。」 (§ 401)

ウィトゲンシュタインは、経験命題と論理的命題 (文法的命題) を区別するが、ここで示唆されるように、当該命題の役割からその身分を区別する。即ち、経験命題はその主張の真・偽や正当性を問うことに意味があり、検証することにも意味がある。他方、文法的命題は、記述の規範として扱われ、その真・偽や正当性を問うことに意味は無い。ここで、「記述の規範」を「文法規則」として捉えれば、ある種の経験命題 (蝶番命題) は、文法規則を表現するものとして機能する、というシャロックの主張 (第 4 章の 2(2)) になる。

1(3) 「揺るぎないもの」の揺るぎない確実さ

第 3 章の 6 でも取り上げたが、ウィトゲンシュタインは、「揺るぎないもの」の誤りを犯すことは、論理的にできないと、次のように言う。

「ある状況において、人は誤りを犯すことはできない。(＜できる＞は、ここでは論理的に使われており、この命題は、その状況において人は偽なることを言うことができない、ということを行っているのではない。) もし、ムーアが、彼が確実だと述べる命題と反対のことを言うとしたら、我々は、彼に同意しないだけでなく、彼を精神障害とみなすだろう。」 (§ 155、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者)

第 3 章の 6「誤りについて」でも述べたように、「揺るぎないもの」の誤りを犯すことは、不注意や勘違いによるものではなく、そこでの疑いや誤りは、自己論駁に陥ることが免れず、その意味で論理的に排除されているものである。従って人は、「揺るぎないもの」について誤りを犯すことは論理的にできない。

また、「揺るぎないもの」の疑いや誤りは、言語ゲームの構造全体に関わってくるものでもある。ハミルトンが言うように (第 4 章の 3(3))、「揺るぎないもの」は孤立してあるのではなく、他の多くの「揺るぎないもの」と関連し、一つの構造を形成している。こ

のことについてウィトゲンシュタインは、次のように言っている¹⁵⁸。

「私は、それらの確信の体系を記述できるかのようなものであるが、そうではない。それにもかかわらず私の確信は、一つの体系、一つの構造 (Gebäude, structure) を形成している。」 (§ 102)

「……、その確信は、私がそれに触れることができないほどあらゆる私の問と答えの内に、しっかりと固定 (verankern, anchore) されている。」 (§ 103、強調はウィトゲンシュタイン)

「我々が最初に何かを信じ始めるとき、我々が信じるものは、一つの命題ではなく、諸命題から成る体系全体である。」 (§ 141、強調はウィトゲンシュタイン)

「人は、経験が我々にこれらの命題を教えると言うことができる。しかし、経験が教えるのは、孤立した命題ではなく、相互に関連した多くの命題である。」 (§ 274)

「車が大地から育ってこないのは絶対確実だ。一もし誰かがその反対を信じるようなことがあれば、その人は、我々がありえないと言明することをみな信じ、我々が確実とみなすことすべてに異論を唱えるであろう、と我々は感じる。

しかしこの一つの信念は、他の全ての信念と、どのように結びついているのであろうか。初めに書いたようなことを信じられる者は、我々の検証体系の全体を受け入れられないのだ、と我々は言いたい。」 (§ 279、強調はウィトゲンシュタイン)

このように「揺るぎないもの」は、「一つの体系、一つの構造を形成して」いる。「私がしっかりつかんでいるものは、一つの命題ではなくて、諸命題の巢」 (§ 225、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者) であり、多くの命題と相互に関連している。それは、「私がそれに触れることができないほどあらゆる私の問と答えの内に、しっかりと固定されて」いる。「車が大地から育って」くると信じる者は、そのことだけが我々と異なるのではなく、「我々の検証体系の全体を受け入れられない」者である。しかし、その「揺るぎないもの」の体系を記述することはできない。なぜなら我々は、推論を経て (一定の思考の足

¹⁵⁸ ここでは、第4章の3(3)に掲げたもの以外で該当するものを挙げた。

取りに従って) 意識的に、その確信に至ったのではない¹⁵⁹からである。

これらのコメントを通じて浮かび上がってくるものは、「揺るぎないもの」は相互に関連しているということ、またそれは、明晰判明な認識という推論を経て得られたものではないということである。もし、「揺るぎないもの」が、明晰判明な推論という認識的手続きに従った結果得られるものであるならば、その揺るぎないものは、推論と同じ認識的レベルにあることになる。当然それは、誤りや疑いの対象にもなりうることになる。しかし、「揺るぎないもの」は、誤りや疑いの論理的可能性が排除されている。それは、事実として排除されているというのではない。それは、言語ゲームが二層の構造からなることから、認識的ゲームにおいて「揺るぎないもの」を誤ることや疑うことが、自己論駁に陥ることを免れないという意味で、論理的に排除されているのである。そして、その「揺るぎないもの」は、認識的ゲーム(通常の言語ゲーム)の枠組みを構成する基礎としてその背景にあって、互いに合い関連して固定されている。

このように、「揺るぎないもの」の揺るぎない確実さは、明晰判明な認識による確実さではない。言語ゲームの二層の構造から、その疑いや誤りが自己論駁に陥ることを免れない、ということからくる論理的な確実さである。次節で、この言語ゲームの二層の構造を取り上げよう。

1(4) 言語ゲームの二層の構造(「揺るぎないもの」とそれを基礎とする通常の言語ゲーム)

通常の言語ゲーム中でなされる「知っている」とか「疑う」とか「信じている」という認識的ゲームは、こうした「揺るぎないもの」の体系を基礎にしてなされている。前章で論じたように、マッギンは、「ムーア型命題(揺るぎないもの)」を実践の枠組みとして、その枠組みのもとに「知っている」や「疑う」、「信じる」、「誤る」等の認識的ゲームが行われることを明らかにした。シャロックは、「蝶番(揺るぎないもの)」は文法規則であり、それが意味を可能にして言語ゲームを可能にするとした。このように、言語ゲームの全体が、認識的文脈の中で行われるゲーム(通常の言語ゲーム)とその基礎(揺るぎないものの体系)という二層の構造からなっていて、その全体が「揺るぎないもの」の確実性を生み出している。ここで言う確実性というのは、前節で論じたように、言語ゲームの二層の構造から、その疑いや誤りが自己論駁に陥ることを免れない、ということからくる論理的な確実性である。

¹⁵⁹ § 103

「私は、確信の根底に達した。そして、この基礎壁〔の存在〕は、家全体によってもたらされている、と言ってもよいだろう。」（§ 248、強調は論者）

「確信の根底」、「基礎壁」は、「経験命題の体系の中で特有の論理的役割」をする命題、いわゆる「揺るぎないもの」を意味し、「家全体」は、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）とその基礎（揺るぎないもの）から成る言語ゲームの体系全体を意味していると考えられる。「家全体」は「基礎壁」とそれ以外のものから成り立っている。同様に、言語ゲームも「揺るぎないもの」とそれ以外のもの（認識的ゲーム）から成り立っているということが示唆される。そして、「基礎壁」の存在が「家全体」によってもたらされているのと同様に、「揺るぎないもの」の存在は、言語ゲーム全体によってもたらされていることが示唆される。

「それ〔「地球ははるか昔から存在していたと我々が想定する」ということ〕は、我々の言語ゲームの体系全体の基礎に属している。」（§ 411、強調はウィトゲンシュタイン）

ここでも、言語ゲームの体系全体が、「基礎」とそれ以外のものから成り立っていることが示されている。同様の主張は、次に掲げる節にも見られる。

「それではなぜ私は、これが私の手であることにかくも確かなのか。言語ゲーム全体が、この種の確実さに基づいているのではないか。

あるいは、この〈確実さ〉は、言語ゲームの中で（既に）前提にされているのではないか。即ち、確実さを持って対象を認識しない者は、それ〔言語ゲーム〕をしていないか、間違っているというということによって。」（§ 446、最初の強調は論者、後の強調はウィトゲンシュタイン）

これらのコメントを通じて示されているものは、言語ゲームの体系全体が、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）とその基礎にある確実なもの（揺るぎないもの）という二層の構造から成っているというものである。そして、この二層の構造が、「揺るぎないもの」の確実性を生み出している、ということである。「知っている」とか「疑う」等の通常の言語ゲームは、この「揺るぎないもの」が基礎にあつて意味あるものになり、「揺るぎないもの」は、その揺るぎなさを言語ゲーム全体（言語ゲームの二層の構造）に負っている。このように、「揺るぎないもの」と認識的ゲームが言語ゲーム全体を構成し、「揺るぎないもの」

は、認識的ゲームを条件づけている（有意味なものにしている）。そしてまた同時に、「揺るぎないもの」の確実さは、言語ゲーム全体（二層の構造）からもたらされる確実さである、ということが知られる。即ち、その確実さは、「揺るぎないもの」を疑ったり、誤ったりすることが、言語ゲーム全体を損ねるということ、即ち、自己論駁に陥ることが免れない、という論理的な確実さである。

このように言語ゲームの構造全体は、揺るぎないものと、それを基礎とする認識的ゲームの二層からなっていて、「揺るぎないもの」の揺るぎない確実さは、この言語ゲームの二層の構造全体から得ていることが示される。

「揺るぎないもの」の確実さは、それを主観的に疑わないとか、心理的に疑わないという問題ではない。第 3 章の 4「疑いについて」で論じたように、それを＜疑う＞ことは、「揺るぎないもの」を認識的ゲームの中に引き込むことであり、自己論駁に陥ることが免れない。「揺るぎないもの」を疑うことは、言語ゲームの二層の構造から論理的に排除されており、言語ゲームの体系全体の中で、意味をなさないものになる。

もし仮に、ある「揺るぎないもの」を本気で疑うとすると、その「揺るぎないもの」は他の「揺るぎないもの」と相互に関連しているので、それに関連する確信の体系、認識的ゲームの枠組みを構成する「諸命題の巢」の全てを疑うということに及ぶ。従ってその疑いは、認識的文脈の中でなされる疑いとは質を異にする。それは、揺るぎないもの（基礎壁）を根拠とする通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）を含めた、言語ゲームの全体（家全体）を問うことになる。それは、「あらゆる判断を放棄することになる」（§ 494）疑いである。それは、「自分の座っている木の枝を切り落とす」（PI § 55）疑いであり、「全てを引きずり込んで混沌の中に突き落とすようにみえる疑い」（§ 613）である。即ち、「言語ゲームを破棄する」（§ 370）ものである。

「揺るぎないもの」を疑う疑いは、言語ゲーム全体の構造が、認識的ゲーム（通常の言語ゲーム）とその基礎にある「揺るぎないもの」という二層の構造からなっているので、この構造自体を疑うものであり、即ち、言語ゲームの全体を疑うものであり、「例外的に起こる完全な規則違反」（§ 647）の疑いである。そのような疑いは、「我々のゲームにおける疑いには属さない疑い」（§ 317）なのである¹⁶⁰。その疑いは、シャロックの言う「普通の人間の理解の範囲」（Moyal-Sharrock [2007], p. 74）を超えるものである。

¹⁶⁰ このことは将棋のゲームに類比的である。将棋では飛車を斜めに移動させることはできないが、これは将棋のルールから論理的に不可能だということで、斜めに動かせないということはない。斜めに動かすことは可能であるが、ただその場合はチョンボになるか、将棋ではなくて別のゲームをすることになる。

このように「揺るぎないもの」を疑う疑いは、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）においてなされる疑いとは、程度の違いではなく、種類の違った疑いなのである。それは世界を根底からひっくり返すような疑い、「精神障害」が疑われるような疑いなのである。だから、普通は誰も疑わない。疑うことが事実としてできる、できないという問題ではなくて、疑わないのである¹⁶¹。

疑いは、認識的文脈（通常の言語ゲーム）の中で行われる。そして、その答えも認識的文脈の中で決着が付く。その認識的ゲームの基礎にある「揺るぎないもの」は疑われない。通常の言語ゲームと「揺るぎないもの」は、これらが一体になって言語ゲームの全体を条件づけている（有意味なものにしている）。言語ゲームは二層の構造からなる。そして、「揺るぎないもの」の揺るぎない確実さは、言語ゲームの二層の構造から生み出される、論理的な確実さである。

1(5) 「揺るぎないもの」をどのようにして手に入れたか

デカルトは、自分の感覚を含めてあらゆる存在を意識的に疑って、それでも疑うことから免れている「考える我」を確実な存在者として措定した。その存在者の確実性は、意識的に推論を重ねた結果の明晰判明な産物である。その確実さは、その推論過程にあるものと地続きになっている確実さである。

しかし、ウィトゲンシュタインの確実さは、これとは違っている。それは、「疑いは、次第にその意味を失」（§ 56）っていく確実さである。そしてそれを疑うことが、「ある点で考えることができなくなる」（§ 54）確実さである。ウィトゲンシュタインの確実さには、不連続がある。

また、ウィトゲンシュタインの確実さは、意識的な推論の産物ではなく、後から発見されるものである。

「私は、一定の思考の足取りに従って、意識的にその確信に至ったのではなく、その確信は、私がそれに触れることができないほどあらゆる私の問と答えの内に、しっかりと固定されている。」（§ 103、最初の強調は論者、後の強調はウィトゲンシュタイン）

「私は、私にとって揺るぎない命題を、はつきりと学ぶことはない。回転する物体の回転軸のように、私は、それを後から発見することができる。」（§ 152、最初の強調は論

¹⁶¹ 「分別のある人は、ある種の疑いは持たない。」（§ 220）

者、後の強調はウィトゲンシュタイン)

「一定の思考の足取りに従って、意識的にその確信に至ったものではない」というのは、デカルトの「考える我」のように、推論や論証によってその確信に至ったというものではない、ということである。実際、「私には手が二つある」やムーア命題の確実さは、推論や論証によって得たものではない。また、それを明示的に学んだのでもない。ではこのような「揺るぎないもの」を我々はどのようにして身に付けたのか。シャーロックは、我々が蝶番の確実さを獲得するにあたって、二つの仕方を区別した。一つは自然に吸収・取り込まれることであり、今一つは訓練によることである(第4章の2(6))。

ウィトゲンシュタインは次のように言う。

「子供は、多くのことを信じることを自然に学び、やがて信念の体系がつくられていく。あるものは動かしがたく揺るぎないが、あるものはある程度動かせる。揺るぎなくあるものは、それが本質的に明白であるとか納得のいくものであるから揺るぎないのではなくて、その周りにあるものによって、しっかりつかまえているからである。」 (§144、強調は論者)

「子供は、多くのことを信じることを自然に学び」というのは、意識して学んだのではない、ということである。子供は多くのことを、観察と授業を通じて (§279)、また共同体の中の伝統として受け継ぐ (§95)。自覚的に学びとられるものを通じて、また自覚的に学ばれるものとともに、非自覚的に学びとられるものがある。それらの内のあるものは、他のものとともにやがて「揺るぎないもの」になる。

このように、子供は多くのことを信じることを自然に学び、「揺るぎないもの」を明示的に学ぶことは無い。その内のあるものは周りにあるものによって固められて、次第に「揺るぎないもの(回転軸)」になっていく。その「揺るぎないもの(回転軸)」は、認識的ゲーム(回転する物体)において後から発見することができる。

ウィトゲンシュタインは、あらゆる探究と主張の基礎であって、受け継いだ背景であり、それによって真・偽を区別するものを、「世界像」と呼ぶ。世界像については、第4章の3(4)で、ハミルトンの解釈を取り上げた。ウィトゲンシュタインが世界像について言及する主な節を改めて取り上げると、次のとおりである。

「私は、一つの世界像を持っている。それは真であるのか偽であるのか。とにかくそ

の世界像が、私のあらゆる探究と主張の基礎なのである。これを記述する諸命題は、必ずしも皆同等に検証を受けるものではない。」 (§ 162)

「しかし、私は、その正しさを私が確信したから私の世界像を持っているのではない。また、その正しさを確信しているから持っているのでもない。そうではなくて、これは受け継いだ背景であり、これに拠って私は真・偽を区別する。」 (§ 94、強調は論者)

ウィトゲンシュタインの言う「世界像」は、探究の当然の基礎であって (§ 167)、「揺るぎないもの（ハミルトンの言う「非人格的ムーア命題」）」である。この世界像を、我々はどのようにして手に入れたのか。それは、我々が親や教師から判断の仕方を学んできたことによる。

「私は一般に、教科書、例えば地理の教科書にあることを真として受け取る。」 (OC § 162)

「子供は、大人を信用することによって学ぶ。疑いは、信じることのあとにくる。」 (OC § 160、強調はウィトゲンシュタイン)

「人が習得するものは技術ではない。人は、適切な判断を学ぶ。」 (PI II, xi, p. 193, 邦訳 p. 454)

「私は、子供の時からこのように判断することを学んできた。これが判断である、と。」 (OC § 128、強調はウィトゲンシュタイン)

子供は、学習によって多くのことを学ぶ。子供は、自分が正しいと確信した上で受け入れるのではない (§ 103)。まず、大人や先生、教科書を信用することで学ぶ¹⁶²。正しいか正しくないかを疑う前に、無条件に判断を受け入れる。疑いが生じるのはその後だ。子供が受け入れる前に疑うことはあり得ない。子供はこのように、多くのことを非認識的に受け入れる。これは、マッギンが主張したことに通じる (第4章の 1(2))。

¹⁶² 「生徒は、自分の先生と教科書を信じる。」 (§ 263、強調はウィトゲンシュタイン)、「我々が何について信じるかは、我々が学ぶもの次第である。」 (§ 286)、「この知識の本体が私に伝えられてきて、私はそれを疑う根拠がなく、多様な確証がある。」 (§ 288) この他に、§ 150, 600 が該当する。

そうして学んだものの中には、後に修正されるものがある一方、「揺るぎない」確固とした信念に形成されるものがある。「揺るぎないもの」は、明晰判明に認識されているからとか説得力があるから揺るぎないのではない。それは、「揺るぎないもの」の体系の中に組み込まれて、しっかり捉まれているから揺るぎないのである。

これら信念が作られていく仕方は、教科書から学ぶように、直接受け入れるものがある一方、受け入れるものを通じて、非自覚的に受け入れるものもある。ウィトゲンシュタインは、興味深い例を挙げている。

「例えば私が、ある人が何年も前にこの山に登った、ということを聞かされる。その時、私はいつも、その語り手が信頼できるかどうか、また、この山がそんなに何年も前から存在したのかどうか調べるだろうか。子供は、物語られる事実を学ぶよりずっと後になって、あてになる語り手とあてにならない語り手がいることを学ぶ。子供は、その山がはるか昔から存在していたということは全く学ばない。ほんとうにそうかどうかという疑いは決して生じない。子供は、いわば、自分が学ぶことと一緒に、この帰結も飲み込んでしまうのだ。」（§ 143、最初の三か所の強調はウィトゲンシュタイン、最後の強調は論者）

ここで言われているのは、子供はまず語り手を信頼する、ということである。信用できる語り手かそうでないかを学ぶのは、そのずっと後になってのことである。また、学ぶ事実の中に、「山がはるか昔から存在していた」ということは、全くない。それを学ぶことは全くないけれど、「ある人が何年も前にこの山に登った」ということを学ぶことと一緒に、「その山がはるか昔から存在していた」ということも飲み込んでしまうのである¹⁶³。

この事実は興味深い。ある山がはるか昔から存在していたということを直に学ばなくても、ある人が何年も前にその山に登ったという話を信用することから、はるか昔からその山が存在していたということも受け入れる、ということである。子供は箸の使い方、歯磨きの仕方を学ぶことで、自分に手があることを受け入れる。

こうして「揺るぎないもの」の体系が次第にできていく（「光は次第に全体に広がる」（§ 141））。それらの中には直に教えられ、その後修正されることなく世界像になっていったものがあるだろうし、直に学ぶことはないけれど学ぶことと一緒に飲み込んで世界像に取り込まれていったものもあるだろう。前者には「 $12 \times 12 = 144$ 」のような初等算術、「私は

¹⁶³ 関連するものに § 480, 538 がある。

L. W.と呼ばれている」等があり、後者には「机はそれを見ていない時でも存在する」、「地球はずっと昔から存在している」¹⁶⁴、「私には手が二つある」、「身体は突然消失することはない」¹⁶⁵、「私の家には地下 6 階に至る階段はない」¹⁶⁶等がある。

「揺るぎないもの」は、教育や訓練によって手に入れるものがあれば、またそれと一緒にになって非自覚的に飲み込まれるものもある。この区分は、先に言及したシャロックの二つの区別に通じる（第 4 章の 2(6)）。これらは、推論を経て意識的に手に入れるものではなく、非認識的に身に付けられるものである。

1(6) 「揺るぎないもの」の転換について

さて、本章の 1(3) で論じたように、「揺るぎないもの」の体系は、互いに合い関連して固く固定されている（§ 103, 274）。だが、変わらないとか変えられない、ということではない。

「神話【であったもの】が再び流動的な状態になり、思想の河床が移動することがあり得る。」¹⁶⁷（§ 97）

ここで「神話」及び「河床」は、真・偽や正当性、その根拠が問われることのない「揺るぎないもの」の比喩である。ウィトゲンシュタインは、そうした揺るぎないものが、揺るぎないものでなくなる、というのである。先に、本章の 1(4) で、『『揺るぎないもの』の確実さは、それを主観的に疑わないとか、心理的に疑わないという問題ではない。それを<疑う>ことは、揺るぎないものを認識的ゲームの中に引き込むことであり、自己論駁に陥ることが免れない。従って、『揺るぎないもの』を疑うことは、言語ゲームの二層の構造から論理的に排除されており、言語ゲームの体系全体の中で意味をなさない』と論じた。

ではこの節にある「思想の河床が移動する」と言うことで、ウィトゲンシュタインは何をいおうとしているのか。彼は次のような例を挙げている。

「かつて人は、自分達は雨を降らせることができると信じていた。【従って】世界は、自分と一緒に始まったという信念を持つように育てられた王様がいても良いのでは

¹⁶⁴ 「我々が歴史的証拠と呼ぶものは、私の誕生はるか以前から地球が存在していたことを指し示す。反対の仮説はそれを維持するものが何もない。」（§ 190）

¹⁶⁵ § 101

¹⁶⁶ § 398

¹⁶⁷ 他にも、言語ゲームは時とともに変化すると言う。（§ 256）

ないだろうか。それで、ムーアとこの王様が会って議論したとして、ムーアは、自分の信念の正しいことを実際に証明することができるだろうか。ムーアが王様を自説に転向させることができない、とは私は言わない。ただそれは、特別な類の改宗 (Bekehrung, conversion) になるだろう。その王様は、世界を全く別様に見ることになるだろう。」 (§ 92)

この改宗 (体系の転換) は、もちろんそう簡単に行われるものではない。それは、世界像を変えるものであり、その人の従前のあらゆる判断を巻き込んだ転換になるからだ。

ここで問題にしている転換は、一つや二つの「揺るぎないもの」を変更することではない。言語ゲームの背景にあって、一つの体系をなしている「揺るぎないもの」と、その体系を基礎にしてなされる通常の言語ゲームをひっくりめた、言語ゲームの全体に影響が及ぶものである。

「今まで疑いえないことと思われていたことが、誤った想定であるということが判明するように見えるとしたらどうであろうか。その時私は、ある信念が誤っていた時と同じように反応するだろうか。それとも、私の判断の基盤が打ち砕かれるように見えるだろうか。……

私は、『そんなことは考えもしなかった』と単に言うだけだろうか。—それとも、私は判断を改訂する (revidieren, revise) ことを拒む (拒まねばならない) だろうか。つまりそのような改訂は、あらゆる基準を破棄するに等しいので。」 (§ 492、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者)

疑いえないもの (「揺るぎないもの」) を改訂することは、それまで自分の判断が拠っていた、「あらゆる基準を破棄するに等しい」ことだ、とウィトゲンシュタインは言う。従ってそれは、通常の言語ゲーム (認識的ゲーム) の中で誤りを改訂することとは、種類 (レベル) が違うのである¹⁶⁸。

先に、第3章の6「誤りについて」で論じた時、ウィトゲンシュタインは、「いわゆるゲームの中にその場所が用意されている誤りと、例外的に起こる完全な規則違反の誤りの間には、区別がある」 (§ 647) としていた。ゲームの中にその場所が用意されている誤りと

¹⁶⁸ 類似のコメントとして、「私は、他の全ての判断をそれでもって引き裂くことなしに、この判断から離れることができない」 (§ 419)、「私は全ての判断を放棄することなしに、この命題を疑うことはできない」 (§ 494)、「ここで疑いは、結果として全て引きずり込んで混沌の中に突き落とすようにみえる。」 (§ 613) 等がある。

いうのは、認識的文脈の中での誤りである。認識的文脈の中で起こる誤りは、「その誤りを正しい知識の内に組み込むことができる」 (§74) 誤りである。しかし、完全な規則違反の誤りは、言語ゲーム（認識的ゲーム）の中にその場所が用意されていない誤り、論理的に排除されている誤りである。そのような誤りを誤りでないものに改訂することは、言語ゲーム全体を改訂することになる。その改訂は、今までの揺るぎないものとそれを基礎にした認識的ゲームという、言語ゲームの二層の構造全体を、根本から変えるものになる。それは、「あらゆる基準を破棄するに等しい」ものである。従ってこの改訂は、今までとは「世界を全く別様に見る」改訂となる。

だから完全な規則違反に該当する誤りを言われても、普通はそれをまともに受け取らない。一つか二つの「揺るぎないもの」に反論しようとする者には、『馬鹿げている』と言うだけでよいだろう。つまり答えるのではなく彼をたしなめる」 (§495) のである。だが、もし改訂するとしたら世界像を転換することである。そのような転換は、証明や説明によってなされることはない¹⁶⁹。ハミルトンの言うように、世界像の違う人々は、お互いに矛盾しているのではなく、「誤りなき不一致」と呼ばれてきたものの中にいるからである。（第4章の3(4)）根拠を与えることや証拠を正当化することには終わりがある (§192, 204) から、それは最後には「一種の説得」 (§262, 612) によって行われる。

このようにこの改訂は、しょっちゅう起こるというものではないが、かといって全く起こらない、というものでもない。ウィトゲンシュタイン自身が「揺るぎないもの」の一つに挙げていたもので、今日では否定されているものがある。

「我々が何について信じるかは、我々が何を学ぶか次第である。我々は皆、月に至ることは不可能だと信じている。だが、それは可能であり、時々起っていることだ、と信じている人々が存在し得る。我々は、次のように言うだろう。我々が知っている多くのことを、この人たちは知らないのだ、と。そして、彼らの信念がどれほど固くとも、一彼らは誤っており、我々はそのことを知っている、と。

我々が、我々の知識体系を彼らの体系と比較すれば、彼らの体系の方がずっと貧弱だということが、明らかになる。」 (§286、強調は論者)

ウィトゲンシュタインが『確実性の問題』を書き始めたのは、1951年4月に亡くなる1年半前のことで、その頃は、「誰も月に行ったことは無く、月に行くことは不可能だ」とい

¹⁶⁹ お互いに相容れない二つの原理が会うところでは、どちらも相手を馬鹿で異端と宣告する。（§611）

うのは、ムーア命題の一つであった。しかし、それから 15 年以上後の 1969 年、アポロ 11 号の船長アームストロングが、人類初の月着陸に成功し、「月に至ることは不可能だ」というのは、ムーア命題ではなくなった。今では、「月に至ることは可能だ」ということが、ムーア命題になっている。このように、ムーア命題が改訂される、ということがあり得る。

1(7) 「揺るぎないもの」の確実さは行為において示される

我々は、「私には手が二つある」ということを認識的に確信したからそのことを学ぶのではない。生活の中で、純粹に実践的に学ぶ。それは、「これは右手、これは左手、合わせて手が二つ」等のように、文字通りに手を取って明示的に教えられることもあるかもしれない¹⁷⁰。しかし、通常我々は、日常の生活における実践を通じて、自分には手が二つあることを、自覚的にはないが受け入れている。そのことは行為の内に示されている。それは、我々が日常の生活を通じて、そこに椅子やドアがあることを知っているのと同じである。

「私の生活は、あそこに椅子がある、ドアがある、と私が知っていること、あるいはそう確信していることを示す (zeigen, show)。——例えば私は友人に言う、『あの椅子を持ってきてくれ』、『ドアを閉めてくれ』等と。」 (§ 7、強調は論者)

そこに椅子があること、ドアがあることを、我々が確信しているのは、生活の中での実践の内に示されている。そこに椅子があることは、「あの椅子を持ってきてくれ」と友人に言うことの内に前提されている。そこに椅子が無いにも拘らず、「あの椅子を持ってきてくれ」と言うことは、論理的に排除されている（意味をなさない）。そこにいない泥棒に縄をかけろと命ずることがナンセンスなのと同じように。縄をかける真似をすることはできるかもしれないが、それはあくまで真似であって、実際に縄をかけることとは、文法が異なる。

同様に、「私には手が二つある」という確実さは、日常の生活を通じて、例えばドアを開けて部屋に入る、洋服をハンガーにかける……という、手に関する無数の行為の内に示されている。

「私には手が二つある」ことは、私の日常生活の実践の中で、自覚することなく当然のこととして、前提にされている。

¹⁷⁰ § 374

しかし、ムーアが誤って「私は自分に手があることを知っている」と言ったように、それを知識だと言うことがあるかもしれない。しかし私は、「私には手がある」のような「揺るぎないもの」を認識的知識として持ち、それに基づいて行為するのではない。その関係は、逆なのである。私に手が二つあることは、私の行為全体の基礎にある。「私には手が二つある」ことを私が意識する以前に、またそれを表現する以前に、私は、日常生活の中で手を用いた無数の行為をしている。

確かに私の行為は、通常、認識的な知識に基づいている。例えば、ケーキを食べたいと思っている時に、冷蔵庫にケーキがあると知っていれば、冷蔵庫まで足を運んでドアを開ける。欲求－信念－行為という構図である。

しかし、この構図には、無数の「揺るぎないもの」が、枠組みとして前提されている。「私には手が二つある」とか「私には足があって、歩くことができる」ことはもちろん、この他に、「この冷蔵庫は昨日ここにあったもので、これとそっくりの別の冷蔵庫があるのではない」、「冷蔵庫のドアは手前に引けば開く」、「冷蔵庫の中のケーキが一夜のうちに蒸発して無くなっていることは無い」等、無数の「揺るぎないもの」（ムーア命題）がこの構図の背景にネットワークを構成している。そして、これらが一体となって、冷蔵庫のドアを開けてケーキを取り出すという、認識的行為を成り立たせている。

このように私は、「冷蔵庫にケーキがある」という認識的な知識に基づいて行為するが、その行為の背景にある無数のムーア命題は、認識的知識の外にある。「揺るぎないもの」は、行為の認識的レベルにはない。行為の認識的レベルには、通常の信念と知識があるだけだ。そしてその行為の内に、「揺るぎないもの」は示されている。その「揺るぎないもの」は、反省することによって発見する¹⁷¹ことができるものである。従って、考えたり反省したりすることのないままに、発見されずに過ぎていく「揺るぎないもの」も生活の中には無数にある¹⁷²。しかし、それらを認識的な文脈の中に持ち込んで、「知っている」とか「疑う」という形で表現することは、論理的に排除されている。

「彼らがある種のことを固く信じているということは、彼らがその信念を言葉に表すと表すまいとにかかわらず、彼らの行為から、人はそれを見て取ることができる。」 (§ 284、強調は論者)

「しかし他方、これが自分の手であることを私はいかにして知るのか。……私が『い

¹⁷¹ § 152

¹⁷² 私の家には地下 6 階に至る階段はない (§ 398) がこれに該当するであろう。

かにして私はそれを知るのか』と言う時、私は、ほんの少しでも私がそれを疑っているということを意味してはいない。ここに、私の行為全体の基礎がある。ところが、『私は……を知っている』という言葉によって、それは、誤って表現されていると私には思われる。」 (§ 414、強調はウィトゲンシュタイン)

「『私は……を知っている』という言葉によって、それは誤って表現されていると私には思われる」というのは、「知っている」が、疑いの論理的可能性を含意するものに用いられる言葉であるにもかかわらず、ほんの少しでも疑うことを意味しないもの（疑いの論理的可能性が排除されているもの）に用いているからである。

「しかしながら、根拠を与えること、証拠を正当化することには終わりがある。——しかし、その終わりにあるものは、ある諸命題が直ちに真として我々に分かるのではない。それ故、言語ゲームの根底にあるのは、我々の側のある種の見え (*Sehen, seeing*) ではなく、我々の行為なのである。」 (§ 204、強調はウィトゲンシュタイン)

ハミルトンは、この節にある「ある種の見え」を、「数学や論理学のアプリオリな命題の自明さ」と解釈している¹⁷³。従って、言語ゲームの根底にあるのは、そのようなアプリオリな命題の自明さではなく、行為であり、その行為の内に「揺るぎないもの」は示されている、ということである。

「しかし、[根拠を求める営みの] 終りは、根拠付けられていない前提 (*Voraussetzung, presupposition*) ではなくて、根拠付けられていない行為の仕方 (*Handlungswese, way of acting*) である。」 (§ 110、下線は論者)

食べたり、歩いたり、会話をする等の日常生活の行為の多くは、知識・信念、欲求・意図などに基づいた認識的行為である。そのような認識的行為にあつて、私は、「自分には手が二つある」ことに、全く揺るぎが無い。揺るぎがないという自覚さえない。私は、学校に行く前に、財布や携帯を持っているかどうか確認することはある。これは、認識的行為である。しかし、自分に手が二つあるかどうか確認しない。また、出かける時に足がちゃんと動くだろうかということも、全く心配しない。学校で出会う友人が、昨日まで自分の

¹⁷³ Hamilton [2014], pp. 99-100

知っていた人と同一人物かどうか（姿かたちがそっくりなエイリアンではないか）に悩むことも無いし、それを確かめてから相手と話すのでもない。（こうした疑いは、考えもしないだろう。）しかしそのことに根拠はないし、根拠を求めることもない。そうしたこと（前提）を意識することは全くない。これが、根拠付けられていない行為の仕方である。そして、私が学校に行くという行為は、自分に手があること、足があることに些かの疑いも持たない断固としたものなのである。その揺るぎなさには理由（根拠）が無いにも拘らず、である。

「私が椅子から立ち上がろうとする時、私はなぜ、自分に両足があることを確かめないのか。そこには理由はない。私は単にそうしないだけのことだ。そのように私は行為する。」（§ 148）

「私は、完全な確実さを持って行為する。しかしこの確実さは、私自身のものである。」
（§ 174、強調はウィトゲンシュタイン）

そしてウィトゲンシュタインは、この非認識的な行為の内に示される「揺るぎないもの」の確実さを、動物的な何かとして理解したいと言う。

「それは、私がそれ【確実さ】を、正当化されるかされないかを越えたところにあるものとして、いわば動物的な何かとして、理解したいということを意味する。」（§ 359）

「私はここで人間を動物としてみなしたい。人が、本能はあるが推理の働かないと確かに思う原始的な存在として。」（§ 475）

動物の行動には、言語による認識的な正当化というものはない。動物はそうする、そうしないという行動があるだけだ。我々の行為も、椅子から立ち上がったり、何の疑いもなくタオルを手でつかんだりする（§ 511）時、そうするかしないかだけである。その意味で我々の非認識的な行為を動物の行動と同じ様なものとして理解したい、とウィトゲンシュタインは言う。そのように非認識的行為において示される「揺るぎないもの」を、あえて言葉にしようとするれば、ナンセンスになるか、ゲームの規則の説明になって、認識的ゲームの中で有効な（意味ある）指し手でなくなる。

「リスは、今年の冬も貯えが必要だと帰納によって推論するのではない。全く同様に、我々も、自分たちの行為や予言を正当化するために、帰納の法則を必要としない。」 (§ 287)

我々は、「私には手が二つある」ことの揺るぎなさを正当化するのに、帰納による認識的推論によらない。非認識的な行為に根拠はない。それは、非認識的な行為の内に示されるだけである。

「そしてここで奇妙なことは、言葉の使用が全く確実で、それについての疑いが全くない場合でも、なお、私は、自分の行為の仕方の根拠を与えることができないということである。あえて言えば、私は 1000 の根拠を与えることができるだろうが、どれも基礎づけようとする当のものほど確かではないのだ。」 (§ 307、強調はウィトゲンシュタイン)

非認識的な行為の内に示される揺るぎなさは、反省以前に揺るぎないものとして、端的な行為の内に示されただけで、その根拠を持たない。

「もし私が、『勿論私は、それがタオルだということを知っている』と言うとすると、私は表明 (Äußerung, utterance) をしているのだ。私は、検証のことは考えていない。それは私にとって、端的な表明である。

私は、過去も未来も考えない。(そして勿論このことは、ムーアにとっても同じである。)

それは端的に何かをつかむようなものだ。私が何の疑いもなくタオルをつかむように。しかし、この端的につかむということは、確かさ (Sicherheit, sureness) に対応しているのであって、知識に対応しているのではない。」 (§ 510, 511、強調は論者)

ここで言われる端的に何かをつかむような「揺るぎなさ」は、「揺るぎないもの」が言語ゲームの体系全体としてその揺るぎなさを保持しているというよりはむしろ、言語を持たない動物が、その行動において示す断固とした「揺るぎなさ」に近いもののように思われる¹⁷⁴。

¹⁷⁴ この点でウィトゲンシュタインは、人間と動物の関係について、動物を人間に近づけて考えるよりは、人間を動物に近づけて考えているように思われる。

以上のようにウィトゲンシュタインは、「揺るぎないもの」の确实さ（揺るぎなさ）について、本章の 1(3) で論じたように、「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームという二層からなる言語ゲームの体系全体が、「揺るぎなさ」を与えていること、また、本節で論じたように、その确实さは、言語を持たない動物がその行動において示す「揺るぎなさ」に近いもので、言語以前の端的な行為において示されているということの、二つを考えているように見える。しかし、この二つは相いれないものではなく、言語ゲームにおける言語と行為の成り立ちという、貨幣の表裏であるように思われる。即ち、通常は表現されることのない「揺るぎないもの」であるが、あえて表現することで示される命題とそれを示す行為という両面が、言語ゲーム中での人間の行為を意味付ける、ということである。他方、言葉を持たない動物は、揺るぎない行動をしても行動があるだけで、その行動に意味を持たないだろう。

さて、例えば、「私には二本の足がある」ことの确实さは、「立ち上がって冷蔵庫まで行く」という行為の内に示されていると言う時、その「揺るぎないもの」が行為の内に示されているとはどういう意味なのだろうか、また、ハミルトンが問うように（第 4 章の 3(5)）、「地球は非常に古い」というような無数のムーア命題を、我々は、立ち上がってケーキを取りに冷蔵庫まで行くという行為の内に示しているのだろうか。次節ではこのことを取り上げよう。

1(8) 心的傾性としての「揺るぎないもの」

前節で例に挙げた、冷蔵庫にケーキを取りに行く場合、私は、「冷蔵庫にケーキがある」という認識的な知識（信念）に基づいて行為する（冷蔵庫まで歩いていく）。その時、私の行為の背景にある「私には二本の足がある」のような様々な「揺るぎないもの」は、認識的知識の外にあって、行為の認識的レベルにはない、その「揺るぎないもの」は、その行為の内に示されている、と言った。

「私には二本の足がある」のような「揺るぎないもの」は、それが行為の際のオカレントな意識に現れず、行為の内に示されるという現れ方は、第 1 章の 6 で論じた、「二種類の心的出来事・心的状態」の内、理解や意図、信念と同じように、本物の持続を持たない心的状態（ウィトゲンシュタインの言う「心的傾性」）に該当すると思われる。

それはちょうど、我々がフランス料理を食べに行こうと（意図して）出かける時、その意図を四六時中意識する（感覚する、注意を向ける）ことがなくても、足は自然にフラン

ス料理店に向かっていることと同じような心的状態だ。お店まで行く間に感覚や感情は、意図とは無関係な様々なことに注意が向いて中断したり変化したりするけれど、フランス料理を食べに行こうという意図（あるいは心構え）は、通奏低音のように途切れることなく行為の背景に流れている。途中誰かに出会って「どこに行くのか」と聞かれれば、聞かれた正にその時には別のことを考えていて、フランス料理のことを全く考えていなかったとしても、「フランス料理を食べに行く」と答えるだろう。そして、料理店に向かう行為には、「フランス料理を食べに行く」という意図だけでなく、おしゃれな服を着ていく意図、電車で行く意図、食事代をカードで支払う意図、遅くならないうちに家に帰る意図、家に帰った後で何々をしようという意図等、生きようとする意図も含めて、そのことを自覚している、していないという違いはあるが、無数の意図がその行為の内に織り込まれている。

これと同じように、認識的ゲームの背景には「私には手が二つある」や「私には二本の足がある」等の無数の「揺るぎないもの」があつて、それらは意識のレベルに現れることは無いが、日常の行為の内に示されている。その「揺るぎないもの」は、意識レベルで注意の移動があつても中断されることは無いし、睡眠によつても中断されることはない。

しかし、「揺るぎないもの」と意図はもちろん異なる。自分が自分の意図を疑うことは、自己論駁に陥ることが免れないのでナンセンスであるが、他人が私の意図を疑うことは意味がある。しかし、「揺るぎないもの」は、それを自分が疑うことも他人が疑うことも、どちらの場合も自己論駁に陥ることが免れないので、ナンセンスである。意図が、知識や信念と異なるのはもちろんであるが、心的状態のあり様として、本物の持続を持たないという点では、これらは同じレベルにある。そして、「揺るぎないもの（確実さ）」も、本物の持続を持たないという点では、意図や知識などと心的状態のあり様としては同じレベルにある。

なお、知識や信念、意図等の心的状態のあり様としての「心的傾性」と、「揺るぎないもの」の確実さの「心的傾性」が異なっている点があることも指摘しておかなければならない。その違いは、知識や信念等は、かつては意識レベルにあったものであり、現在のオカレントな意識にはなくても、容易にそのことを思い出すことができる。だが、「揺るぎないもの」は、知らないうちに受け入れていて行為の内に示されているもので、かつてそれに気付いていたというものではなく、後から発見されるものである、という違いがある。

このように「揺るぎないもの」が、心的状態としては「心的傾性」のような在り方を示していて、それが行為の内に示されている、と考えることができる。論者は、この「揺るぎないもの」は、行為の「態勢」とか行為する「態度」、「構え」の内に示されているものと理解したい。

シャーロックは、蝶番を「文法規則」（第4章の2(1)）としてみたが、ハミルトンは、それを文法規則ではなく、実践や言語ゲームの前提（第4章の3(2)）としてみた。ハミルトンの言う「前提」は、心的傾性というあり方に近いものと考えられる。

さて、ハミルトンは、「この部屋が二階にあって、ドアの後ろをちょっと歩くと階段に出る」ことは、毎日の行為に示されている、だが、「地球は非常に古い」を毎日の行為によって示しているだろうか、と問うた¹⁷⁵（第4章の3(5)）。これについて、今や次のように答えることができる。

ムーア命題は、我々の心的状態において「心的傾性」のようないり方をしている。従って、我々がそれを自覚していなくても、また、そのことに必ずしも気づくことが無くても、我々はムーア命題を認識的ゲームの背景に持ち、その確実さを毎日の行為の内（行為する態度の内）に示している。だから、我々は、「地球は非常に古い」を、それに気付くことが無くても日々の認識的ゲームの背景に持ち、毎日の行為の内にその確実さを示している、と。

さて、シャーロックは、蝶番は文法規則であり、蝶番命題は文法規則を表現した文法命題であると考えていた。本章第1節の最後に、「揺るぎないもの」を表現したものは文法的命題であることについて取り上げよう。

1(9) 「揺るぎないもの」を表現したものは文法的命題である

ウィトゲンシュタインは、認識的ゲームの基礎にある「揺るぎないもの」が、文法的命題として理解されるのではないかと、「ここに私の手ある」について次のように言う。

「ところで、『ここに私の手があるということを私は知っているのであって、単に推測しているのではない』ということは、文法的命題（grammatischer Satz, proposition of grammar）として理解されうるのではないか。それ故、それは時間的ではない。」（§57、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者）

ここでウィトゲンシュタインが、「ここに私の手があるということを私は知っている」が文法的命題として理解されうるのではないかと問うのは、以下に述べるように、「ここに私の手がある」が経験命題ではないことを主張する意味だと解釈される。即ち、「ここに私の手がある」が、もし、経験命題であれば、その真・偽を問うたり検証したりすることに

¹⁷⁵ Hamilton [2014], p. 206

意味があることになる。しかし「ここに私の手がある」は、「あらゆる判断を放棄することなしにこの命題を疑うことはできない」 (§ 494) ものの一つであり、我々の探究において、疑いや誤りの論理的可能性が排除されているものである。従って、そのようなものに「知っている」という用語を用いるのは誤用である。しかしながら、「ここに私の手がある」が、規則と同じような文法的命題であるとするなら、「知っている」と言っても理解できるのではないか、と言うのである。

では、「ここに私の手がある」が文法的命題であるというのはどういう意味か。第 3 章の 6 で述べたように、ドアを開けて部屋に入る、食事をする等、生活の中の様々な行為の基礎に「ここに私の手がある」がある。もしここに私の手が無かったとしたら、ドアを開けることも食事をすることもままならないことになる。ここに私の手があることは、そうした行為ができる条件の一つを構成している。それはちょうど、飛車は前後か左右にしか動かせられないという将棋の規則が、将棋というゲームが成り立つ条件の一つを構成しているのと同じようなことだ。認識的ゲームを成り立たせる無数の条件を構成するものの一つに、「ここに私の手がある」のような「揺るぎないもの」がある。この意味で、「ここに私の手がある」は、規則と同じような文法的命題であると理解されうるのではないかと、ウィトゲンシュタインは言うのである。

ウィトゲンシュタインは、経験命題と文法的命題の区別は固定されたものではない、と言う。かつて経験命題としてテストされるものであったものが、ある時には文法的命題としてテストの規則として扱われることもあり、論理学の命題と経験命題の境界があいまいなのであって、それを区別するのはその命題の使用である、と言う。経験的なものから規則のようなものへ、またその逆へと身分を変えることは、第 4 章の 3(3)で、ハミルトンがムーア命題の動的な概念として指摘していたものである。

以下の引用は、経験命題と論理学の命題とのこうした関係について語っている。この中で用いられている、規則、論理学の命題、規範の表現、導管という用語は、文法的命題と同類のものと解してよいと思われる。

「……同じ命題が、ある時には経験によってテストされるものとして、またある時にはテストの規則として扱われることがあり得る、ということは正しい。」 (OC § 98、強調は論者)

「しかしそれでは、人は、論理学の命題と経験命題の間にはっきりした境界は引けな

い、と言わなければならないのだろうか。規則と経験命題の間の境界があいまいなのである。¹⁷⁶」(OC § 319、強調はウィトゲンシュタイン)

「様々な命題が、しばしば論理学と経験的なものとの境界で使われ、その結果、命題の意味がその境界を越えてあれこれ変化し、ある時は規範の表現とみなされ、ある時は経験の表現とみなされる。(というのは、論理的な命題を経験命題から区別するのは、……その命題の使用だからである。)」(RC § 32、強調は論者)

「経験命題の形をしたいくつかの命題が固められて、固まらずに流れる経験命題の導管として機能するということ、また、この関係が時とともに変化して、流動的な命題が凝固したり、固まっていた命題が流れたりするようになるということ、人は想像することができよう。」(OC § 96、強調は論者)

ウィトゲンシュタインのここでの考えは、経験命題と文法的命題の区別が固定したものではなく、時や使われる状況の違いに拠って変わり得ることを示唆している。従って、「ここに私の手がある」は、経験命題の形式をしているが、ムーアが述べたような状況では、文法的命題の役割をしていると考えるのであれば理解することができる。

ウリクトも、「揺るぎないもの」を表現した文(＝文法的命題＝分析的命題＝論理的必然性を扱う命題)でも、それが経験命題(＝総合的命題＝偶然的真・偽を扱う命題)として使用されるような状況を想像することができるとウィトゲンシュタインが言っている節を取り上げて、「分析的」と「総合的」の間に固定した区別のないことが、ウィトゲンシュタインによって示されている、と次のように言う。

「我々が、少なくともそれら[ムーアが「擁護」に掲げる命題]のかなり多くについて、その使用が我々の言語ゲームの(規則から区別される)一つの指し手になる状況を想像することができる(OC § 622)、という事実は、「分析的」と「総合的」の間に、論理的必然性と偶然的真理あるいは虚偽の間に、確かな区別がない、ということを示している。」(Wright [1972], pp. 173-174、強調はウリクト)

なお、ウリクトがここで引き合いに出す『確実性の問題』§ 622 は、第 3 章の 2(2) でも

¹⁷⁶ この § 319 における規則と経験命題の関係は、基準と兆候の関係に対応しているようにも見える。(BB p.25, 邦訳『青色本』pp.57-58)

取り上げたが、次のとおりである。

「しかしながら今や、『私は知っている』をムーアが述べた脈絡で用いることも、少なくとも特定の状況においてなら正しい。（『私は自分が人間であることを知っている』が何を意味するか【どの様な使用を持つか】、私はもちろん知らない。だが、この表現にすら、一つの意味を与えることができるであろう。）こうした文のいずれに対しても、それを我々の言語ゲームの一手にするような状況を私は想像することができ、それによって哲学的なあらゆる驚きは、消えてなくなってしまう。」（§ 622、強調はウィットゲンシュタイン）

なお、ウリクトが先の引用で § 622 を引き合いに出して言っていることは、経験命題と文法的命題の区別が時とともに変わって（区別の基準が時とともに変化して）かつて経験命題として用いられたものが文法的命題として用いられるようになる、というよりは、同じ命題が、状況の違いによって経験命題にも文法命題にも使用される、ということを指摘している、と解される。同じ命題が、状況の違いによって経験命題にも文法命題にも使用されることを、シャロックは、ドッペルゲンガー（doppelgänger、分身）と呼んでいる¹⁷⁷。

シャロックは、文法規則の意味を広く解して、蝶番（揺るぎないもの）を文法規則と考えた。また、ハミルトンはシャロックと違って文法規則を狭く解して、ムーア命題（揺るぎないもの）を文法規則とは言わず、言語ゲームや実践の前提を表現するものと考えた。

ウィットゲンシュタインは、「揺るぎないもの」の役割は、「ゲームの規則の役割に似ている」（§ 95）、また、「揺るぎないもの」は、「規則の性格を持つ」（§ 494）、と言っていた。

ウィットゲンシュタインのこの意味を明らかにするために、次節では規則についてのウィットゲンシュタインの考えを見てみよう。

2 規則について

前節の考察を踏まえて、本節では、(1)「揺るぎないもの」の役割はどのようにゲームの規則の役割に似ているのか、(2)「揺るぎないもの」は規則のどういう性格を持つのか、について考察する。これらの問題を考察するために、まず、規則に従うとはどういうことかについて、ウィットゲンシュタインの考え方を見ていく。最初に 2(1)で、規則に従うことの

¹⁷⁷ Moyal-Sharrock [2007], p. 71

一つの事例として標識を取り上げる。続く 2(2)-2(5)で、規則に従う行為の仕方は解釈によって決めることができず、社会慣習によることを論じる。その後 2(6)-2(10)で、規則と「揺るぎないもの」についてその役割と性格が類似するところと相違するところを論じる。

2(1) 標識について

ウィトゲンシュタインは、道標（規則）を例にして、規則にはただ一つの解釈しかないのかどうかと問うて、道標は、ある時は疑問の余地を残し、またある時は残さないと言うことができる、次のように言う。

「規則が道標のようにそこにある。——この道標は、私のいくべき道について、何ら疑問を残さないのだろうか。私はその側を通る時、どの方向に行くべきか、街路に沿ってか、野道に沿ってか、それとも野原を横切っていくのかを指し示しているだろうか。……手の【指さしている】方向なのか、それとも（例えば）それとは逆の方向なのか、どういう意味で私がそれに従うべきかが、どこに書かれているのだろうか。……それらには、ただ一つの解釈しかないのだろうか。……あるいはむしろ、道標は、ある時は疑問の余地を残し、ある時は残さない、とすることができる。するとこれは、哲学的な命題ではなく、経験命題である。」（*PI* § 85、強調はウィトゲンシュタイン）

街路と野道の分かれるところに、「→」のような道標があったとしよう。その時我々は、どう反応（応答）するだろうか。例えば、JR 東海の主催する「さわやかウォーキング」の参加者で、「→」がウォーキングのルートを示す案内標識だと知っている人なら、まず全員が、「→」に従って何の躊躇もなく、矢印の示す右の道を行くだろう。それとは関係のない地元の人だったらどうか。「→」という標識に関心を持つ人がいるかもしれないが、ほとんどは無視するか、気に留めることもないだろう。標識に気づかない人もいるかもしれない。

「→」という標識が「さわやかウォーキング」のルートを示す場合、その標識は、ウォーキングの参加者が右の道を行くべきであることを指示している。その標識の下に更に、「上の『→』は右の道を行くことを表示しています」等と、注釈（解釈）を書き加える必要はない。

我々は、「→」という標識に出会うと、通常その標識を、「右に行け」とか「右を見ろ」を指示しているものとして見る。ウィトゲンシュタインは、次のような例を挙げている。

「私は絵を見ている。それは一人の老人が、杖で体を支えながら、急な坂道を上って

行く姿を表わしている。—しかし、どうして【そう見えるのか】？彼が、【実際には】その姿勢でその道を滑り落ちているのだとしても、その【上って行く】ように見ることができるのではないか？火星¹⁷⁸人ならこの絵をおそらくその【滑り落ちている】ように記述するかもしれない。なぜ我々は、そのように記述しないのか、私には説明する必要がある。」（*PI* § 139 の欄外 (b) p. 46、邦訳 pp. 113-114、始めの強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者）

我々は、この絵が、実際には老人が坂道を滑り落ちているところを描いたのだとしても、そのことを知らなければ上っているものとしてみるのが普通である。どうしてそう見るのか。そう見ることに理由（根拠）はない。だからウィトゲンシュタインは、「私には説明する必要がある」と言う。しかし、さらに説明が求められたとすれば、「それは我々の自然誌¹⁷⁸だから」というのも一つの答えかもしれない。しかしこれは、そう見ることの理由ではなくて、原因を説明しているものである。

「→」という標識が右を指示するものとして見ることに類似した例は、他にも沢山ある。

例えば、「(^_^)」は、人の顔のように見るのが自然ではないだろうか。それも微笑んでいる人の顔として。むしろ、記号の集まりとして見るの方が不自然のように思われる。これもウィトゲンシュタインの言う人間の自然誌の一つであろう。

こうした人間の自然誌が原因となって、社会慣習や社会的実践に関わる記号や制度が作られていくこともあるだろう。さわやかウォーキングの「→」という標識は右方向に行くことを指示しているというのも、その一つかもしれない。

2(2) 規則に従う仕方は社会慣習による

何かに規定されているわけではないが、「さわやかウォーキング」の参加者は、普通、分かれ道で標識「→」があると、自然に（何の疑いもなく）右の道に行く。その時、その標識に気付かない参加者がいて、その人から「どうして右の道に行くのですか」と聞かれれば、聞かれた人は、標識を指し示しながら「そこにルート標識（「→」）があるから」と言うことで説明はおしまいである。

『いかにして私は規則に従うことができるか。』—もしこれが原因についての問いで

¹⁷⁸ 「我々が提供しているものは、もともと、人間の自然誌についての考察である。……それについて誰も疑わなかったことの確認であり、それは常に我々の眼前にあるので、気付かれなかったただけなのだ。」（*PI* § 415、強調は論者）

ないとしたら、それは、私が規則に従ってこのように行為することの正当化についての問いである。

私が理由を論じ尽くしたのだとしたら、私は固い岩盤に達したのであり、私のスコップは反り返ってしまう。その時私は、『とにかく私はこのように行為する』と言いたくなる。」（*PI* § 217、最初の強調は論者、後の強調はウィトゲンシュタイン）

「根拠を与えること、証拠を正当化することには終わりがある。」（*OC* § 204）

理由（根拠、正当化）には終わりがある。右の道に行く理由は、そこに標識「→」がある、ということで尽くされている。にもかかわらず、そこでさらに先の参加者から、『「→』という標識が、どうして右の道を指示するのですか』と聞かれたとしたらどうだろう。何と答えて良いか分からないのではないか。あるいは、「質問の意図が分かりません」と聞き返すかもしれない。

しかし、何か答えなくてはいけないと思って、「私は、これまで『→』という標識は右の方向を指示するものであると理解している（社会的な実践（慣習）の中で学んできた）。だからこれもそうだと思って（解釈して）右に行く」、と言うかもしれない。しかし根拠の説明は、そこに標識があるということが終わっている。この答は、彼が右の道に行く根拠ではなくて、社会的な実践（慣習）によるという原因を説明しているものだ。それも後付けによる説明を。なぜなら、彼はその標識を見た時、必ずしもいつもその解釈を念頭に置いていたわけではないからだ。人はその標識を見て、自動行為のように右に行くことが普通だろう。

「理由（reason）の連鎖が終わりになったのに、更に『なぜ』と尋ねられると、人は、理由の代わりに原因（cause）を与えがちになる。」（*BB* p. 15, 『青色本』邦訳 p. 42、強調は論者）

慣習による行為、例えば、「→」という標識があれば右の道に行くことを、我々は生活の中で身に付けている（教えられたという自覚はおそらくないだろう）。経験の中でそのことを既に受け入れていて、改めて問題にすることはなくなっている。

「子供は、大人を信用することによって学ぶ。疑いは、信じることのあとに来る。」（*OC* § 160、強調はウィトゲンシュタイン）

「私は無数のことを学び、人間の権威に従ってそれを受け入れた。その後、私は、私自身の経験によって、多くのことが正しいと認められ、あるいは覆されるのを見出した。」（OC § 161、強調は論者）

我々は、規則に従った行為の仕方を、自然誌や社会制度などに基づいた社会的慣習によって身に付けてきた。このことを別の観点から考察しよう。

2(3) 規則による行為の仕方は解釈によって決められない

「さわやかウォーキング」の参加者は、分かれ道に標識「→」があると、右の道に行く。標識「→」には、右の道に行くという解釈しかないのだろうか。

一般に、規則¹⁷⁹に基づく行為の仕方は、解釈によって一義的に決められる、と考えがちである¹⁸⁰。しかし、「→」という記号（標識）は、右の道を指示するという意味にしか、解釈できないのだろうか。例えばそれが、左の道に行くことを指示すると解釈することもできるのではないか。というのは、「→」という記号自体が恣意的であるし、また、「→」は右を指示する、という記号の解釈も恣意的で、どうとでもとり得るからだ¹⁸¹。

「→」が右を指示するというのは、一つの取り決めであって、右を指示するという解釈しかない、ということではない。例えば「A→B」の「→」は、「A ならば B」とか「A から B」のように、「ならば」とか「から」の意味で使われることもある。記号の意味（記号に対する行為の仕方）は恣意的に取り決めることができるので、別の意味に解釈することができる。例えば標識の場合なら、「→」は左を指示すると解釈することもできる。そのため、『→』は左を指示する」という解釈をもっとはつきりさせようと、新しく「→ ←」という記号を使うことも考えられる。しかし、「→」も「←」も、どちらの記号も、その矢印の向きとは反対の向きを指示すると解釈することができるので、「→ ←」が左を指示するということは、解釈では定まらない。更に、「→ ← →」という記号があった場合、右か左かどちらを指示していると解釈すべきなのか。結局、記号の使用の仕方を、解釈によって一義的に決めることはできないことになる。そのため、記号の解釈ではなくて、記号に対する行為の仕方を取り決めることが必要になる。「→ ← →」の場合なら、一番右側に位置

¹⁷⁹ この場合、規則とは記号（標識）のこと。

¹⁸⁰ 「我々には、規則に従うどの行為も解釈（Deuten, interpretation）であると言いたくなる傾向（Neigung, inclination）がある。」（PI § 201、強調は論者）

¹⁸¹ 「人は、文法の諸規則を『恣意的（willkürlich, arbitrary）』とすることができる。」（PI § 497）「語は、恣意的な記号である。」（PI § 508）

する矢印の指示する方向に従うことに決め、というように¹⁸²。

記号の意味が解釈だけでは決まらないということは、規則に従う行為の仕方は、解釈だけでは決まらない、ということの意味する。ウィトゲンシュタインは次のように言う。

「[規則の] 解釈は……解釈されたものを支えるものとして用いることはできない。
解釈だけで意味 [行為の仕方=実践] は決まらない。」 (PI § 198、強調は論者)

規則に従う行為の仕方(実践)を決めるためには、規則の解釈だけでなく、実例も必要である。我々の規則の解釈には抜け道があるので、解釈ではなく実践によって、行為の仕方を決めなければならない。

「実践を決めるには、規則は十分でなく事例も必要とする。我々の規則には抜け道がある。実践は、自ら自身を証明しなければならない。」 (OC § 139)

規則に従って行為するとき、我々は、規則を解釈して行為をすると考えると、その「規則の解釈」について、さらにそれを解釈することが可能である、という主張を退けることはできなくなる。これは、規則に従った行為の仕方を、その解釈によって一義的に決めることはできない、ということの意味する。言い換えると、どんな行為の仕方でも、解釈によって規則と一致させることができる、ということになる。従って、規則による行為の仕方はその解釈によるとすると、規則は行為の仕方を決めるものなのに、規則の解釈はどんな行為の仕方も決められないという、規則のパラドックスが生まれる。

「我々のパラドックスは、次のようなものだった。それは、規則は行為の仕方を決めることができない、ということ。なぜなら、どのような行為の仕方も【解釈によって】規則との一致をもたらすから。その答えは、どんな行為の仕方も規則との一致をもたらすのであるとしたら、矛盾ももたらす、ということであった。それ故、ここには、一致も無ければ矛盾も無いであろう。」 (PI § 201)

規則の解釈と行為の仕方の間には、どこまでいってもギャップがある。「規則に従って行為する」と言うと、この文の「従って」という表現に引きずられて、規則(の解釈)は行

¹⁸² この段落の議論は、BB pp. 33-34 (邦訳『青色本』, pp. 70-71) を参考にした。

為の仕方を一義的に決める、と考えるしまうのである。しかし、規則の解釈は、行為の仕方を決める根拠にならない。

なお、この規則のパラドックスには、これとは別のパラドックスがあることも示唆されている。それは、規則は、（その解釈によって）行為の仕方を決めることができ無いにも拘らず、実際には断固とした行為の仕方を決めている、というパラドックスである。これはなぜか？しかしこれがパラドックスでないことは、先のパラドックスがパラドックスでないことと同じ理由によるのである。

ウィトゲンシュタインは、規則の解釈が行為の仕方を決める根拠にならないにもかかわらず、規則が行為の仕方を決めるのは、そこに「飛躍」があるからだ、と言う。これはどういうことか。飛躍があるとはどういうことか。それはどのようにして行われるのか。

答えを先取りして言ってしまうえば、それは、「解釈や理解によらない規則の把握の仕方」があるのである。即ち、我々の生活の中での慣習、訓練や教育を通じた実践による規則の把握の仕方がある。それによって規則から行為へと、解釈を飛び越えた飛躍が行われるのである。それをこれからみていこう。

2(4) 規則の解釈ではない規則の把握の仕方

ウィトゲンシュタインは、先の § 201 の引用に続けて、規則は行為の仕方を決定できないというのは誤解であって、我々には、規則の解釈によらない把握の仕方がある、と言う。

「ここに誤解があるということは、このような思考の道筋において、我々が解釈に次ぐ解釈を行っているということの内に、既に示されている。あたかもそれぞれの解釈が、その背後にあるもう一つの解釈を考えるまで、少なくとも一瞬の間、我々を落ち着かせるかのように。すなわちこのことによって我々は、次のことを示している。一つの解釈ではなく、その適用のケースバイケースから、我々が『規則に従う』と呼びまた『規則に背く』と呼ぶことのうちに現れる、規則の捉え方 (Auffassung einer Regel, a way of grasping a rule) がある、ということ。

それ故我々には、規則に従うどの行為も解釈であると言いたくなる傾向がある。しかし、規則の一つの表現を別の表現に置き換えたもののみを人は『解釈』と呼ぶべきである。」 (PI § 201、強調はウィトゲンシュタイン)

ウィトゲンシュタインはここで、規則の解釈ではない規則の捉え方がある、と言う。それは、規則の適用の個々の事例（適用のケースバイケース）から捉えられるものだ、と。

そして、規則に従うどの行為も解釈だと言いたくなる傾向があるが、規則の一つの表現を別の表現に置き換えたものを解釈と呼ぶべきで、この意味で規則に従う行為は、解釈ではないと言う。我々の規則に従った実際の行為の仕方には、規則の解釈に拠らない捉え方があって、それは、規則の適用の個々の事例による捉え方がある、と彼は主張している。

しかし、我々は規則を解釈せずに行為しているとすると、如何にして我々は、その行為をするのだろうか。ウィトゲンシュタインの言う、規則を解釈するのではなく、規則の適用の個々の事例によって、規則を捉える（行為の仕方を把握する）とは、どういうものか。

規則には様々な解釈がありうる。しかし我々は、共同体の中で、規則についての解釈を学ぶのではない。我々は、解釈以前の、解釈ではない規則の捉え方、即ち、実践を身に付けるのだ、とウィトゲンシュタインは言う。

「[解釈なしに] 初めに行為があった。」 (OC § 402)

我々は、規則に従った行為の仕方を共同体の中で、実践という行為（事例）を通じて身に付ける。誤った行為も、実践の中で修正される。規則の解釈（知識）は、実践（事例）を通じて学ばれた後になされる。

『規則に従うこと』は、一つの実践である。」 (PI § 202)

「規則を使う訓練はまた、その使用において間違っているものも示す。」 (OC § 29)

「子供は、かくかくの仕方^でで反応することを学ぶ、と私は言いたい。そのように反応するとしても、彼はまだ何も知っているわけではない。知識は、もっと後の段階^にな^らってようやく始まる。」 (OC § 538、強調は論者)

我々は、共同体の中で、規則の解釈^をを学ぶ以前に、規則に対する反応の仕方、実践を身に付ける。共同体の生活の中での慣習や訓練、教育を通じて、自覚的にあるいは非自覚的に、規則に対する決まった反応^のの仕方、実践を身に付ける。

「規則に従うことは、命令に従うことに類似している。人は、そうするように訓練され、決められた (bestimmt, particular) 仕方^でで反応する。」 (PI § 206、強調は論者)

規則や命令に従うことは、慣習や訓練、教育などによって、決められた仕方で反応することを身に付けることである。これは、言葉の意味を理解することにもあてはまる。我々は、共同体の中での慣習や訓練、教育によって、決められた反応の仕方を自然に身に付けるのである。

規則に従うこと、言語を理解することなどは、慣習や訓練、教育によって身に付けた、反応（応答）である。

「人は、道標の決まった慣用、慣習がある場合に限って、道標に従う。」（*PI* § 198）

「我々が『規則に従う』と呼ぶものは、ただ一人の人がその生涯でただ一度だけすることができるようなことなのか。—またこれは、もちろん『規則に従う』という表現の文法に関する注釈である。

ただ一度だけ、ただ一人の人が規則に従っていた、ということはありません。ただ一つの報告がなされ、一つの命令が与えられ、あるいは理解されていた、などといったことがただ一度だけあったということはありません。—規則に従う、報告をする、チェスをするということは慣習（習慣、制度）である。

文を理解することは、言語を理解することである。言語を理解することは、【言語使用の】技術に習熟することである。」（*PI* § 199、強調はウィトゲンシュタイン）

規則に従うということがあり得るためには、共同体の中で恒常的な慣習があらねばならない、とウィトゲンシュタインは言う。

規則に従うことは、規則の解釈によるのではなく、規則に対して決められた反応、その実践の仕方を身に付けることである。文を理解することは、語を使用する技術に習熟することである。そして、実践の仕方を身に付けること、語を使用する技術に習熟することは、慣習があることによる。

「私が、『Das Wetter ist schön（天気がいい）』という文を言ってみる。だが、語は結局のところ恣意的な記号である。——だからその代わりに『a b c d』を置いてみる。だがこれを読んでも、それを始めの意味に簡単に結びつけることはできない。——私は、『das』の代わりに『a』、『Wetter』の代わりに『b』といった具合に言うことに慣れていないのだ、ということができよう。しかしそのことで私は、私が『a』で直ちに『das』という語を連想することに慣れていない、ということではなくて、『a』を

『das』の代わりに——つまり『das』の意味で——使うことに、慣れていないのだ。
(私はこの言語に習熟していない)」 (PI § 508、最初と最後の強調は論者、二つ目の強調はウィトゲンシュタイン)

「a b c d」で「天気がいい」という意味を表わすためには、共同体の中で、それが慣用されている必要がある。共同体の中で慣用があれば、「a b c d」は言語表現としてそのまま通用するであろう。

人は、誕生直後は、立つことも歩くこともできない。だが、生活の中で自然に（非自覚的に）、這い、立ち、歩き、走る技術を身に付ける。同様に言語も、通常の生活の中で自然に（非自覚的に）、聞き、話す技術を身に付ける。聞く技術と話す技術は、立ち、歩く等の技術と同様に、通常の生活の中でしかるべき時期に、自然に身に付けられる。しかし、活字になった文字を読む技術とその文字を書く技術を身に付けるには、しかるべき時期に、しかるべき訓練や教育を必要とする¹⁸³。いわゆる読み、書き、そろばんは、学習を必要とする。

慣習や訓練、教育によって身に付けた規則に対する行為の仕方は、根拠なしに行われる。

『どんなにあなたが彼に一連の装飾模様を続けることを教えるにしても、一彼は、自分がどうしたら自主的に続けられるかを、いかにして知ることができるのか。』—では、私はそれをいかにして知っているのか。—この問いが、『私に根拠 (Gründe, reasons)があるのか』を意味するのなら、その答えは、根拠はじきに尽きてしまう、というものである。そしてその時、私は、根拠なしに行為するであろう。」 (PI § 211、最初の二か所の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者)

そして、慣習や訓練、教育によって身に付けた規則に対する行為の仕方は、根拠なし行われるだけでなく、完全な確信を持って行われる。

「私が恐れている誰かが、私に、数列を続けよと命令する場合、私は即座に、完全な確信を持って行為するであろう。根拠が欠如していることは、私の気に掛からない。」
(PI § 212、強調は論者)

¹⁸³ 言葉を話すこと、聴くこと、文字を読むこと、書くことはそれぞれ別の事柄で、それぞれ別の技術を必要とする。(『ブルーストとイカ』を参考にした。)

2(5) 規則に従うのは認識知によるのではなく技術知を身に付けること

規則に従うこと、命令に従うこと、言語を理解することは、自覚的にあるいは非自覚的に、実践を身に付けることである。実践を身に付けるということは、認識知（「knowing that」、推論を経て得る理論的知識）でなくて、実践知（「knowing how」、訓練や練習を経て得る一種の能力）である。ゲームにしても、その規則を明示的に知らなくても、ゲームを何度も見ることで、ゲームができるようになることがある。そもそも、がんじがらめに規則に規定されたゲームは無い（PI § 68）。語の意味は、定義によって説明されるだけでなく、事例を挙げたり、現物を示したりすることによっても説明される（第1章の2）。このことと同様に、規則に従った事例（行為）を見ることで、規則が理解できるようになる。例えば、ベイカー（G.P.Baker）とハッカー（P.M.S.Hacker）は、『哲学探究』の§ 78を注釈する中で、認識知と実践知の区別に触れている。『哲学探究』の§ 78は次のとおりである。

「知っていることと語ることを比較せよ。

モンブランは何メートルの高さかー

＜ゲーム＞という言葉はどのように使われるかー

クラリネットはどのように聞こえるか。

何かを知っているのに、それを語ることができないということに驚く人は、おそらく、最初のような事例を考えているのだ。三番目の事例を考えているのではないことは確かである。」（PI § 78、強調はウィトゲンシュタイン）

ベイカーとハッカーはこの節の注釈の中で、ウィトゲンシュタインは知ってはいてもそれを語ることができない事例としてクラリネットはどんな音がするのかを知っていることを挙げ、それを＜ゲーム＞とは何であるかを知っていることに類似させている、と言って次のように続ける。

「それは、次のようなことであると思われる。＜ゲーム＞という言葉がどのように用いられるかを知っていることは、モンブランの高さを知っていること（即ち、それが4807mであることを知っていて、かつまたそのことを語ることができるということ）には似ていない。だからそれ【＜ゲーム＞という言葉がどのように用いられるかを知っていること】は、*knowing how*（実践的能力）に該当する。*knowing how*は、*knowing that*（理論的知識で、それは定義を与えることによる事例—おそらく何世紀かにわたる知的努力の末に、数とは何であるかを知っているということについて、フレーゲが

語ったような事例ーにおいて例証される)に對比される。」(Baker and Hacker [2005], p. 172、強調はベイカーとハッカー)

このように、ベイカーとハッカーは、＜ゲーム＞という言葉がどのように用いられるかを知っているということは、モンブランの高さを知っているということに似ていない、と言う。モンブランの高さが何 m かを語ることはできるが、ゲームとは何であるかを定義で語ることができないからだ。また、クラリネットについても、それがどんな音がするかを語ることができない。この点で、ゲームとは何かを知っていることと、クラリネットがどんな音がするかを知っていることは、事例を通じて知ることではどちらも同じ実践知だ、と言う。だが、この両者が相違する点もある。クラリネットがどんな音がするかは、実際にその音(実物)を示すことで知られるが、ゲームという言葉は様々なケースで使われるため、一つの事例を示すだけでは足りない。それが知られるには、様々な事例を示す必要がある。

ここでは、言葉の意味(言葉の使われ方)の説明が、定義によること(モンブランの高さ)でもなく、実物を示すこと(クラリネットの音)でもなく、様々な事例を示すこと(ゲームとは何か)によってなされる、ということが示されている。そして、ベイカーとハッカーは、＜ゲーム＞という言葉がどのように用いられるかを知っているという場合が、*knowing how*に該当する、と言う。

ゲームの意味は、様々な事例を通して知られる。それが *knowing how* であるとする、規則に従うこと、命令に従うこと、言語を理解することは、生活の中で自然に、あるいは訓練と練習によって、その技術(行為の仕方)を身に付けるものであることから、これらは *knowing that* (理論的知識)ではなく、*knowing how* (実践知)に相当すると思われる。

先にウィトゲンシュタインが、「一つの解釈ではなく、その適用のケースバイケースから、我々が『規則に従う』と呼びまた『規則に背く』と呼ぶことのうちに現れる、規則の捉え方がある」(PI§ 201)と言う時、彼は、規則の把握の仕方を、認識知ではなく実践知として考えていたものと思われる。(規則の解釈は認識知に相当する。)

我々は、生活の中での慣習を通じて自然に、あるいは訓練や教育の個々の事例によって自覚的に、規則に従う行為の仕方(技術)を身に付ける。規則に基づいてする行為は、その技術に習熟すればするほどほとんど自動的に行われる¹⁸⁴。技術に習熟すれば、行為の

¹⁸⁴ ウィトゲンシュタインは、規則に従って動くことを習得することについて、規則を表わした図表を参考にして動く習い始めの段階、次いで図表無しにそれを連想することによって動く段階、最後に図表も連想も

最中に規則を意識することはない。規則に従った行為だということさえ全く気付かないこともある。規則についての解釈は、後から行われるか、全く行われないこともある。しかし、そこでなされた行為は、その規則に従っている。

次の一手を熟考している対局中の将棋の棋士のオカレントな意識に、次の指し手のいくつかが現れていても、将棋の規則は現れていない。しかし、彼が指す次の一手は、その規則に従っている。彼の指し手の基礎には将棋の規則がある。それは彼が、規則に反する手を指さないことに示されている。

ボールを蹴り回している競技中のサッカー選手のオカレントな意識に、サッカーのルールは現れていない。しかし、彼の体の動きの基礎には、サッカーのルールがある。そのルールは、彼の体の動きの中に示されている。

同様に、人が話したり、命令したり、報告するなど言語を用いる時、その人のオカレントな意識に、言語文法¹⁸⁵はない。しかし、そこでなされる言葉は、言語文法にかなっている。かといってその人は、そこで用いた語の言語文法を説明せよと言われてもできないかもしれない。ちょうど子供が自在に言葉を使うことができても、自分の使っているその言葉の言語文法を説明することができないように。でもその子は、言語文法にかなった言葉の使い方をしている。その子の言語使用の基礎には、言語文法の規則がある。たとえその子は気が付かなくても。

規則に従う行為の仕方のこうした在り方は、ウィトゲンシュタインの心的状態の区分でいくと、「心的傾性」に分類されると思われる（第1章の6）。そうした在り方は、感覚や感情のような本物の持続を持たないが、意識の中断や注意の移動によって中断されることが無い、という意味で一種の心的傾性である。

規則に従う行為の仕方（技術）に習熟することは、慣習や訓練、教育によって、規則を規則として意識せずに、規則に従った行為をすることである。行為者が気付いていようとまいと、規則は、その行為者の行為の内に示されている。規則は、規則に従った行為の基礎にある。規則に従う行為（帰結）は、規則との関わりを知らなくても行為者にとって自明（そうすることがあたりまえ）である。それは、規則に従うことが、認識知ではなく実践知である故に、それは自動的に、盲目的に、疑問の余地なく、断固として行われる。規則は実践知として、行為の足場の一部になっている。

無しに動く段階を描写している。（BB pp. 95-96, 『茶色本』 I § 1(33)-(38)）規則に習熟して動くのは、最後の段階の動き方である。

¹⁸⁵ ここで言う「言語文法」とは、いわゆる日本語文法のような言語学者が扱う文法のことである。

「規則が、そのすべての帰結を前もって生み出したように見えるためには、その帰結が私にとって自明であらねばならない。この色を〔言語使用の規則に従って〕『青』と呼ぶことが私にとって自明であるように、〔規則に従った帰結は〕自明でなければならない。」（*PI* § 238、強調はウィトゲンシュタイン）

「規則に従って生じたのか、そうでないのかについて、（例えば数学者の間で）いかなる論争も起きない。……それは、我々の言語が働く足場に属している。」（*PI* § 240、強調は論者）

「規則に従う時、私は選択をしない。
私は、規則に盲目的に従う。」（*PI* § 219、強調はウィトゲンシュタイン）

規則が成文化されていて、その文を読むことによって規則を学ぶこともあるが、実際の行為の仕方は、実践や事例を通じて学ぶ。規則に裏打ちされていることを知らない（意識されない）まま、規則に従った行為の仕方を身に付けることもある。この場合、ウィトゲンシュタインは規則を「学ぶ」とは言わない（*OC* § 279）。「学ぶ」が「意識する」ことを含意するからだ。先に述べたように、我々が母国語を習得する時、我々は、母語を言語文法の規則から学ぶのではなく、聞いたり話したりという生活を通じて、自然に習得する。母語を聞いたり話したりすることは、その言語文法の規則を知らなくてもできる。しかし、そこでなされる言語表現は、言語文法の規則に適っている。

ここで、本節の 2(1) に挙げた標識「→」の事例に戻ろう。さわやかウォーキングの参加者達が、「→」を見て右の道に行くことに、根拠はない。どんな解釈もしていない。彼らが右の道に行く根拠は、標識「→」を示すことで尽くされている。しかし、彼らがその標識「→」で右の道に行くことに、原因はある。それは、共同体の中で慣習などによって、自然に身に付けた反応の仕方である、というものである。

以上を通じて、「規則は行為の仕方を決めるものなのに、規則はどんな行為も決められない」というパラドックスと、「規則はどんな行為の仕方も決められないのに、（実際は）断固とした行為の仕方を決めている」というパラドックスは、いずれも、「規則は、解釈によって行為の仕方が決められるのではなく、実践によって決められる」、ということで解消されることが明らかになる。

だが、共同体の中での慣習という原因によって身に付けた規則の捉え方（行為の仕方）

が、行為において断固としたもの（「揺るぎないもの」）になるのはなぜか。次節でこの問題を取り上げよう。

2(6) 規則違反について

規則による行為の仕方を身に付けた人は、その行為の仕方に少しの迷いもない。断固として行為は行われる。では、そのようにして身に付けた行為の仕方に、規則違反は無いのだろうか。規則に従った行為において、不注意による規則違反はあり得るが、完全な規則違反の論理的可能性は排除されている。

将棋を例にして考えよう。将棋を指している時に、ある局面で作戦として飛車先の歩について相手を攻めるべきか、玉を移動して守りを固めるべきか、最善の指し手に迷う（考える、疑う）ことはある。だが、二歩を指すべきかどうかを迷うことは絶対にない。二歩を指すことは、将棋の規則違反で、即負けになり、指し手から除外されている。だから不注意による以外、二歩は指さない。

もちろん、二歩を認めるゲームをすることはできる。だがそれは、将棋をするのではなく、別のゲームをすることだ。将棋で二歩を指すことはあり得ない。この場合の「あり得ない」は、規則によって、将棋で二歩を指す「論理的可能性」が排除されているという意味での、「あり得ない」である。なぜなら将棋は、二歩を禁じることを含めて、一定の規則を足場にして成り立つゲームである。だから、その規則に反することをするとは、ゲーム自体を成り立たなくすることだ。そのような規則違反をすることは、将棋を指すのではなく、将棋を破棄することである。だが、二歩を指すことは、「事実」としてはあり得る。プロの公式戦でも、不注意でついうっかり二歩を指して、その時点で負けた事例がある。しかしこの場合でも、その当事者達は、二歩を指したのは「ついうっかり」の出来事で、指した者は直ちに自分の負けを認め、指された方は自分が勝ったことに、いささかの迷いもない。彼らが直ちにそれを認めるということが、二歩は将棋の規則違反であるということを受け入れているということを示している。そこには規則に対して疑いを差し挟む余地は全くない。この「ない」は、繰り返すことになるが、疑いの論理的可能性が排除されているという意味での、「ない」である。もし二歩を指して、自分の負けを疑う人がいたら、我々はその人を、将棋を指す人とは理解しない。その人は将棋の初心者か、将棋を知らない人だと思うだろう。

同様に、標識「→」を見て、右でなく左に行くことを理由なく主張する人を我々は理解しないだろう。

このように、不注意などによって規則違反をすることはあるが、「例外的に起こる完全な

規則違反」 (§ 647) とは区別される。完全な規則違反をする人は、そのゲームを知らない人か、ゲームを破棄する人である。

2(7) 規則と「揺るぎないもの」

ここで、ウィトゲンシュタインの規則についての考察をまとめると、次のようになる。

- ① 規則は、言葉によって明示的に表現される場合もあるが、そうでない場合もある。また、規則は恣意的に定められる。
- ② 規則を表現する命題は文法的命題であり、正か誤か（規則に適合しているか否か）を問うことには意味があるが、真・偽を問うことや正当化を求めることは意味がない。
- ③ 規則に従う行為の仕方を身に付けるのは、解釈や推論の認識知によるものではない。それは、共同体の生活の中での慣習や訓練、教育を通じて、自然にあるいは自覚的に身に付ける実践知による。
- ④ 規則に従う行為の仕方に根拠はない。
人は、規則に従う行為の仕方を身に付けると、根拠なく、完全な確信を持って行為する。選択をしない。盲目的に規則に従う。
習慣や訓練、教育は、規則に従う行為の仕方の根拠（理由）ではなく、それを身に付ける原因である。
- ⑤ 規則は、行為の足場である。規則は、行為の内に示される。
- ⑥ 規則に従って行為する時、オカレントな意識に規則が現れることは、普通はない。だからといって、不注意による以外、規則違反をしない。規則について解釈することがあるとすれば、それは行為の後である。その心的状態のあり方は、心的傾性としてある。
- ⑦ 規則に従う行為は断固として行われる。その揺るぎなさは、規則に対する疑いの論理的可能性が排除されている（規則を疑うことは自己論駁に陥ることが免れない）ことによる。また、例外的に起こる完全な規則違反をする人は、ゲームを知らないか、ゲームを破棄する人である。

このように、規則に従う行為の仕方を身に付けるのは、習慣や訓練、教育を原因とする実践知である (③)。規則に従う行為は、根拠なく、完全な確信を持ってなされる (④)。規則は行為の足場であり、規則は行為の内に示されている。規則はオカレントな意識に現れることはなく、その心的状態のあり方は、心的傾性としてある (⑤、⑥)。規則に従った行為の揺るぎなさは、それに対する疑いや誤りの論理的可能性が排除されていることに

よる (⑦)。

また、ウィトゲンシュタインによる規則についてのこれらの考察を、彼の「揺るぎないもの」についての考察と比較する前に、「揺るぎないもの」についての彼の考察をまとめておこう。

- ① 言語ゲームは、「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームの二層の構造からなる。「揺るぎないもの」は、「知識」、「疑い」、「信念」等の通常の認識的ゲームの枠組み、足場、蝶番、回転軸の役割を果たす。「揺るぎないもの」は、通常の認識的ゲームによる論証が生きる場であり¹⁸⁶、認識的ゲームを意味あるものにする。
- ② 「揺るぎないもの」は、認識的文脈の中では言葉によって明示的に表現されることがない。仮に表現されたとしても教示や用法の説明として以外、通常それは意味をなさず、ナンセンスなものになる¹⁸⁷。
- ③ 「揺るぎないもの」を記述する命題は、経験命題の形式をしているが、文法（規則）の命題として理解されうる¹⁸⁸。「揺るぎないもの」を記述する命題は、それを反証する理由を想像することが困難な命題である¹⁸⁹。
- ④ 「揺るぎないもの」に根拠はない¹⁹⁰。それは自明である¹⁹¹。
- ⑤ 「揺るぎないもの」は、推論や論証によって得られる認識知ではない。それは、文化・歴史を受け継いだ¹⁹²共同体の中での生活や実践¹⁹³、過去の体験¹⁹⁴、教育を通じた訓練¹⁹⁵、動物の本能にも似たもの¹⁹⁶、人間の自然誌等に基づいた、慣習によって、非明示的に形成される実践知である。これらは「揺るぎないもの」の根拠でなく、原因である。自然にあるいは自覚的に学ばれるものの中で、あるものは次第に「揺るぎないもの」に固定されていく。それは、後から発見されるものである。それは蝶番として、あるいは回転軸として、認識的ゲームの枠組み、背景を構成する。
- ⑥ 通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）のオカレントな意識に、「揺るぎないもの」が現れ

¹⁸⁶ § 105

¹⁸⁷ § 460, 461

¹⁸⁸ § 57

¹⁸⁹ § 93, 245, 247

¹⁹⁰ § 166, 253, 559, *PI* § 481, 482

¹⁹¹ § 100, 136, 151, 250

¹⁹² § 94

¹⁹³ § 476

¹⁹⁴ § 429

¹⁹⁵ § 128, 144, 160, 161, 263, 283, 286 等

¹⁹⁶ § 359, 475

ることはない。「揺るぎないもの」は行為の内（行為する態度、構えの内）に示され、その心的状態は、心的傾性としてある¹⁹⁷。

- ⑦ 断固として行われる行為は、知識にではなく、確かさに対応している¹⁹⁸。その揺るぎなさは心理的に、あるいは主観的に揺るぎないのでなく、疑いや誤りの論理的可能性が排除されていること、即ち、言語ゲームの二層の構造から自己論駁に陥ることが免れないという論理的なことによる。それについて誤ることは、例外的に起こる完全な規則違反で、その人が精神障害であることを示す。

規則と「揺るぎないもの」についての以上の考察を踏まえて、本節の最初に課題として掲げた、(1)「揺るぎないもの」の役割はどのようにゲームの規則の役割に似ているのか、(2)「揺るぎないもの」は規則のどういう性格を持つのか、についてまとめよう。

2(8) 「揺るぎないもの」の役割はどのようにゲームの規則の役割に似ているのか

前節にまとめた規則と「揺るぎないもの」から、「揺るぎないもの」の役割は、「規則」の役割に多くの点で類似していることが分かる。類似しているところは次の点だ。

- (1) 規則の役割は、ゲームをそのゲームたらしめることである。例えば将棋の規則は、将棋というゲームを成り立たせる役割を持つ。規則は、ゲームの生きる場である。
- 通常と言語ゲーム（認識的ゲーム）は、「揺るぎないもの」が言語ゲームの枠組みを構成していて、その「揺るぎないもの」が認識的ゲームを成り立たせる役割を果たしている。「揺るぎないもの」は、認識的ゲームの生きる場である。
- (2) 規則も「揺るぎないもの」も、それら自体に根拠はない。それらが、行為（規則に従った指し手、通常認識的ゲーム）を意味あるものにする。
- (3) 我々は規則に従う時、選択をしない。盲目的に規則に従う。即ち、ゲームをしながらそのゲームの規則を疑うことは、当該規則によって成り立つゲーム自体を疑うことである。従って、それは、自己論駁に陥ることが免れない。規則に対する疑いや誤りの論理的可能性は、排除されている。その疑いや誤りは理解されない。もし規則を疑うとか軽率でなく誤る人がいれば、その人はゲームを知らない人か、ゲームを破棄する人である。

我々は、認識的ゲームの中で行われる判断を疑うことができる。認識的ゲームの中

¹⁹⁷ 「私は自分の行為と言葉によって、この【揺るぎないものについての】知識を示している。」（§ 431, 強調は論者、他に § 284, 307, 427）

¹⁹⁸ § 511

でなされる判断を疑う論理的可能性は排除されていない。だが、認識的ゲームの外にある「揺るぎないもの」は、「あらゆる判断を放棄することなしに疑うことはできない」ものである。これまで論じてきたように、「揺るぎないもの」を疑う疑いは、自己論駁に陥ることが免れない。「揺るぎないもの」を疑う論理的可能性は、排除されている。

「揺るぎないもの」に疑いを差し挟む余地は全くない。もしそれを誤る人がいれば、我々はその人を理解しない。その人を精神障害者だと思うだろう。

このように、規則も「揺るぎないもの」も、それを疑うことは、自分の座っている木の枝を切り落とすようなもので（PI § 55）、自己論駁に陥ることが免れず、理解されない。規則や「揺るぎないもの」に対する疑いや誤りの論理的可能性は、排除されている。

このように「揺るぎないもの」の役割は認識的ゲームを成り立たせるものであり、ゲームの規則の役割はゲームを成り立たせるもので、両者の役割は似ている。

2(9) 「揺るぎないもの」は規則のどういう性格を持つのか

先の 2(7)節でまとめた規則と「揺るぎないもの」から、「揺るぎないもの」は次のような規則の性格を持つと考えられる。

- (1) 「揺るぎないもの」も「規則」も、それを表現するものの身分は、文法的命題である。そのため、規則に適合するか否か（正か誤か）を問うことには意味があるが、経験命題ではないので、世界の事実と合致するか否か（真か偽か）を問うことには意味がない。
- (2) 「揺るぎないもの」も「規則」も、解釈や推論によって得られる認識知ではない。規則に従う行為の仕方は、生活の中での慣習や訓練、教育により、実践を通じて学ばれる実践知である。しかしながら規則と違って、「揺るぎないもの」が身に付く仕方は非自覚的で、後から発見されるものである。
- (3) 規則に従ってなされる行為は、完全な確信を持って行われる。断固として行われる行為は、確信（揺るぎないもの）に対応している。
- (4) 行為には、様々な感覚や感情がオカレントな意識に現れて変化するが、「揺るぎないもの」や「規則」がオカレントな意識に現れることはない。「揺るぎないもの」や規則は、行為の背景にあって、オカレントな意識が変化しても、変化したり中断したりすることはない。その心的状態のあり方は、本物の持続を持たない心的傾性である。
「揺るぎないもの」は、認識的ゲームにおける行為の内に示され、規則は、規則に従った行為の内に示される。

このように、「揺るぎないもの」は規則のような性格を持つ。しかし、「揺るぎないもの」には規則と異なる面もある。規則との関係についての考察の最後に、この相違する面を取り上げよう。

2(10) 「揺るぎないもの」と規則の相違

「揺るぎないもの」の役割が規則に類似した役割を持ち、また、「揺るぎないもの」が規則のような性格を持つということがどういうことなのかを前節で明らかにした。だが、「揺るぎないもの」が規則と相違する面もある。

規則には様々なものがあり、また規則は、恣意的に定めることができる。言語の文法規則を始め様々な規則は、我々の生活の一部にあり、規則に基づく行為は、我々の認知的行為の一部をなしている。言語文法（規則）やそれに基づく言語表現は、国や地域によって異なり、また、それを表わす記号も恣意的で異なっている。言語以外にも、政治・社会制度の違いに応じて様々な規則がある。多種多様なゲームがあり、それに依拠して規則も異なる。またゲームには、その規則の内容が恣意的で規則を容易に変えることのできるゲームもあれば、規則の内容を変えることが別のゲームをすることになるものもある。規則違反は、ゲームの中で排除されている指し手であり、ペナルティが科せられることがある。規則違反は、不注意などによるのでない限り、その人がゲームを理解しているかどうか疑われる¹⁹⁹ものである。

これに対して、「揺るぎないもの」（ハミルトンの言う「非人格的ムーア命題」）は、我々の世界像を構成する。それは、我々の生活全体（言語ゲーム）の基礎にある。それは、政治・社会制度の基礎にあつて、そこで行われる様々な認知的ゲームの足場、蝶番の役割を果たしている。認知的ゲームにおいて行われるあらゆる確証や反証は、この「揺るぎないもの」を基礎にして行われる。「揺るぎないもの」の体系は、様々な認知的ゲームの生きる場である。

「揺るぎないもの」を変更することは、「あらゆる判断の基礎を私が失うことを意味する」（§ 614）ものであり、簡単にはなされない²⁰⁰。

「揺るぎないもの」に対する誤り（違反）は、規則と同様に、認知的ゲームの中で排除されている指し手である。それは、ゲームの中にその場所が用意されている誤りではなく、

¹⁹⁹ 「私がもし誤った言明をすれば、そのことによって私がそれを理解しているかどうか不確かになる。」（§ 81）

²⁰⁰ 類似のコメントとして他に、§ 92, 419, 492, 494, 613 等がある。

「完全な規則違反の誤り」 (§ 647) で、「精神障害」 (§ 71) か「頭がおかしくなった」 (§ 155) ものとみなされるような誤りである。

「揺るぎないもの」と規則の違いは、「揺るぎないもの」が我々の生活全体（言語ゲーム）に関係しているものである一方、規則は個々の言語ゲームにおいて「揺るぎないもの」に類似した役割を果たしている、と考えられる。個々のゲームの規則の変更は、単に違うゲームをすることであるが、「揺るぎないもの」の変更は、その影響が生活全体に及ぶ。それは、「あらゆる基準を破棄」 (§ 492) し、「世界を全く別様に見る」 (§ 92) 変更である。また、個々のゲームの規則違反はペナルティで済むが、「揺るぎないもの」の規則違反は精神障害の扱いを受ける。

また、今一つの相違は、ハミルトンが、指摘していることで（第 4 章の 3(2)）、チェスは初めに規則を学ぶが、ムーア命題はチェスと違って、規則を最初に明示的に学ぶことはない。

我々は、将棋を学ぶ時、初めにその規則を明示的に教えられ、それを学ぶことで将棋というゲームの仕方を身に付ける²⁰¹。多くのゲームは、その規則を最初に明示的に学ぶことから始まる。

しかし、これに対して我々は、「揺るぎないもの」を、将棋の規則のように初めに「はっきりと学ぶことはない」 (§ 152)。我々は、それを「後から発見する」 (§ 152) ものである。発見に至らないものも無数にある。しかし我々は、それらを自覚することが無くても、既に一つの体系として持っている。ここに、「揺るぎないもの」と将棋のようなゲームの規則との一つの違いがある。

さて、本章ではこれまで、認識的ゲームとその枠組みを構成する「揺るぎないもの」という言語ゲームの二層の構造について、また、「揺るぎないもの」と規則との関係について論じてきた。認識的ゲームの中では根拠を求めることに意味があった。しかし、「揺るぎないもの」には原因はあっても根拠はない。根拠を問うことに意味があるかないかは、認識的ゲームにおける命題と「揺るぎないもの」の根本的な違いである。

これまで根拠や原因という言葉の特に説明することなく用いてきたが、ではウィトゲンシュタインは、根拠ということは何を考えていたか。またそれは、原因とどう違うと考えていたか。次節で、根拠と原因についてのウィトゲンシュタインの考えを見てみよう。

²⁰¹ ゲームにも明確な規則によって制限されていないものもある。（*PI* § 68）ゲームの規則を明示的に学ぶことなくゲームの実践を通じてゲームを学ぶこともある。（*PI* § 70, 71）

3 根拠と原因

「揺るぎないもの」は、推論や論証によって得られるのではない。それは、共同体の中での生活や慣習、教育を通じた訓練、過去の経験、人間の自然誌等によって、非明示的に形成される。だが、これらは、「揺るぎないもの」が形成される根拠ではなく、原因である。では、「揺るぎないもの」の根拠は何か。ウィトゲンシュタインは、「揺るぎないもの」には根拠がない、と言う。

「十分に基礎付けられた信念の基礎に、基礎付けられていない信念がある。」 (§ 253)

基礎付けられた信念とは、認識的ゲームの中で表現される信念である。また、基礎付けられていない信念とは、認識的ゲームの中の信念を基礎付けるものの自らは基礎付けられていない信念で、「揺るぎないもの」のことである。この「揺るぎないもの」を獲得するのに、シャロックは二つの仕方を区分した(第4章の2(6))。一つは、自然に吸収・取り込まれる本能的なものによる仕方、もう一つは、訓練・教育による仕方である。彼女は、蝶番(揺るぎないもの)自体がこうした本能的なものや訓練から、「我々の概念的足場の一部になった²⁰²」と言う。しかしながら彼女は、蝶番の概念的な特徴の一つに、「非経験的であること(諸感覚に由来しないこと)」を掲げている(第4章の2(2))²⁰³。従って彼女はここで、以前の経験(訓練・教育)は、現在の確信(蝶番)の根拠ではなく原因だという意味で言っているのかもしれないが、根拠だといっているようにも見える。実際、例えば熱いものに手を触れると火傷をするという信念は「揺るぎないもの」の一つで、その信念は、火傷をした過去の経験が根拠になっている、と言いたくなる。しかし、ウィトゲンシュタインは、「揺るぎないもの」は、経験が根拠になっているのではない、と言う。

「私は、子供の頃からこのように判断することを学んできた。これが判断である、と。そのように判断することを私は学んできた。即ちそれを判断として私は知るに至った。しかし、そのように判断すること、即ち、そのように判断することが正しいということ、を我々に教えるのは経験ではないのか。しかし、経験はどのようにして我々にそれを教えるのか。我々がそれを経験から受け取ることはできるだろう。しかし経験が、経験から何かを受け取れと我々に勧めるのではない。経験は、我々がそのように判断する根拠(単に原因だけでなく)であるとしても、我々は、再びまたこれを根拠と見

²⁰² Moyal-Sharrock [2007], p. 143

²⁰³ Moyal-Sharrock [2007], p. 72

なすための根拠を持たない。」 (§ 128-130、最後の強調は論者、それ以外はウィトゲンシュタイン)

「経験は、我々の判断ゲームの根拠ではない。顕著な成功【体験】もまた、その【判断ゲームの】根拠ではない。」 (§ 131、強調は論者)

「以前の経験は、私の現在の確信の原因であるということは十分にあり得るが、それはその根拠であるだろうか。」 (§ 429、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者)

以前の経験は、我々の判断ゲーム（認識的ゲーム）の根拠ではない、また、以前の経験は、現在の確信（揺るぎないもの）の原因でありうるとしても、それは根拠ではない、とウィトゲンシュタインは言う。彼は、根拠と原因をどのように区別していたのか。最初に 3(1)で、このことについて論じる。次いで 3(2)で因果関係についての一般的な考えを取り上げて、それをウィトゲンシュタインの因果概念と比較する。これらを踏まえて、3(3)で以前の経験は確信の根拠にならない、というウィトゲンシュタインの考えを論じ、3(4)で「揺るぎないもの」と原因の関係を整理する。

3(1) ウィトゲンシュタインによる理由（根拠）と原因の区別

根拠と原因は、どう違うのか。ウィトゲンシュタインは『青色本』の中で、理由（根拠）と原因の文法の違いについて、次のように言う。

「……しかし、この点で、別の混同、理由（根拠 reason）と原因（cause）の混同が入り込んでくる。人は、『なぜ』という語の多義的な用法によって、この混同に導かれる。だから、理由【根拠】の連鎖が終わりになっても、なお『なぜ』と問われると、人は、理由【根拠】の代わりに原因を与えがちになる。例えば、『私が君に赤の色を描くように言った時、なぜ君は【他の色でなく】正にこの色を描いたのか』という質問に、君が、『私は前にこの色のサンプルを見せられて、同時に＜赤＞という語が私に発音された。そのため私は、＜赤＞の語を聞けば今ではいつもこの色が頭に浮かぶのです』と答えるとしたら、この場合、君は自分の行為の原因を与えたのであって、理由【根拠】を与えたのではない。

君の行為はこれが原因だ、という命題は一つの仮説である。その仮説は、おおまかに言って、多数の経験が一致して、君の行為は我々が行為の原因と呼ぶある諸条件の規

則的な結果であるということを示すのであれば、十分基礎付けられ (well-founded) ている。[しかし] 君がある陳述をする、特定の仕方で行為をするなどの理由 [根拠] を知るためには、一致する経験は一つも必要ではないし、君の理由 [根拠] の陳述は、仮説ではない。＜理由 [根拠]＞と＜原因＞の文法の違いは、＜動機＞と＜原因＞の文法の違いに非常によく似ている。もちろん、人は、原因を知ることができず、ただそれを推測できるだけだ、とすることができる。他方、人は、動機についての話で、『もちろん、私は、自分がなぜそれをしたか知っていなければならないことは確かである』としばしば言う。私が、『我々は、原因はただ推測できるだけだが、[自分の] 動機は知っている』と言う時、この言明は、文法的な言明であることが後に明らかになるだろう。この＜できる＞は、論理的可能性を言っている。

原因を問い、そして動機を問う、＜なぜ＞という語の二重の使い方が、我々は動機を知ることができるのであって、単に推測できるだけではないという考えと一緒にあって、動機は、直接に気が付いている原因、『内側から見られた』原因、または、体験される原因だとする混同を生むのだ。一理由を与えることは、君が、ある結果に導かれた計算を与えることに似ている。」 (BB p. 15、邦訳『青色本』 pp. 42-43、強調はウィットゲンシュタイン)

ここでウィットゲンシュタインは多くのことを語っているが、それらは次のようにまとめられるだろう。

- (1) 人は、「なぜ」という語の多義的な用法によって、理由と原因の混同に導かれる。「なぜ」という語の二重の使い方が、動機は直接気が付いている原因だとか、内側から見られた原因だとか、体験される原因だ、という混同を生む。
- (2) これが原因だという命題は、一つの仮説である。その仮説は、多数の意見が一致して諸条件の規則的な結果であるということを示すという経験に基礎づけられていれば、仮説として定立できる。
- (3) 行為の理由に、一致する経験は必要でない。理由の陳述は仮説ではない。
- (4) 理由と原因の文法の違いは、動機と原因の文法の違いによく似ている。
「原因はただ推測できるだけだが、[自分の] 動機は知っている。」これは、原因と動機が異なることの文法的な言明である。この場合の「できる」は、論理的可能性のことを言っている。
- (5) 理由を与えることは、ある結果に至った計算を与えることに似ている。

(1)について、ここで注意すべきは、ウィトゲンシュタインは、行為を説明するのに原因でもってする場合を批判しているのではない、ということである。行為を説明するのに、理由（根拠）と原因を混同してはならない、と言っているのである。ウィトゲンシュタインは原因による説明を否定している、と誤解している解釈者が多い²⁰⁴ので、この点を特に強調しておきたい。

自分のした行為に、なぜと問われてそれを説明する時、我々は、理由（根拠）を答える場合と原因を答える場合がある。理由の連鎖には終わりがある。理由〔根拠〕が尽きたにもかかわらず、さらに行為の説明を求められると、人は、理由（根拠）に変えて原因でもって答えがちになる。このような「なぜ」についての二重の用法が、理由と原因の混同を生む、とウィトゲンシュタインは言っている。

(2)及び(3)について、原因は一つの仮説であって、その原因が仮説として定立できるには、多数の意見が一致してそれが規則的な結果であることを示す経験に基礎づけられていなければならない。しかし、理由にはそのような一致する経験は一つも必要ではなく、理由は仮説でない、と言う。

(4)について、原因はそれを推測できるだけだが、動機（理由）はそれを自分が知っている、これは原因と動機（理由）の本質的な違いである、と言う。そして、「推測できる」の「できる」は、論理的可能性としての意味だ、と言う。これが意味するところは、原因は、推測であることの論理的可能性が排除されないが、動機は、推測であることの論理的可能性が排除されているということだと解釈される。言い換えると、原因は動機と違って、自分はそれ（原因とされるもの）を知らないということがあり得るということ、また、推測は疑いや誤りの論理的可能性を含意するので、原因としての説明は、疑いや誤ることがあり得るということである。しかし、動機の場合は、行為の説明がどんなに常識からかけ離れているように思われるものであっても、その説明が「推測」であるという論理的可能性は排除されているので、疑いや誤ることがあり得るということも排除されている。だから動機は、推測するのではなく、知っていると言われる。この場合の「知っている」は、疑いや誤りの論理的可能性が排除されている意味での「知っている」である。自分の動機に疑いや誤りの論理的可能性が排除されているというのは、自分の感覚や感情、意図に、疑いや誤りの論理的可能性が排除されているのと同じことであろう。

だが、このような疑いや誤りの論理的可能性が排除されているという意味で、「知っている」という語を使うのは、『哲学探究』の第2部では否定されている。第3章の3(2)「知

²⁰⁴ ドナルド・デイヴィッドソン『行為と出来事』，邦訳，pp. iii - iv

識について」において指摘したように、ウィトゲンシュタインは、1949 年に書かれた『哲学探究』の第 2 部 (PI XI, p. 188、邦訳 p. 441) で、「私は P を知っている」にはレベルの異なる二種類のものがあることを示唆していた。P について疑いの論理的可能性が排除されているものと排除されていないものという二種類である。そして、「知っている」は、P について疑いの論理的可能性が排除されていない場合に「私は P を疑わない」という意味で使われ、疑いの論理的可能性が排除されている場合に「知っている」を使うのはナンセンスだとされた。すると、動機は疑いの論理的可能性が排除されているので、「[自分の] 動機は知っている」とは言えないはずである。なぜウィトゲンシュタインは、『青色本』で、「知っている」について自分が批判するこのような使い方をしたのだろうか。これには、歴史的な経過を見る必要がありそうだ。

第 2 章の 3(1) で論じたように、彼が、「知っている」という語の用法に特に関心を持ったのは、1939 年のムーアの論文「証明」の中で使われた、「私はここに自分の手が二つあることを知っている」という文の、「知っている」に対してである。彼は、ムーアの「知っている」という語の使い方が、ムーアの文脈の中ではナンセンスだという洞察を得た。そして、「知っている」という語の用法とそれに関連する言語ゲームとの関わりが、彼の晩年の関心の一つになった。その思索の足跡が、『確実性の問題』の編集者によれば 1949 年のクリスマスから始まって 1951 年 4 月 29 日に亡くなる二日前の 27 日まで書き続けられた草稿『確実性の問題』である。また、「私は……を知っている」にはレベルの異なる二種類がある、ということを示唆していた『哲学探究』の第 2 部が書かれたのも 1949 年である。従って、1939 年以前には、「知っている」という語について、後に自分が批判することになる使い方をしていたとしても不思議はない。『青色本』は、1933 年から 34 年にかけて口述されたものなので、間違いがあり得ないという意味で「[自分の] 動機は知っている」という言い方をしている、そこにはレベルの異なる二種類の「知っている」という語の使い方があるということまで理解していなかった。だから彼は、それを混同しているとまでは考えていなかった、と解される。

また、同じ『青色本』で「自分に痛みがあることを知っている」について、次のように言っている。

「また、形而上学的な意味で、『私に痛みがある時、私は常にそれを知っていなければならない』と言う時、これは単に＜知っている＞という言葉を使わせるだけである。

『私は自分に痛みがあることを知っている』の代わりに、私は単に『自分に痛みがある』と言うことができる。」 (BB p. 55、邦訳『青色本』 pp. 103-104、最初の強調はウィトゲンシ

このように『青色本』の時点では、「私は自分に痛みがあることを知っている」の「知っている」は、言葉を遊ばせるだけであって、「自分に痛みがある」と言うだけで十分だと言っていて、この場合の「知っている」という語の使い方はナンセンスだとまでは、ここでは言っていない。

さて、自分の動機に対して「私は自分の動機を知っている」と言うのは、「私はここに自分の手があることを知っている」や「私は自分に痛みがあることを知っている」と同類の使われ方であると考えられる。これらは、疑いや誤りの論理的可能性が排除されているものに対して「知っている」という語を使うもので、自分の痛みを知らないというのがナンセンスであるように、自分の動機を知らないというのもナンセンスである。

このような「知っている」という語の用法批判は別にして、「自分の動機」と「自分の痛み」は文法的に似ていると思われる。自分に痛みがあることを推測に拠って知るのでないように、自分の動機も推測によって知るのはではない。もちろん、動機を持つに至ったものが何かは、原因を問うものであり、それは推測によって知られるが、ある動機によってある行為をしたという、その動機自体を、その行為者は、推測によって知っているのではない。動機を持つに至ったことと、その動機によって行為したこととは別である。前者は原因であり、後者は理由である。

(5)について、通常、計算は規則に従って行われ、その結果は疑いの余地がなく確実である。これと同様に、自分の行為の理由(根拠)も疑いの余地がなく確実である、という意味だと解される。なお、自分の行為の根拠を計算に類比するのは、どちらも「規則」に関わりがあるという点で、『確実性の問題』のテーマを予感させる。

このように、ウィトゲンシュタインは、理由(根拠)と原因は文法的に異なる、と言う。

その違いは、原因は仮説であって、多数の意見が一致するという経験に訴える必要があり、知るとは言えず推測すると言えないのに対して、理由は、仮説ではなく、一致する経験は一つも必要とせずに、自分が知っていると言えるものである。

講義録の中でウィトゲンシュタインは、次のように言っている。

「説明の際に、原因(Ursache)と動機(Motiv)／理由(Grund)を区別すること(これは文法的区別である)。人は、自分の動機／理由が何かをどうして知っているか、と問うことはナンセンス(Unsinn)である。」(Vorlesungen 1930-1935, p. 82, 邦訳『講義』p. 114)

ここでウィトゲンシュタインは、原因と動機／理由を区別するのは文法的区別であって、その違いは、それを自分がどうして知っているかと問うことに、原因の場合は意味があるが、動機／理由の場合はナンセンスである、と言っている。動機／理由は、それが行為の根拠であって、その動機／根拠に更なる根拠はない、と。だから、「どうして知っているか」が、理由（根拠）を問うものであれば、ナンセンスだということになる。なぜなら、理由（動機）をどうして知っているかと問う（疑う）ことは、自分が知っていること（自分の動機）を知らないのではないかと疑うことであり、自己論駁に陥ることが免れないからだ。しかし、どうして知っているかが、行為の原因を問うものであれば、自己論駁に陥ることは無い。また、次のようにも言う。

「＜だから＞と＜なぜ＞は、理由にも原因にもどちらにも関係しうる。もし、薬が君に作用するように赤信号が作用するなら、君の行為の説明は、原因の報告であろう。それに反して、その赤い光を見て、あたかも誰かが『赤い光は停止を意味する』と言うかのように君が行為〔して、君がそのように説明を〕するならば、その時の君の説明は、理由の報告であろう。」（*Vorlesungen 1930-1935*, p. 103, 邦訳『講義Ⅰ』p. 148）

＜だから＞と＜なぜ＞は、理由（根拠）にも原因にも関係しうるので、先にも述べたように、我々は、理由と原因を混同しがちになる。ここで挙げられている事例は分かりにくいけれど、赤信号を見て我々が止まる時、その訳を、薬物の影響によるというような生理学的説明でもってする場合、原因を報告するもので、規則によるという説明でもってする場合は、理由を報告している、と解される。

また、先に引用した『青色本』の中で、「＜理由〔根拠〕＞と＜原因＞の文法の違いは、＜動機＞と＜原因＞の文法の違いに非常によく似ている」と言われた。動機と原因の区別について、講義録の中で次のように言う。

「動機と原因を区別せよ。意味の因果説（*kausale Theorie der Bedeutung*）はその二つを混同している。動機は行為に含まれている（*enthalten*）が、原因は含まれていない。」（*Vorlesungen 1930-1935*, p. 132, 邦訳『講義Ⅰ』p. 193）

「動機は行為に含まれている」というのは、動機と行為が密接不可分で、内的な関係にあることが示唆されている。即ち、その動機がなければ行為がないことが論理的に結びつ

いていると理解される。それは、計算の推論過程に比較される関係である。例えば 1 を加えるという規則は、1, 2, 3, ……という数列の展開の内に含まれているということに似ている。1 を加えるという規則がなければ、1, 2, 3, ……という数列の展開もない。

また、理由と原因の区別について、同じ講義録の中で次のような別の事例を挙げている。

「我々はここで、＜理由＞と＜原因＞という語の文法について語っている。我々は、どういう場合に、あることを行つた理由を挙げると言い、また、どういう場合に、それが原因だった、と言うのだろうか。『なぜあなたは自分の腕を動かしたのか』という問いに、人が行動主義的説明によって答えるとしたら、その人は原因を挙げたのだ。原因は、実験によって発見されるが、理由は実験によってもたらされない。＜理由＞という語は、実験との関連では用いられない。理由が実験の助けによって見出されるということは、無意味 (sinnlos) である。『数学的論証か経験的証拠か』という選択肢は、『理由か原因か』に対応している。」 (Vorlesungen 1932-35p. 150, 邦訳『講義 I』pp. 11-12)

ここで挙げられている事例は、自分の腕を動かす場合だ。例えば、私が路上でタクシーを止めようとして手を挙げている時、誰かに「なぜあなたは手を挙げているのか」と聞かれたとしよう。そこで私が、「タクシーを止めようと思って手を挙げている」と答えるとしたら、私が手を挙げた理由【根拠】を答えることだ²⁰⁵。その理由を自分が知っているのは当然のことで、疑いや誤りの余地はない。また、「タクシーを止めようと思って」というのは、私が手を挙げたことの仮説でもないし、手を挙げた理由を自分が推測した結果でもない。実験して自分の手を挙げた行為の理由を発見するということは、意味不明である。だからその時相手から、「そういう理由で手を挙げたのではないだろう」と疑われたら、私はどう答えて良いか分からない。あるいは、私が嘘をついているのではないかと疑われているのかと思うかもしれない。自分の理由について、自分は間違っているのではないかと疑うことは意味をなさないが、相手がそれは嘘ではないかと疑うことは意味がある。なお、理由なく行為することはあるし、自分の動機（理由）を自分でつかみかねる場合もあるし、自己欺瞞の場合もあると思われるが、ここでは理由（根拠）と原因の区別を主題としているので、これ以上論及しない。

しかし、手を挙げた理由に、心理学的あるいは神経生理学的な文脈で答えるとしたら、

²⁰⁵ 手を挙げた時、実際には何も考えていなかったとか、あるいは別のことを考えていたということはある。しかし、実際には別のことを考えていたとしても、聞かれれば、手を挙げた自分の意図の説明として、状況に応じた理由【根拠】を挙げることになる。

それは原因を答えることである。その場合、心理学的あるいは神経生理学的プロセスについて仮説を立てて、それを実験で検証することは意味がある。そして、原因は、自分であれ相手であれ、それが間違っていると言うことに、意味がある。

「理由と原因の間の違いは、次のように明らかにされうる。理由の調査は、それについての〔当人の〕同意が本質的な要素であるのに対して、原因の調査は〔当人の同意に関係なく〕実験によってなされる、と。」（*Vorlesungen* 1932-35 p. 198, 邦訳『講義Ⅰ』pp. 75）

ここで言われている理由と原因の違いについての文法的注釈は、今までのまとめのようなもので、本質的な点を述べている。理由は、その人の同意を本質的な部分として含意するが、原因は本人の同意に関係なく実験による、と。即ち、理由は、当人がそれを知っているのでその人の同意が本質的な要素であるが、原因の場合は、その人の同意は本質的でない。

なお、講義録でのこうした原因についての説明で、原因は実験によって発見される、ということに力点が置かれているが、次に掲げるように、実験によることなく原因を見出す場合があることもウィトゲンシュタインは認めている。

「二つの出来事を考えよう。ひとつは、紐が引っ張られるのを感じ、あるいは似たような類の経験をする時、ひもを－メカニズムを－調べて、その意味でその原因を発見し、一場合によってはそれを取り除く、ということにある。この人は、『なぜこのひもは動いているのか』等々と問うこともあるかもしれない。－もうひとつは、こうである。彼は、自分の山羊がこの斜面にある飼料を食べて以来、わずかな乳しか出さないことに気が付いた。彼は、頭を振って『なぜだ』と問う。－それから実験をする。彼は、この飼料がこの現象の原因であるということを発見する。」（*PO* pp. 388-389, 邦訳 p. 30、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者）

ウィトゲンシュタインがここで挙げている原因の一つは、紐が引っ張られているのを感じて、その原因を発見する場合である。この場合は、紐が、例えば何かに引っかかっているのを見つけるだけで、その原因はすぐ分かる。即ち、この場合は、推論してその原因を確かめるために実験する必要はない。今一つの原因は、山羊の乳の出が悪くなったので、その原因を探究する場合である。飼料が原因ではないかと推論して、実験をしてその原因

を発見する。従って、原因には、見て分かるという様に、感覚することで直ちに分かるものと、推論して実験でそれを確かめるものと二種類がある。

なお、この最初の例で注意すべきは、「紐が引っ張られる感じを持つ」場合、「紐が何かに引っかかっていること」はその原因であって根拠ではない、ということだ。紐が引っ張られる感じを自分が持っていることは疑いえないが、その感じを持つのは、紐が何かに引っかかっているからだ、と言うことは疑いの余地がある。なぜなら、誰かがその紐を引っ張っていることもあり得るからだ。

さて、以上に掲げた根拠（理由）と原因の文法の違いについてのウィトゲンシュタインの考えは、彼がそう言っているわけではないが、結局、次のようにまとめられよう。

「原因は、仮説であり、推測であり、実験で確認することに意味がある」、あるいは「原因は、疑いや誤りの論理的可能性を含意する。」

また、「根拠は、それを当人が知っており、仮説であるとか推測するとか実験で確認することに意味がない」、あるいは「根拠は、疑いや誤りの論理的可能性を排除する。」

理由（根拠）が疑いや誤りの論理的可能性を排除するのは、理由（根拠）についての疑いや誤りが、自己論駁に陥ることから免れないからである。

以上の理由と原因の文法的な区別を、事例によって考えてみよう。

例えば、分かれ道で標識「→」に出会って、右の道を行くとしよう。

A：標識「→」があるのを見る

B：右の道を行く（行為）

C：標識「→」をみて右に行くのは慣習による

私は、分かれ道に標識「→」があるのを見て（A）、右の道を行く（B）。Aは、私が右の道を選択する理由（根拠）である。Bの行為の理由（根拠）はAである。そして、私は、自分が標識を見て右の道を行くことを選択したことを知っているし、その理由は標識「→」があったからだということを知っている。この場合の「知っている」は、私が右の道を選択した理由に、それ以外の理由がない、という意味での「知っている」である。私は標識を見たので右の道を行ったと言うことに、疑いや誤りの論理的可能性は排除されている。（しかし、私が嘘を言っている可能性は排除されない。）

しかし、標識「→」をみて（A）、右に行く（B）のは、慣習による（C）というのは、AとBを関係づける一つの説明である。Cは、私がAによってBという行為をしたと言う事実（これには、疑いや誤りの論理的可能性は排除されている）の原因である。従って、C

は、C でないこともあり得るのではないかという疑いや誤りの論理的可能性を含意している。即ち、心理学的な説明や、他の説明の余地を残している。

3(2) 因果関係についての一般的な考え

ちなみに、これまで述べてきたウィトゲンシュタインの原因の概念が特別なものかどうか、それを一般的に理解されている原因の概念と比較してみよう。ティム・クレイン (Tim Crane) は、因果関係の特徴の中で、異論のないものとして次の三つを掲げている²⁰⁶。

第一 A が B を引き起こしたと言う時、A が起こらなければ B も起こらなかっただろう
ということ

第二 因果関係と説明の概念との関係で、説明することは「なぜ」という問いに答える
ことで、その一つの方法は、説明したい事柄の原因を挙げるということ

第三 因果関係は世界の規則性という要素を含む。原因と結果の間に成り立つ自然法則
は「因果法則」と呼ばれる。

これらをウィトゲンシュタインの原因についての考えに照らして考えてみよう。

第一について、「A が B を引き起こしたと言う時、A が起こらなければ B も起こらなかっただろう」ということは、「B は起こらない」ということではない。そして、「B は起こらなかっただろう」ということは、「B は起こったかもしれない」という可能性を含意する。すると、「A が起こらなければ B も起こらなかっただろう」ということは、「A が起こらなくても B が起こったかもしれない」という疑いや誤りの論理的可能性を含意することになる。従って、先の原因の基準である、「原因は疑いや誤りの論理的可能性を含意する」を満たすので、ウィトゲンシュタインの原因の概念と矛盾しない。

第二について、ウィトゲンシュタインは、「<だから>と<なぜ>は、理由か原因かどうかに関係しうる」 (*Vorlesungen* 1930-1935, p. 103, 邦訳『講義 I』p. 148)、と言っているように、彼は「なぜ」という問いに対する理由の説明の一つの方法として、原因でもってする場合を認めている。従ってウィトゲンシュタインの原因の概念と矛盾しない。

第三について、ウィトゲンシュタインは、因果関係を主として実験によって発見すると考えており、その典型は自然科学に関するものである。自然科学の因果関係は、その形式的な形が自然法則として表現されるので、自然法則が因果関係であることに相違はなく、ウィトゲンシュタインの原因の概念と矛盾しない。

このように、ティム・クレインが異論のないものとして掲げる原因の概念の三つの特徴

²⁰⁶ 以下の議論は、ティム・クレインの『心は機械で作れるか』(邦訳書 pp. 84-86) によっている。

は、いずれもウィトゲンシュタインの原因の概念と矛盾しない。従って、ウィトゲンシュタインの原因の概念が特殊なものでないことが分かる。

なお、ウィトゲンシュタインは、原因や因果関係を理論化したり説明したりすることには関心が無い。それは科学者の仕事だと彼は考える。彼は、語の用法に関心があり、一見して同じ種類や形式に見えるものでも、そこに文法的な違いがあることを明らかにして、哲学的な問題を解消することが彼の哲学の主たる仕事である、と考えている。

『哲学探究』で彼は、次のように言っている。

「我々の考察は、科学的な考察であってはならない、ということは正しかった。……どのような理論も立ててはならない。我々の考察に仮説があってはならない。あらゆる説明が去り、記述だけがその場に留まらなければならない。そして、記述はその光明を、即ちその目的を、哲学的な諸問題から受け取るのである。それらはもちろん経験的な問題ではなく、我々の言語の働きを洞察することによって解決されるのであり、しかもその働きは、それを誤解しようとする衝動に反して認識されるような仕方で、解決されるのである。これらの問題は、新しい経験によってではなく、既に知られていることを整理することによって解決される。哲学とは、我々の言語の手段によって、我々の悟性を惑わしているものに対する戦いである。」（*PI* § 109、強調はウィトゲンシュタイン）

以上、ウィトゲンシュタインの原因についての概念をみてきた。これを踏まえて、ウィトゲンシュタインが「以前の経験は、私の現在の確信の原因であるということは十分にあり得るが、それはその根拠であるだろうか」（§ 429、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者）、と問う意味を検討しよう。

3(3) 以前の経験は確信の根拠にならない

まず、「以前の経験は、私の現在の……」とウィトゲンシュタインが言っている § 429 の全文を引用しよう。

「私が、自分の足の指を見ることができないところで、各々の足に 5 つの指があると想定することに、私はどんな根拠があるか。

その根拠は、以前の経験が私に常にそのことを教えたと言うのは正しいか。私は、自

分に足の指が 10 本あることよりも、以前の経験の方がより確かなのか。

以前の経験は、私の現在の確信の原因であるということは十分にあり得るが、それはその根拠であるだろうか。」 (§ 429、最初の強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者)

私が、例えば靴下をはいているなどで自分の足の指を見ることができない時、各々の足に 5 つの指があると想定するのはどんな根拠（理由）によるのか、とウィトゲンシュタインは問う。私の足には 5 つの指があることは、私には手が二つあると同様に、「揺るぎないもの」である。そのように想定することに根拠（理由）は無い。しかし、冷蔵庫にケーキがあると想定するのは、根拠（理由）なしにはあり得ない。同様に、自分の足に 5 つの指があると想定することも根拠（理由）なしにはあり得ないように思われて、以前の経験が常にそのことを教えてきたと、経験をその根拠に考えがちである。そこでウィトゲンシュタインは、以前の経験の方が自分の足に 5 つの指があることよりもより確かなのか、以前の経験を根拠とする以上に、足に 5 つの指があることの方が確かなのではないかと問うのである。

本章の 1(5)で論じたように、我々は、多くのこと（判断）を、自然から、また親や教師から学ぶ。明示的に教わるものの中で、次第に揺るぎないものになっていくものもあれば、教わるものを通じて特に明示的に教えられたものでないものが、非自覚的に次第に揺るぎないものとして取り込まれていくものもある。そのため、「我々は、我々の揺るぎなさを以前の経験から引き出している (*derive*) ように思われる」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 80-81、強調はウィトゲンシュタイン) のであるが、我々は経験を根拠とみなす根拠を持たない、とウィトゲンシュタインは言う。

「経験が、経験から何かを受け取れと我々に勧めるのではない。経験は、我々がそのように判断するという根拠（単に原因だけでなく）であるとしても、我々は、再びまたこれを根拠と見なすための根拠を持たない。」 (§ 130、強調はウィトゲンシュタイン)

ウィトゲンシュタインがここで、「これ【経験】を根拠と見なすための根拠を持たない」と言うことの意味するところは何か。これについてシャロックは次のように言う。

「我々は、繰り返される体験や成功を論拠 (*arguments*) として用いることはないが、それらは確実さについて、暗黙の、広く行きわたる、非推論的な生きた確証 (*confirmation*) を構成する。……我々の基礎的な蝶番—我々の言語ゲームの足場を作り

上げている信念—は、合理的にではなく、因果的に現実に繋ぎ止められている。」
(Moyal-Sharrock [2007], p.82、強調はシャロック)

「我々の確実さは、事実によって条件付けられているのであって、それによって正当化されているのではない。……我々が再び起こることを期待するのは、推論に基づいているのではなく、訓練や条件付けに基づいているのである。……

我々は、我々の最も基礎的な行為でさえそれを説明するために、幽霊のような理由付けを引き合いに出すが、そこに現れる理由付けは、単に事後のものにすぎず、後から思いついたことにすぎない。客観的確実さは、判断の結果ではない。知識は、判断の結果である。知識は現実に、事実に、経験に、基礎づけられている。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 83、強調はシャロック)

シャロックは、「繰り返される体験や成功」は、確実さについて「非推論的な生きた確証を構成」し、それは「因果的に現実に繋ぎ止められている」と言う。これは、以前の経験が因果的に現実に関係するとしても、それがなぜ現在の確信の根拠になり得ないかを、説明しない。彼女は、我々の確実さが因果的に現実に条件付けられていて、我々の最も基礎的な行為についてさえ、その理由付けは、事後に思いついたものにすぎない、と言う。結局シャロックは、最も基礎的な行為は、理由（根拠）なく行われ、それは訓練や条件付けに基づいているもので、そこに現れる理由付けは後付けのものだ、と言っているだけだ。最も基礎的な行為は理由なく行われるというのはそのとおりであるし、それが訓練や条件付けに基づいているのもそのとおりだ。確実さが因果的に現実と結びついているのもそのとおりで、これらはもともとウィトゲンシュタインが言っていることだ。

だが、ウィトゲンシュタインが問うているのは、「以前の経験は、私の現在の確信の根拠であるだろうか」ということであって、彼はこれを否定していると考えられる。しかし、なぜウィトゲンシュタインは、以前の経験は確信の原因にはなっても根拠にならないと考えるのか。この問いにシャロックは答えていない。彼女は、先に本章の 3(1)で述べたウィトゲンシュタインの考える<原因>と<根拠>の文法的区別を踏まえていないように見える。

そこで改めて、過去の経験は、自分の現在の確信の原因にはなっても根拠にはならない、というウィトゲンシュタインの主張を考えてみよう。

「原因は、仮説であり、推測であり、実験で確認することに意味がある」、あるいは「原因は、疑いや誤りの論理的可能性を含意する」ものであり、「根拠（理由）は、それを当人

が知っており、仮説であるとか推測するとか実験で確認することに意味がない」、あるいは「根拠は、疑いや誤りの論理的可能性を排除する」ということであった。「確信の根拠が過去の経験である」とすると、それについての疑いや誤りの論理的可能性は排除されている、ということになる。即ち、確信の根拠が過去の経験であることに、疑いや誤りの論理的可能性は排除されている、ということになる。そうかどうか検証してみよう。

例えば、「熱い鍋に触れると火傷をする」という確信の根拠が、過去に火傷した自分の経験だとしてみよう。すると、私はその過去の自分の経験を疑いの余地なく知っていることになる。だが、果たしてそうだろうか。いつ、どこで、どういう状況の下で、どの程度の火傷の経験をしたか、疑いの余地なく知っているだろうか。仮に、火傷の経験がありその記憶があったとしても、その経験は、「熱い鍋に触れると火傷をする」という現在の確信と、どう結びついているのか。ウィトゲンシュタインによれば、根拠の場合は、「自分がそれを知っている」ということで結びついている。それは、自分が標識「→」を見ることで右の道を選択する時の結びつきである。そのことを私は、疑問の余地なく知っている。だが、過去の火傷の経験と自分の現在の確信との結びつきを、私は、標識の場合と同様に、疑問の余地なく知っていると言えるのだろうか。熱い鍋を見ると、過去の火傷の経験（あるいは記憶）が直ちに立ち上がってきて、「熱い鍋に触れると火傷をする」という確信が意識に上り、その結びつきの結果、私は、熱い鍋に触れないのだろうか。もちろん、そうしたことがあるかもしれない。だが、いつも必ず思い出すだろうか。「熱い鍋に触れると火傷をする」という自分の現在の確信に、過去の火傷の経験（記憶）がいつも必ず伴っているだろうか。それが無いとすれば、即ち、ウィトゲンシュタインが言うように、「経験が、経験から何かを受け取れと我々に勧めるのではない」（§ 130）とすれば、「熱い鍋に触れると火傷をする」という確信は、根拠がないことになるだろう。

また、仮に、「熱い鍋に触れると火傷をする」という自分の現在の確信の根拠が、過去に火傷した自分の経験だとすると、その確信の根拠は、過去に火傷した自分の経験であることに、疑いや誤りの論理的可能性が排除されているということになる。即ち、過去の自分の火傷の経験以外のこと、例えば自分にはそういう火傷の経験がなくても子供の頃からそのことについて教育を受けてきた可能性があるということは、排除されている。だが、自分は火傷の経験をしなくても、自分の周りで過去に火傷をした人を見たとか、親から教育を受けてきたとかによって、そういう確信を持つに至ったということがあっても、別におかしくないように思われる。そこに矛盾や自己論駁に陥る可能性は無いように思われる。すると、「熱い鍋に触れると火傷をする」という確信の根拠は、過去に火傷した自分の経験以外の論理的可能性を排除する、ということではなくなる。即ち、「熱い鍋に触れると火傷

をする」という自分の現在の確信の根拠は、過去の自分の火傷の経験しかないのではなく、ほかの何かでもあり得ることになる。これは、過去の自分の火傷の経験が、「熱い鍋に触れると火傷をする」という自分の現在の確信の根拠ではなく、その確信を生んだ原因の一つである、ということを示している。「熱い鍋に触れると火傷をする」という確信の原因は、様々な事由の論理的可能性を含意する。過去の自分の火傷の経験もその一つであることもあるだろう。それ以外の事由もあるかもしれない。そのことの論理的可能性は、原因の場合、排除されない。

従って、「熱い鍋に触れると火傷をする」という現在の確信に、根拠はない。しかし、「熱い鍋に触れると火傷をする」という確信の原因に様々なものがある可能性を排除しない。

確かに、「熱い鍋に触れると火傷をする」というのは、因果的な経験命題である。この経験命題を根拠付けるものは、それがいかに記憶の闇に埋もれたものであろうと、自分が過去に火傷した経験くらいしか思い当たらないので、自分の過去の経験がその確信の根拠だと言いたくなってしまう。しかし、自分の過去の経験は、自分の現在の確信の根拠ではなく、原因である。

とはいっても、我々が熱い鍋に絶対に触らないのは、因果的（あるいは帰納的）な経験命題が要請する以上の強制力を我々に示しているように見える。そして、実際、我々は、考えたり推論したりして、その結果熱い鍋に触らないというのではなく、推論等する以前に、行為として断固熱い鍋には触らない。触らない行為が先に立つのであって、それを説明するためにあれこれ取り上げるものは、全て後付けによるものである。そしてそこで取り上げられる説明は、全て原因である。この点は、シャーロックの主張と同じである。

次に、ウィトゲンシュタインが、先に引用した § 130 で、「経験は、我々がそのように判断するという根拠であるとしても、我々は再びまたこれを根拠と見なすための根拠を持たない」と言う意味を考えてみよう。

ある判断をするのにある根拠 a があつたとしよう。すると、その根拠 a を根拠付ける根拠 a_1 が必要になる。そうすると今度は、その根拠 a_1 を根拠付ける根拠 a_{11} が必要になる……、というように推論が際限なく続いていくことを否定できなくなる。しかし、この根拠付けの連鎖はどこかで終る（終らなければならない）。すると、根拠付けの終わるところでは、もはやそれを根拠付けるものは何も無い、ということになる。とすると、この根拠づけの連鎖がどこかで終るということは、最初の段階でそれが終ることもあり得ることになる。即ち、私は判断 a をする、そしてそうすることに根拠はない、と。

たとえ我々が、経験から何かを引き出したとしても、他のことではなくまさにそれを引

き出すことに論理的な根拠はない、ということになる。しかし、この論法は「揺るぎないもの」には当てはめられない。なぜなら、「根拠付けの終りにあるもので根拠付けられないもの」と「根拠付けられるもの」とが認識的に同じレベルにある（地続きである）からである。認識的文脈の中にあるものに対してはこの論法が通じるが、「揺るぎないもの」は、もともと認識的文脈から排除されている（不連続である）。だからこの論法は認められない。従って、仮に、ある経験が、我々がそのように判断するという根拠であるとしても、我々は再びまたその経験を根拠と見なすための根拠を持たないというのは、「揺るぎないもの」は、それを引き出すことに根拠がないのではなく、もともと根拠がないのである。

だが、「揺るぎないもの」にはもともと根拠がないということは、何とも受け入れがたく感じられる。

認識的文脈において、我々は、知識・信念、欲求・意図の下に行為する、と普通には理解されている。だが、行為の説明は、そのような認識的文脈だけでは尽くせない。端的にタオルをつかむ行為に根拠はない。そこにタオルがあることを知っているという知識も、手を拭きたいという欲求も、タオルで手を拭こうという意図も、端的にタオルをつかむ行為の、後付けによる説明（理由付け）に他ならない。

「端的につかむということは、確かさに対応しているのであって、知識に対応しているのではない。」（§ 511）

反省してみると、端的な行為は、解釈や推論に基づいた結果ではないことが分かる。これは、我々が熱い鍋には絶対に触らないことと同じだ。それは、知識や経験を根拠にして触らないのではなく、根拠なく、正に触らないのだ。それにも拘らず、根拠のない行為は不合理のように感じられる。実際には、根拠なく行為をしているにもかかわらず、である。

「困難なのは、我々の信念に根拠がないことを理解することである。」（§ 166）

ここで言われている信念は、認識的文脈の十分に基礎付けられた信念ではなく、その信念を基礎付ける、基礎付けられていない信念（§ 253）、例えば「熱い鍋に触れると火傷をする」というような「揺るぎないもの」についての確信のことである。

『あなたは、熱い鉄板で火傷をするだろうとなぜ信じているのか』—あなたは、こ

の信念に根拠 (Gründe, reasons) を持たねばならないか。また、根拠を必要とするか。」
(PI § 477)

ここで言われる「あなたは、熱い鉄板で火傷をするだろう」という「揺るぎないもの」には、それ以上の根拠はなく、その揺るぎなさは行為において示されている。しかし、行為に根拠がないということは受け入れ難く思われるので、シャーロックが言うように、根拠について後から説明することがあるかもしれない。実際には行為が先にあって、解釈や推論などを行為に先立ってしていないにもかかわらず、だ。我々は、その行為に先立って、推論し、理由付けし、正当化等をしていたと、そのような根拠があったと、後からそれらを持ち出して説明するのである。熱い鍋に行為としてまず触らないのに、熱い鍋に触ると火傷をするから触らないのだと、あたかも理由(根拠)が先にあって、そういう理由から触らないのだと言うように、後付けの理由で説明するのである。

しかし、実際には、私は、理由なく熱い鍋には触らない。触らないという端的な行為が先に立つ。そして、そういう行為を支えているものをあえて表現すれば、「熱いものに触ると火傷をする」という信念（「揺るぎないもの」）なのである。だがそれは、触らないという行為の根拠ではなく、触らないという行為の内（行為する構え、態度の内）に示されているものなのである。

「しかし、[根拠を求める営みの] 終わりは、根拠付けられていない前提ではなくて、根拠付けられていない行為の仕方である。」 (§ 110)

ここで根拠付けられていない前提というのは、認識的レベルで根拠付けられていないもののこと(認識的ゲームの基礎にある「揺るぎないもの」のことではない)である。また、根拠付けられていない行為の仕方というのは、「揺るぎないもの」を構え、態度として持つ行為(本章の 1(8)) のことである。従ってこの節は、認識的レベルの推論の行きつく先と「揺るぎないもの」が不連続である(地続きではない)ことを示している、と論者は解釈している。

なお、熱い鍋には触らないという信念の出所を、生物学的あるいは進化論的な観点から説明することがあるかもしれない。しかしそれは、熱い鍋には触らないという行為の原因を説明するもので、行為の根拠を説明するものではない。終わりは、根拠のないものを構えとして持つ行為である。

これまで論じてきたように、過去の経験は、自分の現在の確信の根拠にはならない。だ

が、過去の経験は、我々が何事かを想定する原因であり得る。このことについてウィトゲンシュタインは、次のように言う。

「本を引き出しに入れた後、……の場合は別にして、その本はそこにある、と私はとにかく想定する。『経験は常に正しいことを私に証明する。本が（とにかく）消え失せるなどということが十分に証明される場合は、無いように思われる。』その本がどこにあるか確かに知っていると思っているにもかかわらず、その本が見つからないということがしばしば起こるように思われる。－しかし実際、経験は、本が消え失せることは無い（例えば次第に蒸発することは無い）ことを教える。－だが、あの本が消え失せたはずはないと我々に思わせるのは、本等に関するこの経験であろうか。今度は、ある新たな状況の下で、書物が消え失せるのを我々が見出した、と想定して見よ。－我々は自分たちの想定を変えるのではないか。人は、我々の想定の体系に関して、経験の影響（Wirkung, effect）を否定できるであろうか。」（§ 134、強調はウィトゲンシュタイン）

本をそこに置いておいたと思っていたにも拘らず、そこに本がないことはしばしばある。そのような時、その本が消え失せたり蒸発したりすることはないと我々に思わせるのは、我々の経験である。本が消え失せたり蒸発したりする経験を持ったことがないからである。しかし、別の新たな状況があつて、そこでは、本が消え失せることを経験するとしたら、我々は考えを改めて本は消え失せることがあると思うようになるだろう。このことは、本が消え失せることは無いとか、本は消え失せるという考えは、我々の経験の影響を受けている、と考えることができる。そしてこの場合、経験は、考えを変える原因として作用している。

以上のように、過去の経験は、自分の現在の確信の原因になっても根拠にならないというウィトゲンシュタインの主張を考察してきた。これを踏まえて、ウィトゲンシュタインは、「揺るぎないもの」と原因との関係をどう考えていたかを見ていこう。

3(4) 「揺るぎないもの」と原因

これまで述べてきたように、熱い鍋に触れると火傷をするというのは「揺るぎない」確信の一つである。そして、「熱い鍋に触れると火傷をする」という現在の確信の原因は、過去に火傷した自分自身の経験かもしれない。あるいは、これまで様々な場面で自分がそう

した火傷の事例を見聞きしてきたことにあるのかもしれない。あるいは幼い頃に鍋に近づいて母親にきつく叱られたことかもしれない。「熱い鍋に触れると火傷をする」ということは、私の成長とともに、特に意識することなく私の「揺るぎないもの」の体系の一つのピースに納められていった。即ち、何らかを原因として形成された「揺るぎないもの」は、他の「揺るぎないもの」と相関連して、次第に確信に固められていった。そしてそれは、命題のような形で意識することが無くても、熱い鍋には触らないという行為の構えの内に示されるものになった。

「揺るぎないもの」には原因がある。様々なことを原因として、あるものが他のものとともに次第に「揺るぎないもの」に形成されていく。そうして形成された「揺るぎないもの」は、推論と地続きになった知識の内にはない。「揺るぎないもの」は、知識のような認識的ゲームの基礎、枠組みとして、認識的ゲームの外にネットワークを作っていく。その存在は、行為の構えの内に示される。

「揺るぎないもの」の揺るぎなさは、「揺るぎないもの」を生み出す原因から生まれるのではなく、そうした原因から生まれた「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームという言語ゲームの二層の構造から生まれる。その揺るぎなさは、この二層の構造から生まれる論理的な関係によるものである。行為は、このような「揺るぎないもの」を構えとしてその行為の内に表わしている。

最後に、「熱い鍋に触れると火傷をする」という「揺るぎないもの」と、原因との関係を整理しよう。

第一 「揺るぎないもの」は、認識的な推論の結果得るものではない。

熱い鍋には触らないという「揺るぎないもの」は、認識的な推論の結果ではない。それは、認識的な推論と地続きになった知識の内にはない。

第二 「揺るぎないもの」には根拠がない。

人は、熱い鍋に触ると火傷するという過去の自分の火傷の経験等をいつも必ず意識しているわけではない。「経験が、経験から何かを受け取れと我々に勧めるのではない。」 (§ 130) 過去の経験は、原因であることはあっても、根拠にはならない。

第三 「揺るぎないもの」には原因がある。

熱い鍋に触らないという「揺るぎないもの」は、自分が火傷をした過去の経験等様々なことが原因で生み出される。

第四、「揺るぎないもの」は、認識的ゲームの枠組みを形成している。「揺るぎないもの」には、疑いや誤りの論理的可能性が排除されている。

鍋料理をしている時、子供の手の届かないところに鍋を置き、子供が鍋に近づかない

よう注意する。誰かが不注意に鍋に触ろうとしたら、危ないと言って、即座に制止する。

「熱い鍋に触れると火傷をする」という「揺るぎないもの」は、自分ではそれを意識しなくても、認識的ゲームの枠組みを構成し、そのことは行為する態度、構えの内に示される。そうした枠組みを構成するものには、疑いや誤りの論理的可能性が排除されている。そうした枠組みを構成しているものを疑うことは、自己論駁に陥ることが免れない。

第五、「揺るぎないもの」の揺るぎなさは、端的な行為に対応している。

鍋奉行をしている私は、端的に熱い鍋に触らない。触ると火傷すると意識したり考えたりして触らないのではない。考えるよりもまず触らないという行為が先にある。

以上から、「熱い鍋に触れると火傷をする」という「揺るぎないもの」は、過去の自分の火傷の経験等を原因として形成され、その揺るぎなさは、他の「揺るぎないもの」とともに、言語ゲームの基礎を構成する。それは、認識的ゲームを条件付ける。この揺るぎなさは、あえて表現すれば「熱い鍋に触れると火傷をする」という命題の形になるが、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中で表現されることは無く、行為の内に示される。それは、熱い鍋には触らないという行為の態度、構えの内に示される。「揺るぎないもの」と行為は、本章の 1(7)で述べたように、ちょうどコインの表裏のような関係にある。

さて、これまでの議論を踏まえて、言語ゲームが「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームの二層の構造から成るというウィトゲンシュタインの道具立ては、ウィトゲンシュタインを基礎付け主義者としてみることができるだろうか。それとも「揺るぎないもの」には根拠が無く、行為の態度、構えの内にそれは示されるだけなので、基礎付け主義者としてみることが誤りなのだろうか。本章の最後に、この問題を検討しよう。

4 ウィトゲンシュタインの基礎付け主義について

シャロックは、ウィトゲンシュタインを、これまでの基礎付け主義者とは異なる基礎付け主義者であると考えている。彼女は、これまでの基礎付け主義者を次のように特徴づける。

「[従前の] 基礎付け主義者 (foundationalist) と整合論 (coherence theories) は、我々の信念の本性について、基礎的信念とより組織立った信念との間にカテゴリー的な線引きをしない。その内容は、終始、命題からなっていて認識的で、階層的な優先性、相互依存、という概念を用いている。それは、正当化と推論によって決定できる命題と

いう形を取り得る。」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 78、強調はシャロック)

シャロックによれば、従前の基礎づけ主義は、正当化の作業を続けて、最も基礎的な、根拠となるアプリアリな命題を認識的に見出して、それをベースとして推論を重ねて大伽藍を作り上げるのである。従って、最も基礎的な命題も、またそれを根拠として作られるその上にある命題も、連続的で同質である、と彼女は考える。

しかし、ウィトゲンシュタインの基礎付け主義はそうではない、とシャロックは言う。

「ウィトゲンシュタインがしていることは、その【従前の基礎付け主義者の】映像の誤り指摘すること (correcting) である。彼は、その映像がすべて間違っていると言っているのではなく、基礎的信念のその描写が間違っているのだと言っている。それ故彼は、伝統的な構造の比喻 (基礎づけと整合性) を保持しつつ、その基礎的な構造的構成要素を非命題的なものに置き換える。その非命題的なものは<無>ではない。それは、我々の行為の仕方の内に自らを表明する、確実さである。」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 78)

ウィトゲンシュタインが通常の言語ゲームの根拠とするもの、即ち蝶番は、非命題的なもので、我々の行為の内に自らを表出するものである。即ち、従前の基礎付け主義は、基礎的なものもその基礎的なもののうえに作り上げられるものも、認識的に連続した同じカテゴリーの下に収めることができる。しかし、ウィトゲンシュタインは、そうしたこれまでの基礎付け主義の誤りを指摘して、基礎的なものは、行為において現われ、示されるもので、それは命題として表現されえない (真・偽を問えない) ものであるとする、と彼女は言う。

そのような「揺るぎないもの」である非命題的なものと、それを基礎にして真・偽や正当化を問う通常の言語ゲームとはカテゴリーが異なる。ウィトゲンシュタインにおける「揺るぎないもの」は、非認識的 (推論を重ねて確信に至るものではない) で非命題的 (真・偽や正当性を問うことがナンセンス) であり、これまでの基礎付け主義者のいうアプリアリに認識される基礎的な信念ではない、と彼女は言うのである。

「知識」と「確実さ」の違いは、程度の違いではなくカテゴリーの違いであるとは、もともとウィトゲンシュタインの言っていることである (§ 308) が、では、カテゴリーの違う知識と確実さが、どう結び付くのか。

「ウィトゲンシュタインの主張は、文字どおりにも比喩的にも不明瞭なところは何もない。彼は、蝶番は基礎的でそしてまた整合的であると思っている。それら【蝶番】は、あらゆる問いと思考の基礎にあり (§ 415)、そしてまたその蝶番は、その周りのものによってしっかり固定されている (§ 144)。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 78、強調はシャロック)

「ウィトゲンシュタインの考えでは、我々の最終の信念の位置と安定性は、他の最終の信念との整合性に依存し、あるいはそれによって強められている。—そこでは整合性を、命題からなる正当化、あるいは合理的な正当化ということによって理解することはできないけれど、(例えば繰り返し現れるというような) 因果的ということによって理解することができる。その基盤は岩のように固い基礎であって、その固さは、正当化によるのではなく、因果的な強化によるのである。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 79、強調はシャロック)

シャロックは、蝶番が繰り返し現れるという因果的な強化によって、他の蝶番と整合的に強められて、その位置と安定性を得ていると、ウィトゲンシュタインが考えているとしている。彼女は、蝶番同士の位置と安定性は、因果的な強化によると考えている。

そして彼女は、§ 97 の河床の移動の比喩に魅惑されて、ウィトゲンシュタインを基礎付け主義者として位置付けることを拒否する注釈者達が、ウィトゲンシュタインの「不変の (immutable) 構成要素を完全に見落としている」と言って、彼らを批判する²⁰⁷。注釈者達は、ウィトゲンシュタインの世界像がこれまでずっとクワインの信念の網に関連付けられてきたので、蝶番が他の信念よりももっと永続する経験的信念以外の何ものでもないものとしてみなしてきた、と彼女は言う。しかし彼女は、このクワインの自由に動く信念の織物と比較すると、ウィトゲンシュタインは疑いなく基礎的な物語を語っている、と言う。

「不変の構成要素」が何を指してのものか、明示されていないのでよく分からないが、クワインが最終の信念をあくまで経験的信念としているのに対して、ウィトゲンシュタインは最終の信念を「規則」としての役割を持つものとしている、ということではないかと考えられる。

また、彼女は、「ウィトゲンシュタインは、我々の信念体系において規範と経験命題の関係を描くにあたって、連続性の観念を排除する」(Moyal-Sharrock [2007], p. 79)、と言う。知識から確実性へと確実さが連続的に次第に増してくるのではなく、ある点で全く

²⁰⁷ Moyal-Sharrock [2007], p. 79、以下の論述も同様。

確実（「揺るぎないもの」）になるのであって、そこには連続的な変化はない。ここには、程度の変化ではなくカテゴリーの変化があつて、意味の相転換のようなものが起こると彼女は言い、経験命題と論理的命題の違いを、クワインは連続的で程度の違いと考えるが、ウィトゲンシュタインはそうでないということを指摘する²⁰⁸。なお、知識から確実性への変化が不連続であることは、ストロールが既に指摘していたことである。（第2章の3(4-1)）

このようにシャロックが、ウィトゲンシュタインを基礎付け主義者として考えるのは、蝶番同士の強固さが正当化ではなく因果的な強化によるものであること、そして蝶番は、最終の信念（蝶番）に至る前の信念（即ち認識的ゲームの信念）に対して、規則としての役割を持つこと、ということからである。従つて、彼女は、ウィトゲンシュタインを基礎付け主義者と考えるが、それは、従前の基礎付け主義者と同じレベルのものではない、と考えている。従前の基礎付け主義者は、最終の信念とそれに至る信念は連続しており、かつ最終的信念も経験的信念と考えるからである。

これに対してハミルトンは、ウィトゲンシュタインを基礎付け主義者と見ることに批判的である²⁰⁹。

その主な理由は次の三つである。

- (1) 言語ゲームの基礎にあるのは、根拠付けられていない行為の仕方である
- (2) 我々の信念体系は、全体論的で互いに支え合う構造である
- (3) ムーア命題のような非命題的命題は、経験命題との間で身分が変動する

ハミルトンが理解する、デカルト以来の認識論において支配的な基礎付け主義とは、次のようなものである。

「[基礎付け主義は、] 我々の知識体系において、正当化は二層の構造を持つことを主張する。その見解によると、他の信念や命題によって正当化されるのではなく、基礎的でそれ自身の権利において正当化される信念や命題がある。それらは、究極的に非基礎的なあらゆる信念や命題を正当化する。基礎付け主義は、この二つの層—根拠と根拠付けられるもの—にある命題を、独立に理解可能なものとして扱う。20世紀において、基礎付け主義は、ラッセル、シュリッック、C. I. ルイス、A. J. エイヤーそしてロデリック・チザムによって擁護された。」(Hamilton [2014], p. 99、強調はハミルトン)

²⁰⁸ Moyal-Sharrock [2007], p. 80

²⁰⁹ 以下は、Hamilton [2014], pp. 98-109 による。

そして、ハミルトンは、先の(1)について、以下に掲げる § 204 等を根拠にして、ウィトゲンシュタインは、根拠のない命題が我々の日常の非基礎的な命題を正当化できる根拠を与えている、という基礎主義者の見解を拒否している、と論じる。

「しかしながら、根拠を与えること、証拠を正当化することは終わりがある。－しかし、その終りにあるものは、ある諸命題が直ちに真として我々に分かるのではない。それ故、言語ゲームの根底にあるのは、我々の側のある種の見えではなく、我々の行為なのである。」 (§ 204、強調はウィトゲンシュタイン)

「私が椅子から立ち上がろうとする時、私はなぜ、自分に両足があることを確かめないのか。そこには理由はない。私は単にそうしないだけのことだ。そのように私は行為する。」 (§ 148)

「何がそのテストとして見なされるのか。－『しかしこれは、十分なテストであろうか。もしそうならば、それは十分なものとして、論理学において認められなければならないのではないか。』－まるで根拠を与えることに終点がないかのようである。しかし、終わりは、根拠付けられていない前提ではなくて、根拠付けられていない行為の仕方である。」 (§ 110、強調はウィトゲンシュタイン)

ハミルトンは、ウィトゲンシュタインにおいて、「我々の言語ゲームの基礎にあるのは、デカルト主義者が持っているような一種の見え—数学や論理学のアプリオリな命題の自明さ—ではなく²¹⁰」、根拠付けられていない行為の仕方だ、だから、『確実性の問題』における非命題的な確実さの役割を強調すべきではない、と主張する。

また、(2)について、ハミルトンは、ウィトゲンシュタインの「基礎壁と家全体」 (§ 248) の比喻や、以下に掲げる光の拡がり、回転軸の比喻²¹¹等を挙げて、ウィトゲンシュタインは、我々が個々の部分についての完全な理解を獲得するというよりはむしろ、信念、あるいは概念の体系についての理解を、次第に獲得すると主張している、と言う。

「我々が最初に何かを信じ始める時、我々の信じるものは、一つの命題ではなく、諸命題から成る体系全体である。(光は、次第に全体に拡がる。)」 (§ 141、強調はウィ

²¹⁰ Hamilton [2014], pp. 99-100

²¹¹ 「回転する物体の回転軸」を直接表現しているのは § 152 である。

「揺るぎなくあるものは、それが本質的に明白であるとか納得のいくものであるから揺るぎないのではなくて、その周りにあるものによって、しっかりつかまえられているからである。」 (§ 144)

(3)について、ハミルトンは、『確実性の問題』の河床・河岸と水の動きの比喩 (§ 96-99、第4章の3(3)に掲載)を根拠にして、ウィトゲンシュタインが描く像は、経験的なものが規則に、また規則が経験的なものに、とその身分を変えることを挙げる。

以上のような考察から、ハミルトンは、ウィトゲンシュタインが基礎付け主義者ではないと、結論する。

このように、ウィトゲンシュタインが基礎付け主義者であるかどうかについて、シャーロックとハミルトンは意見を異にする。しかしその違いは、「確実さ(蝶番、ムーア命題)と知識はカテゴリーが異なる」というウィトゲンシュタインの主張をどう解釈するかの違いにあるように思われる。確実さを表現するものは、経験命題ではなく規則の役割を果たすということ、また、確実さは行為において示されるということは、シャーロックもハミルトンも認めるところである。

しかし、シャーロックは、蝶番同士の強固さが因果関係の強化と整合性にあるとし、蝶番の規則としての役割を強調することで、ウィトゲンシュタインを基礎付け主義者と考える。シャーロックは、蝶番の規則としての役割を重視している。

他方、ハミルトンは、言語ゲームの基礎にあるのは根拠のない行為の仕方であり、信念体系は全体論的で互いに支え合う構造であり、ムーア命題のような非命題的命題が、経験命題との間で身分を変えることを理由にして、ウィトゲンシュタインを非基礎付け主義者として考える。ハミルトンは、行為重視のように考えられる。

論者は、「揺るぎないもの」(ムーア命題、蝶番)と行為は、コインの表裏の関係にあると考えている。「揺るぎないもの」の役割は、規則に類似したものである。言語ゲームは、「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームの二層の構造からなる。「揺るぎないもの」の確実さは、シャーロックが言うような蝶番同士の因果関係の強化にあるのでもなく、ハミルトンが言うような全体論的で互いに支え合う構造にあるのでもない。「揺るぎないもの」が全体論的であることはハミルトンの言うとおりであるが、その確実さは、言語ゲームの二層の構造から、「揺るぎないもの」の疑いや誤りの論理的可能性が排除されていることにある。そしてその確実さは、認識的ゲームにおいて、行為する態度、構えの内に示さ

れる。それは特に意識されることは無く、言葉に表現されることもない。だが、「揺るぎないもの」がないとしたら、認識的ゲームはなし得ないように思われる。従って、有意味な行為もなし得ないと思われる。人間は言語を有するので、ムーア命題として「揺るぎないもの」をあえて表現することができる。だが、それが言語に表現されるか表現されないかに関わらず、ムーア命題に該当するものが行為の背景になればならず、それが、行為する際の態度、構えの内に示されていると思われる。そして我々は、そうした行為する態度、構えに示される「揺るぎないもの」を、心的傾性として持っている。動物は言語をほとんど持たないので、行動しかあり得ないが、ムーア命題に相当するものを、やはり行動の背景に持っていると考えられる。

こうした文脈で考えると、論者は、人間の言語と行為を含めた活動（言語ゲーム）を対象とするウィトゲンシュタインの姿勢の中に、新たな基礎付け主義を認めたく思う。それは、因果的に強化された蝶番による規則重視の基礎付け主義とは異なっている。通常の言語ゲームにおける行為、即ち認識的ゲームにおける行為は、「揺るぎないもの」との論理的な結びつきに基づいている。一方では「揺るぎないもの」が認識的行為を意味あるものにし、「揺るぎないもの」を疑うことは認識的行為自体を自己論駁に陥ることを免れないものにする。「揺るぎないもの」の確実さは、言語ゲームの二層の構造という論理的关系に拠っている。また他方では、「揺るぎないもの」はあえて言葉にして表現することはできるが、そうすることはナンセンスであって、「揺るぎないもの」は行為する際の態度、構えの内に示される。このように、人間の言語を含めた活動は、認識的ゲームと「揺るぎないもの」とが論理的な結びつきを持っていて、それが行為の内に示されるという、基礎付け主義である。「揺るぎないもの」がなければ行為が成り立ちえないという基礎付け主義である。

さて、懐疑論に対処する一つの方法として、ウィトゲンシュタインとヒュームが同じような位置にあると考えたのはストローソンである。彼はそれを自然主義と名付けた。次章では、懐疑論に対処する方法としての、ストローソンの自然主義について考察しよう。

第6章 ヒュームとウィトゲンシュタイン

—懐疑論に対するストローソンの自然主義を批判する—

1 はじめに

G. E. ムーアは、第2章の2(1)-(3)で論じたように、外的世界の存在について、観念論に反対して実在論を擁護するために、1939年の彼の論文「外的世界の証明」において、眼前に自分の両手を掲げて「ここに自分の手がある」という前提から、外的事物の存在を証明しようとした。しかし、その証明に満足しない者達から、その証明が前提にしている「ここに手がある」こと自体の証明を求められて、「私はここに自分の手が二つあることを知っている」でもって答えたのである²¹²。

P. F. ストローソンは、ムーアのこの証明について、バリー・ストラウドの論文「懐疑論の意義」を基礎にして、ムーアは懐疑論者の論点を全く捉え損なっていたか、懐疑論者のテーゼをただ全面的に独断的に否定しただけだ、と批判した²¹³。

ストローソンは、懐疑論の伝統的な問題として、(1)外的世界の存在、(2)他者の心についての知識、(3)帰納の正当化、(4)過去の実在性を挙げる²¹⁴。そして、この中でも特に、外的世界（物体）の存在と帰納の正当化の根拠を問う懐疑について、ヒュームとウィトゲンシュタインの態度を取り上げる。例えば、外的世界の存在についてのストローソンの考えをまとめると次のようだ。

ヒュームとウィトゲンシュタインは、物体について、その存在の根拠を問う懐疑が、我々の合理的な処理能力の範囲外にあり、外的世界の存在についての信念が基礎付けられたものではない（根拠がない）ことを認めている。他方、その信念に対する疑いは、真面目に受け入れるものでもないとも考えている。彼らは共に、「疑いが排除されているもの」があることを認めており、その根源が、ヒュームの場合には、人間の自然本性に、ウィトゲンシュタインの場合には、子供のころからの活動、社会的実践を学ぶことにより、明示的ではないが形成されるものにある²¹⁵、というものである。

本稿では、ヒュームとウィトゲンシュタインの両者に認められる「疑いが排除されているもの」について、ストローソンがそれらをどのように位置づけていたかを検討し、彼の提唱する自然主義的方法は、無視する、あるいは懐疑論を避けると言うだけで、「疑いが排

²¹² Moore [1959], pp. 146-150

²¹³ Strawson [1985], p. 4

²¹⁴ Strawson [1985], p. 2

²¹⁵ Strawson [1985], pp. 14-15

除されているもの」の確実性の内実を示すことができないこと、その確実性は、ウィトゲンシュタインが考察する言語ゲームの二層の構造から示すことができるということ、そして、ストローソンはウィトゲンシュタインのこの観点を見落としているということを論じる。

このことを明らかにするために、まず次の第2節で、懐疑論に対するヒュームとウィトゲンシュタインの態度について、ストローソンの見解をまとめる。次いで第3節でヒューム、第4節でウィトゲンシュタイン、それぞれについて、彼らのテクストをもとに、その考え方を考察し、最後に第5節でまとめとして、ストローソンの掲げる自然主義的方法は、それによって懐疑論を無視する（避ける）というだけで、「疑いが排除されているもの」の確実性を示すことができないこと、そしてその確実性の内実は、ウィトゲンシュタインの言語ゲームの二層の構造からもたらされるものであること、懐疑論者の疑いは意味をなさないことを論じる。

2 懐疑論に対するヒュームとウィトゲンシュタインの態度についてのストローソンの見解

ストローソンは、懐疑論に対して、常識や神学や疑似科学的な考察²¹⁶を利用した論証によって直接にそれを拒否する以外に、自然主義的方法（the way of Naturalism）があるとして、ヒュームとウィトゲンシュタインを挙げる²¹⁷。それは、ヒュームにあつては人間の自然本性に基づく自然主義、ウィトゲンシュタインにあつては、子供のころから社会的実践を通じて学ぶ言語ゲームの枠組みに基づく社会的自然主義²¹⁸とも呼べる自然主義のことである。彼らは、こうした自然主義によって、懐疑論を論証によって拒否するのではなく懐疑論を無視する、と言う。

本節では、ストローソンのこの主張を少し詳しく見ていきたい。

ストローソンはヒュームについて、懐疑論者ヒュームと自然主義者ヒュームという二人のヒュームがいると言う²¹⁹。懐疑論者ヒュームは、「いかなる確実さも我々に提供することができず、懐疑論に反対できない哲学的な批判的思考」のレベルにいるヒュームであり、自然主義者ヒュームは、「自然本性（Nature）、即ち信念への逃れ難い自然の関与によって、批判的思考【懐疑論】の要求が完全にひっくり返されて、その要求が抑圧される、通常の

²¹⁶ ストローソンは、「疑似科学的な考察」を、物理理論が物理的現象の最も有用な説明を与えるように、物体の存在を認めることが経験現象の最も有用な説明を与える、という科学理論に暗黙に比較してすることとして捉えている。（Strawson [1985], pp. 15-16）

²¹⁷ Strawson [1985], p. 8

²¹⁸ Strawson [1985], p. 19

²¹⁹ 以下、Strawson [1985], pp. 9-11

経験的思考²²⁰」のレベルにいるヒュームである。そして、懐疑論者ヒュームは、自然主義者ヒュームの前に、無視される存在者、無力な存在者として立ち現われると言う。

「自然主義者ヒュームに従うと、懐疑論者の疑いは論証によって立ち向かわれるべきものではない。……それらは単に無視されるだけだ。なぜならそれら【懐疑論者の疑い】は空回り (*idle*) しているのであって、自然の力、即ち、自然に植えつけられた信念に対する我々の傾性 (*disposition*) の力【自然本性】に対して無力であるからなのである。」 (Strawson [1985], pp. 10-11、強調はストローソン)

ヒュームにおいて、物 (外的世界) が存在するという信念と帰納による信念形成は、我々の「信念への逃れ難い自然の関与【自然本性】」によって、懐疑論者の疑いから免れており、論証によってそれら信念を正当化せよと言う懐疑論の要求は、無視されるだけだと、ストローソンは言う。

また、ストローソンはウィトゲンシュタインについて、彼は、命題を、理性と経験の光の下で問いと決意に現れる命題と、疑いが排除されていて問いと決意に現れない命題の、二つに区分する²²¹、と言う。

ストローソンは、ウィトゲンシュタインにおける「疑いが排除されているもの」について、ウィトゲンシュタインの草稿『確実性の問題』から多量の章句や比喻を引用して²²²、彼の一般的な傾向や意図を、次のようにコメントする²²³。

- (1) ウィトゲンシュタインは、我々の信念体系において、経験的な確証か反証を受ける実際の探究や疑いを扱うもの、即ち、実際の経験的な探究に関わるものと、「足場」、「枠組み」、「背景」、「基礎」等によって表現される極めて異なる性格を持つもの、即ち、実際に探究する際に、当該探究自体を支える枠組みに関わるものとを区別する。

²²⁰ Strawson [1985], p.10

²²¹ ストローソンは、この区分は、ヒュームにおける探究に値するものと、探究することが無益で我々のあらゆる推論において当然の事とみなさねばならないものとの区別 [(T1.4.2.1 ; SBN187, 邦訳 p. 219)] に相当すると言う。(Strawson [1985], p. 11)

²²² ストローソンは、『確実性の問題』から「いくつかの命題は疑いを免れている」 (§ 341、強調はストローソン)、「【我々の経験命題の】体系において特有の論理的役割を持つ命題」 (§ 136、[...] の挿入と強調はストローソン)、「我々の思考の足場」 (§ 211、強調はウィトゲンシュタイン)、「論証がそこにおいて生きる要素」 (§ 105) を始めとして、§ 415, 342, 253, 411, 83, 151, 162, 94, 95 から引用している。(Strawson [1985], p. 12)

²²³ Strawson [1985], pp. 12-15

- (2) 探究自体を支える枠組みなどの多くは、子供のころからの活動、社会的実践を通じて知らず知らずのうちに形成されるものであって、明示的に学んだり教えられたりするものではない。またそれらは、伝統的な経験論者の意味で、基礎とはみなされない。
- (3) 実際の経験的な探究に関わるものとその探究を支える枠組みに関わるものという、この区別される二種類のものは、目に見えない変化を受けて、時とともに変わりうる²²⁴。

以上から、ストローソンは、ヒュームとウィトゲンシュタインについて次のように論じる²²⁵。

- (1) ヒュームにおいてあらゆる探究の枠組みを構成するものは、
- ア 物体の存在を受け入れる
 - イ 帰納的な信念についてその信頼性を受け入れる
- の二つであって、これらは自然本性によって、我々の心の中に根深く埋め込まれている。
- (2) ウィトゲンシュタインの場合は、表面上はもっと複雑で、
- ア 探究の枠組みに関する諸命題は、ヒュームが掲げる二つ以外に、もっと様々なものがある
 - イ 探究の枠組みは、変化しうる
- (3) あらゆる探究の枠組みを構成するものの根源は、ヒュームにおいては「自然本性」（自然主義）であり、ウィトゲンシュタインにおいては、「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」（社会的自然主義）である。
- (4) ヒュームとウィトゲンシュタインは、両者共に、物体の存在と帰納的な信念に対する信頼は、基礎付けられたものではないと考えている。またそれと同時に、これらに対する疑いは、真面目に受け取るものではない、とも考えている。

以上からストローソンは、ヒュームとウィトゲンシュタインに共通する、次のような懷疑論者に対する態度を見て取る。

外的世界の存在などの信念について、懷疑論者の疑いに立ち向かおうとすることは、我々の信念体系におけるそれら信念の役割を、全く誤解することである。それらの信念に

²²⁴ ストローソンはここで『確実性の問題』から、川の河床・河岸と水の動きの比喻の節（§ 96-99）を取り上げている。（Strawson [1985], p. 13）

²²⁵ Strawson [1985], pp. 14-15

根拠はない。それらの信念に対する懐疑論者の疑いに対処する正しい方法は、論証によってそれを反駁することではなく、その疑いは無効で、非現実的で、見せかけであるということを描することである。論証によって懐疑論者の疑いに反駁しようとすることは、懐疑論者の疑いと同様に無効の試みである。これがヒュームとウィトゲンシュタインに共通する態度である。

かくしてストローソンは、懐疑論者の疑いについて、常識や神学や疑似科学的な考察による論証によって直接にそれを拒否する以外の方法があり、それは、ヒュームやウィトゲンシュタインにおける自然主義によるものである、と言う。我々には、基礎的な信念として受け入れないではいられないものがあり、その根源は、ヒュームにおいては「自然本性」、ウィトゲンシュタインにおいては「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」である。我々は、あらゆる推論において当然のこととして認める以外に、どんな選択肢も持たないものを持っている。こう結論し、伝統的懐疑論者に対する批判として、自然主義を提唱する²²⁶。

ここで確認しておくことは、ストローソンは、懐疑論を論駁するための常識や神学や疑似科学的な考察による論証と対比させて、ヒュームの「自然本性」やウィトゲンシュタインの「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」を措定することによって、懐疑論を無視する、あるいは回避する方法として、「自然主義」を提唱していることである。

しかし、「自然本性」や「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」を措定することによるストローソンの「自然主義」や「社会的自然主義」は、懐疑論を無視する（回避する）というだけで、懐疑論者が求める外的世界の存在や帰納推論の確実さの内実までは示されない。

なぜなら、ストローソンの言うヒュームの「自然本性」やウィトゲンシュタインの「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」は、外的世界の存在や帰納推論の確実さを生む原因でしかないからである。

このことを明らかにするために、ヒュームとウィトゲンシュタインそれぞれについて、彼らのテキストからそのことを見ていくことにしよう。

3 ヒュームについて

ヒュームの哲学では、認識の基礎は知覚である。知覚は印象と観念に区分され、その違いは、我々の意識に入ってくる際の勢い（活力）と生氣（生き生きさ）の度合いにある。印

²²⁶ Strawson [1985], p. 8

象は勢いと激しさを伴い、観念は印象の生気のない像である。その違いは、感じることと考えることの違いであるとも言われる²²⁷。全ての観念は印象からの複製として生じる²²⁸。

ヒュームにおいて、推論は関係づけである。彼は、自然的関係として、「類似性」、「隣接」、「原因と結果」の三つの関係²²⁹を、哲学的関係として、「類似性」、「質の度合い」、「反対」、「量又は数の比」、「同一性」、「時間と場所の関係」及び「因果関係」の七つの関係を挙げる²³⁰。最後の「因果関係」のみが、感覚の印象を超えた結合を生む²³¹。

またヒュームは、全ての推論を、論証的推論（観念の比較のみに依存する推論で、代数学、算術等の直観的、論証的に確実であるもの）と、道徳的推論（事実及び存在に関する推論）の二種類に区分する。事実に関する推論は、原因と結果の関係に基づいており、広義の蓋然的推論と言われる。ヒュームはさらに、この広義の蓋然的推論を、疑念や反対の余地のない確証（立証的推論, proof）と、それ以外の狭義の蓋然的推論の二種類に区分する²³²。

ストローソンがヒュームに関係付ける「自然本性」に関わる推論は、広義の蓋然的推論（因果推論）の中、疑念や反対の余地のない確証、即ち、立証的推論のことである。次節ではこの立証的推論を中心に見ていくこととする。

3(1) 立証的推論について

ヒュームによれば、対象相互の恒常的随伴関係を経験すると、現前している印象が、想像力による自然な観念の結合原理の一つである「原因と結果（因果関係）」によって、別の対象の観念に関係づけられる（観念連合²³³）。そして、習慣（理性ではない）によって、一方の印象から直ちに他方の観念への移行がなされる。その移行は、必然的結合として感じられる（思念されるのではない）ことによって、信念（確実さ）に至る²³⁴。これが立証的推論である。

「現前する印象に基づいて生じるすべての信念は、ただこの起源[習慣]からのみ生じ

²²⁷ T1. 1. 1. 1; SBN 2, 邦訳 p. 13

²²⁸ T1. 1. 7. 5; SBN 20, 邦訳 p. 31

²²⁹ T1. 1. 4. 1; SBN 11, 邦訳 p. 22

²³⁰ T1. 3. 1. 1; SBN 69, 邦訳 p. 89

²³¹ T1. 3. 2. 2; SBN 74, 邦訳 p. 94

²³² T1. 3. 11. 2, 3; SBN 124-125, 邦訳 pp. 151-152、狭義の蓋然的推論は、憶測からの推論で、偶然（原因の不明なもの）や諸原因（複数の原因）から生じるものである。

²³³ T1. 3. 14. 31; SBN 170, 邦訳 p. 200

²³⁴ T1. 3. 7. 6; SBN 97, 邦訳 p. 120、なお、ヒュームにとって信念とは、「経験に伴うものであり、ある特異な心持ち、すなわち習癖によって生み出された生き生きとした想念に他なら」（Ab 27; SBN 657, 邦訳 p. 217）ない。

る。……我々が二つの印象が互いに随伴しているのを見慣れている場合には、一方の印象の出現あるいはその観念は、我々を直ちに他方の印象の観念へと運ぶ（移行させる）のである。」（T1. 3. 8. 10; SBN 102, 邦訳 p. 127）

観念連合は、想像力による。想像力による観念の自然な結び付け（「原因と結果」の関係）によって、我々は、一つの対象とそれに恒常的に随伴するものとの間の結合を持つ。しかし、観念連合による観念の自然な結合だけでは必然性を持たない。因果関係（観念連合による観念の自然な結合）に必然性を与えて信念に至らせるものは、習慣である。

「私は、頻繁な反復の後では、対象の一つが現れれば、精神が、習慣によって、その対象にいつも伴っていた対象を考慮するように、また、それを、その最初の対象に対する関係の故に、より強い光の下で考察するように、決定されている。」（T1. 3. 14. 1; SBN 156, 邦訳 p. 184、強調はヒューム）

立証的推論に関わる信念（確実さ）は、想像力と習慣という自然本性によって決定されている。理性によって帰納推論に必然性を与えることはできない。帰納推論に必然性を与えるものは習慣である。

信念は習慣によって、即ち過去における頻繁な反復から、理性や想像力の新たな働きなしに直ちに生じる。いかなる理由もなく精神が恒常的かつ一様に移行を行う²³⁵のである。いかなる理由もなくというのは、自分の内にその働きを何も意識しないからである。

「信念は、理性又は想像力の新たな働きなしに直ちに生じる……なぜなら、私は、そのような働きを何も意識しないからであり、主題（現前する印象、過去の印象及び恒常的随伴）の内に、そのような働きの基礎となりうるようなものを、何も見出さないからである。」（T1. 3. 8. 10; SBN 102, 邦訳 p. 127、(…)の挿入は邦訳者、強調は論者）

「知性又は想像力が、過去の経験を反省することなしに、ましてや、過去の経験について原理を形成したり、その原理に基づいて推論したりすることなしに、過去の経験に基づいて推理を行う。」（T1. 3. 8. 13; SBN 104, 邦訳 p. 129、強調は論者）

²³⁵ T1. 3. 6. 12; SBN 92, 邦訳 p. 114

立証的推論において、習慣という自然本性は、「同じ随伴を未来に期待するように〔逃れ難く〕私を決定」（T1. 4. 7. 3; SBN 265, 邦訳 p. 300）している。

これが立証的推論に関わる必然性の中身である。立証的推論における必然的結合は、習慣、過去における反復によって、思考または想像において逃れ難く私を決定している。ヒュームはそのような習慣的結合を、思考あるいは想像において感じる、あるいは心持ちを持つと言ひ、それが必然的結合の観念の源泉である、と言う²³⁶。ヒュームにおいて信念（必然的結合の観念）は、思念されるというよりも、感じられることにある。

「信念は、我々の自然本性（*natures*）の思考的部分の作用というよりも、感受的部分の作用であるというのが、より正しい。」（T1. 4. 1. 8; SBN 183, 邦訳 p. 215、強調はヒューム）」

「現前する印象からの移行は、常に観念を活気づけ、強化する。ある対象が提示されると、それにふだん随伴している対象の観念が、直ちに、何か実在する堅固なものとして、我々を打つのである。この観念は、思念されるというよりも、感じられるのであり、……」（*App* 9; SBN 627, 邦訳 p. 315、強調はヒューム）」

このようにヒュームは、立証的推論に関わる信念（確実さ）を、習慣により必然的結合を感じるという心理的確実さによって、説明する。それは証明ではない。

さて、知識等の確実さを、おおまかに、見て分かるというような感覚による「直観知」によるもの、推論による「認識知」によるもの、訓練や行動等の実践を通じて身に付ける「実践による確実さ」によるもの、という三つに区分してみよう²³⁷。立証的推論に関わる確実さは、直観知や認識知と重なるところもあるが、根源的には習慣という実践を通じて身に付けられた確実さであると考えられる。

立証的推論は因果推論であり事実の関係である。事実の関係の帰納推論は、理性によって正当化することができず、論理的確実性をもたらさない。しかし、ヒュームの立証的推論は事実の関係ではあるが、習慣という実践を通じて、必然的結合（確実さ）を感じるものである。ヒュームは、このように立証的推論の確実さを、習慣という実践（自然本性）に

²³⁶ *EHU* 7. 2. 5; SBN 78, 邦訳 p. 70

²³⁷ 実践を通じて身に付ける確実さは直観や推論による知識とは異なる確実さである。また、ヒュームが実際にこのように区分しているわけではないが、ヒュームの挙げる自然的・哲学的関係の中で、「隣接」、「類似性」、「質の度合い」、「反対」、「同一性」、「時間と場所の関係」は直観知、「量又は数の比」と一部の「因果関係」は認識知に当たるといえよう。

よって説明した。だがそれは、確実さが生まれる原因を説明するものである。

「ここで我々の注意に値すると思われることは、原因と結果についての我々のすべての判断の基礎である過去の経験が決して気付かれないほど目立たない仕方で精神に働きかけることができ、ある意味では我々に全く知られないことがあり得る、ということである。……精神は記憶の助けなしに移行を行う。習慣は我々が反省するまもなく働く……経験は、隠れた働きによって、一度も考えられることなしに、信念、即ち原因と結果の判断を生み出すことができる。」（T1. 3. 8. 13; SBN 103-104, 邦訳 p. 128）

ヒュームの習慣という「自然本性」は、立証的推論の必然的結合（確実さ）の論理的根拠（内実）ではなく、その確実さを生み出す原因である。

ヒュームの立証的推論は、「原因と結果」という観念連合（想像力による観念の自然な結合）と、習慣という実践によって、必然的結合（確実さ）が与えられる。この想像力と習慣が、「自然本性」の中身である。

このようにヒュームは、立証的推論とその確実さを、自然本性である想像力と習慣及び心理的確実さによって説明する。それは、立証的推論の持つ確実さの内実を説明するものではなく、その確実さを生み出す原因を説明しているのである。ヒュームにおける想像力や習慣という「自然本性」は、立証的推論の確実さを生み出す原因として措定された、仮説なのである。

従って、自然本性（想像力や習慣）によって生み出された立証的推論が、疑う余地のないのはなぜなのかという確実さの内実についての説明は、感じるという以外に与えられていないのである。

3(2) 物体の存在について

物体（外的世界）が存在するということは、ストローソンも指摘しているように、ヒュームにおいてはあらゆる論究の当然の前提とされるべきものであり、探究の主題は、物体が存在するか否かではなくて、物体の存在を信じさせる諸原因に関わるものであった。

「我々は、いかなる諸原因が我々に物体の存在を信じさせるのかと問うてもよいが、物体が存在するか否かと問うことは、無益である。物体が存在するということは、我々のあらゆる論究において、当然のこととしなければならない点なのである。

我々の現在の探究の主題は、我々に物体の存在を信じさせる諸原因に関わるのであ

る。」（*T1. 4. 2. 1, 2* ; SBN 187-188, 邦訳 p. 219、強調はヒューム）

ヒュームは、物体の独立連続存在を、知覚（感覚）や論証（理性）によって推論することはできず²³⁸、その信念の正当化は、人間の能力を超えるものだと考える。物体の独立連続存在は、想像力による自然な観念の結合原理の一つである「類似（知覚の間の類似性）」による観念連合によって²³⁹、虚構されるのである。

ヒュームは、知覚のみを原理とした理性による推論は、「全ての外的対象を消滅させ、外的対象に関する最も常軌を逸した」（*T1. 4. 4. 6*; SBN 228, 邦訳 p. 260）過激な懐疑論を招くに至り、我々は、それを論駁することはできない、と言う。

「理性と感覚能力の両方に関するこの懐疑は、決して根本的に癒されることのあり得ない病であり、我々がそれをどれほど追い払おうとも、また時には我々がそれから完全に免れているように見えようとも、どの瞬間にも我々に戻ってこざるを得ない病である。」（*T1. 4. 2. 57*; SBN 218, 邦訳 p. 251）

しかし我々は、人間の自然本性が、因果推論（立証的推論）の必然的結合を感じさせるのと同じ種類の心持ちを持つことで、知覚されなくなった後にも、その対象が存在していると信じるように導くのだ、と言う。

「我々が、何らかの事物の外的存在を信じるとき、言い換えれば、ある対象がもはや知覚されなくなった後のある瞬間においてもその対象が存在していると想定するとき、この信念は【立証的推論の信念と】同じ種類の心持ちにほかならないのである。」（*Ab 27*; SBN 657, 邦訳 p. 217、最初の強調はヒューム、後の強調は論者）

「私は、世界を、ある実在的で持続するものであり、たとえそれが私の知覚作用にもはや現れていないときでもその存在を保持するものであると見なすように、自然な仕方で導かれるのである。」（*T1. 4. 2. 20*; SBN 197, 邦訳 p. 229）

ヒュームは懐疑論を否定しない。ただ、それを追い払ってくれるのが自然本性である。懐疑論を理性によって追い払うことはできない。

²³⁸ *T1. 4. 2. 11*; SBN 191, 邦訳 p. 223、*T1. 4. 2. 14*; SBN 193, 邦訳 p. 225

²³⁹ *T1. 4. 2. 32*; SBN 203, 邦訳 p. 235、*T1. 4. 2. 37*; SBN 206, 邦訳 p. 238

「非常に幸運なことに、理性がこれらの暗雲【懷疑論】を追い払うことができないので、自然本性自体（nature herself）が、このために十分であり、この精神の緊張を緩和することによってか、あるいは、これらの幻影を追い払ってくれるような気晴らしと生き生きした感覚の印象によって、この哲学的な憂鬱とせん妄から、私を癒してくれるのである。」（T1. 4. 7. 9; SBN 269, 邦訳 p. 304）

3(3) ヒュームの自然本性

ヒュームにおいて、立証的推論（因果推論）に必然性を与え、物体の存在を信じさせるものは、人間の観念連合（自然な想像力）と習慣（実践）、即ち、自然本性であり、それを感じるという心理的确实さにおいて受け取るのである。立証的推論（因果推論）の必然性・确实さと物体の存在の疑いえないさは、人間の自然本性、即ち、観念連合と習慣という原因によって説明される。

ストローソンは、このような自然本性によって懷疑論を無視する（避ける）という自然主義的方法を提唱する。しかし、「自然本性」は、立証的推論や物体の存在の确实さを生み出す原因である。「自然主義的方法」は、立証的推論（因果推論）や物体（外的世界）の存在に対する懷疑論を無視（回避）するだけで、それらの确实さの内実を説明するものではない。

なお、懷疑論を拒否するための論証としてストローソンが引き合いに出す「神」も、「バークレイは、感覚経験の原因として善意の神という仮説を立てた」（Strawson [1985], p. 4、強調は論者）と言うように、「自然本性」と同様に原因であり、その論理的身分は「自然本性」も「神」も同じである。従って、ストローソンの「自然本性」による「自然主義的方法」と「神」は、その身分が同じレベルにあり、懷疑論者が求める立証的推論や物体の存在の确实さの内実を説明するものではない。

4 ウィトゲンシュタインについて

ウィトゲンシュタインの後期哲学のキーワードの一つは、第1章の4で取り上げたように、言語ゲームである。言語ゲームは、言語とそれに関わる人間の諸活動、生活形式の一部²⁴⁰である。

晩年のウィトゲンシュタインは、これまで各章で論じてきたように、言語ゲームの基礎

²⁴⁰ PI §7, 23

にある「揺るぎないもの（確実性）」に関心を持っていた。これまでに論じてきた「揺るぎないもの」についての彼の考察は、以下のようにまとめられる。

- (1) 分別のある疑いには疑う根拠があり、疑いは際限なく続かない。疑いのゲーム自体が確実さを前提にしており、疑いが終わるところには疑いの欠如がある²⁴¹。
- (2) 言語ゲームは、探究、問い、疑い等の通常行われる言語ゲーム（認識的ゲーム）と、その基礎にある「揺るぎないもの」²⁴²の二層の構造からなっている²⁴³。「揺るぎないもの」は、一つの体系、一つの構造を形成しており²⁴⁴、世界像とも言われ²⁴⁵、言語ゲームの全体が、この種の「揺るぎないもの」に基づいている²⁴⁶。「揺るぎないもの」に根拠は無い。通常言語ゲームにおいて主張される知識や疑いは、その基礎にある「揺るぎないもの」とカテゴリーを異にする²⁴⁷。
- (3) 「揺るぎないもの」は、推論を経て意識的に確信されるに至る認識知ではなく²⁴⁸、日常の実践や学習を通じて自覚的・非自覚的に受け入れている²⁴⁹実践知である。「揺るぎないもの」の確実さは行為する態度、構えの中に示されており、それを言葉にして認識的ゲームの中で表現することは意味をなさない²⁵⁰。端的な行為は、確かさに対応していて、知識に対応しているのではない²⁵¹。
- (4) 「揺るぎないもの」の表現は、経験命題の形式をしているが、経験命題の中で特有な論理的役割²⁵²（蝶番²⁵³、回転軸²⁵⁴の役割）を果たしており、規則のような性格を持っている²⁵⁵。その身分は、真・偽を問うことが有意味な経験命題ではなく、文法的な命題（語の用法や規則を記述するもの）として考えられ²⁵⁶る。そしてその確実さは、言語ゲームが二層の構造から成ることによって、疑いや誤りの論理的可能性が排除されているということにある確実さである。「揺るぎないもの」を疑うことは、自己論駁に陥ることが

²⁴¹ OC § 56, 88, 115, 122, 123, 232, 323, 334, 370, 392, 450, 519, 625

²⁴² 「確実さ」（§ 233 他）、「揺るぎない確信」（§ 86, 103）のことである。

²⁴³ § 88

²⁴⁴ § 102, 225, 274

²⁴⁵ § 93, 162, 167

²⁴⁶ § 411, 446

²⁴⁷ § 308

²⁴⁸ § 103

²⁴⁹ § 128, 143, 144, 160, 161, 162, 170, 263, 283, 286, 476, 480, 522, 538, 548

²⁵⁰ § 460, 461

²⁵¹ § 110, 148, 204, 510, 511

²⁵² § 136

²⁵³ § 341, 343

²⁵⁴ § 152

²⁵⁵ § 95, 494

²⁵⁶ § 56, 57, 58, 167, 213, 308, 401

避けられない。また、「揺るぎないもの」を誤ることは、言語ゲームを破棄する²⁵⁷ことである。しかしこうした経験的なものと文法的なものの区分は、固定したものではなく、変化することがあり、両者の間に明確な境界線を引くことはできない²⁵⁸。

以上を整理すると、「揺るぎないもの」は一つの体系、一つの構造を形成している (§ 102)。しかしそれは、推論を経るなどして意識的にその確信に至ったのではなく (§ 103)、その体系を記述することはできない。言語ゲーム全体は、日常行われる知識についての主張、疑い、探究、誤り等の通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）と、その基礎にある「揺るぎないもの」という、二層の構造からなっている。「揺るぎないもの」に根拠は無く、その確実さは、二層の構造から成る言語ゲーム全体から得ている一方、言語ゲーム全体の確実さは「揺るぎないもの」に基づいている (§ 144, 248, 446)。「揺るぎないもの」を疑うことや誤ることの論理的可能性は排除されており、それを疑うことや誤ることは自己論駁に陥るか、言語ゲームを破棄することになる。これが、「揺るぎないもの」の確実さの内実である。「揺るぎないもの」は態度や構えとして、端的な行為の内に示される。

なお、ウィトゲンシュタインの言う「揺るぎないもの」は、ヒュームの立証的推論に相当するものやある物の存在だけでなく、ムーアが、彼の論文「擁護」において、自分は確信を持って知っていると主張する常識の「地球は、私の身体が生まれる以前から何年も存在してきた」²⁵⁹等を始め、もっと広い範囲に及ぶ。「揺るぎないもの」は、認識的ゲームにおける信念を基礎付ける、基礎付けられていない信念である²⁶⁰。

通常行われる、知っている（知識）という主張、疑いや問いとその答え、検証や反証の探究、主張の誤りと訂正等の認識的ゲームは、こうした「揺るぎないもの」が基礎にあって、有意味に行われる。それは、回転する物体の回転軸のように、私は後からそれを発見することができるものである (§ 152)。こうした「揺るぎないもの」は、認識的ゲームがそこで生きる場である。我々は、「自分の座っている木の枝を切り落とすわけにはいかない」(PI § 55) のである。「揺るぎないもの」を疑うことは、自分の座っている木の枝を切り落とすことで、その可能性は論理的に排除されており、自己論駁に陥ることが免れない、意味をなさない（ナンセンスな）疑いである。

なお、ウィトゲンシュタインは、「揺るぎないもの」（確実さ）を得る原因として様々なものを挙げている。文化・歴史を受け継いだ²⁶¹共同体の中での生活や実践、過去の経験²⁶²、

²⁵⁷ § 370

²⁵⁸ § 96, 98, 319

²⁵⁹ Moore [1959], p. 33

²⁶⁰ § 253

²⁶¹ § 94

教育を通じた訓練²⁶³、動物の本能にも似たもの²⁶⁴、人間の自然誌²⁶⁵ (Naturgeschichte) 等が
そうである。これらは、ストローソンが「社会的実践」と呼ぶものである。

4(1) ウィトゲンシュタインの因果推論に対する考え

ウィトゲンシュタインがヒュームをどのように理解していたかは、彼の著作集の中でヒュームに言及している個所がないので、確かなことは分からない²⁶⁶が、因果推論も言語ゲームの一つである。

『原因の経験』と呼ばれうるような本当の経験があるのは確かである。……原因を探し求める際に、原因－結果の言語ゲームの一つの根源がここに見出される。」(PO pp. 372-373、邦訳 p. 11、強調はウィトゲンシュタイン)

過去の因果関係を将来に適用しようとする時、帰納推論の妥当性が問われる。帰納推論は我々にどう関わるのか。ウィトゲンシュタインは、次のように言う。

「次のように言うこともできよう。『帰納法則』は、経験的な事柄に関係するある特定の命題を根拠付ける (*begründen*) ことができないのと同様に、根拠付けることができない。」 (§ 499、強調はウィトゲンシュタイン)

「我々は、これまでいつも生じたことは今後も生じるであろうという原理に、単純に従っているのではないか。－この原理に従うとはどういうことか。我々はこの原理を本当に推論の中に持ち込んでいるだろうか。それとも我々の推理が、それに従っているかに見える自然法則にすぎないのか。この方がありそうなことだ。それ【原理】は、我々の考察の中に含まれている要素ではない。」 (§ 135、強調はウィトゲンシュタイン)

過去にいつも生じたことは将来も生じるであろうという帰納は、我々がそのように単に推理するというだけで、実在的な関係としてそれを表現するものではないし、原理として

²⁶² § 429

²⁶³ § 128, 144, 160, 161, 263, 283, 286 等

²⁶⁴ § 359, 475

²⁶⁵ 「命令する、問う、話をする、しゃべることは、歩く、食べる、飲む、遊ぶことと同様に、我々の自然誌に属している。」 (PI § 25、PI § 139 の欄外(b))

²⁶⁶ ウリクトは、ウィトゲンシュタインが、ヒュームについては断片的に理解することしかできなかったと述べている、と記している。(「回想」 p. 32)

それを用いているのでもない、とウィトゲンシュタインは言っている。

過去の経験に基づく因果的推論が、数学や幾何学の論証的推論が持つ論理的必然性を持たないということは、既にヒュームが明らかにしたことであつた²⁶⁷。ウィトゲンシュタインの数学や論理学の推論の必然性についての考えはヒュームと異なる²⁶⁸けれど、過去の経験に基づく因果推論についてはヒュームと同様に、過去の経験は論理的に必然的な根拠にはならないと考えている。

また、ウィトゲンシュタインは、我々は帰納によって推論しているのではないし、行為の正当化に帰納法則を必要ともしない、とも言う。

「リスは、今年の冬も貯えが必要だと帰納によって推論するのではない。全く同様に、我々〔人間〕も、自分たちの行為や予言を正当化するために、帰納法則を必要とはしない。」 (§ 287)

帰納法則を基礎付けることはできない。むしろその原理は、我々の論理的な考察の要素ではなくて、我々のする自然な推理形式が帰納推論に従っているのではないかとウィトゲンシュタインは先の § 135 で言う。それは、我々の言語ゲーム（生活形式）における推論の形式、出来事を判断する形式である。そのため我々は、原因がないと思われる場合でも、原因を探す衝動に駆られるのである。

「あらゆることを原因と結果という図式を通してみる衝動が、我々の内でいかに強力であることか。」 (*PO* pp. 374-375、邦訳 p. 14)²⁶⁹

また、ウィトゲンシュタインは、第 5 章の 3(1) でも言及したように、因果推論を、探究することに意味のないものと実験などによる探究に意味のあるものと二つに区別する。

²⁶⁷ *T*1. 3. 3. 3

²⁶⁸ ヒュームとウィトゲンシュタインとの間で、数学や幾何学の推論の必然性に対する考え方は次のように異なっている。ヒュームは、数学や幾何学の論証的推論を「客観主義」（客観的に必然的なものを示す）という立場で考え、これと対比して因果的推論を論証的推論とは区別された蓋然的推論（立証的推論）と考えていた。しかし、第 4 章の 1(2) で論じたように、マッギンの理解によれば、後期ウィトゲンシュタインは、数学の推論の必然性をヒュームのように客観主義という立場で考えていなかった。ここにヒュームとの違いがある。マッギンは、「揺るぎないもの」の仮借なさが訓練による言語技術の習得の結果と考えるのと同様に、ウィトゲンシュタインは、論理学や数学の推論の仮借のなさも、客観主義によってではなく、訓練による推論・計算技術の習得の結果として考えていた、と言う。しかし、これは、論理学や数学の推論の仮借なさを、訓練による技術の修得という原因によって説明するもので、それらの仮借なさの内実を説明するものではない。

²⁶⁹ 他に関連する節として *PI* § 481

紐が引っ張られているのを感じて、紐が何かに引っかかっていることが原因であるのを見てとるのは、探究の必要ない因果推論である。また、自分の飼っているヤギが、ある飼料を食べて以来乳の出が悪くなって、実験によってその飼料を見出すのは、探究することに意味のある因果推論である²⁷⁰。前者の因果推論はヒュームの立証的推論に相当する。

そして、立証的推論のような因果推論の確実さは、行為において示される。

「それは端的に何かをつかむようなものだ。私が何の疑いも無くタオルをつかむように。」

しかし、この端的につかむということは、*確かさ*に対応しているのであって、知識に対応しているのではない。」 (§ 510, 511、「*確かさ*」の強調はウィトゲンシュタイン)

第5章の 3(3) で論じたように、熱い鉄鍋には触れないというのも、過去の経験からそのことを推論して触れないというのではなく、熱い鉄鍋には触れないという行為がまず先に立つ。その確実さは、推論による認識知によるものではなく、実践知によるもので、行為する態度、構えの内に示される。

我々は、過去の経験を帰納推論して行為するのではない。端的に行為するのであり、その行為を正当化するために帰納法則を必要とはしない。ここには、ヒュームの立証的推論と同様の議論がみられる。

ヒュームにおいては、立証的推論に確実さ（信念）を与えるものは、理性（帰納推論）ではなく習慣という実践（自然本性）であった。ウィトゲンシュタインにおいても、ヒュームの立証的推論に相当する因果推論の確実さは帰納法則によるのではなく、行為という実践において示されるもので、端的な行為は、「揺るぎないもの（確かさ）」に対応している。習慣も行為も実践の一形態なので、この点でヒュームとウィトゲンシュタインは類似していると言えよう。違いは、ヒュームにおいては立証的推論の確実さが習慣という原因にあってその確実さを感じるものである一方、ウィトゲンシュタインにおいて「揺るぎないもの」に根拠は無く、その確実さは、言語ゲームの二層の構造に基づいて、「揺るぎないもの」の疑いや誤りの論理的可能性が排除されているということからくる論理的なものである。

²⁷⁰ PO pp. 378-379, 邦訳 p. 30

4(2) ウィトゲンシュタインの物体の存在についての考え

物体の存在について、ウィトゲンシュタインもヒュームのように、その独立連続存在を問題にしないわけではない。

「机はそれを誰も見ていない時でもそこに存在する、ということをすべては物語っていて、それを反証するものは何もない、と人は言うこともできるだろうか。それでは、何がその証明になるのか。」 (§ 119)²⁷¹

「誰も観察していなければ、このテーブルは消滅したり、形や色を変えたりするが、それを観察する人間が再び現れると、たちまち元の状態に戻るのだ、とはどうしても信じられない。それはなぜか。—『しかし、一体誰がそんなことを仮定するのだ。』—こう言いたくなってしまう。」 (§ 214)

ウィトゲンシュタインは、第2章の3(4-1)で取り上げたように、一般的な「物理的対象(物一般)」は、色や量と同様に論理学的概念であり、「物理的対象は存在する」というような物一般の存在を表現する命題は定式化されず、ナンセンスだと言う²⁷²。それで彼は、物一般の存在ではなくて、個別の物の存在を問題にするのであるが、個別の物であっても、例えば、「ある惑星が存在する」という命題よりも、「私には手が二つある」という命題の方を問題にする²⁷³。この「私には手が二つある」というごく当たり前のような命題を、「私は知っている」と言うことがどういうことなのかを考察することが『確実性の問題』の主要なテーマである。

「ある惑星が存在する」という命題は、それを疑うことや天体観測によってそのことを検証しようとすることには意義がある。しかし、「私には手が二つある」という命題は、それを知っていると云ったり、疑ったり、検証しようとすることは、通常ナンセンスだ。「私には手が二つある」ことは、「私は無条件にその信念に従って行動し、決して迷うことがない」 (§ 251) のが普通である、とウィトゲンシュタインは言う。

ウィトゲンシュタインは、ある物が存在するかどうかという疑いは、その物が存在することが思い浮かばないからこそ生じる、と言う。

²⁷¹ 他に関連する節として § 120

²⁷² § 35, 36, 「…存在についての疑いが [通常の] 言語ゲームの中でのみ働くものだという事実…」 (§ 24)

²⁷³ § 52, 54

「子供は本が存在すること、椅子が存在すること等々を学ぶのではなく、本を取ってくる、椅子に座ること等を学ぶ。

もちろん後になって、存在の問いも生じてくる。『一角獣は存在するか』等。しかし、そのような問いは、普通、その問いにふさわしいものが頭に浮かぶことがないが故にこそ可能なのである。というのは、人は、一角獣の存在について如何にして確信するかを、どのようにして知るのか。人は、あるものが存在するかしないかを決める仕方をどのようにして学んだのか。」 (§ 476、強調は論者)

「一角獣は存在するか」という問いは、一角獣は存在するということが思い浮かばないからこそ、疑いとしてあり得る、とウィトゲンシュタインは言う。逆に、「本は存在するか」とか、「椅子は存在するか」という疑いは、我々が本や椅子が存在することを前提にした生活をしているので、疑いとして生じない。「本は存在する」と明示的に理解してなくても、「本を持ってくることを通じて、「本が存在すること」を受け入れた生活をしている。そうした生活をしていることを前提にしていながら、即ち、「本を取ってきてくれ」と言われて、言われた本を持ってくることをしながら、本は存在するだろうか」と疑うことは、自己論駁に陥ることを免れない。同様に、「私には手が二つある」ことは、我々が普段、食事をしたり、鼻をかんだり、お風呂で体を洗ったり、車の運転をしたりすることの中で前提されていて、そのことは日常生活の内に示されている。それを疑うことは、自己論駁に陥らざるを得ず、ナンセンスである。

「私の生活は、あそこに椅子がある、ドアがある、と私が知っていること、あるいはそう確信していることを示す。一例えば私は友人に言う、『あの椅子を持ってきてくれ』、『ドアを閉めてくれ』等と。」 (§ 7)

椅子やドアが存在することは（そして手があることも）、私が「椅子を持ってきてくれ」とか「ドアを閉めてくれ」と言う等、無数の実践の中で、我々が暗黙のうちに受け入れている（世界像の中に取り込んでいる²⁷⁴）。「そこに椅子やドアがあること」や「私には手が二つあること」は、我々の日常の生活の基礎にある。

こうした「揺るぎないもの」が基礎にあって、例えば、昨日冷蔵庫にしまっておいたケーキがないのはなぜかといった認識的問いが、通常の言語ゲームにおいて意味をなすので

²⁷⁴ 我々は、明白な規則を学ぶことなしに純粹に実践的にゲームを学ぶことができるように、世界像も実践を通じて知らず知らずのうちに身に付ける。（§ 95, 143）

ある。その際に、誰が食べたのかと犯人捜しをすることはあっても、ケーキの自然消滅や、そこにある冷蔵庫は昨日まであったのとそっくりの別の冷蔵庫ではないかというようなことは疑わない。犯人捜しをすることは、ケーキは自然消滅しないという前提があつてはじめて意味がある。もし、ケーキが自然消滅することが常態の世界であれば、犯人捜しをすることに意味はないであろう。

4(3) ウィトゲンシュタインにおける「揺るぎないもの」の身分とその確実さについて

これまで述べてきたように、「熱い鉄鍋には手を触れない」ことや「私には手が二つある」ことは「揺るぎないもの」として、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の基礎にあり、その確実さは、日常生活の行為の内に示される。こうした「揺るぎないもの」は、第5章の1(1)、(2)で取り上げたように、経験命題の形式をしているが、「我々の経験命題の中で特有の論理的役割を果たす命題」（§136、強調は論者）であり、思考のあらゆる操作の基礎に必要である（§401）。それは、言語ゲームにおいて規則のような役割を持つ（§95）、文法的なものである（§57）。

ヒュームにおいて、自然本性としての観念連合（想像力）や習慣は、立証的推論の信念の原因であつて、その確実さは、「感じる」という心理的な確実さにあつた。

しかし、ウィトゲンシュタインの行為において示される確実さは、そうした心理的な確実さではない。

ウィトゲンシュタインは、語の意味を、その語に伴うイメージや心理的な感じとして考えることを批判する。それは無限後退に陥ることにもなるし、またイメージや感じをいつも必ず持つということではないからである²⁷⁵。

「ウィリアム・ジェームズは、＜そして (and)＞、＜もし (if)＞、＜または (or)＞のような、語の使用に伴う特定の感じ (specific feeling) について語っている。少なくともある種の振舞いが、そのような語にしばしば結びついていることは疑いない。＜そして＞にはものを集めるような身振り、＜でない (not)＞には退けるような身振りのように。そして、これらの振舞いに結びついた視覚的、また筋肉感覚的感覚があることは明らかである。他方これらの感覚は、あらゆる＜でない＞と＜そして＞の語の使用に伴うのではないことも、全く明らかである。……また、『リンゴとそしてナシを僕に与えたまえ、そして部屋から出て行ってくれたまえ。』と私が言った時、

²⁷⁵ 以下に引用したものその他に関連するものとして、BB pp. 3-5, 11-12, 78-79, 邦訳 pp. 24-27, 37-39

二つの<そして>という語を発音した際に、私は同じ感じ (same feeling) がするだろうか、と自問してみよ。」 (BB pp. 78-79, 邦訳『茶色本』 § 1 の(1) pp. 135-136、強調はウィトゲンシュタイン)

「<もし>という言葉が発していない時に、人は、もしー感覚 (Wenn-Empfindung, if-feeling) の感覚をもつだろうか。」 (RPP1 § 335)

「意味は、語を聞いたり語ったりする際の経験ではない、また、文の意味はそのような経験の複合体ではない。……文は、語から構成される、また、それで十分なのだ。」 (PI vi、p. 155、邦訳 p. 361)

「そして」や「でない」という語を使用する時、特定の感じが伴う場合があることは勿論そのとおりであるが、その同じ感じや他の何らかの感じが、いつも必ず伴うということはないと、ウィトゲンシュタインは言う。彼は、語に伴うイメージや感じ等の感覚は、語の意味を理解するための必要十分条件ではないと考えている²⁷⁶。

このことと同様に、ウィトゲンシュタインは「揺るぎないもの」の確実さを、ヒュームのように心理的な「感じる」ことに求めることは全くないと思われる。なぜなら、そのような心理的に確実な「感じ」が、「揺るぎないもの」にいつも必ず伴うとは限らないからである。

ウィトゲンシュタインにおける「揺るぎないもの」の確実さは、これまで述べてきたように、それ自体に根拠はないが、言語ゲームの基礎にあって、一つの体系を形成し、「揺るぎないもの」が相互に固く結びついている。そして、この「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームという二層からなる言語ゲームにおいて、「揺るぎないもの」は規則のような役割を果たしている。その確実さは「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームの論理的な関係に基づく確実さである。

ゲームにおいて通常の規則違反は、単なる不注意や勘違いで犯すものである。しかし、例外的に起こる完全な規則違反 (§ 647) は、自己論駁的であって、ゲームを破棄することか、ゲームを知らないものがすることである。「揺るぎないもの」の確実さは、このような規則に従うことに似た確実さであって、疑いや誤りの論理的可能性が排除されていることからくる、論理的な確実さである。

²⁷⁶ ウィトゲンシュタインは、「語の意味とは言語内におけるその使用である」(PI § 43) と言う。他に PI § 10, 20, 29, 197 等、BB pp. 4-5 邦訳『青色本』 pp. 27-28

さて、ストローソンが、ヒュームの「自然本性」に対してウィトゲンシュタインの「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」と言うものは、文化・歴史を受け継いだ共同体の中での生活や実践、過去の経験、教育を通じた訓練、動物の本能にも似たもの、人間の自然誌などを通じて形成されるもののことであるが、これらは、「揺るぎないもの」の確実さの根拠ではなく、ヒュームの場合と同様に、確実さの生まれる原因である。

「揺るぎないもの」の確実さの内実は、「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームという言語ゲームの二層の構造全体から生まれるのであって、それは規則に従うことに似た論理的な確実さであり、行為の内に示されるものである。

懐疑論は、こうした「揺るぎないもの」を認識的ゲームと同じレベルに置いて、「揺るぎないもの」を表現する命題を経験命題として扱おうとするものである。しかし、懐疑論の提起する疑いは、ウィトゲンシュタインの観点からはカテゴリーミステイク (§ 308) であり、自己論駁的な誤りを犯すことで、意味をなさない（ナンセンス）疑いだ、ということになる。

以上のようにウィトゲンシュタインにおいて、ヒュームの立証的推論に相当する因果推論や日常の個別の物の存在の「揺るぎないもの」の身分は、言語ゲームの基礎にあって、言語ゲームにおいて規則のような役割を果たす文法的なものであり、それ自体に根拠はない。そして、その確実さは、「感じる」というヒュームにおけるような心理的な確実さではなく、言語ゲームの二層の構造全体からもたらされる論理的な関係に基づく確実さである。それは規則に従う時のような確実さで、端的な行為の内に示されるものである。

そして、こうした「揺るぎないもの」を持つに至る原因が、文化・歴史を受け継いだ共同体の中での生活や実践、過去の体験、教育を通じた訓練、動物の本能にも似たもの、人間の自然誌なのであり、ストローソンはそれを「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」として措定したのである。

しかし、ストローソンが措定したこれらのものは、「揺るぎないもの」を持つに至る原因であって、その確実さの内実を説明するものではなかった。原因として説明されるものは、ウィトゲンシュタインに従えば、第 5 章の 3(1)で論じたように「仮説」であって、論理的な確実さを持たない。原因というレベルでは、ストローソンが除こうとする神もストローソンが提唱する自然主義も同じである。

ストローソンは、「揺るぎないもの」の確実さが、言語ゲームの二層の構造全体からもたらされるということ、「揺るぎないもの」が言語ゲームにおいて規則のような役割を果た

しているということ、それは経験命題の形をしていても言語ゲームの中では文法的（論理的）な身分を持つものであること、こうした観点を、全く見落としてしまっている。

ストローソンは、自然主義的方法によって「懐疑論を無視する（避ける）」と言う。しかし「懐疑論を無視する（避ける）」というだけでは、ヒュームの際に論じたのと同じように、懐疑論に対して効果がない。それはどちらも懐疑論を無視する（避ける）と言うだけで、「揺るぎないもの」の確実さの内実を示すものではないからである。従って、ストローソンが「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」として措定するものだけでは、「揺るぎないもの」の確実さがどのようにして示されるのかという問題は、依然として残されたままなのである。

5 本章のまとめ

ヒュームとウィトゲンシュタインについての以上の考察から、次のことが帰結する。

ヒュームもウィトゲンシュタインも、疑いが排除されている因果関係（立証的推論）、物体の存在の疑いえなさについて論じており、それらに対する疑いは、ストローソンが言う様に、両者にあつていずれも無視されてよい疑いである。その無視する根源としてストローソンがあげるのは、ヒュームにおいては「自然本性」、ウィトゲンシュタインにおいては「社会的実践（文化・歴史を受け継いだ共同体の中での生活や実践、過去の体験、教育を通じた訓練、動物の本能にも似たもの、人間の自然誌など）を通じて非明示的に形成されるもの」である。

しかし、ヒュームの「自然本性」や、ウィトゲンシュタインの「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」は、そうした「揺るぎないもの」を持つに至る原因であって、それらを措定することによって懐疑論を無視する（避ける）としても、それによって「揺るぎないもの」の確実さが示されることにはならない。

従って、ストローソンの「自然本性」や「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」を根源とする自然主義的方法は、「疑いが排除されているもの（揺るぎないもの）」の確実さの内実を示すものではない。

疑いが排除されているものの確実さを示すことができるのは、ウィトゲンシュタインの考察する言語ゲームの二層の構造という観点からである。ストローソンはこの点を全く見落としている。

言語ゲームは、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）と、その基礎にある「揺るぎないもの」という二層の構造から成り立っている。「揺るぎないもの」自体に根拠はない。これらは認識的ゲームと一体となって、言語ゲームの体系全体を有意義なものにしている。「知っ

ている」とか「疑う」等の通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）は、この「揺るぎないもの」を基礎にして初めて意味あるものとなる。従って、「揺るぎないもの」は、我々の通常の言語ゲームが有意味に行われるための条件であるともいえる。

そして、「揺るぎないもの」は、ヒュームの言うような確実な「感じ」や「心持ち」という心理的な確実さから揺るぎないのではない。その確実さは、言語ゲームの構造全体の中にあって、規則のような役割を果たしているところから揺るぎないのである。それは、規則に従う時のような、論理的な関係に基づく確実さであって、不注意や勘違いによる誤り以外、完全な規則違反の論理的可能性が排除されている確実さである。

通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）では、知っているという言明や疑いについて、その根拠を問うことには意味がある。しかし、その認識的ゲームの基礎にあって、そのゲームを意味あるものにしている「揺るぎないもの」には根拠はない。それを疑うことは意味をなさない。そのような疑いは、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）でなされる有意味な疑いに、疑いの表現形式が似ているため、意味をなさない疑いであるにもかかわらず、そのことを見て取ることができなくて、意味ある疑いのように思われてしまうのである。

しかしながら、懷疑論者による因果推論（立証的推論）に対する疑いや外的世界の存在に対する疑いのような「揺るぎないもの」に対する疑いは、自己論駁に陥ることが免れない意味をなさない疑いなのである。

第7章 結論

これまで、第2章から第6章にわたって、ウィトゲンシュタインの確実性について考察をしてきた。ウィトゲンシュタインの確実性についての論者の解釈は、第5章の2(7)及び第6章の4でまとめている。本章では、本論文で取り上げた5人の解釈者について、関連する著作の年代順に彼らの解釈をまとめ、最後に論者の解釈を掲げることで結論としよう。

ストローソンは、*Scepticism and Naturalism : Some Varieties* (1983)において「疑いが排除されているもの」があることを認め、それについて次のように論じる。

- (1) ウィトゲンシュタインは、我々の信念体系において、経験的な確証か反証を受ける実際の探究や疑いを扱うもの、即ち、実際の経験的な探究に関わるものと、「足場」、「枠組み」、「背景」、「基礎」等によって表現される極めて異なる性格を持つもの、即ち、実際に探究する際に、当該探究自体を支える枠組みに関わるものとを区別する。
- (2) 探究自体を支える枠組みなどの多くは、子供のころからの活動、社会的実践を通じて知らず知らずのうちに形成されるものであって、明示的に学んだり教えられたりするものではない。またそれらは、伝統的な経験論者の意味で、基礎とはみなされない。

ストローソンはこのようにウィトゲンシュタインを解釈して、彼が「社会的自然主義」と呼ぶウィトゲンシュタインのこの態度によって、懐疑論を無視する、あるいは回避するとした。

ストローソンは、ウィトゲンシュタインが、我々の信念体系において、実際の経験的な探究に関わるものと、「足場」、「枠組み」等によって表現される当該探究自体を支える枠組みに関わるものとを区別している、と論じている。

しかし、ストローソンが懐疑論を避ける方法として提唱するウィトゲンシュタインの「社会的自然主義」は、実際の探究の「枠組み」を獲得するための原因として措定されたものである。原因というレベルでは、ストローソンが除こうとした神も彼が提唱する自然主義も同じである。

マッギンは、*Sense and Certainty* (1989)において「揺るぎないもの」を「ムーア型命題」と名付け、それについて次のように論じる。

- (1) ムーア型命題は、認識的文脈の中では使われない。ムーア型命題は、我々の「実践の枠組み」であり、「言語の表現を有意味に用いるための条件」である。
- (2) ムーア型命題の確実さは、我々が言語による記述の技術を共同体の中で訓練によって習得した結果である。

マッギンはこのように、真・偽や証拠の正当化を有意味に問うことができるのは認識的な文脈の中だけだとした。

しかし彼女がムーア型命題の確実さの淵源を、共同体の中で言語による記述の技術を訓練によって習得するという、非認識的な実践技術の習得に求めることは、ムーア型命題が確実さを持つに至った原因を説明するものであって、その確実さの内実を説明するものではない。

ストロールは、*Moore and Wittgenstein on Certainty* (1994) において「揺るぎないもの」を「蝶番命題」と呼び、蝶番命題と通常の言語ゲームの中の命題を区別して、次のように論じる。

- (1) 蝶番命題の身分は、「疑似命題」であり、「文法的規則」である。
- (2) 知識は言語ゲームに属し、確実性は言語ゲームの外にあって言語ゲームを支持する。
- (3) 確実性は、本能、行為、訓練という三つの形式を持ち、世界像という概念でまとめられる。

またこの他に、誤りについて、惑星が存在することを誤ることと自分の手が存在することを誤ることは、誤りの程度の違いではなく種類の違いであり、自分の手の存在を疑うことはナンセンスであることを示した。

ストロールはこのように、蝶番命題は文法規則であること、知識は言語ゲームに属し、確実性は言語ゲームの外にあって言語ゲームを支持する関係にあり、言語ゲームを作る。また、誤りにも程度の違うものと種類の違うものがあるととした。

しかしストロールは、蝶番命題の文法規則としての役回りがどのようなものを明らかにしなかった。また、彼が論じる蝶番命題の確実性の形式の内、本能と訓練という二つの形式は確実性が生まれる原因であり、行為という形式は確実性が行為に示されるというだけである。彼は、蝶番命題の確実さが論理的なものによることまで論じなかった。

シャロックは、*Understanding Wittgenstein's On Certainty* (2007) において「揺るぎないもの」を「蝶番」と表現して、それについて次のように論じる。

- (1) 蝶番の特徴は、①疑いの余地がなく、疑いや誤りは論理的に不可能で意味をなさな

い、②基礎的である、③非経験的である、④文法規則である、⑤言葉で表現しがたい、⑥行為の内にある、というものである。

(2) 蝶番は探究の対象ではなくて、探究の規則である。蝶番は言語ゲームの外にあって、言語ゲームを可能にする。

(3) 蝶番の確実さを獲得する仕方には二つの仕方があって、一つは自然に吸収・取り込まれること（本能によるもの）であり、今一つは訓練によることである。

しかしシャーロックは、蝶番を疑ったり誤ったりすることは論理的に不可能だと言うが、なぜ論理的に不可能になるのか、明らかにしない。また彼女は、蝶番の確実さ自体が本能的なものや訓練による因果的な条件付けから得られると言っているように見える。

ハミルトンは、*Wittgenstein and On Certainty* (2014) において「揺るぎないもの」を、時間をかけて化石化した「ムーア命題」と時間的・空間的に限られた確実さを表現するものとに区別して、「ムーア命題」について次のように論じる。

(1) ムーア命題の特徴は、①人は自分がどうしてムーア命題を知っているか言うことができない、②ムーア命題は、非認識的な確実性であり、それを疑うことは意味をなさない、③ムーア命題に特定の証拠を求める必要が無い、というものである。

(2) 知識は疑いや誤りの論理的可能性を含意するが、ムーア命題は疑いの余地が無く、誤りの生じる文脈を欠いているので、知識ではない。

(3) ムーア命題は、文法の規則を表現する文法的命題ではなく、言語ゲームや実践の前提を表現しているものである。

(4) 行為結果はムーア命題が知られているということを示す。

しかしハミルトンは、ムーア命題の確実さが、言語ゲームの二層の構造に由来する論理的关系に基づくものであることを見なかった。彼はまた、「揺るぎないもの」を時間的・空間的に限られた確実さを表現するものとムーア命題とに区分したが、ムーア命題も時間的・空間的に限られた確実性を表現する命題も、その確実性を疑ったり誤ったりすることが自己論駁に陥ることから免れず、それらの命題が論理的には先同じレベルにあるということを見なかった。

以上、5人の解釈者に共通する見解は、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の外に、通常の言語ゲームを意味付ける枠組みとしての「揺るぎないもの」を認める、ということである。即ち、彼らはいずれも言語ゲームが、実際の探究（認識的ゲーム）とその基礎にある「揺るぎないもの」という二層の構造から成ることを認めている。

また、ストローソンとマッギンはこの「揺るぎないもの」の身分について、特にコメントをしなかったが、ストローとシャーロックは、文法規則を表現する文法的命題として位置付けた。しかし、ハミルトンはそれを文法的命題として考えるのではなく、実践や言語ゲームの前提として考えた。

また、「揺るぎないもの」の確実さについて、ストローソン、マッギン、ストローは我々がそれを獲得する方法を論じたが、それは原因を説明するもので、確実さの内実を示すものではなかった。また、シャーロックも蝶番の確実さは因果的な条件付けから得られる、と言っているように見えた。一方、ハミルトンは、「揺るぎないもの」の確実さは、行為結果の内に知られる、とした。

本論文を通じて論者が主張してきたことで、ここに掲げた5人と一致するところは2点ある。一つは、言語ゲームが「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームの二層の構造から成るということであり、また今一つは、「揺るぎないもの」が自然にあるいは訓練を通じて獲得されるということである。しかしこれは、「揺るぎないもの」が獲得される原因の説明である、ということを主張しておく。

また、論者の主張で、この5人が論じなかったことが次に示すように3点ある。

- (1) 動物的な本能や教育などによる訓練は、確実さを獲得する原因であって、確実さの内実を説明するものではない。
- (2) 「揺るぎないもの」の確実さは、言語ゲームの二層の構造からもたらされる、論理的な関係に基づくものである。即ち、「揺るぎないもの」を疑うことや誤ることは、自己論駁に陥ることが免れず、言語ゲーム自体を破棄する結果になる、そういう論理的な関係から生まれる確実さである。
- (3) 我々の心的状態における「揺るぎないもの」のあり方は、心的傾性としてある。ウィトゲンシュタインは心的状態のあり方を本物の持続を持つものとそうでないものとに区別した。「揺るぎないもの」は本物の持続を持たない、それは彼の言う心的傾性である。即ち、我々は「揺るぎないもの」をオカレントな意識として持つことはなく、意識レベルで注意の移動があっても「揺るぎないもの」が中断されることは無いし、睡眠によって中断されることもない。それは、我々が行為する態度、構えの内に示されている。我々は、それに気付いている訳ではなく、それは後から発見されるものである。そして、それが指摘されれば、我々は既にそのことを当然のこととして受け入れていることを認める、というものである。

参考文献

- Baker, G. P. and Hacker, P. M. S. [2005], *Wittgenstein Understanding and Meaning Volume 1 of an Analytical Commentary on the Philosophical Investigations Part II – Exegesis §§ 1–184*, Blackwell.
- Crane, Tim [1995], *The Mechanical Mind; A Philosophical Introduction to Minds, Machines and mental Representation*, Penguin Books (『心は機械で作れるか』, 土屋賢二監訳, 勁草書房, 2001)
- Davidson, D [1980], *Essays on Action and Events*, Oxford University Press (『行為と出来事』, 服部裕幸・柴田正良訳, 勁草書房, 1990)
- Hamilton, A. [2014], *Wittgenstein and On Certainty*, Routledge.
- Hume, David, *A Treatise of Human Nature*, Norton, David Fate and Mary J. Norton (eds.), Oxford Philosophical Texts : Oxford University Press, 2007 [1739-1740] (『人間本性論 第1巻 知性について』, 木曾好能訳, 法政大学出版局, 2011 (新装版))
- , *An Abstract of a Book Lately Published; Entitled, a Treatise of Human Nature, &c, Wherein the Chief Argument of That Book is farther Illustrated and Explained* [1739-1740] in Hume, *A Treatise of Human Nature* (『人間本性論摘要』, 斎藤繁雄・一ノ瀬正樹訳, 法政大学出版局, 2004)
- , *Enquiries Concerning Human Understanding and Concerning the Principles of Morals*, reprinted from the posthumous edition of 1777 and edited with introduction, comparative table of contents, and analytical index by L. A. Selby-bigge, M. A. third edition with text revised and notes by P. H. Hidditch oxford: clarendon press, 2010 [1748] (『人間知性研究』, 斎藤繁雄・一ノ瀬正樹訳, 法政大学出版局, 2004)
- 飯田隆 [2005], 『ウィトゲンシュタイン 言語の限界』, 講談社.
- 飯田隆編 [1995], 『ウィトゲンシュタイン読本』, 法政大学出版局.
- 金杉武司 [2007], 『心の哲学入門』, 勁草書房.
- 鬼界彰夫 [2003], 『ウィトゲンシュタインはこう考えた』, 講談社.
- Kuusela, O. and McGinn M. (eds.) [2011], *The Oxford Handbook of Wittgenstein*, Oxford University Press.
- Malcolm, N. [1986], *Nothing is Hidden -Wittgenstein's Criticism of his Early Thought*, Basil Blackwell (『何も隠されてはいない』, 黒崎宏訳, 産業図書, 1991)
- [1974], *Ludwig Wittgenstein; A Memoir*, with a Biographical Sketch by Georg Henrik von Wright, London, Oxford University Press, 1958 (『回想のヴィト

- ゲンシュタイン』， 藤本隆志訳，法政大学出版局（「回想」と表示）
- McGinn, C. [1984], *Wittgenstein on Meaning; an Interpretation and evaluation*, Basil Blackwell（『ウィトゲンシュタインの言語論』，植木哲也・塚原典央・野矢茂樹訳，勁草書房 1990）
- McGinn, M. [1989], *Sense and Certainty*, Basil Blackwell.
- McGuinness, B. [1972], ‘on certainty : comments on a paper by G. H. von Wright’ in *Approaches to Wittgenstein: collected papers*, Routledge.
- Mcmaus, D. (ed.) [2004], *Wittgenstein and Scepticism*, Routledge.
- Moore, G. E. [1959], *Philosophical Papers*, George Allen and Unwin Ltd, the Macmillan Company.
- [1939] ‘Proof of an External World’ in Moore, (1959), 127-50.
- [1959] *Philosophical Papers* (George Allen and Unwin, the Macmillan Company)
- Moyal-Sharrock, D. [2007], *Understanding Wittgenstein's On Certainty*, Palgrave.
- Moyal-Sharrock, D. and William H. Brenner (eds.) [2007], *Readings of Wittgenstein's On Certainty*, Palgrave Macmillan.
- Sluga, H. and Stern, D. G. (eds.) [1996], *the Cambridge Companion to Wittgenstein*, Cambridge University Press.
- Strawson P. F. [1985], *Scepticism and Naturalism: Some Varieties*, the Woodbridge Lectures 1983, Routledge.
- Stroll, A. [1994], *Moor and Wittgenstein on Certainty*, Oxford University Press.
- Stroud, B. [1984], *The Significance of Philosophical Scepticism*, Oxford University Press（『君はいま夢を見ていないとどうして言えるのか』，永井均【監訳】岩沢宏和・壁谷彰慶・清水将吾・土屋陽介訳，春秋社，2006）
- Wittgenstein, Ludwig, *Tractatus Logico-Philosophicus*, Trans. C. K. Ogden, 1922, Routledge, Rep. 1992（『論理哲学論考』，野矢茂樹訳、岩波書店＜岩波文庫＞，2003）
- , *Philosophical Grammar*; Rush Rhees (ed.), Trans. Anthony Kenny 1974, Basil Blackwell Oxford, Paperback edn. 1984（『哲学的文法 1』，山本信訳，ウィトゲンシュタイン全集 3，大修館書店，1975）
- , *The Blue and Brown Books*, 1972, Basil Blackwell Oxford, 2nd edn.1969（『青色本』・『茶色本』，大森荘蔵訳，ウィトゲンシュタイン全集 6，大修館書店，1975）
- , *Vorlesungen 1930–1935*, Cambridge 1930–1932, Aus den Aufzeichnungen von John King und Desmond Lee Herausgegeben von Desmond Lee, Cambridge 1932–

- 1935, *Aus den Aufzeichnungen von Alice Ambrose und Margaret Macdonald*
Herausgegeben von Alice Ambrose Übersetzt von Joachim Schulte Suhrkamp
Verlag (『ウィトゲンシュタインの講義 I ケンブリッジ 1930–1932 年』, 山田友幸・
千葉恵訳、勁草書房, 1996 (引用文で『講義 I』と表示), 『ウィトゲンシュタインの講
義 ケンブリッジ 1932–1935 年』, 野矢茂樹訳、勁草書房, 1991 (引用文で『講義』
と表示))
- , *Philosophical Investigation*, Trans. G. E. M. Anscombe, 2007, Basil Blackwell,
3rd edn.2001 (『哲学探究』, 藤本隆志訳, ウィトゲンシュタイン全集 8, 大修館書店,
1976)
- , *Philosophical Occasions 1912-1951*, James C. Klagge and Alfred Norman (eds.):
Hackett Publishing Company, Indianapolis & Cambridge, 1993 (一部訳『原因と結
果：哲学』, 羽地亮訳、晃洋書, 2010)
- , *ZETTEL*, G. E. M. Anscombe and G. H. von Wright (eds.), Trans. G. E. M.
Anscombe, 2nd edn. 1981, Basil Blackwell, 1975 (『断片』菅豊彦訳, ウィトゲンシ
ュタイン全集 9, 大修館書店, 1975)
- , *Remarks on Colour*, G. E. M. Anscombe (ed.), Trans. Linda L. McAlister and
Margarete Schättle, Basil Blackwell Oxford, 1978 (『色彩について』, 中村昇・瀬嶋
貞徳訳, 新書館, 1997)
- , *Remarks on the Philosophy of Psychology, vol. I*, G. E. M. Anscombe and G. H.
Von Wright (eds.), Trans. G. E. M. Anscombe, Basil Blackwell, 1980 (『心理学の哲
学 1』, 佐藤徹郎訳, ウィトゲンシュタイン全集 補巻 1, 大修館書店, 1985)
- , *Remarks on the Philosophy of Psychology, vol. II*, G. H. von Wright and Heikki
Nyman (eds.), Trans. C. G. Luckhardt and Maximilian A. E. Aue, Basil Blackwell,
1980 (『心理学の哲学 2』, 野家啓一訳, ウィトゲンシュタイン全集 補巻 2, 大修館書
店, 1988)
- , *On Certainty*, G. E. M. Anscombe and G. H. von Wright (eds.), Translated by
Denis Paul and G. E. M. Anscombe, Basil Blackwell Oxford, 1979 (『確実性の問題』
黒田亘訳, ウィトゲンシュタイン全集 9, 大修館書店, 1975)
- , *Last Writings on the Philosophy of Psychology, vol. I*, G. H. von Wright and
Heikki Nyman (eds.), Trans. C. G. Luckhardt and Maximilian A. E. Aue, Basil
Blackwell Oxford, 1982.
- , *Last Writings on the Philosophy of Psychology, vol. II The Inner and Outer*

- 1949-1951, G. H. von Wright and Heikki Nyman (eds.), Trans. C. G. Luckhardt and Maximilian A. E. Aue, Blackwell Publishers, 1992.
- , *Cambridge Letters Correspondence with Russell, Keynes, Moore, Ramsey and Sraffa*, Brian McGuinness and G. H. von Wright (eds.), Blackwell Publishers, 1995.
- Wolf, Maryanne [2007], *Proust and the Squid: The Story and Science of the Reading Brain* (『ブルーストとイカ 読書は脳をどのように変えるのか?』, 小松淳子訳, インターシフト, 2008)
- Wright, von G. H. [1972], ‘Wittgenstein on Certainty’ in *Wittgenstein*, University of Minnesota Press.
- 山田圭一 [2009], 『ウィトゲンシュタイン 最後の思考』, 勁草書房.